

近代日本の人種ステレオタイプの形成過程と マイノリティに対する現代的偏見の研究

(課題番号 12610112)

平成12年度～平成14年度科学研究費補助金

(基盤研究(C)(2)) 研究成果報告書

遅れて返却すると、遅れた日数分の貸出停止となります。

	返却期限日		返却期限日
1	2004.4.18	13	
2		14	
3		15	
4		16	
5		17	
6		18	
7		19	
8		20	
9		21	
10		22	
11		23	
12		24	

埼玉大学附属図書館 048-858-3667

平成15年3月

研究代表者 坂西友秀

埼玉大コーナ-

埼玉大学附属図書館



998005343

はじめに

この報告書は、平成12年度、平成13年度、平成14年度の3年間、日本学術振興会の科学研究費補助金（基盤研究（C）（2）、課題番号12610112）の助成を受けて行った「近代日本の人種ステレオタイプの形成過程とマイノリティに対する現代的偏見の研究」をまとめたものである。

地球規模の交通が発達し、経済的文化的な関わりは急速に進んでいる。国際化が叫ばれて久しいが、日本人が日本国内でさまざまな国籍を持つ外国人に日常的に接するようになったのは最近のことである。それだけに、日本人の多くには、外国人との接触経験が少なく、ステレオタイプの認知や偏見があるといわれる。また、こうしたステレオタイプや偏見は、いわゆる人種の違いによって大きく異なる。アメリカやヨーロッパの白人に対しては、好意的、積極的な態度を示す傾向が強いが、アジアやアフリカ系の人々に対しては、否定的、消極的な態度を示す傾向が強いともいわれる。同じアジア系の外国人であっても、英語を話す人と話さない人とは、日本人の対応が異なることもある。欧米の文化が、アジアの文化に比して尊重されているのかも知れない。本研究では、あらゆる面でグローバル化してきている今日、日本人の外国人に対するステレオタイプと人種的偏見が、どのように形成され、また現在どのような形で存在するのかを明らかにすることを目的にした。

日本は四方を海に囲まれ、海外との交流は船を利用するほかなかった。海上交通を利用して、琉球を通じた南方経路の交易や中国・韓国との交流は古くから行われてきた。しかし、西洋との関わりは遅く、16世紀にキリスト教の宣教師が日本を訪れた頃にはじまる。西洋人との交流は、やっと安土・桃山の時代になって始まったのである。第一部では、日本人が西洋人に国内で接するようになった時代的な経過と、その間の外国人に対する印象や態度の変化を、一方では宣教師の記録や外国人の日本滞在日記をもとに、他方では日本人自身の外国人に対する記録や回想録やかわら版や新聞記事などをもとに明らかにしようと試みた。日本人の外国人意識・ステレオタイプ・人種的な偏見の形成過程を心理歴史的な視点から分析し考察することを目的とした。第一章では、主にイエズス会の宣教師の日本に関する記録に基づく分析を行った。時代的には16世紀から17世に焦点を当てた。第二章では、鎖国体制ができあがり、海外との交流がほぼ完全に閉鎖された江戸時代の日本人と外国人との交流に焦点を当てた。時期的には、17世紀から19世紀後半頃までである。第三章では、海外からの開国の圧力の下に、再び西洋との交流が復活する幕末から明治、大正の初期にかけて、日本人の外国人観がどのように変遷したのかを分析した。明治の文明開化は日本のあらゆる面に及んだ。心理学も例外ではなく、この時期に初めて学問として輸入され、明治の後半になり「心理学」なる分野が一般に認知されるようになった。そこで、この三章では、心理学成立の最初期に、心理学研究において「人種」や「民族」がどのように意識され、研究されていたのかを分析した。第二部では、現代において、マイノリティに対するステレオタイプや人種的偏見は減少し、弱くなっているか否かを質問紙法及び実験法を用いて実証的に検討した。第一章では、マイノリティとして同性愛者に対する態度を取りあげ、一般の異性愛者が同性愛者に対してどのようなイメージを抱き、

どのような人間関係を持とうとするのかを明らかにした。第二章では、同性愛者自身に聞き取り調査を実施し、自分が同性愛者であることをカミング・アウトすることが、その後の人間関係や日常生活にどのような関わりを持つのかを明らかにした。第三章では、人種的なステレオタイプの存在を、「ちびくろさんぼ」を材料に実験を行い、人種的なステレオタイプが必ずしも減少しているわけではないことを示唆する結果を得た。

国際化、グローバル化が急速に進む今日、歴史的、社会的、文化的に背景を異にする人々が平和に共存するためにはお互いの交流と理解が不可欠である。人種的なステレオタイプや偏見は、この相互の理解と協調を阻む要因である。人種的なステレオタイプ、偏見の心理歴史的背景を含めて理解することにより、現代における民族や人種に関わる偏見や差別を低減する手がかりが得られれば幸いである。本報告書で扱いきれなかった課題が沢山残っている。本研究を基盤に、今後残された課題の解明へと研究を発展させたい。

平成15年3月15日

研究代表者 坂西友秀
(埼玉大学教育学部)

研究組織

- 1 研究代表者 坂西 友秀 埼玉大学教育学部教育心理学講座 教授

研究経費

平成12年度	140万円
平成13年度	70万円
平成14年度	80万円
<hr/>	
合計	290万円

研究発表

1 学会発表

- 1 2001年 7月 「Ethnic stereotypes and the prejudice of Japanese adults」
第4回アジア社会心理学会 Melbourne, Australia.
- 2 2001年 9月 「青年・ジェンダー・「家」文化」『発達における性別分化を論じる
—男女共同参画社会の実現を展望して—』日本教育心理学会第43回
総会準備委員会企画シンポジウム
- 3 2001年 9月 「協同学習を支える教師集団の協同」 指定討論者 日本教育心理
学会第43回総会 自主シンポジウム
- 4 2002年 9月 「海外留学と日本の心理学」 指定討論者 日本心理学会第52回総
会ワークショップ
- 6 2002年10月 「日本における教育心理学の戦前と戦後」 指定討論者 日本教育心
理学会第44回総会 自主シンポジウム
- 7 2002年11月 助言者 第34回全国バズ学習研究大会 (杉並区阿佐谷中学校)

2 論文発表

- 1 2001年 7月 Ethnic stereotypes and the prejudice of Japanese adults. Proceedings
(The 4th Asian Social Psychology Conference, Melbourne), 156.
- 2 2002年 3月 「西洋人と黒人に対する日本人の人種ステレオタイプの形成に関わる心
理—歴史的背景—イエズス会宣教師の書簡・報告書を中心にした分析—」 埼玉大学
紀要教育学部(教育科学I) 第51巻第1号 65-84.
- 3 2002年 9月 鎖国前後における日本人の西洋人観・黒人観の心理—歴史的背景 埼玉
大学紀要教育学部(教育科学I) 第51巻 第1号 65-84.
- 4 2003年 3月 セクシャル・マイノリティに対するセクシャル・マジョリティの態度と
カミング・アウトへの反応 埼玉大学紀要教育学部(教育科学I) 第53巻 第1
号 (桐原奈津・坂西友秀共著)
- 5 2003年 9月 セクシャル・マイノリティとカミングアウト 埼玉大学紀要教育学部
(教育科学I) 第53巻 第2号(桐原奈津・坂西友秀共著)(印刷中)

目次

はじめに

第一部 近代日本における人種ステレオタイプ・偏見の形成過程に関する研究……

- 第一章 西洋人と黒人に対する日本人の人種ステレオタイプの形成に関わる
心理—歴史的背景…………… 2
- 第二章 鎖国前後における日本人の西洋人観・黒人観の心理—歴史的背景…………… 23
- 第三章 近代日本の「人種」・「民族」意識と心理学研究
—「心理研究」の分析…………… 47

第二部 マイノリティに対するステレオタイプと現代的偏見に関する研究

- 第一章 セクシャル・マイノリティに対するセクシャル・マジョリティの態度とカミン
グ・アウトへの反応…………… 127
- 第二章 セクシャル・マイノリティとカミングアウト…………… 155
- 第三章 Ethnic stereotypes and the prejudice of Japanese adults. …… 180

資料

- 資料1 セクシャル・マイノリティに関する質問紙…………… 187
- 資料2 人種ステレオタイプに関する刺激材料・質問紙…………… 200

第一部

近代日本における人種ステレオタイプ・
偏見の形成過程に関する研究

第一章

西洋人と黒人に対する日本人の人種
ステレオタイプの形成に関わる心理
歴史的背景

鎖国前後における日本人の西洋人観・黒人観の心理—歴史的背景

坂西 友秀*

キーワード：16世紀末、西洋人と黒人、日本人、心理—歴史的背景、人種ステレオタイプ

第二章

鎖国前後における日本人の西洋人観・ 黒人観の心理—歴史的背景

目次

はじめに

I 日本人の西洋人観 —鎖国以前—

- 1 西洋人の種子島漂着
- 2 遣欧使節の見た世界の中の日本
- 3 手摺み・唾棄する野蛮な西洋人
- 4 礼節を欠く西洋人

II 日本人の黒人観 —鎖国以前—

- 1 遣欧使節が語る「黒味を帯びた人々」
- 2 遣欧使節が語るアフリカ黒人
- 3 生殖上の原因に起因する肌の色
- 4 汚点・欠点としての黒い肌

III 日本人の西洋人観と黒人観 —鎖国後—

- 1 大隅国種子島の西洋人
- 2 白石が聴取で得た世界の情報
- 3 長崎民衆と西洋人・黒人
- 4 丸山遊女の西洋人観・黒人観

IV 考察

- 1 日本人と西洋人の間の混血児
- 2 物珍しい西洋人
- 3 無礼・傲慢な西洋人と恐怖の奴隷商人
- 4 まとめ

はじめに

16, 17世紀の日本では日常人々が外国人に接することは皆無であった。それでも、わずかに海外貿易をしている港市や都に住む貴族、武士、商人、町人、一般の民衆はポルトガル人に接する機会があった。特に大村純忠(肥前大村)、大友義鎮(宗麟, 豊後)、高山長房(右近, 摂津)を初めとするキリシタン大名の領地に住む住民は、イエズス会の宣教師と接触したのも少なくない。宣教師たちが、日本を布教の地として活動した安土・桃山時代は、日本人がもっとも頻りに西洋の人々、とりわけポルトガル人に接した最初の時期であった。

信長がキリスト教を厚く保護し、布教活動を援助したことは、ポルトガル人の日本への渡来と居住を可能にした最大の要因であった。イエズス会の宣教師が、毎年日本における布教活動の状況を克明に記してインドのゴアや本国の教会本部に送った「日本報告」こそ、最初期の日本人と西洋人の出会いを生き生きと描写している。当時日本人にとって、西洋人はきわめて珍しく、好奇的であった。彼らが同伴していた黒人や「肌の黒い人」もまた日本人にとっては初めて見る対象だった。西欧諸国の大航海と植民地活動を背景にしたアジアへの進出が、東アジアでもっとも遠い東端の未知の島国日本とヨーロッパ諸国との出会いを生んだのである。

西洋との遭遇は、戦に明け暮れていた戦国武将にとっては、貿易上の関心を引き起こすことはあっても、彼らの日本中心の世界観を変え、全国統一を目指すその野望を乱すほど重要な政治上の問題になることはなかった。イエズス会宣教師の日本報告書を分析した限りでは、16, 17世紀の日本

* 埼玉大学教育学部教育心理学講座

** 本研究は2000年度(平成12年度)および2001年度(平成13年度)科学研究費補助金(基盤研究C(2))の交付を受け、研究課題「近代日本人の人種ステレオタイプの形成過程とマイノリティに対する現代的偏見の研究」の一部として行ったものである。

第三章

近代日本の「人種」・「民族」意識と 心理学研究 —「心理研究」の分析—

I 文明開花期の西洋人に対する民衆の心理

はじめに

- 1 明治期日本人の西洋人礼賛・崇拜と反発・反感
- 2 西洋人観の底流にある「異人」・「毛唐」意識
- 3 白人と黒人の対比を通じた人種意識
- 4 日本「民族」への関心
- 5 日本「民族」の「人種改良」

II 明治・大正期の心理学における「民族」・「人種」研究

- 1 心理学の輸入と定着
- 2 心理学書に著された「民族」・「人種」
- 3 「心理研究」における日本「民族」・「人種」
 - 1) 欧米・アジア諸国と日本の比較研究
 1. 日本「民族」「人種」に関する研究
 2. 日本の植民地・アイヌ等に関する研究
 - 2) 日本の植民地・アイヌ等に関する研究
 1. 日本「民族」「人種」に関する研究
 2. 日本の植民地・アイヌ等に関する研究
 - 3) 優生学と日本社会の改良に関する研究
 1. 優生学を支持する研究
 2. 優生学に批判的な研究
 - 4) 日本人の知的能力と遺伝・環境・教育に関する研究
 1. 優生学的知能研究
 2. メンタルテストとしての利用と応用に関する研究
 - 5) 欧米諸国に関する随想・紀行文

III 全体的考察

- 1 文明開化・富国強兵策と心理学
- 2 心理学における遺伝論及び優生学と日本民族の優良化
- 3 知能テストの利用・応用・実用化と日本民族

引用文献

I 文明開化期の西洋人に対する民衆の心理

はじめに

日本人が初めて西洋人に接したのは14世紀、布教活動に來たキリスト教のイエズス会宣教師たちであった。彼らは、従者として黒人奴隸を従えてきた。その後、キリスト教は禁止され、鎖国体制に入った日本で人々が西洋人に接することは、長崎の出島以外にはなくなった。中世から近世に至る間の日本人と外国人との接触と日本人の外国人観・人種意識の形成については坂西(2002a, 2002b)が検討している。大航海時代以来欧米諸国からの海外移住、アジア進出、植民地活動が年々盛んになった。1800年代にはいと再び西洋人の日本への来航が頻繁になった。異人に対する厳重な警戒が行われた。天保の御触書では、異国船が来航し、異人がいろいろ挑発的な行動をとるかも知れないが、動揺するなど指示している。「…時宜など心得違、又ハ猥ニ異国人ニ親ミ候儀等ハいたす間敷筋ニ付、警衛向之儀ハ弥嚴重ニ致し、人数共武器手当等ハ、是〔迄〕よりハ一段手厚く、聊ニ而も心弛ミ無之様相心得可申候、若異国船より海岸之様子を伺ひ、其場所人心之動静試候ため杯ニ、鉄炮を打懸候類可有之哉も難計候へ共、夫等之事ニ動揺不致、…され共、彼方より乱妨之始末有之候敷、望之品相与へ候而も帰帆不致、及異儀候ハハ、速ニ打払、臨機之取計者勿論之事ニ候…」(石井・服藤, 1995)。

黒船の出現は、幕府を転覆させる大事件であった。庶民もまた動転し、火のつくような騒ぎだった。「近隣では火事かと思つてとび出して沖の黒船にビックリ、また次々と家の者を呼びたてる。子供を寝かせつけているかみさんを、なぐらばかりにせき立てて、婆さん爺さんまで引きずり出して浜へ駆けつけ、黒船の行方をあれよあれよと見送って夢中になっている一家があるかと思うと、釜の下をたきつけている女房をいきなりつきのけて、火の上に水をぶっかけ、子供も年寄りもひとまとめにして裏山の土窟(やぐら)へ追い込み、大風呂敷に着物やお櫃までつつんでそこへ避難するという気の早いのもありました。…若い漁師の中には、赤銅色の岩のような身体に禪一つ、天秤を斜めに構えて海を睨み、寄らばぶち殺すぞとばかり凄い顔色のもあり、…玉子と小魚を少しばかり入れた策を抱えて、(異人がビードロの徳利に入ったステキにうまい酒をおいていく)そんな機会でもねらっているかのように浜辺をまごまごしている酒好きの爺さんもあった」。鎌倉郡村岡村の当時の様子である(山川, 1983)。

イギリス領事館付きの牧師が編集した「蔓国新聞」第三集(慶応三年三月下旬)には、横浜の外国人居留区でマダガスカル人の男が不審人物として市中見回りの番兵と守衛兵に追いつめられ刺殺された記事が載っている。「幕末期の新聞にはわずかではあるが、…アフリカやアフリカ人に関するニュースが時々掲載された」(青木, 2000)。当時、欧米に限らず世界各地から多様な人々が日本に渡ってきており、断片的ではあれ世界各地の情報が日本に入ってきていた。江戸末期から明治期にかけては、鎖国から開国への激動の時代であった。欧米諸国の人々が、日本国内に住み、外国人居留地が作られるまでになった(横浜開港資料館・横浜居留地研究会, 1996)。明治十六年には横浜に居留していた外国人の総数は、男女3,468人に達した。内訳は、清国人2154人、英国人618人、米国人255人、仏人118人、ドイツ人116人、ロシア人43人、スイス人36人、等であった(中山, 1934 郵便報知 明

表2 明治期の横浜の国籍別外国人の人数(明治3~30年) (単位:人)

	イギリス	アメリカ	ドイツ	フランス	オランダ	欧米人 合計	中国人	外国人 合計
明治3年	513	146	76	83	34	*942		
11年	515	300	175	120	59	1,370	1,850	3,220
26年	808	253	151	133	60	1,605	3,325	4,930
30年	869	372	208	274	40	2,096	2,015	4,111

注(1) 『横浜市史』3巻下より作成。

(2) 欧米各国のなかで横浜滞在人数の多い上位5カ国の人数に限定した。なお*印は女性を含まない。

表3 横浜市における職業別外国人の人数(明治34年) (単位:人)

国籍	官備	私備		商用	職工	化学師	医師	教師	その他		合計		合計
		男	女						男	女	男	女	
イギリス	5	4	—	181	15	3	3	38	203	363	605	363	968
アメリカ	2	75	—	95	3	—	3	28	79	199	285	199	484
ドイツ	—	48	—	70	2	—	1	—	31	62	152	62	214
フランス	—	33	—	41	—	1	—	—	8	40	83	40	123
スイス	—	18	—	25	—	—	—	—	6	28	49	28	77
ポルトガル	—	23	—	17	—	—	—	—	10	24	50	24	74
デンマーク	—	9	—	11	—	—	—	—	4	9	24	9	33
オランダ	—	1	—	12	—	—	—	—	5	13	18	13	31
オーストリア	1	4	—	7	—	1	—	—	5	7	18	7	25
イタリア	—	—	—	13	—	—	—	—	5	3	18	3	21
中国(清)	16	1,776	71	245	178	—	3	26	530	819	2,774	890	3,664
合計	28	2,165	71	729	199	5	10	92	909	1,581	4,137	1,652	5,789

注(1) 欧米系の国籍は合計19カ国のなかで、合計人数の多い上位10カ国を表示した。

(2) 「商用」以下の職業名は原史料による。

(3) 領事官員はこの表に含まない。

(4) 「合計」は、合計19カ国の外国人の人数を合算した数値。

(5) 『横浜市統計書』による。

治十六年五月八日、以下「新聞集成 明治編年史、第5巻」の如く記載する)。イギリス、アメリカ、ドイツ、フランス人が多く(表2)、商用で来日している割合が最も高くなっている(表3。)

米国、阿蘭陀、露西亜、英、仏の大国との間で通商条約(不平等条約)を次々と締結した(朝尾 他、1996、外務省外交資料館日本外交史辞典編纂委員会、1992)。通商を契機に欧米文化が一気に日本を飲み込み勢いであった。結んだ条約が日本にとって不利なものであったことは、日本人の西洋人観に大きな影響を及ぼした要因の一つだった。日本政府が「海關賦税ノ専権ヲ占有センコトヲ諸外国ニ要求スル」ために、引き替え条件に「外人ニ與ルニ雜居ノ允可ヲ以テ…」交渉を行うとの風説が流れた。「外人」が日本国内に自由に住み、旅行することを許可することは、「日本帝國ガ至貧至弱ノ長途ニ彷徨スルノ初日」であり、「日本の一大事」だった(郵便報知、明治十年一月二四日:新聞集成 明治編年史、第2巻)。不平等条約に関わって、西洋礼賛・崇拜と西洋への対抗・反感を同時に強く意識せざるを得なかったのである。

本稿は、I部で明治初期における日本人の西洋人に対する崇拜・尊敬と反感・憎悪の対立する感情が入り交じった複雑な心理と、日本人の外国人観及び「民族」・「人種」意識を明らかにする。第II部では、第I部で明らかにした民衆の心理を背景に、激しい西洋化の波の中にあつて、新興の学問・研究であった「心理学」において、「民族」「人種」の問題はどのように取り上げられて研究されてきたのかを明らかにする。本研究では、日本における最初期の心理学研究雑誌である「心理研究」に焦点を当てて分析することにする。なお、当時使われた諸外国の国名の主な漢字表記一覧を表1に示した(永原、1999)。

1 明治期日本人の西洋人礼賛・崇拜と反発・反感

外国との接触が頻繁になるにつれ、日本人と外国人の間の軋轢・摩擦もまた頻々と生じた(尊皇攘夷など開国をめぐる政治的対立は、西洋人に対する反感の強さを表すものであった;京大日本史辞典編纂会、2000)。外国人に発砲した罪で備前藩家臣は死罪なつた(中外新聞、慶応三年二月二四日:明治編年史、第1巻)。幕府は、頻発する外国人に対する暴力や侮蔑は「國難を惹起」するとして怖れ、「外人輕侮を戒飭」した(もしほ草、明治二年四月十日:新聞集成 明治編年史、第1巻)。明治十一年の朝野新聞の記事は人種観も含めた当時の西洋人に対する日本人の意識を表して興味深い。見出しトップが「恐異人病時代」であり、西洋人に対する日本人のとまどいと気後れ意識が一般化していたことを示している。明治十五年二月七日の日の出新聞は、特別扱いされる白人西洋人を自嘲気味に取り上げている。英国人アブトル、カルトルは、日本の悪漢と共謀して賭博、玉轉と数々の悪事を働いていた。しかし、外國館にはなかなか日本の官権は手を出せなかった。「異人崇拜の時代に 此の異人ゴロ」がのさばっていると皮肉った(新聞集成 明治編年史、第5巻)。外国人を非難し揶揄する記事が散見される。「外人の横暴已まず 此頃一洋客あり、人力車に乗りて新橋蒸氣車ステーションに至る。途上車中より小便を放ちて車夫に注ぎ掛けたり。車夫怒って打懸らんとするに、洋客忽ち車夫の膝頭に噛み附しかば、車夫は怖れて逃げ退きたりしが、洋客は忽ち其車傍の堀中へ投げ込みて逃げ去りたりとぞ」(明治七年十月三日、東京日日:新聞新聞集成 明治編年史、第2巻)。「政府が高給で抱えた喰わせ者異人 福澤は在留外人嫌ひ」の見出しで、福澤論吉のことばを引き、「夫れ外人の狡猾なる言を俟ず、福澤先生等は在留外人中一個の頼むべき無しとせり、…」と食わ

表1 外国地名漢字宛字一覧

愛蘭,愛耳蘭	アイルランド	市俄古	シカゴ	費府,費拉特費	フィラデルフィア
亞細亞	アジア	西比利亞	シベリア	比律賓,比島	フィリピン
阿富汗斯坦	アフガニスタン	暹羅	シャム	芬蘭	フィンランド
阿弗利加	アフリカ	瓜哇	ジャワ	伯刺西爾	ブラジル
安特提府	アムステルダム	壽府	ジュネーブ	仏蘭西	フランス
亞米利加	アメリカ	星港,新嘉坡	シンガポール	武府,比律悉	ブリュッセル
亞利比亞	アラビア	瑞西	スイス	勃牙利,勃爾牙利	ブルガリア
北阿	アルジェリア	瑞典	スウェーデン	普魯西,李漏生	プロシア
亞爾然丁	アルゼンチン	蘇丹	スーダン	越南	ベトナム
安土府	アントワープ	蘇士	スエズ	威尼斯	ベニス
安南	アンナン	蘇格蘭	スコットランド	秘露	ペルー
英吉利(英蘭)	イギリス(イングランド)	西班牙	スペイン	白耳義	ベルギー
伊太利	イタリア	錫蘭	セイロン	波斯	ペルシア
伊蘭	イラン	塞比亞	セルビア	伯林	ベルリン
伊犁	イリ	蘇連邦	ソ連	土侯	ベンガル
印度	インド	泰	タイ	坡士頓	ボストン
印度支那	インドシナ	知(致)惠古	チェコ	波蘭	ポーランド
維納,維也納	ウィーン	致須	チェコスロバキア	坡西士	ボートサイド
威爾斯	ウェールズ	西藏	チベット	和諾爾	ホノルル
浦潮(塩,沙)斯德	ウラジオストク	智利	チリ	暮利比亞	ボリビア
烏爾圭	ウルグアイ	丁抹	デンマーク	葡萄牙	ポルトガル
埃及	エジプト	独乙,独逸	ドイツ	孟買	ボンベイ
蒙(滿)太利亞,蒙州	オーストラリア	土耳其	トルコ	澳門	マカオ
塊太(地,多)利	オーストリア	尼港	ニコラエフスク	馬德里	マドリード
阿蘭陀,和蘭(陀)	オランダ	新西蘭	ニューージーランド	馬尼刺	マニラ
加奈陀	カナダ	紐育	ニューヨーク	馬來	マレー
樺(柯)太	カラフト	尼(捏)保爾	ネパール	未蘭	ミラノ
加里(利)保爾尼(亞),加州	カリフォルニア	諾威	ノルウェー	墨西哥(古)	メキシコ
柬埔寨	カンボジア	海牙	ハーグ	麥普尼	メルボルン
坎馬(瑪),古巴	キューバ	巴奈(拿)馬	パナマ	莫斯科	モスクワ
希臘	ギリシア	河内	ハノイ	摩洛哥	モロッコ
劍橋	ケンブリッジ	哈府	ハバロフスク	蘭貢	ラングーン
交趾支那	コーチシナ	巴拉圭	パラグアイ	里斯本	リスボン
哥爾薩港(克)	コルサコフ	巴里(斯)	パリ	里昂	リヨン
哥(古)倫比亞	コロンビア	巴爾幹	バルカン	羅馬尼亞	ルーマニア
古倫母	コロombo	哈爾濱	ハルビン	呂宋	ルソン
柴提,西貢	サイゴン	布哇	ハワイ	羅馬	ローマ
薩哈噠	サハリン	匈牙利,洪牙利	ハンガリー	露(魯)西亞	ロシア
聖彼德堡	サンクトペテルブルグ	盤谷	バンコク	羅府	ロスアンジェルス
聖市	サンパウロ	漢堡	ハンブルグ	倫敦,竜動	ロンドン
桑港	サンフランシスコ	緬甸	ビルマ	華府,華盛頓	ワシントン

いづれも複数の表記例があるが、代表的なもののみを掲げた

せ者外国人に対する警鐘を鳴らしている(郵便報知, 明治七年一月七日:新聞集成 明治編年史, 第2巻)。文明開化に浮かれ踊る当時といえども、西洋人がすべて日本人に快く受け入れられていたわけではなかった。

外国人の日本での居住が定着し、都市部特に横浜など開港都市では日本人と外国人とりわけ白人西洋人との接触や関わりは飛躍的に増加した。しかし、開化された国、西洋諸国に住む文化人とはいえ、彼等にはことばが通じず、容姿・外貌、行動様式が大きく異なる。何より西洋の進んだ科学技術を携え、武力を誇示する白人は、日本人にとっては得体の知れない恐ろしい人々だったに違いない。庶民の日常においてもときには、西洋人蔑視や反感につながるできごとがあった。「ある日、大丸に大変な人だかりがした。西洋人が買い物に来ているのだという。いってみると、太い赤い頸に金茶色の毛がモジャモジャしている。眼鏡をかけた男と、キチキチした、黒っぽく光る上衣に、腰の方だけ沢山ひだを重ねて広がった服をきている。意地のわるそうに尖った、茶色の目の、狐のような女が、ボンネットをかぶって、見物にかけつけたものを睨(ね)めかえしていた。小さくて痩せている犬をつれていた。子供の目にも、今思い出しても、決して上品なよい人柄とは思えなかった。ものめずらしくはあったが、なんとなくこの西洋人を軽蔑した。その時分、黒いやせた、茶色の斑点が額にコブのようにある洋犬をカメと呼んだ。だが、そのおり人々が口にしたカメは、連れていた子犬ではなく、どうもその女の方をさして呼んでいた様子だった。西洋人も傲慢だった。泥靴のまま畳の上へ上がっていった」(長谷川, 1983)。生活・文化・行動様式・言語等々、あらゆる面で西洋に引け目を感じていた日本人であったが、日本人としてのアイデンティティや自尊心を失ってしまったわけではなかった。

事故や偶発的な出来事をきっかけに、優位に立つ西洋人に対する人々のわだかまりが爆発することもあった。ノルマントン号の難破は代表的な事件の一つであった(内川・松島, 1983)。この事件は、明治19年10月30日、神戸に向けて横浜港を出港したイギリス船ノルマントン号が、紀州大島沖で沈没した事故をきっかけに起こった。日本人乗客23名は全員溺死した。日本人乗客だけごとく死亡したことが大問題になった。英国人船長ドレークは、沈没する前に日本人乗客に端船に乗り移るよう説得したが、乗客からは聞き入れられず、惨事に至ったと主張した。神戸で行われた裁判では、ドレーク船長は無罪になった。その後公判は横浜のイギリス領事館に場所を変えて行われた。この事件では、西洋人に対する日本人の反発が強く表れている。「彼等皆謂えらく、西洋の教義、法律は東洋に適用すべきものにあらず。東洋人は一種の下等人類たるのみ、これに対して礼を失し、情を失い、危難の場合に臨みて、見殺しにしたりとて、人間の道に違ふの所為と云うべからず。猫を殺し犬を溺らすがごとく類の所業は、人道を以て繩墨するの限りにあらざるなりと。彼等の常に心に信ずる所、既にかくのごとし。故にいったん事に当たりてその行為の非常案外なるは、決してあやしむに足らざるなり。殊に外国船の日本沿海に旅客を運送するものは、船客として日本人を乗載するにあらずして、一種生類の貨物なりと心得て船艙に積み入るのみ」。西洋人は、日本人はアジアの劣等人種であり、単なる積みであると見ているにすぎないと、強く非難している。少なからぬ日本人は、白人西洋人を崇拜し、西洋文化に傾倒すると同時に、日本人を劣等「人種」と見なし、見下す彼等に対して憤慨し、強い反感をもっていた。

2 西洋人観の底流にある「異人」・「毛唐」意識

「毎夕外国奉行から合い言葉が来る。ソレを知らんものは銃殺されてもしかたがないですから、異人の立ち番の所を通ると、異人は銃を横え、鈍(のろま)な日本語で『だれだア』という。ソコで合言葉をいうのです。…異人はその当時毛唐人といい、夷狄といい、禽獣視していたのに、ソレを警固したり、後生大事に尊重するのだから、志ある武士は憤慨しない訳のものでないんですが、私の藩にも伊藤軍兵衛というのがあって、慷慨家でした」(篠田鈺造, 1996)。少なからぬ人々が、西洋人は異人であり、毛唐として蔑視し、見下していた。「陛下行幸のみぎりなど、御送迎に出かけたことがある。途中外国人が馬車で、コノ行列の間を縫ったから、承知しない。『この毛唐奴(め)が』と、その馬車を大勢で顛伏させてしまった」(篠田鈺造, 1996)。明治十年代のことである。

明治21年7月15日、福島県の会津磐梯山が噴火した(新聞集成 明治編年史, 第7巻)。噴火のすさまじさを生々しく伝える当時の新聞は、驚天動地、磐梯山の噴火などだれも想像したこともなく、毛唐人のたわごとであった、と書いている。長くなるが、生き地獄の様を再現しよう。「突然噴火し之が為にその災害を山麓六里四方に及ぼし埋死する者凡そ四百人程内浴客十五名あり埋没戸数は凡そ三十餘戸にてヒパヲ全村の如きは大川噴出の際に其土に埋られ殆ど沼とならんとし噴火鳴動尚未だ止まざる」(東京朝日, 明治廿一年七月十七日)。被害の状況は、連日報道された。無数の焼けこげた死体が発見され、目を覆う惨状が伝えられた。「廿一日午前四時に警察官數十名人夫百餘名をして發掘せしめ親戚故舊のものらに一々撰擇指定せしめしも死屍の顔色の如きに瓦斯又は土灰の為に黒色を帯びたるもの或いは石の為に毆たれしもの目球の飛出せるもの或は手足のなきもの身首處をことにせしもの多かりし故七十九人と定めしも只一箇の屍に首一箇手足各々二本を付し其數を取りしものなれば遂に足二本の殘餘を生ずるにいたれり又男女の區別の如きは只頭髮の長短に依りて區別するを得たる位なり殊に磐梯山崩潰は十五日午前八時頃なるを以て未だ睡眠中にてありしもあり元來東奥地方に於ては寝に就くに當ては裸體にて臥すの習慣なるが故に此朝鳴動に驚かされて裸體の儘遁走せしものもあらんさればにや死屍多くは裸體なりし斯く死屍は容貌を變じ身首手足處を異にし死屍の何人なるやを知るを得ず況やその裸體なる者をや衣類の縞柄にても識別する能はずして為めに死屍を左に轉じ右より移しなどするを見るに堪はずして親族縁者は號泣止まず其惨状悲傷實に目も當られず余も亦知らず知らず衣襟を濕ほせり」(東京朝日, 明治廿一年七月廿六日)。

明治もこの頃にはすでに外国人は日本国内を移動していた。すでに文久2年8月17日のバタヤ新聞には、荷蘭人が駕籠で日本を旅行したことが載っている(新聞集成 明治編年史, 第1巻)。太政官日誌(明治三年一月七日, 新聞集成 明治編年史, 第一巻)には「外人の國內旅行と其の取扱ひ方」が記され、外国人に対して如何に警戒し、神経をとがらせていたかがわかる。「[府藩懸へ] 外國公使旅行之節、城下又ハ陣屋許へ休泊致候ハ、官員一人平服ニテ旅館へ相越シ、知事の口上ヲ以、尋問可致事。…外國人通行之節、往來見物イタシ候儀ハ不苦候エ共、彼方ニテハ高官ノ者モ手輕ニ旅行致シ且ツ彼我之禮義モカハリ候儀ニ付、在々ノ人民ニ於テハ殊更外國人情態ヲモ熟知セザルユエ、不作法等之儀有之候テハ不相濟儀ニ付、地方官ニテ屹度取締可致事」。こうして、外国人旅行客の安否に関する情報も逐次掲載されていた。「外人の有無 目今避暑休暇中外國人の旅行をなす者多き時節なるに今回噴火せし磐梯山は該地方にて著名の山なり且は温泉場ある土地なれば或は外國人の同地方に漫遊し居りて此災いに罹りたるものは非るかと思はれ其筋にては夫々其取調を

遂げられたる處噴火の前日…一名も同地方を外國人の往來するを見認めざりしゆゑ多分外人にして今回の災に罹しものは無からんといふ」（東京朝日新聞、明治廿一年七月二十日）。外國人が国内を頻りに旅行するようになったとはいえ、人々は好奇・畏怖と侮蔑・蔑視の念を同居させながら、不安な面もちで彼/彼女らを見、迎えていたのであろう。「…東西に奔走し四方に離散して救助を求め食を乞ふ者千餘人に及び其負傷者は目も當てられぬ有様にて頭を碎き手足を折り面を潰しなど筆紙に盡しがたき惨状なり…首足所を異にして嬰兒の頭もに木枝に掛かり居る等のものありしといひ檜原村の内雄子澤秋元細野の三部落は悉埋没して一面の山となりたれば死傷のほど判然せざれども恐らくは一人も生を全くせし者なかるべしといふが如き讀む者をして三状苦熱の日猶身毛疎然膚に粟を生ぜしむる悲惨の出來事なりといふべし」（東京朝日新聞、明治廿一年七月廿一日）。恐るべき阿鼻叫喚地獄を彷彿とさせながら、記事は続く。「桑田變じて海となるといひ桑田碧海須臾改といふに唯毛唐人の囁語（ねごと）とし世の變遷のすみやかなる形容詞たるものと思ひたまふ噴火の事を地誌、風土記にて視るも遠き昔の事とのみ思ひたるに今や我東京よりわづかに五十里許りを距てたる會津に於て此の實況を目撃するに至らんとは思ひも寄らぬ災害に罹りたる會津人民即ち我が最愛なる兄弟姉妹の不幸を吊せずばあらざるなり」（東京朝日新聞、明治廿一年七月廿一日）。この世のものとは思えない悲惨な地獄絵を誰が想像し得たか、磐梯山の大噴火は荒唐無稽な「毛唐人の囁語」だった。

團團珍聞（明治十三年五月二日：明治編年史、第4巻）は「尾崎三良の毛唐婦人」と題して西洋一辺倒の世相を滑稽話風に描いている。「尾さき狐の婚禮。是まで連そふ私をさき如何に珍しいが英からとて、玉蜀黍の毛のような婦人を女房に為やうとは、そりゃ餘で三郎ぞや」。服部誠一が明治7年に著した東京新繁昌記(1874)でも、ところどころに「毛唐人」「夷狄」のことが使われている。例えば、学校の項で、漢學生が漢學批判に対して洋學生を論駁している。「一客、切齒扼腕進んで曰く、余は乃ち漢學生也。子の漢學を誹謗する何事呼。漢も亦學、道義に於て豈二有らん呼。夫れ孔子の道は至正至大西洋夷羅狄の道と日を同うして論ず可らざる也」。西洋諸國は狡猾で、利にさとく「君臣父子を忘れ廉恥醜惡」を失って、人倫を顧り見ないと痛烈に批判する。対して、洋學生は反論する。「支那地方を以て夷狄と為し、西洋諸國を以て中華と稱して可也。且つ口を開けば則ち文章々々と稱す。…赤壁の賦を作るも蒸氣の發明を知らず、陳腐の寐語を吐くも開化の文字を解せず、毛唐人の用たる果たして亦何か有らん」と。築地異人館の項では、「彼の欄に凭（よ）る婦人…其の側に立つ者は髮亂鬚長く、毛唐人に似て毛唐人に非ず、是毘沙門天也」。西洋文化への傾倒が著しかったにもかかわらず、相変わらず西洋人に対する「毛唐」の蔑稱は生きていた。開化開化と沸き立つ一方で、日本人の意識の底流には「毛唐人」として西洋人を蔑視する觀念が根強く残っていたことを示す一例である。

3 白人と黒人の対比を通した「人種」意識

江戸末期には黒人奴隷の売買はすでに禁止されていた。1833年にはイギリスが欧米で初めて植民地における奴隷制を廃止する法律を制定し(高木他、1957)、1863年にはアメリカで奴隷の解放宣言が行われた(大下他、1989)。灼熱酷暑のサンウキス島に日本人300人が労働者として送り込まれることが明らかになり、黒奴同様であると強い非難が起こった(中外新聞、慶応四年閏四月三日：新聞集成 明治編年史、第1巻)。「此節日本國內の騒亂に乗じ、當港在留のある外國人、サンウキス島の砂糖竹植附を渡世といたし候と約定し、

日本人三百餘名を三ヶ年の年季にて雇ひ切り砂糖竹植附刈込等に使役するが為彼地は差送れり。…黒奴賣買の所業に均しき事にて、此の如き所業は萬國の法例に戻り、且無辜の日本人狡點の外國人に欺かれ、利益は悉く彼に奪われ、憐む可し日本人は酷熱の氣候と辛勞煩苦に堪へずして疾病に罹るのみならず、萬一如何程慘酷の所置に逢ふとも訴ふ可處無く、たとへ死すとも期限中は故郷へ歸るの路無く…黒奴賣買の事は既に禁止となり其後英國政府と支那政府と條約ありて、支那人の年期を定めて外國へ送りし事あれども、是亦禁止に成りたり」。黒人はもともと悲惨な奴隷状態にある人間であり、劣等「人種」の代名詞として理解されていた。

西洋文化を取り入れる過程で、白人に対する無批判な礼賛・羨望・優越視が生じると同時に、黒人に対する蔑視・劣等視が生まれ、両者はコインの裏表のように表裏一体のものとして日本人の「人種」觀念に定着していった。当時の事件はこのことを示唆している。「外人を黒んぼと云っただけで懲役 十月三日東京裁判所落着 東京第四大區五小區湯島三組町百一番地 明治醫學社寄留 高知縣平民 伊與木 進 同社寄留 長野縣平民 中川益太郎 其方儀、英國人アブデル・カデル氏へ水ヲ注ギ石ヲ投ゲ付ケタル旨同人ヨリ告訴スル處徴證ナキヲ以テ其罪ヲ問ハズト雖モ、同人ヲ指テ黒人ノ通ルヲ觀ヨ、或ハ黒人ガ何ヲ言フカ等ノ言ヲ發スル科罵詈律人條ニ依リ懲役十日宛申付ル」(朝野、明治十一年十月四日：新聞集成 明治編年史、第三巻)。「黒んぼ」呼ばわりは、白人に対する大きな侮辱であり、犯罪であった。

南洋の国、トラック島から王子が日本を視察に来たときの紹介記事(時事、明治二十六年五月二十五日：新聞集成 明治編年史、第八巻)には、南洋蔑視、肌の赤黒い人々を輕蔑する傾向を明らかに見て取ることが出来る。「南洋トラック島の王子來朝」の見出しの下、次のように王子は描写されている。「然るに蠻島の事なれば王族と雖も裸體にて腰に帯を纏ひ居るのみなれば、風俗の卑しきこと更に印度地方の蠻民に異なる事なく、サンミ氏は身體五尺もあり、年齢は二十五六歳にして、容貌猛惡ならざるも温和と云ふべきに非ず、頭髮は散髪にして頭上に木の櫛に似たるものを以て束髮の體を為し、耳には貝殻製の輪を下げ、色は黒赤を帯び、言語は少しく英語に通じ又羅馬字を書く事を得。従者は齡漸く十六七歳にて蠻族としては愛らしき容貌なり、此の兩王族は自國を放れてより米飯及魚類を食し頗る満足の様子にて熱帯地方より俄に寒氣の國に來りしを以て脚疾を起し大に困難したるが、最早全快して衣服は船主より之を贈與したるものを着し居りて餘り上陸を好まざる様子なり」。文明開化の波が日本を飲み込む中で、西洋流のアジア・アフリカ・インド蔑視と有色人種劣等視の「文明觀」・「人種觀」が、日本人の間に急速に浸透し形成されていた。

明治初期の日本人の人種觀は、福澤諭吉の掌中万国一覽(1869)に見ることができる。人種には5種類あり、白哲(皙)人種(ヨーロッパ人種)、黄色人種(亞細亞人種)、赤色人種(アメリカ人種)、黒色人種(アフリカ人種)、茶色人種(諸島人種)である。白哲(皙)人種は、「皮膚麗しく、毛髮細やかにして長く、頂骨大にして前額高く、容貌骨格都て美なり。其精神は聡明にして、文明の極度に達す可きの性あり。これを人種の最とす。歐羅巴一洲、亞細亞の西方、亞非利加之北方、及び亞米利加に居住する白哲(皙)人はこの種類の人なり」。黄色人種は、「皮膚の色、黄にして油の如く、毛髮長くして黒く直ぐにして剛し。頭の状、梢や四角にして、前額低く腰骨平らにして広く、鼻短く、目細く、且其外皆

(まじり)斜に上れり。其人の性情、よく艱苦に堪へ、勉励、事を為すと雖も、其才力、狭くして、事物の進歩、甚だ遅し。フィンランド、ラブランド等の居民はこの種類の人なり。赤色人種は、「皮膚、赤色と茶色とを帯びて銅の如く、黒髪直くして長く、頂骨小にして、腮(頬)骨高く、前額低く、口広く、眼光暗くして深く、鼻の状、尖り曲がりて鉤の如く、又鷲の嘴の如し。体格長大にして強壯、性情険しくて闘いを好み、復讐の念常に絶ゆることなし。南北亜米利加之土人は比種類の人なり。但しこの人種は、白哲(皙)の文明に赴くに従ひ次第に衰微し、人員日に減少すと云ふ。黒人種は、「皮膚の色黒く、捲髪(ちぢれげ)羊毛を束(つか)ねたるが如く、頭の状細長く、腮(頬)骨高く、顎骨突出し、前額低く、鼻平たく、眼大にして突出し、口大にして唇厚し。其身体強壯にして、活潑に事をなすべしと雖も、性質懶惰にして開化進歩の味を知らず。亜非利加砂漠の南方に在る土民、及び売奴と為りて亜米利加へ移住せる黒土等は、この種類の人なり」。茶色人種は、「皮膚茶色にして渋の如く、黒髪粗にして長く、前額低くして広く、口大にして、鼻短く、背は斜めに上ること黄色人種の如し。其性情猛烈、復讐の念甚だ盛なり。太平洋、亜非利加の海岸に近き諸島、及びマラッカ等の土民は、この種類の人なり」。さらに、人間を、定住せず食を追い求め移動する生活を「蛮野」と呼び、安全な地に定住し、礼儀を知り、宗旨を信るなどし天賦の幸福を享受する生活を「文明」と呼んでいる。この二種の間生活は、混沌、蛮野、未開、開化文明の低級から高級へと四種類に分類できるとしている。

青木(2000)が指摘するように、明治時代のアフリカに関する情報は東南アジアと同様に豊富に日本に伝わっていた。「アフリカ諸国が西洋列強による植民地化の時代に当たっていたため、ヨーロッパ経由で…日本に伝わっていたからだ」。しかし、明治初期のアフリカについての記載内容は、福澤の記述が新井白石(1724)の諸外国の記述内容と共通点が多いことからわかるように、「外国からの丸写しで、ヨーロッパ優越主義を反映し、アフリカは野蛮な未開人の住む危険な『暗黒大陸』で、ヨーロッパ人によって開発されつつある大陸としての扱いだった」(青木, 2000)。

4 日本「民族」への関心

「人種」や「民族」の定義は必ずしも明確ではない。今日なお政治的、社会的に影響のある人々が、「民族」に関する偏狭な発言をし、物議を醸すことも多い。近いところでは、田中真紀子元外務大臣が単一民族発言をし、後に外務省が撤回している。「ユーゴスラビア連邦のコシュトニツァ大統領との会談で『この地域は民族、宗教の違いにより、内戦状態にあった。民族については、日本では単一民族ということで、なかなか理解は難しい』と述べた」(朝日新聞, 2001年7月17日, 夕刊)。前国連難民高等弁務官の緒方貞子は、日本の難民問題の受け入れに関わって「民族」問題に触れている。『「日本が単一民族」との言説について『人・モノ・情報が広く行き交う今日の世界では到底維持できない錯覚だ』とし、『外国人に対する偏見や差別を打ち捨てる必要』を強調した」(朝日新聞, 2002年11月17日)。日本が単一「民族」で構成されているか否かが未だに議論されていることは、「民族」の解釈・定義が人により大きく異なることを示すものである。

沖縄や北海道は、現在日本の一部であるが、そこに住む人々は「琉球人」・「アイヌ」とよばれ、いわゆる「本土」と呼ばれる本州・四国・九州に住む人々とは区別されてきた。沖縄は1972年にアメリカから日本へ領土の返還が行われた。しかし、もともと沖縄は、琉

球王国(1429年成立)として日本とは独立した国であった。16世紀に東南アジア貿易が衰退し、琉球王国は日本との貿易に傾斜していった。その後、豊臣秀吉は、朝鮮出兵を契機に、島津(薩摩・大隅)の権力範囲に琉球王国をおいた。さらに、島津は1609年に琉球出兵を行い1611年に琉球を属国(附庸国)とした。これ以前の琉球は、独自の王国であったことから古琉球として区別される。1634年には、琉球は日本と中国の両国に属すると決められた。明治政府は、1872年には琉球藩を、1879年には沖縄県を置いたため、清国との間で琉球帰属の問題が生じた。しかし、抵抗運動の挫折があり、琉球は事実上日本の領土であることが確定した(以上、永原, 1999)。

高良倉吉(1986)は、次のように指摘する。「われわれの思考様式には、日本列島に住む人々とその文化を均質的・等質的にとらえるクセがある。『日本民族』や『日本文化』と称される概念も、多くの場合、均質性・等質性を前提に用いられており、日本史についてもまた、いわゆる一国史的な論理に立つ「国史」的歴史像が風靡しているように思えてしかたがない」。宮城栄昌(1975)もまた、沖縄の歴史を振り返る中でその独自性を述べている。1871年、沖縄に朝貢に来ていた宮古の船が、台風のため台湾に漂着した。そのとき、69名の乗組員のうち59名が、台湾の生蕃(せいばん:高砂族)に殺された。当時清は、台湾を自国の固有の領土とは認めていなかったため、政府は西郷従道をして台湾に出兵させた。その後清は態度を変え「征蕃」に対して抗議をした。日清両国間で調停が行われ、大久保利通を中国に派遣して調印にこぎつけた。そのときの条約文に、「台湾の生蕃が日本に属する人民(沖縄人)に対して、無法に害を加えた」との文章が含まれた。これが国際法で沖縄人を日本国民と認めた最初のものであるという。このときまで、琉球人は、日本「民族」とは異なる人々であったことを示すものである。当時の新聞には、「琉球人來朝」(東京日々, 明治五年八月二五日:新聞集成 明治編年史, 第1巻)、「琉球は依然として支那へ朝貢」(あけぼの, 明治八年三月二二日:新聞集成 明治編年史, 第2巻)、「琉球藩遂に我國に隸屬す」(東京日日, 明治八年一月一七日:新聞集成 明治編年史, 第2巻)、「琉球藩の哀訴歎願」(評論新聞三六, 明治八年一月:新聞集成 明治編年史, 第2巻)、等々、「琉球人」と題する記事が頻りに掲載されている。沖縄に住む人々は、日本人とは明確に区別され、「琉球人」と表現されていたのである。

「アイヌ」の人々もまた、「本土」に住む日本人とは異なる歴史を築いてきた。永原慶二(1999, Pp. 4)によれば、「アイヌ」は、北日本に古来から居住し、固有の言語や文化などを形成し保持してきた人々の集団をさす民族自称である。現在の東北地方に当たる蝦夷地や北海道、樺太などに生活してきた。日本の権力者・為政者により次第に支配下におかれるようになり、日本人との同化が進められた。近世にいたり北海道にも幕府の支配が及び、居住地域・生活領域が極端に狭められてしまった。1669年には不等価交換などに対する不満からシャクシャインの戦いが起こり、1789年には飛騨屋請負場所での労働酷使に対するクナシリ・メナシの戦いが起こった。ロシアの南下に危惧を抱いた幕府は1799年、東蝦夷地の直轄に踏み出し、これを契機にアイヌ民族を内国民として位置づけ、風俗改めなど日本人化を強いる同化政策が始まったという。

明治政府はアイヌの人々を土人と呼んでいた。日本人への同化策を進め、北海道開拓の力とした。開拓使日誌には、和人とアイヌの協調が説かれている。「一、北海道ハ皇國之北門最要衝之地ナリ、今般開拓被仰付候ニ付テハ、深ク聖旨ヲ奉體シ、撫育之道ヲ盡シ、教

化ヲ廣メ、風俗ヲ敦ス可キ。一、内地人民漸次歸住ニ付、土人ト協和、生業蕃殖候様開化心ヲ盡ス可キ。一、樺太ハ魯人雜居之地ニ付、專禮節ヲ主トシ、條理ヲ盡シ、輕卒之振舞曲ヲ我ニ取ルノ事アル可ラズ、…」(開拓日誌四、明治二年九月)。「アイヌ土人の日本語 北海道舊土人が本邦の言葉を真似たるものの中には餘ほど變りたるものありて思わず失笑することあり…」(大坂毎日新聞、明治二十三年七月一八日)。内地和人との融和をすすめるためのアイヌの教化も積極的に行われた。「樺太土人の教育 めきめきと進歩 先年千島樺太交換の際、開拓使にて樺太より石狩國對雁(ついでしかり)へ移されし舊樺太土人の子弟は、先年來同所に教育所を設けて夫々教育を施されしに、學業も追々進歩し…」(郵便報知、明治十三年一月二二日)。アイヌの人々の徴兵も行われた。「アイヌが從軍志願 北海道日高國邊には舊土人乃ちアイヌ人種の部落多し、此部落も次第に王化に沐浴し、中には日本服を着し日本語を解し日本通を以て誇るもの少なからざるが…從軍の手續を願わんとてそれぞれ準備中のよし…」(報知新聞、明治二十八年一月五日)。東北・北海道への日本人の進出が進むに連れ、アイヌ人口は次第に減少するに至った。取り上げられたアイヌ衰退の原因は、偏見に満ちたものであった。「アイヌ人減少理由 黴毒遺傳及内地人と交通の爲 アイヌ人減少の主なる原因は、全く遺傳の黴毒病」(朝野新聞、明治二十三年六月一五日)。「アイヌ滅亡の叫び 北海道土人アイヌ人種の年を逐ふて滅び行くは、…生存競争の法則によるなど六つかしきことのみならず、多くは内地人より侵害され、生活の便を失ふに依ること多し。其の侵害の第一は、アイヌが開墾せる土地を取り上げらるゝこと、教育を受くる便宜を剥がるゝこと等にあるよしにて、今其愁苦を訴へんとて、同道日高國沙流のアイヌ鍋澤サムロツヲなるもの、…都下に來り居れり」(國民新聞、明治二十八年一月二七日)。琉球の人々同様アイヌの人々は、その歩みを見ると(小川・山田、1998)、日本人とは生活や文化、言語を異にする独立した「民族」だった。

5 日本「民族」の「人種」改良

南博(1994)は「日本人論」の中で、日本人の「人種改造」論が明治期にくり返し主張されたと指摘する。「明治の初めに日本を訪れた西洋人は、知的水準が高いだけでなく、平均的な日本人より肉体的な面でもはるかにすぐれていた。つまり白人エリートの知能と体力に、日本人は圧倒されたのである。明治初年から人種改造論は断片的に、西洋人との雜婚を進める意見などに現れた」。その最も体系的な提案は、福沢諭吉の門弟であった高橋義雄だったという。高橋(1884)は、「日本人種改良論」を著した。その中で、日本人と西洋人の「雜婚」によって、日本人の人種そのものを改良しようと提唱した。彼は、日本人種が劣等であることを前提として、劣等人種が優等人種と雜婚すれば、劣等人種にとって好結果をもたらすと考えた。「西洋人は身長・体重・頭顱いずれも日本人よりすぐれているので…遺傳を目的として…雜婚することが日本人種にとって必要だと論じた(南、1994)。「人種」的に優秀な西洋人に互する日本人を生み出したい。そのためには、白人西洋人男性と日本人女性の間「混血児」をもうけ、遺傳的に優良な日本「民族」造ることが早道である。こんな噂が広まり、人々が混乱を来したこともあった。「歐洲の人種(ひとだね)を得為に」、新聞雑誌八三(明治六年三月)はこんな見出しで記事を書いた。「駿州大宮邊ニテ、此頃一奇説ヲ唱へ觸セル由、其故ハ女子十三才ヨリ二十五才迄他エ縁付クザル者ハ都テ歐羅巴エ遣ハサル、旨不日應ヨリ布令有之シトノ事ニテ、日本女子ヲシテ彼歐洲ノ人種ヲ得サシメン為杯暴説ヲ傳へ、區々戸長屢説論ヲ加フレドモ、素ヨリ頑愚ノ民信用セズ。女子アル者

ハ俄ニ婚姻ヲナシ、或イハ十二三才ニテ未ダ花唇モ綻バザル者ヲ、俄ニ齒ヲ染メ他ニ嫁セシメ杯人氣ノ動揺大形ナラズト。右ハ區區巧手ノ女子ヲ撰擧シ、歐洲便利ナル職業ヲ傳授セシメン」ヲ公布ニ可相成哉ノ説ヲ誤解セルヨリ起リシ事ナル由」(新聞集成、明治編年史第二卷)。日本人の西洋コンプレックスとその克服が如何に深刻に考えられ、一般の人々の間にも広く浸透していたことをよく示す出来事であった。

日本人の人種改良を図るという発想には、ダーウィンの「種の起源」(1859)に示された進化論や、進化論から着想したゴールトンの優生学が背景にあったと考えられる(岡本、1963)。ゴールトンは心理学に統計的解析を導入する端緒を開いたことで知られる(岡本、1976、1987)。彼は、「遺傳と天才」(1869)の中で、ある人の天才度を測定する方法として、全人口に対し、その平均以上を示す人数の比率(頻度)を用いることを提唱した。統計的方法を用いて身体領域から、精神的領域に至るまで、個人差を測定することを考案した。その一方で、ゴールトンの「研究の本質的な目的は、個人差測定によって研究した優越性あるいは劣等生の遺傳的關係を実証的に証明することであった」(モーリス・ルシュラン、1957)。

モーリス・ルシュランは、差異心理学について次のように述べている。「集団や個人のすべてが、同一の環境条件の変化に対して同じように順応するものではないことがわかる。その『種』全体にとって、一般的な形式を持つ真の《法則》、あるいは真の關係というものは、特殊な各個人を継続的に考察するばあいには、ある限界内でさまざまに変わるものである。このような個人的差異を研究することが差異心理学の目的である」。個人差研究には二つの考えが根底にあり、その一つが、理論的なもので、ダーウィニズムの考えから生まれ、ゴールトンを経て発展した統計学の心理学への応用であった。ダーウィンの進化論(1859)は、個体が生存するためには環境に適した特性を持つ必要があり、適した特性を持たない場合には、自然に淘汰され滅亡してしまう。環境適応に有利な特性を親から受け継いだ子孫は、生存競争にうち勝ち強い個体として生きのびる可能性が高くなる。ゴールトンは、遺傳を通じて、優れた個体、国民を生み出すことに大きな関心を抱いた。「人間の心的素質の遺傳的法則を研究して、一全體としての国民の素質を生物学的に向上せしめることの可能性と必要性を強調して今日の優生学の文字通りの創設者となった」(甘粕、1935)。彼の発想は斬新な者であったかも知れないが、「人種」の改良をも展望する過激な主張も含まれていた。

「天才と遺傳」の中から彼の考えを拾い出してみよう。「自然的能力は、近代のヨーロッパ人が低位の人種に屬する人間に比してずっと大なる平均度に於いて所有してゐるような自然的能力である。家畜の歴史を見ても、一般的に進化の歴史を見ても、將來近代のヨーロッパ人に比して、知的にも、道徳的にも、丁度近代のヨーロッパ人とネグロ人種の最下級のものとの懸隔ほどかけ離れた優秀で健全な人種が形成せられるといふことは、少しも疑いはしいことではない」。彼は人のある特性、例えば身長が、165cmから170cmまでの人であろうが、170cmから175cmまでの人であろうが、その全体に対する割合は、年度ごとに変化することはなく、ほとんど一定である。しかも、特定の集団の平均値は年度により一定しており、平均からの絶対値が等しい場合には、絶対値の範囲内の平均上の人と平均下人の人数(全体に対する割合)はほぼ同じである(平均偏差の法則と呼んでいる)。ゴールトンは、この平均偏差の考えを人間の自然的素質の優劣に応用することにより、人間を

優秀な者 (A級・B級・C級…F級・G級…) から劣等な者 (a級・b級・c級…f級・g級…) へと分類した (表4)。この人間の等級分けによって彼は諸民族の比較を行っている。それによれば、「ネグロのX或いはG級以上の全級がわれわれのF級に相当するやうだといふことを示してある、すなわち黒人と白人の間には少なくとも二級の差異bがあるのである」。「要するにネグロのE級、F級はざっとわれわれのC級、D級に等しいと見液做されるのである」。「ネグロはわれわれの間では薄馬鹿と言わざるを得ない者の数が非常に多い。アメリカにおけるネグロの従僕について語ってある書物を見ると、どれにもかような例が一ぱい出てくる。私自身もアフリカを旅行してこのことを非常に強く感じた。自分たちの仕事の上でネグロがいろいろのへまを演ずるのを見ると、如何にも子供っぽく、のろまで、馬鹿のように思へて、私はしばしばわれわれ人間族を恥ぢねばならなかつたほどである。彼等のC級はわれわれのE級ほどの低さだと言っても誇張ではないと思う」。「民族」には優秀なものから劣等なものまであり、等級化できるというのである。「彼にとって人類の改善こそ、まさに最終目標であり、優生学とは種の改良のために人を選抜飼育することであった。

人類の直面する現代の社会的課題の解決のために、…人種差別的…生得的知能観も、ゴールトンの遺産に含まれていたということを強く指摘する心理学史家も出ている」(岡本, 1987)。リーヒー(1986)は、次のように厳しい指摘をしている。「ゴールトンの最も忠実な弟子であったカール・ピアソンは、優生学のためにも積極的に活動した…結核は遺伝病だから、結核の遺伝子を…まき散らすだけの患者を治療することに反対だった…彼は、大英帝国の結核撲滅運動に反対した。彼は、また、ユダヤ人の子どもがアングロ・サクソンの子どもよりも不潔なのは、スラムに住んでいるからではなく、生まれつき不潔だからスラムに住んでいるのだと主張した」。現在から見れば、ゴールトンは人種改良に関して過激な主張をしていた(岡本, 1963)。「青年紳士諸君、只今より国家が厳格な規定に従って実施した本年度競争試験の結果を発表いたします。諸君は、才能、性格、身体の全面を通じて最優秀の成績を得られた人々であります。別に又本年二十一才に達せられました全国の若き女性に対しても、漏れなく一定の試験を実施いたしました。其の試験範囲は申す迄もなく女としての優雅さ、容姿、健康、気質、主婦たる教養、偏らざる愛情、高尚なる心情、並びに知能に留意致したものであります。吾々は諸君一人一人の得られた点数を具に検討し、一人一人の個性を深く熟慮して十人の女性を選定いたして居ります。私が此処に携えて居ります名簿に従って結ばれます結婚はそれぞれに類稀なる幸福の確率を約束するに止まらず、何よりも亦我が国家の将来にとって絶大なる利益を将来すべき優秀なる後継者の誕生を確約するものであります」。海野(1911)は、日露戦争後の明治44年に優生学を基礎にした「興国策としての人種改造」を著している。日本人と西洋人の雑婚により、日本人を改良する発想は、ゴールトンの優生学の延長線上にあることがわかる。

表4

自然的素質による人間の分類

平均以下	平均以上	何人かといふ割合	同一年齢に100人につき	イギリスの男子の人数、即ち千五百人の中の下記の各年齢に該当する人数						
				20—30	30—40	40—50	50—60	60—70	70—80	
a	A	4	256,791	651,000	495,000	391,000	268,000	171,000	77,000	
b	B	6	161,279	409,000	312,000	246,000	168,000	107,000	48,000	
c	C	16	63,588	161,000	123,000	97,000	66,000	42,000	19,000	
d	D	64	15,696	39,800	30,300	23,900	16,400	10,400	4,700	
e	E	413	2,423	6,100	4,700	3,700	2,520	1,600	729	
f	F	4,300	233	590	450	355	243	155	70	
g	G	79,000	14	35	27	21	13	9	4	
X	X									
即ちGより下即ちGより上の位のすべての位のすべての位の		1,000,000	1	3	2	2	2			
平均のいづれか一方の側の数…		500,000		1,268,000	964,000	761,000	521,000	332,000	149,000	
総数、平均の両方の側の数…		1,000,000		2,536,000	1,928,000	1,522,000	1,042,000	664,000	298,000	

各該年齢階級の人数の割合は、イングランド及びウェールズに於ける事實上の割合から算出されたもの (1861年度國勢調査附録, 107頁)
 例一 F級は500人毎に一人ある。換言すれば百萬人毎にこの階級のもの233人ある。これはF級についても同様である。イギリス全土(イングランド、スコットランド、アイルランド)を通じて590人のF級のもの(及び同数のF級のもの)が、20歳から30歳までの間にいる。30歳から40歳までには450人、以下同様。

II 明治・大正初期の心理学における「人種」・「民族」研究

1 心理学の輸入と定着

心理学がなぜ明治期に西洋から急いで輸入されたのか。大泉(1977, 1998)は、近代日本における心理学の導入と発展の過程を詳しく分析している。彼は、心理学の導入は、「日本の近代化を『上から』推進しようとした明治政府の政策だった」、と考えている。「迫り来る欧米資本主義列強からの圧力に抗して、民族の独立と近代化を自らの手で達成するために、明治新政府は“富国強兵”政策を採用し、当面の「一大急務」を西洋文明の移入と近代的学校制度の導入においていた。「1872年8月、明治政府は『学制』を發布し、…その制度的理念の基礎づけと学校教育の実践的方向づけのために、率先して欧米の教育論・技術の導入・移植に努めた」。さらに、「文部省は学制發布の翌月開設の最初の官立師範学校にアメリカ人講師スコット(M. M. Scott)を招き、その指導を受けた学生を全国の師範学校に配置して行く方針をとった。スコットはアメリカの師範学校などから教科書や学習指導案、教材や教具をとりよせ“一斉教授法”などの近代的学校教育法を伝えた」。この教育法をこれまでの教育方法と比較するとき、そこに欧米の教育心理学的思想を受け入れる条件づくりともなっていたことに気づく、と大泉(1977)は指摘する。

心理学の訳語については、東京開成学校の予科と法科で1874年に「英語学(心理, 論文)」と「心理学及論文」の教科名が用いられた。「日本の心理学は明治の後半から大正の中頃にかけて一定の定着を達成し、それなりの社会的評価を受ける世になる。…1890年代までの心理学は欧米の概説書を翻訳紹介するものが多く、その受容は心理学的調査の模倣や実験の追試などは希で、専門知識=教科としての意義が主であった」。この事情は帝国大学、高等師範学校、私立学校においても大差はなかった(以上 大泉, 1998, p17, 谷本, 1897)。実験を主にした本格的な心理学研究が行われるのは、帝国大学に心理学研究の条件整備が進められる、日清(1894~1895)・日露(1904~1905)の両戦争と第一次世界大戦(1914~1918)の間であった。1901年に東京帝国大学出身者を中心に初めて「心理学会」が研究会として月一回開催された。発端は1891年から元良勇次郎宅で行われていた談話会が発展したものであった。その後も「心理学通俗講話会」(1909)が月一回開催された。二つの会はともに講演や講話を中心に行われたのである。後者は、特に一般人向けに行われた。この心理学通俗講話会は、京都帝国大学の心理学会と連携し、1912年「心理学研究会」に発展的に改組した。心理学研究会は、本論文で分析対象とした「心理研究」を刊行し、後に大正末に統合された日本心理学会の「心理学研究」に引き継がれるまでの間の1925年までに28巻発刊した(心理學研究会, 1913, 佐藤, 1997, 日本心理学会, 2003)。

2 心理学書に著された「人種」・「民族」

第I部で概観したように、19世紀末以来西洋との接触と交流を余儀なくされた日本人は、「民族」や「人種」の違いを強く意識せざるを得なかった。女子高等師範学校教授下田(1904)は、「女子教育」の中で、「近來世界に於ける日本の位置に就ての自覺が、我國民に起り出してから、國民一般に元氣が出て、各方面の事業に驚くべき發展を見るに至ったのは、實に慶すべきことである」、「我國女子の精神的水準は、概して尚西洋の女子よりも低い、國の文野の程度は、女子の精神の開明の度が最も能く之を示す、我國の女子の教育は

尚廣くなると共に高くならねばならぬ所以である」と述べ、世界の中の日本を強く意識している。「民族」や「人種」意識の高揚は、欧米心理学の紹介から脱し始めた明治末期の日本の心理学研究にどのように反映したのであろうか。心理学の基礎となる実験心理学の訳書・著書(塚原, 1901, 大槻, 1911)、ソーンダイクの訳書「人性研究」(北澤, 1904)には「民族」や「人種」に関する記述はない。東京師範学校教授の小泉又一の著した文部書検定教科書「教育的心理学」(1908)にも、該当する内容は見あたらない。心理学において、「民族」や「人種」について記述することは一般に少なかったのであろう。

とはいえ、中には進化論をもとにした「人種」の説明をした心理学書もあった。有賀長雄(1885)は、「教育適用 心理学」の中で遺伝と人種について紹介している。「茲ニ二名ノ児童アリテ、之ニ全ク同一ノ自然並ニ人為ノ經驗ヲ授ケ、且全ク同一ノ演習ヲ課シタランニハ、果シテ同一ノ心意ヲ備フルニ至ルベキヤト問フニ、…近時ノ學者ハ然ラズト答フ、何トナレバ人ニ依リテ自然ノ發育ニ差同アレバナリ。サレバ自然ノ發育ヲシテ異ナラシムル者ハ何ゾト問フニ、答ヘテ曰ク先祖ヨリ遺傳スル所ノ心意ノ偏向氣習コレナリ。遺傳するのは身体の形質だけではない。腦髓の遺伝を介して知性、感情、意志も親に似るといふ。遺伝には「特殊の遺伝」と「普遍の遺伝」二種がある。「特殊の遺伝」には智力・感情・意志の發育の早い遅い、寒暖の感覺、右利き左利き、近眼、盲目、色盲等がある。「普遍の遺伝」は、いわゆる天性といわれるものであり、教育されなくとも手に触れるものを口にす、歩行する、兩眼の動きを同時に調節する等の力をさす。さらに、人種を「野蠻人(人種)」「古代人」「近世人」の3つに区分している。「野蠻人種ハ物ノ資質一定シテ變ゼザル事ヲ知ラズ、却テ種種ニ變化スル者ナリト信ズル…」。野蠻人には、ブラジル人、アフリカ人、蝦夷地に住む人々、等がいる。「ブラジルノインデヤン人ハ『日日ノ要求ニ直接ニ關係スル者ノ外ハ何事ヲモ思念セザルモノ、如シ、善ク觀念ヲ為スト雖モ、其知覺ニ因テノ有益ナル事ヲモ演釋セズ』ト云フ。東部亞非利加人ノ心意ハ『感覺ノ範圍ヲ脱セントセズ、且ツ之ヲ脱スル能ハザルニ似タリ、現在ノ物ノ外ハ何事モ留意セズ』ト。蝦夷實記ニ曰ク『何事モ今サシ掛リタル事バカリニテ、初メノ事ノミ、末ノ事ニハ心ヲ用井ル事無シ』ト」。いずれも野蠻人は、現下眼前のことしか考えられないのだという。

下田(1904)は、前書「女子教育」の中で「進化論より見たる男女」と題して、性差を進化の観点から説明している。エリスの説を引用して、次のように解説している。「女子の子供に類似の多いのは其男子に優る所以である、人に似た幼い猿は、割合に人間的性質を、其成熟せるものよりも多く有し、成熟せるものは割合に多くの禽獸的性質を有して居る、若い猿は人間のような平滑なる球形の頭と割合に小さい顔を有して居るが、長ずるに従ふて、人に類するの點減少し、其幼児よりも劣化する、即ち腦は割合に甚だ小さく頭蓋は見悪く、顔面突出して大に且鋭角をなし、暗毛全身を覆ふて居る…。猿も人間も幼児期がもっとも進化した状態にあり、成長するにつれ退化するというのである。「人間自からも生活の進行に連れて、其幼き時の殊更に人間的なる標本から、漸次遠かるものである、併し其退化の程度が人間は猿より少い、猿はますます禽獸化する。…人間の子は人性の重なる著しき性質を備へて居る、即ち其頭腦は大きく、顔面は小さく、毛髪は少なく、骨格は纖巧に出來て居る、之れに反して舊世界の猿、野蠻人及び老人は、割合に頭が小さく、顔が大きくて恐ろしく、脚が長く、毛が多く且黒く皺びたる皮膚を有し、脂肪過小にして、筋肉組織及骨格は過大に、神経及び精神は硬性である」。「女子は、男子より、児童に近似する

ことが大きいから」、「女子は男子よりも人間の特徴を高度に有している」のである。「民族」や「人種」についてもわずかではあるがふれている。「人間に於ては三歳以後の成長は、外界に對しての必要な適應であるが、或る度までは劣化と老化に外ならぬ、而して遂には或る度までは猿に近寄るのであるが、猿程下等には達しない。人間の中でも人種によって其劣化の度が違ふ、アフリカ人は早く老衰するが、ヨーロッパ人は長く兒童的活發を保有している」、と。進化論を基礎にした欧米の「民族」観や「人種」観が、Hallの訳書の前に輸入されていたことがわかる。

個体発生は系統発生を繰り返すと主張したHallの「青年期の心理学」が訳されたのが明治43年であった(元良, 1910)。「發生學の立脚地より見て嬰兒の發達は系統發達(フィロジェネシ)の各階級を反復する」。「細胞分裂の際各個體は一般に其種の進化の歴史を反復するものにして、徐々に原生動物の時代より複細胞動物の時代に移るなり。則ち單細胞動物の時代より始めて蟲類、魚類、水陸兩棲動物、類人猿、人類等の時代を盡く經過するなり」と系統発生及び進化の過程を重視している。第1章「身長及體重の發達」では、遺伝について次のように述べている。「…人種及遺傳は各個人に略其發達すべき大きさを限定するものなり。而して全體の發達の如何に分配せらるゝやは遺傳の最も特有なる表現の一にして境遇又は教育も是を制する力なきが如し」。続いて、人種的特色について説明している。『パタゴニア』人、北米印度人(特に『ミスシッピー』種族)及び蘇格蘭土人は恐らく最も丈高き人種にして、瑞西人、那威人及白人種の亞米利加人は次に次ぐ。亞非利加の侏儒、日本人、「エスキモー」、南部伊太利人、「ブッシュメン」、西亞非利加人、「マレー」人、佛蘭西人、西班牙人は最も丈低き人種に屬せるなり。…人種によりて最も根本的に差異あるは毛髪と眼なるが、是に次ぐは身長なるが如し。婦人は野蠻人の方が文明人よりも比較的に男子の身長に接近せる事多し。此事實は漸次兩性間の差異減少するに至ると云へる説に反對するものなり」。遺伝や人種や民族に関する知識や考え方が欧米の心理学では、広く活用されていたことを示すものである。

心理学における「民族」への関心は、大泉(1998)が指摘したように日清・日露の戦争を契機に一層強められたと考えられる。「男女青年の心理及教育」の中で遠藤・市川(1910)は、次のように述べている。「ホールの大作『青年』は這般の研究中の白眉を以て目されるものだが、然し、人種も違ひ、風俗も違ふ我國へは丸呑みにして適用することは出来ぬ」。西洋流の心理学を日本にそのまま適用することはできず、日本の事情を考慮する必要を説いている。「個人には、個人の特性がある、…民族には民族の特性がある。その特質を發揮することが民族の天職である。…民族の特性を悟り民族の天職を確信するをその民族の自覚と云ふ」。自覚は、國民民族にも必要であるとし、「我が國民の特性を指摘し、吾々大和民族の天職の果たして那邊にあるかを説」いている。「我が國民は熱烈なる忠愛の精神に富んで居る。…日露戦争に因って始めてこの精神の存在が世界に知れ渡り、その熱烈の程度が國民に自覚されたかと思ふ。…これは實に大和民族の大名誉である」。日露戦争が、欧米に対する日本人の劣等感を払拭する大きな心理的な効果をもったことを示唆することばである。

既に述べたが、明治初期以来、日本人の「人種」としての劣等性は深刻な問題であり、優生学の考えに基づき克服することがまじめに議論されていた。「我が國民は優等民族である。明治初年歐化主義の流行を極めた頃、人種改良と云ふがあつた、それと同時に英語を

國語と使用と云ふ説もあつた。…大和民族は歐米の民族に比して顔色の冴えぬ如く知力が鈍つてゐる、體の小さい如く膽力も小さいと云ふのであつて、是非之を改良する為に西洋夫人を妻に貰はねばならぬと云ふのであつた」(遠藤・市川, 1910)。「最近に於いては東洋殊に日本の文明と云ふものが歐米人の注目を惹く様になり、日本民族の知力能力が着々研究された結果、或いは日本人は、東西西洋の文明を總合して新文明を起こす天職を有してゐると云はれ、或は日本人は世界の民族中體重に比して頭圍頭重の多い國民だからその知力の進歩は測り知るべからずなどと曰はれ或は日本民族の繁殖力は世界中一流にある凡劣等人種は高等人種と接すると次第に滅亡して行く筈なのに日本人の繁殖の急激なのを見ればこの民族は餘程高等な種類に属するものだらうと黄禍論さへ起る様になった。要するに、我が大和民族の優等人種であることその知力の優等であること等は争ふべからざる事実と思う」(遠藤・市川, 1910)。日露戦争の勝利を期に、劣等感は一転して「優越感」に転じ、日本人の「人種」としての優秀さが前面に押し出されてきた。亜細亞諸国へ進出した明治末期には、欧米に對抗する形で、大和「民族」としての自覚と「人種」的優越性の意識が一部の心理学者の間に生まれていたことを示すものである。

3 「心理研究」における日本「民族」・「人種」

ここでは、「心理研究」に掲載された論文のなかから、「民族」と「人種」に関わる論文をとりあげる。当時の心理学研究における「民族」と「人種」の問題をできるだけ幅広くとらえるため、日本と海外諸国との国際比較調査・資料、優生学、遺伝、知能等に関する論文を検討範囲に含める。なぜならばこれらの範疇に入る研究は、直接間接に「民族」問題や「人種」問題に関連すると考えるからである。以下、関連する論文を発表年にそってとりあげ、日本「民族」・「人種」に関する内容について、可能な限り個々の著者の記述を引用しながら要約する。黎明期の日本の心理学における「民族」「人種」研究を概観することで、全体状況を把握し、考察することが可能になると考える。

1) 欧米・アジア諸国と日本の比較研究

欧米文化の取り入れは、欧米人並みに「文明化」した教養や行動を身につけることに日本人を敏感にした。社会制度、教育制度、生活様式、行動様式、疾病罹患率、障害者発生率、等々、ありとあらゆる面で開化し、西洋に匹敵する水準に達することが、日本が文明国の一員にのし上がる必須条件であった。各種の国際比較は、世界の中で占める日本の客観的な位置、日本「民族」「人種」の独自性、優秀性を確認する重要な指標であった。

1. 日本「民族」「人種」に関する研究 ドイツ人エミール・ハリールが、「外人の眼に映じたる日本學生の心理について」書いている(1912, 心理研究 第二巻)。「幼年學校生徒の教育が規律正しく一様であるといふこと々々、學校内で生活して外部からの影響にいくらか遮断ゐるといふ彼等の境遇とは、…幼年學校で育まれた青年は他の市井の學校に比して自分の意志を發表する自由を比較的束縛される事になり、…クラスに於ける成績も軍隊以外の學校に比して平均してゐる…この若き人々の潑刺たる活氣を、負け嫌ひの愛國心に表はれる武士魂と、開けっ放しに心を打ち明けて親みを増す赤心を一の腹中に布く底の心意氣と率直とは更に喜ばしい。日本の學校で教鞭を執つてゐる外國人には、彼等は内國人のやうにハッキリとは國人の心を觀察する事が出来ないのだが、その生徒等が何らの隠し立をもせぬと云ふ確信を得るのは非常に愉快に感ぜられる。…個人生活の目的は、より長く生存し常に新陳代謝する全體の利福に在る。…學生界の人達からも外國の教師に對して

一矢を報いて貰ひたい」。軍隊生活をする日本人学生に日本的愛国心や武士の魂を見ると語っている。

榑崎浅太郎(1913, 心理研究 第三卷)は、「日本人の力量消長」の中で「力量發達の民族的相違」を諸外国の資料と比較することにより明らかにしている。「國民の身體的並に精神的精力が其の國民の生活年齢中に於て、如何なる消長を為すかは、頗る興味あり且つ最も重要なる問題の一なる可し。然れども是に關する確實なる知識は今猶甚だ不十分なりと云はざるを得ず」。榑崎は、握力の發達的变化をとりあげ、アメリカ、フィリピン、中国(支那)、日本の国際比較を行った。「民族的相違は畜に身體的特徴に於て表現せらるゝのみならず、精神物理的並びに精神的特徴に於ても又差異なかる可らず。…太平洋に於る大四民族力量の發達を比較し、其の民族的相違を記載す可し」。調査の結果、次の結論を得ている。

「力量發達の人種的相違は生後六年間に少しく其の根を崩し、六歳より十三歳に至る児童及び少年期の七ヶ年間は其の相違に殆ど變化を見ず。十五歳より十九歳までの發情期的急激強烈なる發達期に於て人種的相違最も強度に發現せられ、其後の發達に於いて尚少しく増加し、遂に成人に於ける人種的相違を生ずるに至ると結論するを得可し。此の結論は獨り日本人種間に限らるゝものにあらず、フィリピンと日・米間に於ても然り、故に本結論は恐くはあらゆる人種間力量發達の相違に適用せらるゝものなる可し」。

半田孝海(1914, 心理研究 第六卷)は、「野蠻人の嫉妬心」について書いている。野蠻人にも嫉妬心があるという説と、ないという説の二説がある。前者は、「嫉妬は實に人性に基づく感情であるから、人間は嘗て此の勢力ある感情を缺いた時代もなく、又世界には全く男女間の嫉妬を起さない人種もないと云ふ」。後者は、「野蠻人の所謂嫉妬は夫の名譽又は妻の純潔とに對する憂慮ではなくて、單純なる狂怒・復讐・怨恨等に過ぎない、且是等の感情も常に僅の報償を得て和解せられる程微弱であるといふ」。筆者は以下のように結論づける。「固より女子が男子の奴隸となつて居る處にあつては、夫は妻を以て他の所有物と殆ど異ならぬものと考へるのは當然ではあるが、これ偶々彼等の愛情や嫉妬が未だ十分な發達を遂げて居らないことを證するものではあるまいか。…さはいへ野蠻人の嫉妬と文明人の嫉妬とを比較すれば其の間著しい相違のあることは免れない。先づ心理上から之を見れば野蠻人の嫉妬的發作は一事的爆發的(此の點は文明人の児童と一致する)であるが文明人のは絶間なき煩悶である、又前者の嫉妬的行動は加害者に對して苦痛を與へようとするが、後者のは被害者自ら苦痛を感ずるに在る。次に道德上から之を見ても野蠻人の嫉妬は禽獸的粗朴の劣情であるが、文明人のは家族の純潔を維持する高尚有益な情緒(眞の愛情を警戒する情緒)である」。

澤柳政太郎(1916, 心理研究 第十卷)は、「日本人の思考について」欧米と比較しながらまとめている。日本人の思考の欠点は、「非論理的なる點に存する。…イギリス、フランスなどの人の考へ方に比べると、よほど違つていると思はれる。…然るに日本人はこれに反して大變敏捷である。判断を下すことが早い。唯どうしてその判断に到達したかには、殆ど頓着しない。考へとしては、結論に達するまでの道行が大切であるのに、その道筋はいゝ加減にしておいて、直ちに結論の方に急いで行かうとする缺點がある…日本國民はよほど現實的實際的であるといふことである」。表面的なことに動かされる日本人の欠点を指摘する。「日本人を動かすには、必ずしも筋道を正うして前提と結論との關係を明らかにしてかゝるには及ばない。一寸人の心を捉へるやうな目標を示してやれば、悉くそれにつり込

まれてしまふ」。日本人の施行上の欠陥より生ずる結果として、「物事を輕信」、「理論を輕視する」、「科學的の事業を妨害する」、「思想上の貧弱」、「結果の不成績」が上げられ、救済方法としては「欠陥の自覺」、「論理的知識の普及」、「學問の仕方の改善」が指摘されている。

高田他家雄(1917, 心理研究 第十一卷)は、「本邦青年女子の死亡危険」について、主に欧米の文明国と比較し、日本の女子是最悪の状態にあることを指摘している。「英佛獨三ヶ國に於ては、我國に於けると同じく、女子死亡率が男子死亡率の超過する年齢時期があるけれども、其時期は、我國に比すれば甚だ短く、又其差も、我國の千人に就き一人乃至二人に比すれば、僅に一人以下を示すに過ぎないのである。此他英佛獨以外の文明諸國、例へば北米合衆國に於ては、女子死亡率が男子死亡率より多き年齢時期は、十歳から二十一歳までの間で、其差は、其最も著しき年齢、即ち、十六歳に於ても僅に零人四分九厘にすぎないのである」。イタリアとオーストリアは日本に似た様相を示しているが、それでも少ない。「英佛獨伊澳の六ヶ國に就て見るも、我國の如く、青年女子の死亡率が、成年男子の死亡率よりも、著しく多い國は、何處にも無いのである」。「我國の女子の二十歳前後に於ける死亡率の著しく多きことは、世界の強國中に於いて、無比であると云へるのである。この死亡率は、獨り世界の強國中に於て、無比であるのみならず、其他の小文明國、即ち、瑞典那威和蘭白耳義瑞西等の同年齡女子死亡率に比較しても、亦遙に多いのである。文明諸國中、我國と殆ど相似たる女子死亡率を示してゐる所は、匈牙利及西班牙只二ヶ國のみで、我國より稍劣りたる死亡率を示してゐる所は、只印度一ヶ國あるのみである」。

町田剛文(1917, 心理研究 第十二卷)は、「盲人の心理及び教育」について、諸外国と日本の比較検討している。「(失明の原因について) 兎に角我が日本には未ださう云ふ豫防や統計の事はやつて居らぬのであります、行きなりバツたりでやつて居る、其う云ふ有様であります、…文明諸國の如くに盲人の数を段々に少くしようと云ふには、其の原因を豫防する、さうすると盲人の数が減つてくる、文明諸國では皆其の原因をズンズン豫防して居ます、ズンズン盲人が減つて來ると云ふやうな實況であります」。盲人の發生比率は、文明の開化の程度の比例しているが、發生率が高く文明國に遅れているというのである。「我が日本が人口十萬に百四十一人であり、夫れから露西亞帝國が二百十四人、奧太利が五十六人・九、洪牙利が百一人、…奧太利洪牙利は一國であつて二つに是がなつて居りますは、洪牙利の開けぬ事が是で分かります、同じ奧太利洪國であつても百一人ある、盲人の多いのは何故だと言へば開けないので、開けた國は年々減つて來る、…伊太利が七十六・二、夫れから仏蘭西が八十四・三、夫れから瑞典が七十二・二、…獨逸全帝國で六十・九、夫れから英吉利…本國ばかりで七十九・九、夫れから西班牙で百四十七で、一寸驚きますのは埃及が千三百十四人、…北米合衆國が八十五、…日本國は世界の最多盲人國で露西亞に次いで盲人國であります」。盲人数をアジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、オーストラリアの各諸國と国際比較した図が掲載されている。エジプトは群を抜いて發生率が高くなつて居るが、図では他のアフリカ諸國全体も率が高くなつて居る。文明開化の指標として日本の盲人の發生率と予防的対応を説いている。

野上俊夫(1918, 心理研究 第十三卷)は、「假名とローマ字」と題して、兩者の長所短所を比較研究している。「國語及び國字の問題は、我々日本國民が早晚何等かの形に於いて是非とも解決せざる可からざる極めて重要なる問題である」。日本の公用語を何にするかを議

論している。「此の問題が、少くも軍備や外交やなどと同じ程度に於いて重要な大問題であることを容易に認め得らるゝであらう。一般に從來此の問題は重に教育上の方面よりのみ注目されて居た。即ち日本の兒童が漢字を學習することの困難なるがために、小學教育の年限が、歐米の兒童に比して何がしの時間だけ多くあることになって居る」。日本語は難しく、學習に多くの時間を要し、その文歐米の子に比較して不利だという。さらに、「國語國字の問題は決してこれのみに止まらない」という。「一面に於いて直ちに其の國の國勢の隆替の問題である。これは歐洲などに於いて諸國家、諸民族の互に犬牙錯綜して居る所に於いて、すべての國家が如何に國語の問題について注意し劃策して居るかを見れば直ちに知り得ることである」。かつて日本語を廢止しようとしたことも当時としては卓見だったという。「今まで東洋の一隅に孤立して居たものが、突然に新奇の事物、出來事に接觸したがために、此等の事物や出來事の内、在來の我が國語で云ひ表はすことの困難な場合が極めて多く出來たことは當然の事である。維新前後の洋學者が西洋の事物の名を翻譯するに際して有して居た苦心の大なることは今日に於いて殆んど想像の外である。今日ほゞ此等の譯語が善なり悪なりに一定したといつても差支ない程になって居るに係らず、我々の關係して居る哲學とか心理とかいふ方面だけについて考へて見ても、西洋の術語を如何に翻譯すべきかの苦心が常に我々の日常に出て來るのを以て見ても、我が國の國語が、まだゞ新境遇に適應し得ないで居る多くの差のあることを知るに至るであらう。随つて維新前後の先覺者中に日本語の不完全なることを痛切に感じて、むしろ全然國語を廢止し、之れに代ふるに英語を以てしようと言つたやうな亂暴な而して幼稚な考へを出した人のあつたのも、或點では寧ろ當然として恕せなければならぬのみならず、當時としては頗る卓見として敬服しなければならぬものであつたかも知れない」。日本語が適當か、ローマ字が適當か。日本語には漢字學習の難しさがあつたり、同音異義語の判別困難があつたり、難点はある。しかし、ローマ字はアルファベットの組み合わせの難しさや、発音の問題など、更に大きな難点があるという。そもそも日本の國字をローマ字に変えようとする論者の考への背景には、事大主義、崇歐思潮、親西趣味等があり、慎重周到なる熟慮研究が必要だという。

心理學研究室同人(1918, 心理研究 第十四卷)は、海外の名著新論文の紹介として「カウンツ、算術的検査及び算術の心理學についての研究」をとりあげ、人種間の比較に言及している。「最後に氏はアメリカ、スラブ、スエーデン、獨乙、和蘭の系統の兒童の比較研究を試みて居る兩親ともアメリカで生れたものをアメリカの子とし、兩親とも獨乙人なるを獨乙の子と云ふ風に見て、各種族の子供二百五十名乃至六十六名を撰び、其の正答數を比べたのである。其の結果大體に於いてスラブ種が一番よく、スエーデン種之に次ぎ、あとは大差ないが、アメリカ種が一番まづい事になる。但各人種を年級別にすると、かなり少數になる故、之れでかゝる仕事に關する人種的優劣を斷ずる事は出來ない。但之れ等の兒童は同様な學校教育下にあるもの文を撰んだのである」。紹介者は、「我國の教育界に於いても、かう云ふ結構な試みがほしいと思ふ」、と結んでいる。

秋葉隆(1921, 心理研究 第十九卷)は、「坐俗の研究」を行い、アジアと歐米の坐り方の違いを比較検討している。「(甲) 古來一貫して發達せる坐俗 (乙) 坐俗より一轉して發達せる立俗 (丙) 古來一貫して發達せる立俗の三種あり、甲は日本を以て乙は支那を以て丙は歐羅巴を以て夫々代表者と見做すべく、未だ立俗より坐俗と成れるものなく、歐西立俗

の影響日を追うて各地に大ならんとするの勢いあり、…坐俗は所謂オリエンタルカスタムの一にして主として亞細亞に發生發達し、立俗は歐西の生活様式にして歐に發生せるものなり」。この坐り方を (甲) 人種的、(乙) 文化的に考察すると次のようになる。「(甲) 地中海人種は其南部地中海人種の全部及北部地中海人種のイント、イラニツク族を除くの外悉く發達せる立俗を有し、其他の諸人種は皆坐俗を以て其本來の生活様式となす、唯亞細亞人種中シニテイツク系統の支那人が現代立俗を有するのみ。(乙) 未開人の生活様式は概ね座式にて、開明人の生活様式には立俗の發達を見る」。それぞれに發達してきた理由、根拠が考えられ、何れがよいかを決めつけることは一概にできないという。「今や改造と云ひ改善と云ふ所謂現代の標語にして滔々たるの勢あれども勢必ずしも理と協合せず、改造必ずしも改善を意味せず、改善果して眞の改善なりや否やは頗る慎重なる實理的批判の結果に俟つべし、頃者生活改善同盟會なるものありて立式生活に適する住宅衣服の宣傳に努むること甚だ急なりと雖も、彼の一夕卓を圍んで、談笑の間『立俗か座俗か』の重大問題を決了し去るが如き予の潜に惧るゝ所なり」。

今堀友市(1922, 心理研究 第廿一卷)は、「色彩美感情に就いて」実験的研究を行っている。結論の中で、民族問題に若干触れている。「單純なる心と單純なる色—或色を好むとか好まないとか云ふ感情と其人の心の状態とは非常に親密な關係がある。即ち單純な心を持つて人は單純色を好み、複雑心を持つて人は複雑な色を好むものである。そこで子供の心は單純である。從て子供の好む色は黄や青や赤の如き單純色である。…又田舎の人は都會の人よりも其心が單純である。だから電車内に掲げてある廣告畫を見ても、田舎電車は單純色でどこともなくおちるきがない。田舎の祭禮等集つて居る人々の服装を見ても單純色が多く、又不調和な配色が多い。野蠻人は文明人に比し其心が單純である。單純であるから單純な色を好むのである。殖民地の官吏や軍人がつとめて華美な單純色の裝飾を施した制服を着て居るのは單純なる心の土民に憧憬せられんが為である。…儀式にい用ふる大禮服の如きも、あの服色から見ると、恐らく西洋人が昔大に下等民族を征服したときに用いた其服装の遺物であらう」。殖民地にされるような下等民族は單純で、複雑な心を持っていないと言明している。色から連想するものとして、肌の色の違いによる「人種」があげられている。「黒きものと云ふ所では黒人、靴、印度人、雲、烏、瓦等を主として連想してゐるのである」。茶色からも類似の連想が行われている。「茶は落つきのある上品な色である、此聯聯が増加すると共に其好まれる度合も増加して居る。茶は又暑い色でええある、南洋の土人、印度人、アフリカ人等は皮膚の色が茶色である、熱氣で乾き切つた砂漠の土は又茶色である、此聯想は數が少いから、あまり好むと云ふ感情に影響しなかつたが、不快感を起す聯想である」。

崎田弘(1923, 心理研究 第廿四卷)は、「日本人の發明能力」を、歐米と比較して短く紹介している。「日本人の發明能力 何といふことは、先ずその特許件數を外國のそれと比較して見れば大體わかると思ふから、今大正二年の統計を擧げてみよう。…亜米利加…三四、〇五七、英吉利…一六、五九九、仏蘭西…一五、七三六、獨逸…一三、五二〇、奧太利…一二、六四〇、白耳義…一一、一一六、伊太利…一〇五六〇、瑞西…三、七九九、匈牙利…三七八九、西班牙…二、四四〇、日本…一九四五、瑞典…一、九一五、丁抹…一、三七六、諾威…一、一九六、葡萄牙…四八八、和蘭…二四八。本邦の特許發明品は概して手工的で、且つ比較的簡單なところから、世間には日本の發明は採るに足らぬ、大發明は

ないと云って、日本人の發明能力を疑ふものがあるが、併し發明といふものは、必要にm、基づいて現はれるもので、従って其の國の産業の情態と密接な關係がある。それで、一國の産業の情態が進歩するに従って、漸次立派な發明も出て来る譯であるから、此の點から云へば本邦人の發明能力は未知數と云はねばならぬ。又現在に於いては、本邦の發明品が本邦産業の實情に適應して、技術的に成功し進歩したものであるならば、その發明の内容が外國のものに比して、複雑、精緻の點に於いて劣って居るからと云って、日本人の能力が劣って居ると云ふことは出来ない。

高木(1924, 心理研究 第廿五卷)は、「人種間の社會的特色の比較」(シー・ビー・ダヴェンポートとラウラ・シー・クレイトール)を簡潔に紹介している。社會的特色の人種的な違いを量的に評定することを研究の目的にしている。ドイツ人、アイルランド人、イタリア人、オーストリア人、ロシア人を対象とした比較を行った(ユダヤ人含む)。結果は以下の通りだった。「統率に關しては獨逸の兒童は首位…猶太人は中位の統率性のある人種と考えられる。一方愛蘭人や伊太利人は統率といふ點に於ては低く中位との差は明かに著しい。執拗といふ點においては獨逸人が首位を占めてゐる。…恐らく猶太人より高い。愛蘭人、伊太利は最も低い…」。

マッキーン・カッテル(1924, 心理研究 第廿六卷)の「拔群者の統計的研究」が、「學界鳥瞰」蘭で内外新著抄録として紹介されている。「最近偉人といふもの社會的進化の一部として見てこれを研究するに統計を用ふる精密科學の方法によらうとする企てがおこつた」。蓋然性の法則をもって偉人の偉さを測ることができると時代になったという。「拔群者の時代及び人種に於ける分布状態を見る。…これによれば沸が首位を占めており、英が僅かの違ひでこれに次ぐ次に獨伊、ローマ、ギリシャ、アメリカ、スペイン等の順である」。

桃井省平(1924, 心理研究 第廿五卷)は「腦重と年齢及文化」を簡潔に紹介している。「日本人の腦重は…二十一歳より八十歳までの男、三百七十四人の平均は千三百六十七グラム女は二十一歳より八十歳までの平均は千二百四十四グラムであつて、まづヨーロッパ人やドイツ人の平均男の腦重とは八グラムの差ですが、日本の女は三十一グラム彼方の女子より少いのであります。…教育が足らず文化が低い為でせうか。女子教育の彼の國に比して大に劣って居ることは時々耳にすることです。大體において腦重の大なる時期が最も全精神全人格の活動出来る時であつて偉大であつた人、何かに優れた人はその全盛時代において確に腦重が大であつたに違ひありません。…一般に國民としても腦重の大なる國民は文明國民であつて文明になればなる程國民の腦重は増大しつゝあることを示し、衰へつゝある國民例へばエジプト人の如きは、腦の重さが次第に減少して行くのであります」。西歐人が最も優れており、文明國ではない日本の民はその水準に及ばないという。

大阪毎日の記事(1924, 心理研究 第廿六卷)「小學兒童の國際的知識」が「雜録」に掲載されている。「熊本市修身科研究部會では小學校兒童が周圍の人々の談話や新聞雜誌等から國際的思想の影響を受けてゐるが之は總て斷片的知識の概念に過ぎず、其の眞想を曲解し又は正鵠を誤つてゐる事實多きを以て、之を等閑に附する時は危檢を醸生せんとも圖らぬから教師は其等を批判的に確實に指導し整理してやることが頗る必要である…今彼等の小さい頭の中で之等諸問題が如何に映り如何に憶測してゐるかにつき、…壺川小學校に於て調査せる…先づ尋常科四年生に對し『西洋人と日本人とどちらがえらいか』と云ふ問ひに對し『日本人が偉い』と答へたもの四十四名、其の理由としては戦争の時いつも勝つか

らと云ふのが六名、知識が多いからと云ふのが五名其他正直だから、日本魂があるから、天皇が長く續くから、小さくても強いから等と云ふのがあり、『西洋人が偉い』と云ふのが十一名で、其の理由としては、發明するから、飛行機で世界を廻るから、心が良いから、知恵があるから、煉瓦で家を作るから等があり『西洋人と日本人とはどちらがお金持ちか』との間に對し西洋人と云ふもの三十九名、日本人と答へたもの十四名であつた。「同校尋常六年生に對して『排日問題とはどんなことかどうして起こつたのか』の問を發した所、三十九名の兒童中理解者十一名、半解者二十一名、不知者七名あり、其内最も多かつたのは『米國人が移住せる日本人を追ひ返すことで、日米戦争があるので米國人は日本人中軍事探偵が居りはせぬかと怖れて居る云々』で『國際連盟とはどんなことか』の問に對し理解者六名、半解者八名、不知者二十五名あり。『世界各國は永久に平和になれるか』に對し、平和で通らないとの答が三十一名、平和で行くとの答が三名、答へ得ぬものが五名、『軍備縮小とは何か、日本は之に對してどうしてゐるか』につき理解者十名、半解者九名、不知者二十名、『日本は國が小さくて人口が増すから如何にしたらよいか』に對し軍國侵略主義のもの二十八名の多きに及び平和的發展主義のもの七名、答へを得ないもの十一名あり茲に注意すべきは平和主義を主張した者は多く優等者であつたと」。

上野陽一(1924, 心理研究 第廿六卷)は「人間の姿勢殊にその立位について」人種間の比較を行っている。直立することは人類だけに見る特色であり、下等動物には見られない。「コーカサス種族の足は大趾が長大にして強く、直立して歩くのに適して居る、けれども下等の種族になると、趾は短小で、踵骨は強大でなく、アーチは扁平であり、従つて踵は突きでゑる」。直立の姿勢においては、骨盤は内臓緒器官を支へる役目を主としてゐるものであるから、人種が舊いほど薦骨は低くなり、ヨーロッパ婦人のやうに左右徑(横徑)が前後徑(縦徑)よりも大きくなって来る。シャム人の骨盤の前後徑は一般に左右徑よりも長い、黒人の楔形においても同じやうな状態を示してゐる。して見ると、ニグロはモンゴル人に比して、直立後日(背)が浅い、又は發達が途中でとまってゐるといふことが出来る。モンゴル人にあつては、長い間脊柱の重みによって四角の形をとるやうになつたが、ヨーロッパ人は更に薦骨を壓して陰部に近く、前後徑又は共軛軸を犠牲にして左右に擴がってゐる。有袋類乃至狐猴類にあつては主として箱形の骨盤であるが、人間の骨盤が楔形をなすやうになると共に、骨盤孔は小さくなり、胎兒の頭は却つて大きくなるといふ妙な現象を示して來た。黒人は進化の日が浅いという。こむら(腓)の大きさも下等民族では小さく、歐米人の方が進化上優れているという。「下等民族の腓は歐米人に比して小さい。即ち直立するやうになれば、趾の屈曲やその獨立運動に要する筋は段々不用になつて來、却つて腓の伸筋の方が發達して來る。今日吾々の足の附近に限られてゐる小筋も元はもっと高いところにあつたのであるが、直立後、その機能を失ふと共に、形は段々小さくなり、段々下の方に移つて行つたのである」。脊骨の彎曲の仕方も人種の進化の程度を反映するという。「人間においては、直立の姿勢に適するやうに、更に二つの曲線が加はつてゐる。一つは腰の邊、即ち重心が前におちようとするところと、一つは頸即ち頭の重みを支へるためるところと、二ヶ所に曲がりが出来た。併しこの變化は急に現はれたのではなくして、少しづつ出來た變化である。オーストラリア、ブッシュマン、アンダマン種族と、ゴリラ、ギボン、チンパンジーなどとの間に突然の變化は認められない。人類の下等民族に見る腰部のまがり、彼等が半直立の姿勢で藪や叢を走るのに最も適したものである」。脊骨と

連絡する頭蓋骨の大きな孔の配置も、人間になってから段々違って来た。その孔は自然前方に傾いて重心の下に来る。その傾斜は水平に近くなる、文明人は理想に近い。併し尚進化しつつある。下等民族は類人猿に近く、ニグロは三七度、オラングは三六度である。直立歩行に伴い変化した身体の多くの点で、黒人や下等民族は文明人に比して劣っていると結論づけている。「要するに直立の姿勢は最も複雑なる動作を営み得る姿勢であり、最も複雑なる動作を営むためには、神経系統の十分なる発達を必要とするのであるから、姿勢のよいものは、知能においても優れてゐるといふことが出来る。反対に白痴や精神缺陷者などは姿勢が悪く、前屈みに歩き、甚だしいのになると真直ぐに立つことが出来ない、運動も能力も十分発達せず、二三の単純な運動を機械的自動的に営むに過ぎないものが少なくない」。

武政太郎(1925, 心理研究 第廿七卷)は、「人體測定學的一考察」の中で、民族的特質と発達との関係を検討している。「米國人二十一歳の男子の身長は平均一七二・八センチメートルである。…本邦男子の平均身長は一六一・八センチメートルである。日米兩國人の差十一センチメートルである。…大體は發達の途中の或時期に生ずるらしい」。日本人と「歐洲人」との身体發達の比較も行っている。「初生兒に於ける彼我の身長體重の差異は極めて僅少である」ので、「日本人と歐洲人との身長及び體重に於ける民族的差異は嬰兒期以後に主として起こるものと推定される」。「日歐人の身長體重の差異は、一面民族的特質にもよるのであらうが、また生活條件に依存することも少なくない…それは、日本の女子と歐洲人の女子との差は、歐洲人の男子と日本人の男子との差よりも身長において著しい差があり、體重に於ては、その反對の傾向を有してゐる。これは、日本人の女子の方が従来より多く男子よりも座業に従事してゐる結果であらう」。

2. 日本の植民地・アイヌ等に関する研究 **寺田精一**(1921, 心理研究 第十九卷)は、「朝鮮に於ける犯罪の觀察」を連載している。植民地化の一環として朝鮮民族の歴史的文化的背景を理解することの必要性を、心理学者の視点から分析している。「朝鮮の問題には種々なものが注意されて居る、又注意しなければならない問題が少なくない、特に我が帝國の一部をなすというふ意味に於いて。…主として内地人の犯罪の起こり方と比較して、注意すべき又興味ある重なる点を述べてみたい。…いふまでもなく朝鮮は内地に比較して、その風俗も習慣も傳説も甚だしい相違を有し、其の上に社會や民族や自然界も異なつた點に乏しくない、かかる異なつた點が背景をなして居る朝鮮の人の犯罪は、内地人の犯罪と比較して觀なければならぬ多くの事實を有して居るのである」。内地人と朝鮮人の各種の犯罪統計を比較し、年齢、性別、年次等を考慮し詳しく考察している。さらに、朝鮮人の性質について分析を進めている。「朝鮮に於て行はれてゐる主な個々の犯罪の性質、並びに個々の犯罪の上に現はれた朝鮮人の性質の一側面について少し詳しく述べてみよう。迷信が不正や犯罪の原因となることは、何れの時代に於ても亦何れの社會に於ても、見られることではあるが、朝鮮のやうに一般民衆の文化の程度が尚低級に止つて居り、科學的思想の普及して居ない場合には、自然迷信が社會の一つの主な現象となること特に多く、そのために種々なる性質の犯罪がをも發生せしめ易いのである。…朝鮮に於ける迷信殊に自己の身體の存續に深い關係を持つて居る迷信は、…最も注意すべきものとなつて居る。其の中主なものはいふまでもなく難治の疾病治療に關係したものである」。病氣に関する迷信に対する注意を喚起している。「例へば癲癩には人

肉殊に女陰の肉や辜丸等が、癲病には人肉殊に男兒の陰莖や人の肝臟其の他の内臟或は嬰兒を漬けて置いた酒などが、肺病には矢張り人肉殊に男兒の陰莖や人の肝臟等が、それぞれ特効あるものと信ぜられ、それ等のために傷害罪や誘拐罪や殺人罪などを敢えてすることが決して珍しくない。「墳墓に關する迷信から行はれる犯罪も、亦頗る多い。これは朝鮮に於て特に重んぜられて居る信仰に基くものであつて、死體を障風向陽の地に埋葬することは、其の白骨を安靜ならしめるのみでなく、其の餘澤は遠く埋葬されたるものの子孫に及び、一門の榮華これによつて疑ひなしとされる信仰があるからである」。鬼神に關する迷信も少なくないという。日本の狐憑き、犬憑き、天狗憑きに似て、鬼神が人に憑依してその鬼神の性質に相應した行動を行うという信仰である。「朝鮮に於ては、一般の民衆の文化の程度が低い丈に、この種の思想が極めて一般的に行はれ、それがために間々身體に關する罪、例へば障害や殺人等を敢えてせしめることがある」。朝鮮は文化の程度が低い指摘している。「朝鮮人の一般に知識の低い程度にあることと、其の住家の室が少なく厚い土壁に入り口の少ないこととは、同じく財物を目的とする犯罪であつても、比較的強盜を多からしめる傾向となつて居る。何となれば知能の低いことは、複雑な思慮を回らし然かも蜜に行ふ窃盜方法を考へるよりも、強盜というふ單純な素樸的な手段に至らしめ易い。それは文化の進まぬ民族と否らざる民族とを比較して、明かに知り得られることであると共に、同一の社會のものであつても、強盜を行ふものには窃盜を行ふものよりも、教育程度の特に低いものが少くない」。

朝鮮の人々の抗日運動、獨立心をなくするためには、民族の特徴を理解しなければならぬと説いている。「朝鮮が新に我が邦に併合されたといふ點で、自發的に若しくは他よりの扇動によつて、従前の如き一つの獨立した國家たらしめんとする要求を持ったものが、容易に根絶しない。この思想は、他の多くの併合された民族の場合に見られるやうに、朝鮮が教育を受け覺醒して來ても、急速に衰滅するものとはいはれない。いふまでもなく特殊な歴史と傳統とを有することが、一つの特殊なる民族性の基礎をつくることとなり、其特殊な民族性は其の民族の精神裡に極めて根強く永續するものである以上、政治上の併合が間屬性の融合に至るまでには、相應に永い時日を要するものといはねばならない。かくて朝鮮では、我が内地では見られない罪質即ち獨立といふことを目的とした政治犯とか騷擾罪とか治安法違反とかいふものが、起こり易いことになるのである。…而してこの問題は刑事政策上極めて重要な方面であると共に、統治の上にも極めて注目すべきことであつて、朝鮮の犯罪現象の一つの特徴を與へるものである。…然かも其の多くの特徴は、殆ど皆朝鮮が特殊な風俗を有し、特殊な習慣を有し、又永い間の特殊な傳説を有することと、其の文化の程度一般に低いといふこととに基くものといはねばならない。かくて李朝の政治を離れ、我が内地に類似した法則の下に統治され、今後如何なる程度まで、又今後幾何の時日を経て、我が内地の犯罪現象と相似した現はれ方をなすに至るか。これ頗る興味ある問題であると共に、それが又一面には統治上の反映を推察し得る好箇の材料ともなるのである」。

關東大震災については、増田幸一(1923, 心理研究 大廿四卷)が、「雜記帳」蘭に「震災心理の諸相」と題する隨想を、また上野陽一が同じ卷(1923, 心理研究 大廿四卷)で、「雜話」として震災の様子を書いている。すでに併合している韓国人に対して、内地日本人の流言飛語による殘虐な行為について心理学者としての思いを隨想風に書いている。

2) 日本の「民族」・「人種」・「国民性」に関する研究

「民族」問題については、文明化した「民族」と未開ないしは野蛮な「民族」との違いを、いろいろな観点から分析したものがあつた。

1. 日本「民族」「人種」に関する研究 石川貞吉(1912, 心理研究 第一巻)は、「外人の眼に映じたる日本學生の心理」と題して、日本陸軍備教授のハリールが上海東亞教育新聞に載せた記事を紹介している。「原著者の観察は、兎角風俗道徳を異にせる眼から観たものであるから、或點に於ては甚しく極端に走せたところもあつて、素より一々首肯することの出来ない者もある。…その見解の自ら正鵠を失つた點は勿論あるが、我國一般教育者及學生に取つて注意もし且つ参考となるべき節も尠くないから、茲に全文を譯載した」。外国人の目をして、日本人の姿を客観的に理解しようとする姿勢がうかがわれる。「日本の學生は勉強で而かも研究好きであるが、其勉強は多くは机上の勉強である、夜が更ける迄もランプの前に座つて不良不十分の榮養で以て教師の口述した課目の系統や、歴史概要を何者の批判もなしに、教へられたる其儘に諳記するに至つては、實に感心の外はない」。暗記中心の非創造的教育と、現在でも批判される教育の実情が明治期にあつた。「日本學生は一般に無邪氣であり、愛敬があり、そして交際的である、それ故に普通事なき場合には温和なる人物として現はれて居るけれども、時としては全く平素と反對の怪物と化し去ることがある。現に彼等は屢々原生的の蠻力を暴露して、其極は種々な殺人行爲に及ぶやうな事は近時頻繁に見る所の事實である。…又父母教師などすべて上長に對しての尊敬といふ様ことは甚だ缺けて居つて、…それ等に對する贊美の如きは、殆ど地を拂つて空しいふ有様である」。儒教的な文化に対する驚きも記されている。「外人の目に奇異に映ずるのは、既に完成した壯年で、而かも一戸の家主たる程のものが、老耄せる兩親の前に奴隸の如くに平伏する、そして盛んに父母の叱責訓戒を要する時代の小兒が、其父母に對して怒を起させる様の事をする。是が即ち後年書生としては「ストライキ」を起こしたり、社會人としては凡ての政治的及び學術的の權威を蔑みする原因を為すではなからうかと思ふ」。日本の青年は萎縮し静死して、多くは柔弱で神經過敏で、時々女性のように懊惱に沈み込んでいるともいう。「日本人の最も多く成功して居る點は、普國を模範として嚴重なる軍隊教育を施した所にあるが、此の點より察すれば、其根核は確かに良性である」。批判なしに教科や講義を暗記するような日本国民全体の暗黒を生じるような一切の弱点を青年から除き去ることができるなら、学び好きの青年の教化は有望で、実り多き結果を得るはずだ、と指摘する。「氏は如何に日本青年の長所と弱點とを公正に觀察して、光明と陰翳とを適當に配置する事にめたかといふことを承認し得るであらう。されば此記述は日本の事物に就いて諸方面に蔓延して、誇張せられたる觀念を、正當なる分量に裁定する上に於て、最も好恰なものを見做すことが出来ようと思ふ」。

寺田精一(1912, 心理研究 第二巻)は、「文身の話」として、文身をするこの意味、動機について論述している。「現今の文明人に於いて、比較的によく文身の行はれて居るのは、我邦を初めとして、伊太利・佛蘭西等であつて、獨逸などにも往々見られる。けれども一民族を通じて行はれ、若しくは殆ど全部に於いてこれが見らるゝといふのは、未開民族に於てある。我邦の領土内に於ては北海道のアイヌ族・台灣の生蕃はその一例である。阿弗利加のネグロ及び南洋に散在せる群島の中に生活して、原始民族の遺物とも思はるゝ未開人の中に甚だ多い、即ちボルネオ・ニューギニア等の所謂土人は

それである。又北亞米利加土人の中にも文身を有せるものが少なくない」。

上野陽一(1912, 心理研究 第二巻)は、同じ巻の讀者の質問に対して心理学者が回答する「應問」欄で野蛮人をとりあげられている。「音の方でいへば開明國の大人には鋭くて荒々しく到底聞くに堪へないとふよな音を好むやうである。恐らく原始的の眼及び耳には文明人よりも烈しい刺戟を與へなければ正常の力強い反應を起こさないのであらう」(エンジェル原著「機能主義心理學講義」)との説に疑問を呈した讀者に上野陽一が回答している。

「開明國の大人には到底聞くに堪へないやうな音が、却て野蠻人には快く聞える。これ恐らく野蠻人に中等度の力強い反應を起こさせるには、餘程烈しい刺激が必要なのであらうといふ意。趣味が文明の程度によつて違ふことを、音の強さに就いていうたのであつて別に難解の文とも覺えない、察するに、質問者は「開明國の大人には」を「聞くに堪へない」にかけて讀むべきを、「音を好む」といふ方にかけて讀んだのではあるまいか。我々には鋭く荒々しい音を、野蠻人は却つて好むといふ心である」。文明人と開明人を対比している。

上野陽一(1913, 心理研究 第三巻)は、「人種」や「民族」についてエンジェルの著書を翻譯し「近世心理學大觀」で紹介している。この訳書でも野蛮人の分析が行われている。「野蠻人の心と同時代の文明人との間には根本的の區別があるといふ説は、スペンサー及びその學徒が主張したのであつて、一般に知られて居る思想である。その説によると、野蠻人は種々の精神を飲いて居る、その精神作用は子供と同じく、不安定で動搖し易く、忽ち笑ひ忽ち怒るといふ風である。…文明人よりも餘程感覺が鋭い…視力も聴力も餘程遠くまで達するし、文明人には感じない位の嗅ひをも感ずる。その代わり野蠻人は推理力が弱い、數もごく僅かしか教えることが出来ないし、簡単な數學の問題などに對しては、どうともすることが出来ない」(1913, 心理研究 第三巻)。こうした未開人種に対する理解は不十分であるとエンジェルは、述べている。「野蠻人の叡智に關する思想は、その根本とする事實が間違つて居りはせぬかと考へてみるひつようがある」。近世の研究によると、野蠻人及び文明人の精神は畢竟同一のものであるといふ見解に近づきつつあるようである。…兩者を同等の平面においたならば、殆ど同一の特質を現すに相違ない。いわゆる「劣等民族」を「優良人種」(文明の進んだ人種)との間に本質的な違いはないと主張している。エンジェルの著書の中では、文明人、劣等民族、優良人種以外にも「文明民族」「野蠻民族」など「人種」と「民族」ということばが共に使われており、明確な區別はないようである(1913, 心理研究 第三巻)。

さらに、エンジェルの本では人種心理学が獨立した節で紹介されている(心理研究 1914年 第三巻)。「社會心理学と謂はゆる人種心理学又は民族心理学との間には大切な區別がある。歴史から尋ねて見ると、人種心理学は社會心理学よりも早く分科して居た。初めはヘルバルトの心理学の傍系として起こり、直ちに人類學と密接の關係を結んで今日に至つたのである。而してこの學科は人種及び國民に現れて居る精神上の特質を分解し記述するのがその一般的な任務である」。人種が生じた理由は何か。「色々な影響が相伴なうて作用すれば、そのため各社會に特有の型を生じて、他の社會と區別されるやうになることは、鳥渡考へても明らかなことである。而して各社會の中には又各々團體やその又小分けがあつて各自に特徴と特質とを具へて居る。之を大きくいへば、これら等の分化より延いて誰しも知っている人種の別を生ずるに至るのである」。人種の別はあつても、精神的能力は本質的に同じであるといふ。「一般に人種的の差別は、或程度まで氣候と地理的住所との影

響に基づくものだと考えられて居る。これ等の影響のために、身長や皮膚の色ばかりでなく、その他身體上の細い構造に至るまで變化するものだといふことは、一般に明らかなる事実と認められて居る。…兎に角身體の構造や物質的の外圍の異なるにつれて、諸人種の間各自特有の精神の型があることを認めておかなければならぬ。この事実を捉へて、直に精神が人種によって異なるのは元々腦髓の構造が根本的に異なるからだといふけれども、それは誤って居る。この説には十分の根據が無いのみならず、反證も尠からず擧げて居る。「要するに、人の心は、生まれた時から社會關係の中に居て成熟し、社會と相互に影響し合ふといふ意味に於て社會的であるばかりでなく、その時代その氏族の根本的特質を具ふる人種的精神的即ち團體精神であるといふことも心理である。故にこれ等の影響を度外において考えへては、十分にその起源や意味を了解することは出来まい。人は両親の子であると同時に、その時代及び人種の子である」。

上田只一(1915, 心理研究 第七卷)は、「原始人の心理」について書いている。「今日地球上に生棲する、例せば、オーストラリアの土人、アフリカのホッテントット・ブッシュマン・ズルー、セイロン島のヴェダ、米大陸のインディアン・エスキモー、北海道のアイヌの如く、其の風習、思想、感情の多少明確に知られて居て、而かも著るしく今日の文化と遠ざかつて居るものを指して原始人といふのである。是迄普通の見方によれば、裸體の儘でなくば木皮獸皮の小片を纏ひ、弓矢を取って山野を馳驅し、野獸を捕って食とし岩窟に穴居する原始人を想像して、彼等は智能に於て最下等に居り、他の動物を去る遠からず、宛ら進化の楷梯の最下級を示し、今日文明の精華を誇る白人種は、其楷梯の絶頂に位するものであって、原始人は言語に於て、社會組織に於て、將た宗教道德=若し原始人に如此ものありとせば=に於て、最も簡單幼稚な状態にあるものと考へて居た。而して此説は斯學界過去の天才の名と結び付けられて、今に千鈞の重みを以て後學を壓迫して居る。然し輓近土俗學研究の態度及び方法大いに改まり、原始人に關する吾人の智識が益々確實となるにつれ、舊來の解釋は、皮相偏頗な觀察の上に築いた、白人の誇大夢想に過ぎないことが知らるゝに至つたのである。茲に注意すべきは、文化の程度よりして直ちに天賦智能の優劣を推斷することの誤れる事である。人種民族間に於ける文化の程度の差違は、智能問題と全く離れて、むしろ歴史的事情から説明すべきである。「黒人種と雖も境遇良好な場合には、能く他の文化を容れこれを發揮し得ることは、第八世紀から第十世紀に亘つてスーダンの黒人種が、當時文明の擁護者であつたアラビア人の風化の下にあつて殆どこれと同一程度の文化を有するに至つたのを見ても明白である。即ち、モハメット教徒の多妻主義は偶々黒人教養の途を開いたので、黒人婦女子は征服者たるアラビア人の妻女として迎へられ、其の兒女も亦家族の一員として生活を共にするに至り、兩人種の接觸融合は最も親密となるに及むで、文化の開發に最も恰好の境遇を得た黒人種は、能く其の天稟を發揮するを得たのである。今日に於ては斯かる境遇は容易に得られず、原始人は文明人との接觸交通によって、利益する所極めて少ないのみならず却つて弊害を受ける場合が多いのを思へば、彼等は其の壓迫に堪へずして自づと衰頹に赴くのも怪しとするに足らぬ。白人種の智能の優越を立證するために、從來提供された生理解剖學上の論據は、今日悉く覆されたというてよい。白人種の頭腦の普通の大きさを一四五〇乃至一六五〇立方糎とすれば、歐羅巴人五十五パーセント、アフリカ黒人の五十八、メラネシア土人の五十八は之部類に屬す。一五五〇より大なるものは、白人種中に五十パーセント、黒人中に二十七、メラネシ

ア土人に三十二ある。之れに依ると、天才と稱すべきもの、或ひは白人の間に多いかも知れぬが、總體から見ると此の點に於ける相互の差違は、一般に想像さるゝ程大ならず、之れに據つて直ちに人種間の智能の優劣を斷ずることは出来ぬ。こうして次の結論に至る。

「上來論ずる如く、今日の文明人と原始人との間に天賦智能の優劣を立證すること不可能なるのみならず、問題の彼此文化の程度の差違は、却つて歴史的事情から十分説明出来る理由がある。而して原始人の生活は一般に想像されて居る程に簡單幼稚なものでなく、これ等しく生存のため奮闘する成人の経験であつて、其思想、感情、習慣は、傳承的材料即ち神學、哲學、科學説等の異なる所から、文明人のそれと相違するが、其の根本要素に於ては毫も異なる所はないのである。要するに人種問題は多くは感情によって上下されるもので、研究開けず考證に乏しい時代に於ては、感情は一層放恣である、苛刻である。吾人は成るべく冷靜に事實を察して、感情の暴戾を避けることを力めねばならぬ。これ即ち吾人が原始宗教を論ずるに當り、先づ原始人觀を定めんと欲する所以である。若し人の原始宗教道德を聴かば、先づ論者の原始人觀を問ふべきである。若し彼れの此所に躓けるおを見出さば、餘は知るべきのみである」。

寺田精一(1918, 心理研究 第十三卷)は、「犯罪觀念の發達」について論じている。罪に關する思想は時代の変化に伴い形式と内容を変えてきたとし、その變遷を考察している。「文明人の犯罪觀念」の項では黒人差別に言及し、次のように述べている。「現代に文明を誇る社會・國家のものを觀察すれば、其の間に古代人・未開人と卑め得ぬ多くの事實を知ることが出来る。…世界に率先して自由を叫び平和を叫んで居り、又慈善救濟機關の完備を得意として居る亞米利加合衆國に於て、今日も尚殘虐を極めた私刑の行はれて居ることは、何人も周知の事實である。但し一般に私刑は、白人の婦人を侵した黒人に加へる行為で、假令一面には女尊の思想の手傳つて居るにせよ、民族を異にせることが、其の主たる原因なることは、黒人に對する彼地の白人の日常の態度に於ても知られることである」。文明社會にも文明とは相反する多くの残酷な犯罪は多いことを認める。「吾人は所謂文明人が、如何なる程度まで犯罪觀念に發達し進歩した點のありやを、疑はねばならない。否寧ろ文明社會は、その組織の複雑なるだけに、却つて未開人・古代人に比較して、往々其の社會の保全に矛盾した行為が、割合に無頓着に認められて居ることがある」。しかし、刑罰は未開社會と文明社會には違ひがあるという。「刑罰に關する方面よりせば、犯罪行為が、行為者の體内に宿る惡魔の使喚に因るといふ原始的思想に類した單純な意味に於ける惡意より行はれるのではなくて、相當な內的・外的の因果關係に因つて行はれるものである事實は、彼等に單純な憎惡のみ以て對すべきでなく、寧ろ憐憫と保護とを以て對すべきである。…犯罪に關する方面よりせば、形式上犯罪と目すべき行為が、國家・種族・民族並に個人の保全と繁榮とを得んとする自然的要求から、他の國家・種族・民族並に個人の自由・平和・權利を侵害するに至ることを、發達した道德の存する今日に於ても、尚これを認めねばならぬ。…而してこの二面は、現代に於ける犯罪觀念の發達に關して、等閑視すべからざる事實であつて、前者は、犯罪に對する發達した民衆の態度であり、後者は、犯罪に關して過去並に現在一環せる根柢をなすものである」。

大島正徳(1918, 心理研究, 第十五卷)は、心理学通俗講話会で「國民生活の心理」について講話している。「此の歐洲の大戦、否世界の大戦は、人類あつて以來未曾有の大事變で…未曾有の時節でありますから、この時局に顧みて、我が國民生活の上に幾多顧みなければ

ならない事項がある…少なくとも二つの重要な問題がある…。其の一つは國家的精神を涵養しなければならない、それを更に深く樹立しなければならないと云ふことであります。もう一つは我國民に自發創造性が足りない、故に生徒の自發性を養成する自發教育が極めて必要である。『優勝劣敗の此の世界の舞臺に於きまして、お互ひに國民として自國に忠君であり愛國でなければならぬ、さう云ふ國家精神を強めて進めて行かなければならぬ…日本の忠君愛國は、必ず日本流でなければならぬ。…固より輕薄淺慮なる流行的民主主義の唱道は我が國體と相容れざることは明白であるが、さりとして之を頭ごなりしに非議する譯にも行かぬ。此の邊を十分考慮して其の中に意味する所にして、我國體に同化し得べき點は同化したし、恰も西洋料理を喰って不相變日本人であるが如くするがよい』。『積極的に彼等西洋の思想と云ふものを十分批評し、十分論究して而して自分の材料にすると云ふことが必要である。只西洋の思想が來たと云って、之を恐れて觸れることもせぬは自らを信ずること厚からざるものである。自主自立の精神が薄弱だといふと、外から來て意見を述べる人の議論が強いのを聞くと云ふと忽ち引込んで了はなければならぬ。苟も日本の國體をどこまでも闡明にし、日本の國家を永遠に伸長せしめて行かうとする者は、色々新しい思想が來てもそれに迷ふ必要はない。寧ろ先ず其の思想を論評し、取るべきは取り、否定すべきは否定すると云ふやうな積極的態度で、國民の道德思想問題を取り扱ふ必要があると思ふ。…相變らず西洋のものを模倣して居ると云ふ丈では、日本の將來に取って憂慮すべきことである』。日本人の自發性、創造性の乏しくなった原因がいくつか上げられている。「本々階級制度であり、自發活動の餘地がなかった」こと、「是までの日本の學問は、…佛教乃至儒教である、佛教や儒教の中に於きましては、科學的というふ方向は少しもない」こと、「道德的教訓の著色が少しも仕事をすゝめるとか功利を重んずるとか云ふことになって居ない」こと、「我日本人乃至東洋人は論理的でない、論理的にものを考へると云ふことが少ない」こと、等が上げられ、西洋人に伍する日本人を育成することが急務であると訴える。

菅原教造(1920, 心理研究 第十八卷)は「衣服の發達より見たる毛及び裸體の研究」を行っている。文明國になるに当たって、裸體を衆目にさらすことは大きな問題であった。「吾々は日本服や洋服を此通りに著て居ります、マア洋服を著て居ります人類は、顔と手しか出て居りませぬ。後は皆防禦してしまつて、靴でもこんなやうな窮屈なものを穿き、暑い思ひをして汗を垂らして居ります。…女の夜會服などになると、ズツと肩から胸の所から、後ろの背中、殊に此節流行る夜會服は背中の中分位まで露出して、前の方はレースのやうなもので、肩の所へ繫いで居る。手などは白い皮の手袋を嵌め、二の腕の所まで出して居る。詰り今まで出して居った所を出さないで、今まで隠して居った所を露したり、色々變挺な事をして居ります。…餘に矛盾した事を平氣でして居る事に就て不思議に思はざるを得ない」。肌を露出させる女性の洋服にとまどいを感じている。「夜會などに初めて出て見た日本人などはそんな事で驚かざるを得ない。…けれども西洋人はさう云ふ矛盾が平氣で演ぜられて居るのをどうして怪しまないか。是は可なり考へて見る價值があるだらうと思ひます」。「西洋の夜會服に胸を出すやつを、日本になると、首の後ろの方がズツと出て、足なんか剥き出しになって居る。是なんかは外國から日本に來た人を見ると餘程ショックを感じる。向ふでは靴を穿いて居りますから、足を見ると云ふ事に就ては殆ど平常には經驗がない。日本に來ると素足の綺麗なのが出て居る、餘程刺戟を感じるさうであります。

…女の人が自動車に乗ったり、車に乗ったり、電車に乗ったりする時には、或る程度まで脛が現れます。外國人は町を通りながら、そんな脛を見て矢張り非常に刺戟を感じる。…合せて居る着物が動く、チラと可なり上まで見えたりするやうな事がある。マア斯う云ふ風な洋服で固めた連中から見ると餘程不思議な事に見えて來る。外國人は風俗習慣の差に随つて色々な矛盾、衝突、激動、刺戟なんて云ふやうなものを感じて、不思議がつて居ります。肌を公衆の面前で露わにすることにそれほど抵抗を感じない日本の文化的特徴を、世界史の視点から説明しているのである。「マア外國の人が日本に來ますと、お湯の三助が棒一つで女の湯の方に這入つて身體を洗つているのは餘程不思議に見える。…野蠻人の例を取つたら色々な例もありますが、文明生活の例ではそんなものであります」。輕犯罪法を制定し、人前で裸になることを禁じたのが明治5年(1872年)1月である(違式註違條例)。第二十二條で、「一、男女入込の湯を渡世する者。一、裸體または袒裼(はだぬぎ)し或は股脛(ものほぎ)を露し醜體をなす者」、と規定している。これに先立ち4月には、東京府下には同様の嚴禁の令が出されている。「一、裸體または袒裼(たんせき)にて往來致し候儀は勿論、見世先その外總じて往還見通しの席は同様相成らず候事。一、男女入込洗場相成らず候事。ただし湯屋二階並びに入口等は葭簣暖簾(よしずのれん)の類下げ置き、往來より見通し相成らざるよう致すべく候事」、とされた。西洋人の目に映る裸體を如何に氣にしたかがわかる。

野田義夫(1921, 心理研究, 第廿卷)は、「國民性に就いて」まとめている。野田は、1913年にすでに「國民性の訓練」を著している。その考へる骨子は國運の盛衰を來す原動力は國民性であるということに帰着すると述べている。本論文では、「英米佛獨の四箇國の國民性」についてまとめたものである。戦争に関わらせて國民性について次のように述べている。

「今日の戦争と云ふものは昔の一騎撃の戦争とは違つて、國民全體の戦争である。詰り民族全體の戦争である、従つてその戦争は其中で最も優れた性格を有つた民族が結局勝ちを占めると云ふことになるのであります。…今回の世界大戦は民族存亡の戦争で結局國民性の戦争であつたと言つて差支無いと思ひます。さい云ふ意味に於て此國民性と云ふものは非常に重大な意義を持つて居るものであると云ふことを常に考へて居る」。「優れた國民性は自國の發展進歩の原動力である許りで無く又人類の幸福を増進する原動力と言つて差支無いと思ひます。もしどの國民もどの國民も短所ばかりを發揮して下手の事ばかりをやつたならば各國が困る許りで無く人類も全體として幸福を期することは出来ないと思ひます。…國民性の高潮は決して現代思想の基調とも言ふべき人道の理想に矛盾せぬのであります。…各國民がその長處を發揮せねば人道の理想を實現することは困難であると切論し度いのであります。…優秀なる國民を有する國民が平和の國際競争に優秀の地位を占むることも極めて正常事と言はねばなりません。戦時民族戦が結局國民性戦であるやうに平和の國際競争も結局國民性の競争であると言つて差支無からうと思ひます」。一國民を益する長所は同じ長所を他の國民が持つとしてもその國民を益するやうな者でなければならぬという。他國民の長所を見て自らを反省し修養する助けとするのが眞の愛國心であり、人道の理想を實現し、永遠の平和を保持するためには國民相互の正当な理解が大切だということ。こうした視点から、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツの國民性を紹介している。イギリスの國民性は、冷靜沈着で、正義感が強く、ねばり強く、親切である。アメリカの國

民性は、進歩的・奮闘的であり、性急であり、壮大なことを好み、金銭を物事遂行の手段として好み、成功への欲望が強い。さらに、淡泊・開放的で、無用な儀礼はすべて簡略化し、正義と自由を愛する。フランス人は、上品な智と情を持つ優れた民族である。国民性としては、多感性、社交性、優美性、理性にすぐれており、自由平等を愛し、勤儉貯蓄の精神に富んでいる。ドイツの国民性は、忠実であり、意志強固であり、沈着冷静である。さらに、研究精神旺盛で、組織的系統的で、規律的生活を営み、思想的に自由であり、勤勉・儉約的である。

三上義夫(1922, 心理研究 第廿一卷)は、「日本数学者の性格と国民性」について書いている。「日本の数学者が何んなものであったかを述べて見たいのであるが、数学者といって日本人であり、日本人の仕事である以上は国民全体の性格が其上にも現れてゐるのは言ふまでもないことで、其関係を明らかにしたいのは我々の願望である。数学史など言へば極めて特殊のものゝ様に思はれもしやうけれど、其實社會状態との関係を闡明することが最も大切なものであって、ここに国民性乃至は文化一般との関係も見通されなくなる。斯くして数学者の性格も国民性と大に関係のある者と考へる」。数学者の性格は国民性の問題であるとし、日本人の国民性を論じている。「學術界から離れて一般國民を見ても、日本人が公德心の缺けていることは何人も異論のない所であり、排日の聲は世界到處に擧げている。排日の原因は蓋し二つある。…東西洋の対立は波斯戦争以來古今を一貫して何時も歴史上の最大要素となるのであるが、今や東洋諸國が屏息して白人の世界にならうと云ふ時に日本が俄かに勃興して其局面に出たので、白人國から警戒されるやうになるのは避くべからざることであった。併し他の反面には公德心の缺乏が第二の原因となる。日本の商人は、…信用と言ったら絶無である。外国に對して許りではない。…日本人は一體に陰日向がひどい。…日本人は虚偽を意とせず、人の迷惑をかまわない國民と言ひ得られる。公德心がないと云ふのもつまり其結果である。日本人が到處に排日の厄に逢ふのは日本人自身にも責任のないものでないことは自覺しなければならない」。さらに、「日本人は何處までも感情的であつて理智的でない。…虚偽を意とせず知識を尊重しない…知識尊重の精神が発達しないのは尚他に原因がないのではない。和算の發達を見ても理論の構成に長じたこと云ふよりは運用を巧みにしたものであるが、運用が巧みである為に理論を要しないと云ふことが和算だけではなく總での方面に著しい。日本では哲學らしい哲學は出来ない。外國のものを採用して之を同化改造し、さうして實地に適するものにして、之に指導を仰ぐ。…日本は極めて感情的で單純で理性に乏しいにも拘らず、社會體として非常に理性的であるのは、此性格から來てゐる。和算も此性格によって形造られた。日本の文明は總てさうした過程によって構成される。而も此能力があるが為めに根本的に知識を開拓し學問を尊重することの必要が生じなかつた。其知識を尊ばぬことが、虚偽を意とせず、道德の頹廢をも來たさせることとなる。この様にして此等の事柄が互に因となり果となつて、國勢の盛大を來たすと共に亦憂慮すべき事情をも出現することになつたのである」。

諸岡存(1922, 心理學研究 第廿二卷)は、「視覚と色情」の関係を、野蠻人と文明人の違い、日本人の特徴とうに触れながら考察している。美意識は時代、種、を超えて共通性があるという。「美と云ふものは野蠻人と文明人と、原始時代の人民と、現代の人民と、又廣く下等動物と高等動物、更に一層廣く植物界と動物界とは其標準が異なるものであるやうに見えても、實際の所、驚くべき程一致して居るものがあるのである。大體に於て野蠻人の

見て美とする所は、文明人の見て美する所と大した違ひはない、…美と云ふものは大體に於ては生物界全體に共通するものである。故に野蠻人の極めて原始的なる文學から、上は所謂最高文明人の美術文學に於ける美の叙述は、…大體に於て驚くべき一致を呈して居るのである」。身体の裝飾についても論じている。「露骨に生殖器官を露出して、男子の眼を惹く方便とするのは比較的稀れなことであつて、文明の程度の低い人民に限られてゐるのである。…野蠻人が身體に裝飾を加へ、若しくは着物を着るのは、身體を隠す目的ではなくして、却つてその部分の注意を惹く為である」。著者は専ら身体的な美について語っている。「歐羅巴にせよ、亞細亞にせよ、アフリカにせよ、大概の人類の中で婦人の臀部の大きいことは一般に美の重なる要素とされて居るのである」。骨格によつて、人種の進化の程度に違いがあるともいう。「白人は最も廣き薦骨を持って居ると云ふことである。黄色人種は其次であつて、黒人が最も狭き薦骨を持って居る、尚又白人は薦骨の屈曲が最も大であつて、黄色人種が其次で、黒人は最も扁平なる薦骨を持っている、此點よりのみ見れば黒人が最も不完全な骨盤であつて、それで時とすると、黒人の中では所謂人工的に大なる臀部即ち脂肪の臀部を持って居る、例えばホットントット人種の如きものがそれである。此特質は骨盤を大きく見せる一つの手段と見るべきもので、是は其實完全に發達して居る臀部ではなく、只多量の皮下脂肪が堆積せられて居るために大きいのである。一種の自然的脂肪腫と見るべきものである。この種の大なる臀部は只ブッシュマン及びホットントット人種と、之と血族的關係を持つて居る種族のみに限られに居る。併し是に類した臀部は他のアフリカ土人の間にも見られるのである」。白人が最も進化しており、次いで黄色人種、黒人は最も進化が遅れているというのである。日本、特に東京の女性は世界で最も美しいと絶賛している。「東洋の婦人は外の婦人よりも長く肉の強さを維持して居る、此尊き性質は、皮膚の新しさと白さとに加へて非常に尊い性質である。皮膚の綺麗なることは東京の婦人に越すものはないと云ふことは歐羅巴人も認めて居る點である」。

Y T 生という匿名の著者(1924, 心理研究 第廿六卷)は、學界鳥瞰で「人類と同祖としての三種の猿」のテーマで、猿との類似から人種による優秀性を論じている。「猿人同祖説の一主張として人類を現在生存の類人猿に定型的にびたりと當て嵌た考察があるから、夫を紹介して見る。其の説は人間及び猿が極安樂な休息状態にある時の姿勢を論據として居る。即ち然様な時が、筋肉、骨體等が一番微妙な平均を保つて居る時で、毫も直接意識が働いて居ない。で其姿態の近似は同祖を物語る力強い證據である。夫れに仍つて考へれば、地球上現存の人類を蒙古人、黒人、白人の三種に分ち、各の分派を猩々、ゴリラ、チムパンジーに歸する事が出來ると云ふのである。蒙古人は休息の時脚を水平に曲げて(即ち胡座して)るが最も普通の形であり、如何なる黒人も白人も是を樂な姿勢とは思はない。彼等に在つては日本人の所謂及び腰と云ふ様な蹲居は逆も長座に耐へないだらうと思はれる姿勢が最も平安な休息方法であるが是を更に仔細に見ると、黒人は先づ垂直の状態に上半身を置くが、白人は比較的稍上體を前に乗出して居る傾きがある。所が驚くべき事には總ての猿の内胡座して休息するのは猩々のみであり、ゴリラは恰も黒人の様に上體を垂直に全重心を臀部に落し膝を抱へる様な恰好に蹲居し、チムパンジーは白人がする様式なのである。以上でも己に微妙な動物の進化の跡を辿る時、非常に重要な一致であるのだが、更にそれよりも一層此論を強くせしめるものは、諸種の白痴状態の人間に表はれる姿態と、以上三種の猿との間の一致である」。白人はチムパンジーに、蒙古人はオランウータ

ン、黒人はゴリラに対応し、進化の序列を示すという。

「歐羅巴の醫家の間に『蒙古型白痴』と診断され來って居る一種の白痴型がある。それは兩親は顯然たる白人であり乍ら、蒙古人の特質を表はすから其様な名を附せられたもので、彼等は椅子なしに休息する時東洋風邪の姿態を採る。又早發性癡呆症の患者はすべて原始白人の休息様式を、エシオビックと名付けられる白痴は黒人の様式を採るものである。是等の白痴が為す所の姿態は全て原人其儘を表すものであるが面白い事に純血の黒人や白人の間には決して『蒙古型白痴』を見出す事がない。是は即と彼等の系圖の中に蒙古人乃至『猩々』の血液が混入されて居ない事を物語るもので無くて何であらう。同時に又、歐洲人乃至米人の間に屢ば『蒙古型白痴』を發見する事は一派の人類學者が云ふが如く、西洋人の間に、著しく蒙古人の血が混入されて居る事を最も有力に裏付けるもので無くて何であらう。尚事の序を以て云へば西洋人の間には斯様な白痴の間のみでなく常人の間にも外貌及び解剖學的に非常に屢ば蒙古型の人間を見受けるのである。…有色人を一段下級の如くに見たがる白人に取っては誠に氣の毒であるが科學的に様々な證據があつては彼等も抗議の申し出様はないだらう」。白人とは、黄色人の血が流れていることがしばしばであると指摘する。

この説をさらに確証するには、「手のひら」の研究が必要であるという。「蒙古型白痴」の手のひらを見ると、通常の西洋人と違って是を深く貫く條は一本しかない。是は未開な蒙古人の間に屢ば見出される型で、同時に又猩々の掌と著しく近似の形を示すものである。そして猩々以外の猿には斯様な一本の深い溝を持った掌は見出せないのであるから、蒙古人と猩々々が同祖から出たと云ふ説は非常に色が濃くなって來るわけである。若し黒人或は白人の間に此型の手を持って居る者がある時、深く注意して其家系を溯って行けば其處には必ず蒙古人の血を見出す事が出来るであらう。所がゴリラの掌を見ると二條の貫通線があつて全く上述のものと同趣を異にして居り、更にチムパンジーのになると、中心のあたりからV字形に分かれた皺によって縦に區切られて居る。そして此型の手を早發性癡呆症患者の間に見る事は決して珍しい事實ではないのである。手のひらからしてゴリラ、チムパンジーは、早發性癡呆症患者に類似している。ゴリラ、チムパンジーに似ている黒人と白人は、蒙古人に劣ることを暗に示唆しているのであらう。

「…耳にしても舌にしても、猩猩と蒙古人種との間に、或は以上の二つと蒙古型白痴との間にのみ共通な類似を指摘する事が出来るし脊柱の末端を見ても彼等が等しく胡座の習慣から得た所の特殊の形状を呈している。或は又大腿部の骨の彎曲を検しても此習慣が彼等に共通である事を證するに足る」。いずれにしても、人類は猿に祖先を持っている事ことは認めなければならない。我々の「頭蓋、眼、耳、手或ひは其動作等一つとして祖先を物語つてゐないものは無い。悪戯好きで淫蕩なチムパンジー型、重々しい哲學者氣取りで自己満足的な猩々型、遲鈍、狡猾、残忍なゴリラ型或は其複雑な混合等何れかに組入れられぬものはない」。

足立文太郎(1925, 心理研究 第廿七卷)は、「軟部人類學より見た人種の優劣」についての談話を載せている。「白人と有色人との骨格に著しい相違がある以上これに附屬する所の筋肉、血管、神経及び内臓等にも等しく相違がなければならぬ…從來人類學者は徒に皮膚を舐め骨をシャブルことより知らなかった…しかも舊來の人類學乃至解剖學はヨーロッパのそれであつて日本人を研究の對象としたものでないことは學術上極めて遺憾とせざるを

得ない。…最も米國では…黒人の筋肉を解剖研究されたものが…あるが、日本人について研究された例はない、日本人の筋肉と西洋人の夫れとが相違するやうに、血管にも著しい相違を發見した…茲に特に一言しなければならぬことは舊來の人類學なり解剖學は西洋人の作ったものである、而して西洋人は極めて自惚の強い人種であることである、西洋人は世界において一番高等な人類と考へ、日本人其他の有色人は遙に劣つた人類であると考へてゐるが、自分の研究にかゝる軟部人類學上から見るならばそれこそ飛んだ勘違ひである」。日本人と西洋人の何れが優れているか、甲乙つけがたいと結論づけている。「西洋人には毛が多い、之は明らかに獸類に近いもの額骨の出張つたのも猿族と似通つてゐる、又日本人は菜食するから内臓が長い様にいはれて居たが、今日までの研究では何等肯定すべきものを發見しない。日本人の尾胝骨が飛び出て居ると獨逸の人類學會が發表したといふ有名な事件の如き明らかに日本人に對する誣妄であつて解剖學上西洋人と何等異なる所なき確證し得た、日本輕業師の綱渡りも亦彼等のいふ如く猿族に近いがためでなく幼時から草履、下駄の類の使用に馴れたからで筋肉組織の相違から來たものでない。唯鼻については、日本人は著しく劣つて居る。要するに東洋人を比較し人類學上互に一長一短で、優劣の存在せぬことを斷言し得るのである」。

2. 日本の植民地・アイヌ等に関する研究 保科孝一(1918)は、「人文鬭争上より見たる國語問題」として、民族と國語の關係を考察している。「心理學上の問題としては少し縁が遠いやうであります、亦ある部分即ち民族心理の上から見れば密接な關係があると思ひます。元來國語には二つに分ける事が出來まして、その一つは人文上の國語問題、今一つは政治上の國語問題であります。…政治上の國語問題として現はれて居るものは、民族の間に最も重大な關係を持って居ります」。民族主義について述べている。「民族主義といふものは民族的勢力を擴張せんとするのであります、その手段として民族固有の文明を他の民族に扶植するのが目的になってをります。…その目的は民族が自己の勢力を段々擴張しようといふのであります、之を擴張する場合に、何を手段とするかが問題になりますが、その手段になるものに二つあります。即ちミリタント即ち武力によって勢力を擴張するものと、非武力(ノンミリタント)即ち人文によって勢力を擴張しようといふものであります。人文によって擴張する場合にも、その手段なるものがあるゝあります、その主なるものを擧げて見ると、國語政策、學校政策、植民政策及び經濟政策といふやうなものであります。そのうちで國語が政策上最も重大なる手段となつてをります。…民族的勢力を擴張する場合には、先ず學校を設立することが最も策を得たものであると云ふことに認められて居るので、殊に大學を設立する事が最も効力の大なるものであります」。ヨーロッパにおいて民族的衝突が絶えないのは、「全く國民性を異にするからで、これは民族心理學上面白い問題」だという。「この問題について日本人はどう云ふ關係を持って居るかど申しますと、一體日本人は民族的觀念が餘り強くない。言語關係より見て特にそれが證明されるやうに思ひます。我々日本人がどこまでも民族的觀念によって、その勢力を扶植し、固有の國民性を擁護して行かうといふ執着心を有して居りますと、日本人がある場合に於てもう少し他の民族と衝突する機會があると思ひます」。日本人はもつともつと民族性を強き意識しなければならないと説く。「日本人としては飽くまで國民性を擁護する必要がありますから米國に於ける日本兒童は日本語によって教育すべきもので、然らざれば非國民的な人間を生ずる場合がないとも限らない。所が日本人は固有な國民性擁護に對して熱

心が足りない。…中には日本人として米國のパブリック・スクールに子弟を送ることに大いに名譽と考へて居るものもあります。…又馬尼刺に於てもその他の植民地に於ても、日本の移住者が澤山居りますが、皆其の地方の學校に子弟を入學させて居ります。勿論馬尼刺・香港・上海等には日本人の小學校もありますが、皆甚だ不完全なもので、在外指定學校になって居るものは今日極めて少いのであります。日本人としては祖先傳來の國語によって子弟を教育し國民性を維持することは極めて必要なことであります。然るに歐羅巴の文化が日本に入るとその文化に心酔する傾がありますが、國民性を閉却して他の文化に心酔すると云ふことは非常に重大な問題でありますのに日本人には兎角その傾向がありません。衣食住其他に就ても日本に固有なものがない。衣服でもどれが日本の國民性を代表するものか分らない。洋服を着るものもあり、和服を着るものもあり、勞働服を着るものもあり、國民としての固有な衣服に執着しないのが日本人の特性である。「日本人は日本固有の文化を扶植することに力めないのみならず、むしろ他の民族の文化に同化するのを喜んでゐる傾がある。即ち歐羅巴の文化が入って來ると、忽ちその文化に心酔する。支那の文化が入ると支那の文化に同化し、朝鮮の文化が入ると又それに同化するといふ有様であります。之は將來民族の發展上大に研究すべき問題であると思ひます。將來日本が東亞の盟主として大に雄飛せんとする場合には、我が民族的勢力を大に擴張し、その文化を他の民族の上に扶植する事が必要であります。その關係からわれわれ日本人は祖先傳來の國語を大に尊重しなければならぬ。所が日本人は固有の國語よりも、むしろ外國語を尊重して居ります。例へば日本に現在獨逸の俘虜が居りますが、彼等を取扱ふのに、やはり獨逸語を用ゐて居る…斯くの如きことは歐羅巴には決してないことでありまして、俘虜に對しては必ずその國の國語によって取扱つて居ります。…日本人として飽くまでその國民性を維持し、民族的勢力を發展せしめるにはその文化を他の民族の上に扶植することが必要であります。それにはまづ日本語を整理整頓し、これを廣く海外に普及せしめる事が必要であります。然るにわが國民は祖先傳來の國語の擁護及び擴張に就ては非常に冷淡であります。これは民族的競争の戦後益々盛なるべきを豫想せられる以上これは將來大に考慮すべき問題と信ずる」。

速水洸(1919, 心理研究 第十六卷)は、「臺灣生蕃人の文化」について、次の断りをした上で記している。「門外漢として固人類學的に詳しい研究を発表しようと言うのではない。…當時の生蕃の生活状態、其文化の一般をご紹介申し上げる。彼は、「臺灣總督府の講習會に招聘されて彼地に渡つた」。生蕃の人々の住む地までの旅行中、出会う人々が日本語で挨拶することを驚きと喜びを以て受けとめてゐる。「其の眉溪から先きへ坂道を進んで行きますと、蕃人が幾人となく山から降りて來つゝあるのに出會つた。…何れも吾々に會ふと必ず『今日は』とか『皆さん今日は』と云ふやうな挨拶をします『今日は』とか『左様なら』位な事は大抵知つて居るのであります」。生蕃の子どもが学ぶ學校(公學校と呼んでいる)に行き授業の參觀をしたときの様子が書かれている。「教師に頼んで色々な事を生徒に質問して見ましたが、最初は耻かしがって餘り返答しなかつた、併し皆日本語は中々上手に喋るのです。實は豫想に反して彼等の流調に日本語を操るのには驚いた。何か日本語で話をして呉れと言つた處が始めは耻かしがって居たが、其の中一人讀本を持って夫を其儘讀みました。私の希望した通りに自分で自由に思想の發表を為す事はしませんでした。其中教師から何か兒童に話してやつて呉れと云ふ注文がありましたから、私は其の子供

に向かつて一場の話をしました。自分は東京と云ふ遠い所から來たものである、東京は此處からは彼此十日以上も掛らねば行けない程遠い所であつて、其處は天子様の居らっしゃる都であると云ふことは諸君も御承知でありませう。諸君は平先生の教を能く守つて勉強されると見えて中々上手に日本語を話されるのを聞いて私は非常に嬉しく思ひます。…中には頷いた者もありました」。皇國民化を図る日本の植民地教育が、台湾で深く浸透してゐた。「教師の指圖で大國民の歌と云ふ唱歌を一同で歌つて呉れました。其の調子と云ひ發音と云ひ實に明瞭で、内地の兒童にも決して劣らぬと思ひました。…日本語の發音は本島人よりも生蕃の方が早く覚えて且つ上手になるそうである。…此の一年と二年では子供が君ヶ代の唱歌を歌つて呉りました。私は君ヶ代を聞いた時には何とも云へない感慨に打たれました。生蕃の學校と云へば如何にも程度の低いもので、とても内地の學校とは比べものにならないものだと思つて居たし、又日本語にしてもやつと簡単なことが話せる位だらうと豫想して居たものですから、一つには其の豫想に反して進歩して居るのに驚いたゝめでもあるが、又か様な僻遠の山間、殊に蕃地に於て生蕃の可憐な兒童の口から君ヶ代の唱歌を聞かうなどゝは思いも寄らぬことであつて、今更ら王化の四海に洽ねくして教育の効果の著しいものがあるのに感慨を催うしたものであります」。台湾「民族」の日本「民族」への同化策がとられ、現地の社会・文化・教育事情の視察に心理学者も訪れていたのである。

海軍中佐安藤諒次郎(1924, 心理研究 第二十五卷)は、連載の「群衆心理研究上の一資料」の中で、関東大震災時の在日朝鮮人に対する日本人の流言飛語とその被害について述べている。「筆者は九月二日の夕刻親戚の勧めに従つて、原宿の當時の自宅から數町を隔てた某華族の庭園に避難した。此の時分は最も流言蜚語が盛んで、朝鮮人が二千人押し寄せて來ると云ふ事が一般の人々に確信されて居つた。筆者は多少の軍事知識を持つて居るから、どう考へても異域にあつて且つ團體的訓練なき彼等、然かも組織的の比較的劣つた彼等に到底斯くの如き働きの出来る筈がないと信じた。此の流言は全然嘘だと断定して何等それに対する顧慮が起らなかつた。夜に入つて該庭園には血眼になつた避難民が約八十名ばかりに達した。其のうち筆者を除いては一人も男が居なくなつた。それは男は朝鮮に備ふべく警戒につけとの事であつたからだ。筆者は其の必要がないと認め又自分の家族は幼弱者ばかりで且つ、避難者群も女子供の集合であつて之れを指揮するものもないから、自分がそれに當らうと考へて踏止まつた」。安藤は、流言飛語に惑わされず、毅然とした態度で朝鮮人を保護した人々を研究上の参考資料としてあげている。「山口氏は九月二日鮮人騒ぎが起り自警團が出來た時に夙に武器を禁じ、鮮人に對し一指を染めてはならぬ旨を命じ、軍隊に對しても治鮮上の利害得失から犯罪の有無を論じて鮮人の保護を論じたものだ。そして軍隊から嘲笑され自警團から怨まれつゝ鮮人二百餘名に保護を加へた。「鮮人二十七名を救つた勇敢なる在郷軍人がある。…砲兵少尉島田藤一氏は…『これ等鮮人は決してかゝる不都合者ではない』と極力防止したところから、激昂せる町民等は…暴行を加へんとした…(島田は)其場に積み重ねてあつた材木の上に飛び上つて『鮮人は決して暴行せざる事』『大國民の態度に出づべき事』『暴行の非なる事』について演説をなすと共に、彼等鮮人の所持せる所謂毒藥なりと確信せるものを、自ら群衆の前に立つて飲んで見せたので、一同引揚げ無事なるを得た」。竹槍の前で三人の學生を隠し終せた六十六のおばあさんがある。…それは大騒ぎでございましたよ。宅の二階には…韓仙袒(二二、東京醫專在學)と、お妹さんの東竹(一九、音樂學校學生)さんと金(二一、東京醫專在

學)さんの三人がゐましたが、近所の自警團の方が來られて『この家に鮮人はゐるさうだが直ぐ渡せ』と云はれましたが『いゝえ』と云って断りました。…鮮人だって悪い人ばかりぢゃありませんものね。二度目には竹槍や刀などを以っておどしに來ましたが、今朝程出て行ってまだ歸りませんがどうしたものでせうと云って追ひ返しました」。

入谷智定(1925, 心理研究 第廿七卷)は「アイヌの精神検査」についてまとめている。研究の動機を次のように語っている。「彼等生活の一般條件を知ることは纏て彼等の精神生活を知る手引ともなると思ふからである、即ち彼等は日常外面的生活に營々として内省したり主観的に複雑な生活を營んだりして居るから其の精神生活は文明人以上に日常の生活に現はれて居ると思ふからである」。アイヌの特徴をあげている。「アイヌを一見して男女共其れと區別のつくのは眼球の位置である。解剖的には尙外に一、二内地人と異った處がある相である。顔の型には長頭型と圓頭型とある様である。中老以上の年輩者を観ると男子は頭髮鬢を房々と伸ばし、女子は口邊に刺青し、男女共に筒袖を着て恰度繪端書杯に見るアイヌ其の儘であるから單に其の風俗丈を觀ても直ぐ分るけれども、青、壯、少年杯の近代教育を受けた連中になると男子は頭髮鬢を短くし、女子は刺青なく、頭は束髪、衣服は和人と同様のを用ひて居るから餘り内地人と區別はつかぬ様であるが其の眼差は均しく異様な感と與へるのである。此の身體的特徴は恐らく人種的融合の一大障礙となるであらう」。家屋は汚いという。「内部は燻って四壁も牀も眞黒である。…屋内亂雑不潔で其に一種の臭氣さへあって不快の感を與へる」。「彼等の最大好物は酒である。男子のみならず女子も可なり酒を呑む相である。男子は三升でも五升でもある間は呑んで居るので男子で三升や五升の酒を呑めない者は彼等仲間には居ない相で、多少の餘裕が出來ると彼等は之を酒に代へて朝から呑んで居るのである。何んな家を覗いて觀ても酒器のシントコの備へてない家はない位で、子供の時から酒の味に親しむのである。つまり彼等は酒を樂みに生存して居ると云つてもい樂い位である。…斯る習慣のある結果酒精中毒が彼等をして無償逸惰の風を生ぜしめ、延いては種族的自殺を招致する一因であるとまで謂はれて居る。…のみならず彼等は和人から劣等人種視せられ、物質的、精神的競争に於て優位を占めることの出來ないことが一面彼等の精神を畏縮せしめる原因であると同時に又同類意識を強める一因でもあるだらう。…訪問の際路傍に遊んで居た兒童にそれと知らずにあれはアイヌの家かと尋ねたらあれはシャモの家であると稍興奮した調子で答へた處を觀ると小學兒童時代からは彼等の頭脳にはかなり明瞭に人種的意識が起つて居るらしひ」。アイヌの低劣な文化、怠惰な生活が強調されている。「アイヌは音聲言語を持って居るが、書記言語を持たぬ。従つて學問はないし、醫術杯は發達して居らぬから一般に衛生思想に缺乏して居り、時間觀念に乏しく、全體の生活が不規律である。其の服装杯でも、住宅の内部でも不潔亂雑で一種の臭氣さへある。夫故彼等には痘瘡、トラホーム、梅毒、肺結核等の病氣に悩むものが多いと云はれている。彼等の間に起る梅毒は極めて猛烈なものであり、…死亡者の二割五分は結核の犠牲者であると云ふ」。

3) 優生学と日本社会の改良に関する研究

ダーウィンの進化論、ゴールトンの優生学、メンデルの(優性・劣性遺伝)法則を基に民族、人種を優良化することが盛んに論じられている。

1. 優生学を支持する研究 松本亦太郎(1912, 心理研究 第一卷)は「優良種族の消長」と題する優生学に関する講話をまとめている。冒頭、松本は、「優良種族の消長と云ふ問題

は最近代に於ける大問題」であると述べている。「人間測定學と云ふ見地からして、人間を研究して、其研究の結果を實際に應用しようとして、優良種族學と云ふ學問が唱へられるやうになつたのであります…フランシス、ガルトン、及其一派の人々であります。世の中が段々文明に進むに従ひまして、自然的現象を人為的に矯正して行くと云ふ企が盛になつて來る。此優良種族學の如きは人為的矯正に關する最も大膽なる企であつて、甚だ興味のある學問であります」。優生学の統計的な背景を説明している。「人間は精神的特徴に於ても個々人相互は一定の關係に従ひ相違して居る。多數の人は尋凡價に近い特徴を有して居るが、尋凡價以上に優れた特質を有して居るものも、尋凡價以下に劣つた者もあつて、優劣の度と人數の關係とが殆ど蓋然法により律せられて居る事が明らかであります」。「偉人は親の性質を稟け、偉人の子は又偉人の性質を稟くる事が親族中の他のものの性質を稟くるよりも餘程多い事になって居ります。親、子、孫と云ふ直系親族間に稟質の遺傳が最強く行はるゝのであるから一般に見て優良稟質は代々相傳するものと見る事は確かに出來ます。稟質は遺傳すると云ふ事が明らかであるとすれば、更に多方面より起つて來る問題があります。…今日の文明社會に於て劣等なる種族の子孫を生む割合と、優等なる種族の子孫を生む割合とどっちが多いかと云ふ問題であります。假りに英國の例に就て言ふと、統計學者の研究上劣等なる種族子孫は段々増加して行くが優等なる種族の子孫は増殖の割合が餘程少い…。只増殖の割合が少いと云ふだけならば宜いけれども、優等なる種族の子孫が減少して行く傾きがある。文明が高度に進むに従ひ、劣等なる程度の人の子孫が段々世の中を押領して行つて、之が為め優等なる種族の子孫が驅逐せらるゝと云ふやうな事實が統計上に現はれて來て居る。同じやうな現象の例を見やうと思ふなら、都市と田舎の人口の消長に就いて見ると一番宜い。概して言ふと、文明の程度に於て都市の人間は田舎の人間よりも高く進んで居る。文明的價値の大なる人間は田舎よりも都會の方が餘計住んで居る。然るに日本でも英國でも都市の人口と云ふものは、都市だけで調べてみると段々減退して行くのである」。都市より田舎には劣等な人が多いという。「野蠻人が野生狀態から出て文明狀態に觸れると野蠻人は段々消滅して行くと云ふ傾向がある。兎に角かゝ次第で文明の高度に達した人種は或る不明の原因から其の繁殖力を減ずると云ふことは確かである。優良種族の蕃殖の割合の減少する理由の稍明瞭なるものは晩婚と避妊とである。世の中が文明になつて來ると、概して結婚する時期が遅くなる傾を生ずる。男の結婚にしても、女の結婚にしても遅延する。もう一つは…結婚をした者が意志的に妊娠を避けると云ふことが文明社會にある。晩婚と云ふことと、避妊と云ふこととの二つの事柄が働いて為に優れた階級の子供の出來方が少なくなる。晩婚と避妊の二つの現象は良い下級に餘計行はれて、下の方の階級には餘り行はれていないのであります」。慈善事業もまた、優秀種族の保存には妨害的に作用することがある。「慈善事業が段々と殖えて來ると云ふと、養老院が出來、孤兒院見たやうなものが出て來る。而て劣等階級の子供の死亡率が減ずる。さう云ふやうな事情が働いて文明國に於ては文明的の價値を有つて居ることの少い者の子孫が益々増加して來るやうな傾きがある、之に比べると優良なる者の子孫の増加を助ける事情が少い」。劣等種族の人口は増えやすく、優秀種族の人口は減少しやすいのである。「或國民に於て平均の蕃殖力以上の蕃殖力を有つて居る種族が相互の間に於て結婚をすると其子孫は益増殖して數代の間に其國民の大部分は此種族の子孫より成立つ事となり、他の蕃殖力の少い種族は漸次壓倒される事になり、而て極く短い世代の間に殆ど全國民が蕃殖力の最も強い種族

の有に歸して仕舞ふのである…今若し文明的價値の優良なる種族の者が、中等或は劣等の種族より蕃殖力が少いと云ふ事であると、人口繼續の上から見て優等階級は劣等階級より不斷補充されねばならぬ事になる。即ち優等なる者の後繼者は劣等の方に自然に引落さるゝ事になるので、さう云ふ事が代々繼げば遂に卓絶の人が消失して平凡の人のみ多くなり、世の中の指導者が減ずる事になります。…優良の分子を段々増加する道を研究しなければならぬのである。さう云ふ道を研究する學問を優良種學と云ふので、…フランシスガルトンが初めて用ひたのであります…原語の意義は兎に角優良なる種族の有って居る特徴を段々向上せしめ、且此良性質を出来る丈發達せしめる全ての影響を研究する學問を優良種學と云ふのであります」。

阿部文夫(1912, 心理研究 第一卷)は、「結婚と遺傳」について論じ、人種や優生学に言及している。「…遺傳しない方の性質と申しますと、顔の色とか『キメ』は勿論遺傳性の分子もありますが、或度迄は化粧液等で改良することが出来る様であります。併し黒人が如何に美顔水を用ひましても黄色人乃至白人の様になるか如何かといふことは實驗を経なければ斷言は出来ません」。遺傳は、個々人に作用するとはいへ、総体としては種族全体に働き、効果を發揮するという。「今日の各國民或は種族といふものは幾つかの純系の雜婚であります。然も祖先が持つて居った所の單位性質は全體から見ますといふと保存されて居ります。…然らば今日の各個體は皆祖先以來の凡べての要素をもつて居るといふ考は間違であつて、比較的少數の性質だけをもつて居るのであります。蓋し種族全體としては祖先傳來の要素を悉くもつて居るのでありませう」。遺傳という観点から結婚の重要性を説く。「結婚といふ事は甚だ重大な事件でありまして、結婚の如何によつて性質の組合はせが異つてまゐります。今日文明國の男女は誰でも結婚といふ事には重大なる意味を持たして、其配偶者の撰擇を嚴密にして居るのは誠に尤もな次第であります。…矢張生物學の見方が結婚の主要なる點であらうと思ひます。…文明人は文明人らしき結婚をすべきものであつて、今日の遺傳學の智識を活用して配偶者を撰ぶのが至當でありませう。…吾々に甚だ都合の悪い、寧ろ有害なる精神身體上の異常の要素が散布して居るのであります。是等の單位性質は…組合せによつてなくなることもありますけれども、夫婦が各々の生殖細胞を吟味した上で良い方丈を受精せしめるといふことは出来ませんから、結婚をする前に、最も冷靜なる態度を以て科學的考察をすることは文明人の義務でありませう、吾々は徹頭徹尾生物でありますから、生物學の法則に支配されて居ることは當然であります。吾々は吾々に特別なる意志の自由權を振りまはして、深く廣く配偶者を撰擇するのが文明人の特權であります」。こうして、人種改良の考が出てくるといふ。斯様な點からして人種改良といふ事が出来ます。茲に人種改良と申しますのは、遺傳學の智識を人間自らが應用する所のものであります。其第一歩は結婚の改良であります。茲に人種改良といふのは曾って日本に唱へられました西洋人との雜婚といふ意味ではありません。最も適切に、申せば『人だね』改良と唱ふべきであります」。結論として、「一體人間社會は常變であつて、法律とか道德律とかいふ様なものは常に動いて靜止しないのであります。單位性質を現はす要素は不變であります。…故に其不變の要素を最も良く社會に適應せしめるには、結婚によりて鹽梅しなければならぬと思ひます」。

速水滉(1914)は、ケンブリッジ大学のエザムの「社會と遺傳」(1912)を要約し、「社會の改善と遺傳」と題して紹介している(心理研究, 第二十六號第五卷)。「種族改良學の研究は、

フランシス、ガルトンが倫敦大學にその研究學會を作り、特別な雑誌を發行してより以來、日猶淺きに係わらず、ピーヤソン其他の學者の研究によつて追々盛になつて來て、今日では、漸やく、單に理論の問題たるに止まらずして、將さに實行の問題とならんとする勢を示しつつあるのであるから、社會の改善に留意するひとは、到底是を等閑に附することは出来ぬ。「種族改良」による社會の改良が示唆されている。「從來社會の改良と云ふ事は専ら生活の條件を改良し、人間の境遇を善良にすることにのみ注意されて居たが、それだけでは人種の先天的性質を改良することが出来ぬ。のみならず、漸次に生活を支ふるに必要な個人の努力の程度を低めると云ふ危険も伴つて來る。そこでどうしても、遺傳の影響を利用して、自然淘汰による改善を企圖せねばならぬ」。ロンプロゾーの犯罪學も同様に遺傳の重要性を指摘する説として紹介されている。「種々の犯罪者を精密に研究した結果、彼等は、顔面の容貌や、頭蓋の恰好や、神經の状態に一種特異の徴候を有つて居る、餘程原始的の野蠻人に類似した特徴があると云つて、先天的犯罪者の存在を認めて居る。…遺傳は犯罪傾向の重なる有機的原因である。則ち、一方には、兩親が犯罪者であるために來る直接の遺傳、他方には、間接の遺傳で、種族的に退化した家族から來る」。

エザムは、社會を改善するためには、下層貧民の「繁殖制限」が必要であると説く。「慈善の方法が宜しきを得ず、貧民保護方法を誤り、放埒無賴の徒、浮浪人、無職業者の生活を餘りに容易ならしめ、しかも同時に彼等子孫の繁殖を制限する方法を少しも講じないと云ふ事になれば、吾々は徒に、懶惰、無能の徒、無職業者のために澤山の金を支出することになつて、能く働き能く勉むるものに却つて、多く課税することになる。是は、勤勞、有能、勉勵に關して境遇の調節が宜しきを得たものと云ふことが出来ぬ。單に社會の改良を個人の直接の快樂と云ふ方面のみより考へて、將來の世代に於ける徐々にして回復すべからざる影響を等閑に附するは、特に民主政治の大なる危険である」。かくして結論に至る。

「偉大な事業は強大な人格を持つて居る個人、及び強大な人種的人格を持つて居る人種によつて成し遂げらるゝものである。而して國民其の者の中に於いては顯著な特性を持つて居る少數の優秀なものに依つて、最良の事業が成遂げらるゝものである。然るに、現在に於ける出産率の割合を見ると、精神薄弱や、發狂者の如き、個人的人格を缺いて居るもの、社會若くは、無職業者、浮浪人の如き、何等理想がないか、例ひあつても是を現はす方法のないものゝ社會に於いて、出産率が最も高くして勤勉にして才能を有せるものゝ間に出産率が低くなつて居る。是は國民が其の團結と個性とを滅却しつつあるものであつて實に寒心の至りである。「吾々は先づ充分に増殖を圖らねばならぬ。而して後、淘汰を施さねばならぬ。淘汰の作用が若し有爲にして、強健なる家族を排除する様になれば、國民の進歩は到底望むことは出来ぬ。吾々は嚴密な淘汰によりて始めて多數の人間の中から少數の最卓越したる人間を得ることが出来る。吾々は最早運命の手に委ねられたる無意識的の道具で満足することは出来ぬ。吾々は吾々人間の運命を自覺して、自ら進んで創造的進化の神聖なる計畫に參與することを努めねばならぬ」。

下澤瑞世(1915, 心理研究 第七卷)は、「偉人的萌芽」と題して優れた人種を生む必要性と述べている。「生物學者は、色々な優種の優秀性を複合させて、優逸な生物を新たに產生せしむることに力めて居る。卓越な人物を產生するにも、矢張り斯様に優良な諸性質を複合させるが宜しい。ピアソンは思慮的に結婚をなすことに由つて、人種は迅速に改善せられ、斯くて數代を経過すれば、人格は著しく進化すると説くのは決して空言ではない。

…混血といふやうなことも、人種の改良上有効な方法であるが、然し斯様な大まかな考案と方法は、今日では満足することが出来ない。そこで望ましいことは、一步深く突き入って考察し、結婚の如きも兩者の心物的諸性質を仔細に分析考察し、彼此補充し合ふやうな性質を有つものを配合せしめ、又生殖原形質の本質を顕微鏡下に於て科學的に攻究して、兩者の本質を究明し配合の適否を判定するやうな時代の來らんことである。「人間は、系統的に存續して居る色々な特別の性質は、種々なる複雑の度と、結合の色々な仕方にて、複合して發生し生長したものである。で其の系統に於て優逸な諸性質の流れて居る系統には、優秀な結合は生じ易い譯である。人間の性格は…出生以前からの遠い遠い歴史の凝結であるのである。社會には、兎角優秀人物の生産することの多い、偉人系とも言ふべき家系があるものである。「要するに天才も偉人も、或る特殊の性質の複合の仕方によって生産したもので、漠然と心物的有機體の全體の優秀を意味するものではないことを思はねばならない。夫故に系統に流るゝ優秀な諸性質—單位性質の複合が、其の人に至って成熟大成して一代を動かす氣魂のある偉人天才の出来る場合もあるし、二三性質の珍妙な偶然の複合—組合せによって産出した偉人天才もある。…結果は原因に依って生じ、原因のない結果は決して存在せぬが、唯、今日ではその深秘は解らないのである」。

山内繁雄(1917, 心理学研究, 第十一卷)は、「人類の遺傳」と題する社会国家のために優生学に則った行動を推奨している。「抑ゝ遺傳と云ふ事は、近來、著書或は雑誌等に頻りに掲載せられて、恰かも新問題の如き觀あるも、實は生物學では、早くから論じ來られたる古き問題である。…遺傳とは如何なるものかといへば、答えは頗る簡単で、親に子が似て居ると云ふ事である」。彼もまたゴルトンを引用している。「ゴルトン氏は遺傳、境遇、發育を三角形の三邊と假定し、人としての成績をその面積に比較して居る。遺傳は既に定まることで自ら變へることの出来ぬものゆゑ、まづ人力を以てこの成績を多からしむるには、境遇と發育をよくする外に途はない。ゴルトン氏は即三角形の二邊丈は人力によりてよく伸ばすことが出来るが、第三邊に當る遺傳をも長く伸ばすことが出来はせぬかと考え、遺傳をよくする企てを人種改良の名の下に試みた最初の人であった」。人種改良の必要性をこう説く。「遺傳質は祖先より受け來たものであるが、多數の生物の品種間には、優良なる遺傳質を有するものあり、又劣悪なる遺傳質を有するものもある。生物の品種を改良して優良なる遺傳質のものとする方法は、淘汰と雜種形成の二方途により實行し來つたので着々效を奏して居る。この劣悪なるものを淘汰し去ることと、優良なる品種同士の雜種形成とは生物には無理なく實行される事であるが、人類には容易に行はれないのである。彼米國に在りては、之が消極的に、犯罪者、泥酔等を隔離し、且痼疾の病者には結婚が許されない。亦一方積極的に優良なる人士には結婚を奨励しつゝあるが、こは頗る單純の如くにして、實は非常に困難な事柄である」。有史以來人類はさほど進歩してはいないのではないかと、疑問を投げかけている。「而して今日は、境遇及び發育は勝つて居るが、遺傳質は格別の進化はなからう。而して實驗上、生物に於て行はるゝ事情は人類にも皆行はれて居ると云ふ事は注意に値するのであるから亦人類の繁榮を欲するには、不良種を除外し、善良の種子を傳播すると云ふ事が必要條件となるのである。且つ其の親子間に於ける遺傳の如く、又社會的に社會より社會に讓る遺傳もあるべければ、是又念頭に置いて、社會國家の爲めに考へねばならぬ」。

既述の**高田他家雄**(1917, 心理学研究 第十一卷)は、「本邦青年女子の死亡」率の高さは「結

核」に大きな原因であり、結核に罹患しやすい人には「結核遺傳」、結核になる素質があると指摘する。「遺傳の影響を少なくすることは、人種改良學的方法に據らなければならぬことで、之を實行することは甚だ困難である。體質不良にして結核遺傳を有するものは、多少結婚年齢を延ばし、成るべく二十五歳以上に於いて結婚するにすれば、或程度までは此の目的が達せられるかと思ふのである。何となれば、二十五歳以上に至れば、身體も完全に發育し、結核死亡の危険ありや否やも多少判断することが出来るし、又それより生るゝ小兒の數も少なくなるからである」。厳密な意味での遺傳ではないと断っているが、人種改良にまで言及している。

齋藤茂三郎(1917, 心理研究 第十一卷)は、「精神的特徴(發作)の遺傳」について優生学の視点から解説している。「遺傳は人類に於ては昔から認められてきた事實でありまして、小供が兩親及び祖先と或類似を保つのは普通のこととして、誰も恠むものは無った」。「然し親や祖先の或特徴が如何様にして、又如何なる程度に子孫に遺傳するかについては、確かなる理由を以て之を説明することが出来なかつた…人類の特徴の遺傳觀がこの様な幼稚の状態に長く止まってゐた間に、遺傳の説明が見事に解決されるやうになりました。…始めて生物遺傳の事實を證明したのは…メンデルであります。…然しメンデルをして植物遺傳の研究を思ひ立たせたものは、…ダーウィンの『種の起源』であります。…氏の研究の結果は世にメンデルの遺傳法則と名くるものであって、この法則が闡明された爲めに生物の觀念が根本的に一變したことは、恰もダーウィンの進化論が出て、以前の生物の觀念に一大轉機を與へたのと同じであります。實に進化論とメンデル遺傳法則とは過去六十餘年間に出て、生物學に大影響をした二大思想であります」。ダーウィンの影響もさることながら、メンデルの遺傳に関する考えが人間の見方をも大きく変革したことがわかる。「メンデルが人間以外の生物に確實に行はれてゐることは最早疑ふの餘地はありません。…人類にも亦斯の如き遺傳の事實が行はるゝやといふに、…今日の研究進歩の程度では未だ断然然りと言ひ切る事の出来ない事情の下にあります」。人間の遺傳にメンデルの法則を適用できるか否かを明らかにすることが一つの研究目標であるといひ、「それには各家族の歴史を調査し、材料を蒐集する必要があります…讀者諸君がこの方法を應用して、自個の一家一族の成るべく精しき家系圖を作つて、或特徴の遺傳する有様を研究されたならば、…子女の教養、職業の選擇等實際の役にも大いに益あることと思ふのであります」。こうした家系研究による作業は、「優性保護」資する重要な仕事であると主張する。「斯く人類特徴の遺傳に就いて、その間に行はるるメンデル法則を發見するのは種族改善の爲めには勿論、教育、犯罪、病氣の治療及び豫防、縁組等社會の各方面に關係ある重大の事業であります」。そして、「家族の歴史を多數調べてみると」、本論文の主題である感情の「發作」が「遺傳する法則を發見する」のだと述べている。

三田谷啓(1917, 心理研究 第六十四號 第十一卷)は、日本民族を改善するには「異常兒童」に対する特殊教育が必要であると主張した。「貧富貴賤を論ぜず又幼若男女を問はず國家の上下を一貫して居るところの重要問題は、恐らく日本民族の改善と云ふことであらう。言ひ換へて見ると日本國民が如何にしてより強くなり、より賢くなり、より道徳的となるかの問題である。一言にして約めると如何にして國民の身體と精神とが改善されるかと言ふことになる」。特殊教育とは「主として精神薄弱兒教育を指し、精神薄弱兒と國家の關係について次のように論ずる。「國民の中に居る異常者の數が多ければ多いだけ國家の

損失である。異常兒童殊に今論ずるところの精神薄弱者が多く居る場合には却て他人に手数をかけることになるのである。即ち精神薄弱者自己は國家の爲めにこの出來ぬのみならず普通の人の勞力を殺ぐことになるのである。若し人間の精神能力を學校の成績表の如く點數をつけ得るものとすれば國民の總點數を國民の頭數で割ったものが平均の點となるのである。假令滿點のものがあるても零に近いものがあれば平均點は餘程滿點より離れて低いものとならねばならぬのである。之が精神的方面の損害である。「何は兎もあれ、精神薄弱兒教育機關は國家が興すべき筈のものである。東京の如き大都會にありて此等の教育機關の絶無なるはあまりに當局の無謀も甚しいものと謂はねばならぬ」。國の改善には民族衛生が大切だと説く。「この場合に問題となるのは第一教育である。教育には二大方面がある。一、生前教育、二、生後教育。生前教育は即ち遺傳の方面で、俗に言ふ氏であり、生後教育は育ちと言う方である。…『氏より育ちは』は宜しく『氏と育ちと』と改めるのが學術上正しい者と思う。右の如き理由よりして精神薄弱者の子供に優秀なるものが出來やうとは思へない。此意味から言えば精神薄弱者は子孫を得ぬやうな工夫にする方が都合がよいのである。…結婚をしても子孫を得ぬやうな工夫にしたら民族衛生上大に好都合と思うのである。…民族衛生の知識が大に進んでくれれば氏即ち遺傳と言ふことに世人が注目するやうになって結婚に方りても大に相手の體質に重きを置くやうになると思ふのである」。

齋藤茂三郎(1919, 心理研究 第十六卷)は、「社會改良と優性學」の紹介を行っている。「斯くの如く、人の性質が遺傳因子の結合如何に依って、種々變つた形を取って發現するといふことは、二十世紀の初頭に於ける最も驚歎すべき學術上の発見であつて、これ程各方面に亘って廣汎の關係を有つてゐるものはないやうに思われる。就中その最も大なる影響の一つは、遺傳の法則を利用して、人の心身を改善せんとする運動—初めてこゝに着眼したゴルトンの言を以て言へば、優性運動(ユーゼニックス・ムヴメント)である。予は先に『遺傳と人性』を心理學研究會から出版して、此種の思想の大略を述べたが、今こゝに紹介せんと思ひ立つた」。齋藤は、優性學を有効にするためには、經濟組織の改良をすることが必要だと説く。「ウォーレスは、…人種改善が經濟的に婦人を獨立させることに依つて成就されるといふ希望を述べている。婦人が移植の爲に結婚する必要が無くなれば、その子供の父として優秀の男子を選ぶやうになるといふ意見である。人種改良の手段として、結婚淘汰が大なる役目を有つてゐるのは疑ひない。然し經濟組織の改造より結婚を考へるのは、只一面の觀察であつて、劣悪者に結婚する者多く、優秀なる婦人に獨身者多きを考へれば、結婚淘汰もウォーレスの信ずる如く、大なる頼みにはならない。「劣悪者」の結婚を少なくし、「優秀なる婦人」の結婚を多くする方策を講じなければならないのだ。「人種の改良が現に大多數の人々を壓迫してゐる經濟組織を改良することゝ親密の關係を有つてゐるのは明らかである。階級で固つて動きの取れない社會は、若しその内に無智で貧乏なるプロレタリアートが含まれてゐれば、恐らく何等の進歩もなさぬであらう。若し是等の沈淪せる階級に、一層教育の便利を多くし、生活標準を高めてやれば、彼等の無分別なる爲に高くなつてゐる生産率は恐らく却つて減少するを見るであらう。…優性學的理想が現代の社會に於けるよりも一層有効に行はれん爲には是非とも經濟狀態の改良を必要とするのである。富の分配が一層よく平均すれば、各階級に於ける生産率の不同を無くすやうになるであらう。次いで、一般教育の標準を高くし、社會的に價値ある性質を次代

に傳へることを以て、人々がその義務と考えるやうになれば、社會は自から轉回して、叡智敏感なる人に比較的高き生産力が賦與さるゝのを見るやうになるであらう。若し社會組織の改良によりて、優秀の性質を有つ人が高き生産力の所有者であるやうに、兩者の間に相關係を成立させることが出来れば、人類は再び種族發展の域に向つて進むやうになるであらう」。富の均等な分配と教育の普及が、優良な種族を生み出す最良の方策だと主張している。

匿名で「雜報」(1925, 心理研究 第廿八卷)に、「日本人の體格と遺傳」と題して「遺傳學會の權威」ゴールドシュミットの講演内容(科学知識普及會主催)が紹介されている。「過去二十年間の統計に依つて見ると、日本人の體格は著しく増大したが、白人に比べれば依然として小さい。…人間の身長はメンデルの法則に依れば遺傳因子の調節に依つて變化させることが出来る。則ち増大因子の數が多ければそれだけ身長が大きくなるわけで、この點は植物と同一には考へられない、所が人種の遺傳因子は何千萬年の時代を経て非常に複雑なものになつてゐるが、選擇淘汰に依つて小さい人間の子孫を出来るだけ残さない様にすれば人口全體として體格の増大は望み得るわけである。尚身長に限らず性格の方面にも同じ法則があてはまるのでそれによつて人間の悪い性質を除くことは社會全體から見ても重要なことである。故に各人が遺傳に關する知識を有してゐて、性格及體格の改良に努めることが肝要である」。

2. 優性學に批判的な研究 杉井富貴子(1914, 心理研究 大六卷)は、アルフレッド、ワラスの「社會的環境と道徳的進歩」を翻訳し紹介している。まず、道徳とは、正しい行為、すなわち我々と直接交渉のある社會に対してのみならず、同胞全体、人類全体に対する正しい行為を指すという。さらに道徳は、品性に基づくものであり、この品性は、人格的、國民的個性を構成する精神能力と、情緒との連合である。我々の子々孫々に遺傳するのはこの生得的の不変の品性である。品性が不変のものであるとすれば、品性の向上を促すためには適当な自然淘汰能因がなければならないという。論を展開する中で、ワラスは進化論の視点を重視しているが、遺傳性の強い高等な知的、道徳的能力といへども累積的に進化するわけではないと主張する。人間の品性はその情緒的方面と道徳的方面とを問はず、如何なる種族においても、國においても同一であるという。ただし知的方面においては趣を異にする。「人種改良論又は結婚に據る人種改良」と題して人種改良についても触れている。「自然淘汰が人類に對して其の威力を収めた結果、人類には心身共に改革が起こつた。以上の事實に基づき一つの新しい學問を創めた人は、サー、エフ、ガルトンである。現今人口に膾炙した『人種改良學』と云ふのが即ち夫れである。氏の主張に基づいて一つの會が組織された。即ち、是に依つて人類の墮落を防ぎ、且其の工場を計らうと云ふのである、…心身共に強壯な且道徳上堅固な男女を試験の上制定して、是に賞金を與へて結婚させるといふに過ぎない。…目的とする處が金錢上の報酬にあるのであるから、斯くの如き結婚は、その性質に於て不道徳である。而して其の結果が人種の改良などとは、思ひもよらぬことである。併し世にはガルトン氏の方法に似て大いに非なる方法を弄して、斯くの如き技巧的の淘汰を行ふ危険な人物がある。…精神の薄弱なるものを分離しやうとする案と、不適當者及び或種の犯罪人に子孫を残させまいとする案とが、同時に提出されてゐる。斯くの如き案が現れると、次には、不具の嬰兒絶滅案とでも稱すべきものが提出されることになる、現に、グラント

アレンは該案を提出した。優生学的な結婚対策を強烈に批判している。「人生の最大事とする神聖なる結婚問題を、罪悪と腐敗の極に達した現代の社會状態を無視した強制的な法律で制定しやうと云ふのは、僭越とも不合理とも申やうやうがない。個體保存の上にも種族保存の上にも、共に缺くべからざる兩性の關係を立法で定めることが今の世にどうして出来よう」。結婚における自由選択を説く。「…總の婦人は、結婚の申込を受ける、是に於て、有力なる淘汰能因は、婦人の手に握られることになる、この淘汰が教育及び輿論の制度の下に如何に實現されるかは茲に事々しく申すまでもない。即ち、怠惰者や我儘者は、一般に擯斥されるに違ひない。又、精神病の傾向のある人や先天的不具者も同様に、年若き婦人の弾劾を蒙るに定つてゐる。何故なれば、斯くの如き疾病や、不具を後世に残す媒介者となることは社會に對する罪惡であると考へるからである」。「婦人は元來不正な愚鈍な又薄弱な男子を始めとして、就中不具者や疾病者を歡ばぬ者であると云ふ裏面の眞理をも藏してゐるのである。夫れにも拘らず、現代の婦人中に斯くの如き劣等の男子と結婚する者が時々あると云ふのは、婦人自らの責ではなくて、婦人を強ひる現代社會の罪である。…婦人が經濟的に社會的に選擇の自由を得た暁には、多數の劣等男子は、あらゆる階級を通じて一般に擯斥せられるに至るのである。…好ましからぬ者を除去する改良法は、比較的優れた者を抜いて早婚せしめる方法より數段立ち優つて居る。何故なれば、我々の切に要求する點は、少數の優れた型式のものを向上せしめるよりは、寧ろ劣等な型式のものを削除して全人口の平均數を改良するにあるからである。偉人及び善人は常に多數産出される、且つ現に各程度の文明に於て夥多數現れてゐる。目下の急務は、斯くの如き偉人及び善人の數を増すよりも、劣等者の除去に努めなければならない。除去的過程が自然淘汰の方法であつた…適者の生存とは、言を換へて云へば、實に不適者の消滅の謂に外ならぬのである。現代の慘忍な破滅的な社會制度を改良するに當り、婦人に結婚を選擇する自由を與へて、種族の力と美と形態とを改良せしめると云ふことは、人類の將來に點する希望の光明であります」。社會的救済は、貧困者の結婚を可能にし、早婚を多くする所が難点だといふ。「社會改良上の緒計劃の中でも就中、貧窮と飢餓に對する憂懼とを除かうとする計劃に取つて最も困ることの一つは、計劃が圖に當つて救済の實が擧るに従ひ、早婚の數が多くなることである」。人類の進歩に冠する二つの原則があるといふ。「第一には、現代の社會的害惡と稱すべき種族的墮落と性的不道德の種々なる形式とを直接に扱ふ必要に關する現代人の觀念は、根本的に誤つてゐる。而して其の罪惡の根本的原因たる貧・窮乏及び飢餓を一掃しない限り、此の觀念は、何時までも失敗に終るのである。元來人の性質は現今の種改良學者が考へて居るやうなそんな不成功なものではない。人生は合理的に正しい均等なる經濟状態の下には、あらゆる罪惡を自働的に排除する根本法則に依つて影響されるのである。第二に、貧を除いた結果として起こる人口の過剰は、全然杞憂に過ぎない。即ち是は自然の法則と、人為的原因を其儘にして措いて社會的罪惡を作ることの出來ると云ふ假定とを知らない為に起こる取越苦勞である」。

齋藤茂三郎(1915, 心理研究 第八卷)は、「遺傳と境遇」について述べ、過度の優生学的主張を批判している。「今日の如く子供の貴重な地位が一般に認められたことは曾つてなく、兒童保護に關する諸種の問題は教育者行政官其の他一般職業者の念頭を離れぬ問題となつた」。同性及び同年の個人が知識、性格、及び技能において大きな差異があるといふ。「而してこの相違は大部分當人の生れ乍らの性質に原因する。勿論一部は明らかに境遇及

び練習等の相違に原因するが、然し精密の研究によれば、個人的相違が境遇に原因するは僅に小部分であることが證明された。…人は生まるゝ以前、生殖細胞の構造によつて優劣を決定され、生まれ乍らにして性質を異にする。即ち人は同等の惡しき境遇に在りて進歩の遅々たるにも、或は同等の善き境遇に在りて大進歩を遂ぐるにも、決して萬人同一でない。進歩の絶対價値即ち零より進む所の高は一般に境遇の善惡に關係する。然しその比較的價値即ち他人に對する一個人の進歩の高は生れ乍らの能力の相違に原因する。否是れに止まらず、人の生得的性質は却つて境遇の撰擇をなす力を有つてゐる」。「人類の性質を決定するに、遺傳が至大の關係を保つは、遺傳研究の進むに従ひ益々確實の度を加へる。以前一世を風靡した境遇至上論と引換へ、今日にては萬事遺傳を以て解釋せんとする傾向を馴致した。遺傳至上論は益々勃興せんとする。遺傳至上論者は完全の境遇に在りて、猶ほ遺傳の原理の應用に依つて人の性質の一層の大改善をなし得ると主張する。論者は主に優良種族學者で、斯界の先覺者ゴルトン自身、その有名なる『遺傳的天才』及び『自然的遺傳』に於いて、遺傳の影響を力説し、天才は不可抗力的に輩出し、惡境遇に依つて之抑壓し得ぬと斷言した。自然淘汰について語る。「抑も慈善及び救済の必要は自然淘汰に反對して弱者を救済せんとして起こつたのである。それは人類社會に自然淘汰が殆ど行はれぬほど薄弱となつた許りか、搦て加へて無常の自然淘汰を座視し得ぬほど社會が敏感となつた為めである」。かくして次の結論に至る。「遺傳を以て境遇の上になりにする、近時流行の代表的思想である。然しこの思想が彼等の主張する如く萬全有効なりやは反對者ならざる者も直に首肯し兼ねる所であろう。兎に角現今研究程度に在りては、その論點の決定を將來に保留するの賢明の處置たるを信ずる者である。…子供が身體的、精神的並に道徳的に發育する方法を決定するものは獨り境遇許り、若しくは血統計りでなく、境遇と血統、換言すれば周圍の狀況と生殖原形質の性質に由るのである」。

海野幸徳(1919, 心理研究 第十五卷)は、「優生學の界限に就いて」を書き、優生學万能論に異を唱へている。「私が明治四十三年に初めて種改良問題を取り上げました時には、未だ何人も深く優生學的意義につき思考をめぐらして居なかつたやうでありまして、無論この方面の組織的研究や著書といふものもなかつたやうであります。…私はだんゞ優生學には限界があるといふこと、それは甚だ不十分な學科であるといふと、其の概念が不明でづれて行くと學そのものが亡滅に瀕する」と。「一般的優生學といふやうなものはフィクチオンでありまして、日本國民の優生學米國民の優生といふやうなものゝみが成立するのであります。吾々の時代は種時代若しくは國家時代でありませうから、種と國家とは各々相分れるといふ見地から改良も施されるのでありまして、甲の種若しくは國民を改良する方法必ずしも乙の種若しくは國民を改良する所以にあらず、甲の時代の改良法必ずしも乙の時代の改良法とならないといふことになるのであります」。改良の對象が不明確だといふ。「人類になりますと、單純直截にはまゐらず、何が改良の對象であるかといふことは容易に斷定することのできるものではありません。…タイ人類の場合では改良對象を決めますには、差當『生存』といふ概念を明定する必要がありまして、これがきまらなると、自然改良の對象も決まらん譯であります。さて生存といふ概念とは申す非常に複雑な概念でありまして、生物學の見解より食み出してゐ、到底優性學など申す非人類的な非文化的な學科の捕捉しうるところではありません」。優生學では狭すぎるという。「人類の生存を攻究するといふことは確かに一の獨立なる學問の體系でありまして、生存は生

物學を超越し、總ての學科の綜合を仰ぎ、そこに花を開くべき雄大なる體系であります。即ち人類の生存に關する凡ゆる見解は綜合して一の體系を形作り、この體系がやがて人類を改良しその生存を規定することになるのであります。…人類の改良といふことは優生學以外の學科の企圖するところといふ結論に達するのであります。優生學それ自から人類改良若くは人種改良といふ役割りより引き下ろされ、自然亡滅といふ姿になり、應用遺傳學といったやうな純生物學的のものとして殘留するといふことになりませう。かくして、次の結論に至る。「社會と申ものは、なかゝ複雑なものでありますから、單にかくゝのことが望ましいなどゝ申すだけの見地よりは社會は一切料理することができないのであります。優等階級の増減といふ問題に對して、吾々は單に生物學的にかくゝなれば優種がへる、かくゝすれば劣種が増すといふやうな單純な筆法では、いつでも失敗に了る外ないといふことを覺ります。それで吾々は眼界廣げて、もっと廣汎なもっと深奥な見解から如何にせば民族劣生化の問題が解決せられるかといふことを攻究しなければなりません。…優生學を超えて彼岸遙かに一新境地を開拓する機運既に熟すと窺かに感じさせられてゐるのであります」。心理研究

佐久間ふき子(1923, 第廿三卷)は、1921年にニューヨークで開催された國際優生學大会でマクシミアン・グロスマンが行った講演を「優生學の限界」と題して紹介している。「優生學といへば、遺傳の因子とか、人類の能率の評價といふやうな事をも含めた學問であるが、現在その學說の根柢をなすものといへば、ヴァイズマンの胚種質説及び後天形質は遺傳しないといふ説と、遺傳に關するメンデルと、心理學の實驗室で行はれる臨床的研究と査定の方法の三に外ならない。「ヴァイズマン説の假定する處は(一)異なつた性の二つの個體の結合によって新しい生命を生ずる胚種質は遺傳され、そしていつまでも變化しない。但し種の結合が新しい混合物を造り出すことはある。(二)種の改善はかうした結合に要する望ましい種を保存し結合させさへすればいゝ。(三)親個々の生活といふものは子孫に何等の影響を及ぼさない。「胎兒は熱・電氣・化學的變化といふ様な、環境に起る變化に對して敏感であるから、誕生前の影響といふものを、ヴァイズマン派の人々が認める以上に重く見る必要がある。「遺傳の要素の表に記録された始末に了へぬ除外例を全然看過することが出来ないのである。人類の遺傳的特性を明示するやうに作り上げられた家族表なるものは、結論的のものだとも、横槍の入れやうもない正鵠を得たものだとも、總べての點で完備したものだとも思はれない、といふのが掛値のない處だらうと思ふ。その家族表に就いて調べた結果から見ても、缺陷のある血統といふことに見做された血統から正常のものに復歸するといふことが、事實として認められた。「メンデル派の學說は、その適用において整理的關係の運用に基づいてゐるので、寧ろ機械的であることも認めなくてはならない。「心理學的査定即ちいはゆる精神検査にも同様の限界がある。心的作業や職業上の適不適や學問上の天稟の相違を決する上にこの査定が貢獻したことは非常である。が、少し高唱され過ぎたかの感がないでもない。今や心理學的査定は、まぎれもなく一種の流行病となつてゐる。「普通一般に行はれてゐる査定は、すべてピネー＝シモンの方法に基づいてゐる所謂精神年齢なるものを造出するのである。この査定が失敗に了るのは、普通その適用の範圍が自我の奥深く隠れた部分に透入しようとしたり、潜在意識や暗示の現象や催眠状態の働を明かにしようとしたり、人間の行為の所謂形而上學を計量しようとしたりするからだ」。その『ごまかし』的の結果が遺傳の學說と結び付く時、輕

視されない新勢力となつて来る。「劣悪種と極印をつけられた莫大に多數な者を、いはゆる『優良種』を育成して以て次第に除き去るといふ手段に頼らなくてはならないのか。その一方に劣悪性の遺傳を荷った個人をその能力の限界内に押込めておいて、その獲得した能力をその子供たち又は子供の子供たちに傳へることもなくして満足しなくてはならないのか。われゝゝは單に機會を承け傳へ得るだけであるのか。代を逐つてその習熟能力を増すこともなく各個の新生の個人について皆最初から繰返ゝゝ始めなければならないのか。若しさういふことであつて、若し感化救済とか、社會的及び教育的改革が痴人の夢であつたならば、現在の世の中は何とも改善の仕方もない。さういふ結論になるわけである。「優生學の注意深い研究者が蒐集する大きなすばらしい事實の背後には、恐らくまだ底を測り知り得ない隠れた眞理がある。物事は、とかくわれゝゝの考でかうだと極めた通りでなく、實際は頗る異なつたものであることが往々あるものだ。あまり先ばしらずに判斷を控へ目にしておくことが必要である。われゝゝが安全に人間の人格の秘義を解決することの出来るやうな數學的公式は、まだ恐らくは發見されてゐないのである」。

4) 日本人の知的能力と遺傳・環境・教育に關する研究

精神的能力の測定に關する研究は、幅広くおこなわれ、職業の適性を診断する検査としての應用も試みられてゐる。

1. 優生學的知能研究 木村久一(1913, 心理學研究第十一卷)は、連載「英才教育論」で、ゴールトンを引きながらも、能力の發達に果たす諸要因の役割を考へる時、遺傳要因のみを重視することに反論している。「英吉利のフランシス・ゴールトンは、人種改良學を創始した。而してこの學は、今や我國に於いても盛んに唱へられて居る。謂はゆる一世を風靡して居ると云ふ盛況である。而して我々は、人種改良學者から次の如き話をしばゝ聞かされる」。木村は、優秀な家系研究の例としてアメリカ・コネチカット州のジョナサン・エドワーズの例を、劣等な家系の例としてニューヨークのマス・ジュークをあげている。これは遺傳の大切さを示す例である。それに対して、ニューヨークの兒童救護會が行つてゐる慈善事業の成果を遺傳論に對する反証としてゐる。「劣等」な親の元で生まれた子どもが、里子として育てられることでその後の「成績」が極めて良くなったのである。「予は決して人種改良學の主張に反對せんとする者でない。予も遺傳の大切なることは十分認める。併し人種改良のみを萬能視して、人の運命は遺傳即ち天賦の如何に由つてのみ定まると考へ、教育の價値を多く認めざるが如きは、予の取らざるところである。以上の例を見ても分かる通り、人種改良學者から見れば、全く望みのんじ代物でも、よく教育すればかくの如く立派な人になる。即ち教育と云ふものは、多くの人が思つて居るよりも、遙かに、恐らく十倍も二十倍も効果のあるものである」。さらにゴールトンを批判している。「アテネには餘り人口がなかつたにも拘わらず、驚くべく多くの天才が居つた。ゴールトンはこれを見て、これはアテネ人が、優秀な人種であつた為だと考へた。彼は云つた、アテネ人は人種として、吾々が阿非利加土人に優つて居るぐらゐ吾々に優つて居つたと。彼は遺憾ながら、天才の問題を、天賦と云ふ立場からきり見ることが出来なかつた。彼も多くの人の如く、教育の價値を十分に認めて居なかつた。アテネに天才が多かつたのは、アテネ人が優秀な人種であつた為もあらう、併し更に大なる原因は、彼等の教育が習慣として早教育であつたことである。然るにゴールトンは、この事實に気づかなかつた。故に彼の天才觀は不十分ならざるを得ない。ゴールトンは、謂はゆる『遺傳的天才』の例を蒐集して、

天才の遺傳的なることを立證せんとした。併し吾々は、彼が蒐集した例よりも多くの天才の遺傳的ならざる例を蒐集することが出来る。…教育の價値を十分認めなかつた彼の、到底解する能はざるところである」。かくして次の結論に至る。「天才の發生には、天賦は大切に違ひないが、人種改良學者が考へるほど大切なものでない。大切なのは寧ろ環境と教育である。…人の天賦には勿論差がある。併しそれを一から百までとすれば、多くの人の天賦は五十前後である。中ぐらゐが大部分」である。それ故に、天賦はあまりあてにならず、早教育の必要が生じる。「人種改良は、教育と共に人性の二大福音である」という。

木村久一(1917, 心理研究 第十一卷)は、「天才教育の話」を著し、教育の重要性を指摘している。「個人の性格如何は幼時の教育如何に由る。従つて國民の性情如何は子弟の教育如何に由る。東洋人の宿命主義あきらめ主義なる、希臘人の知識主義藝術主義自由主義なる、羅馬人の保守主義武斷主義なる、皆幼時に於ける教育の結果である」。アフリカ人を下等な人種と決めつけた彼のゴールトンを引き合いに出し教育の重要性を強調する。「ゴールトンは嘗て精神力から云へば我等の希臘人に於けるは猶ほ阿弗利加土人の我等に於けるが如しと云つた。我等は希臘人より下等な人種だと云ふ學者は此の外にも澤山ある。併し之は誤である。我等を希臘人以上の人種にするも希臘人以下の人種にするも一に我等の手中にある事である。適當な教育さへ施せば我等を希臘人以上の人種とするは容易なことである。之を以て見れば人類の運命を左右するものは教育である。故に教育の問題は人類の大問題である」。

黒澤良臣(1917, 心理研究 第六十七號第十一卷)は、偉人の脳を検討する中で、日本人の優秀さについて示唆している。「人類と動物、動物間でも、高等なるものと、下等なるものとを比較すれば甚だしく相違がある。一般に下等なる動物ほど脳の外形は簡單で、腦溝の數も少なく、且浅い。人類と猿とを比べても、單に大小の相違ばかりでなく、腦溝の疎密の差に著しいものがある。猿の間ではシムパンジー、ゴリラはマカクスよりは複雑である。人間に於いても精神作用の發達して居る文明國人と、餘り進歩して居らぬ野蠻人とを比較すると、脳の外形に可なり著しい相違がある。第一次腦溝には大體變りはないが、第二次腦溝が餘程少ない。殊に前頭葉及び顳頂葉に於いて此差別が顯著である。個人としての脳の發達、動物間並に人類間の脳の比較等から證明せらるる如く、精神作用の優劣と脳の外形とは關係が存するのである」。さらに、脳の重量から叡智指數を算出することができるという。ズボアの公式と呼ばれ、脳の重量(W)と体重(S)を用いて、 W を S^2 の三乗根($\sqrt[3]{}$)で除すると叡智指數(C)が得られる。 S^2 の三乗根は身体の表面積である。叡智指數は、人類(2.81)、猿(0.76-0.45)、馬(0.44)、犬(0.36)、猫(0.33)の順になる。「人類の脳の平均重量は種族によって差があり、從來の報告を基礎とすると男は日本人のが最も重く、女は支那人の最も重い」。脳の平均重量(g)は、日本人(男=1367, 最大1790-最小1063, 女=1214, 最大1432-961)、支那人(男=1357, 女=1239)、露西亞人(男=1328, 女=1237)、英國人(男=1325, 女=1183)、佛人(男=1323, 女=1210)、ヒンズー(男=1253, 女=1133)の順になるという。「歐洲人は東洋人よりも脳の平均重量は男女共に軽い。尤も其差は僅少である。之を既述のズボアの式に當て嵌めるならば日本人の叡智指數は可なり良くなるわけである。…野蠻人は一般に軽い。ヒンズーの男女共平均百瓦軽く、濠洲土人は更に軽い」。日本人は世界の中でも叡智に優れた人種だ、と黒澤はいいたかったのであろう。

松本亦太郎(1921, 心理研究 第廿卷)は、人間の「智慧の段階」について論じている。「人

間の精神現象を量的に考察するのは學問界に比較的新しく起こつた事で、自然科学の研究法から影響された結果である。…人間の不平等であることを著しく提唱したのは英國のフランス・ゴールトンであった。氏は多數人の身體的及精神的特徴を検査し、又英國の諸方面に於ける拔群人を研究し、夫等の材料に就いて種々の考察をなし人間の材能を約十六段階に區別した」。ゴールトンの人間を等級化したことを紹介している。さらに、何故人間の等級化を必要としたのか、その動機を説明している。「ゴールトンは文明の向上進展には偉人が必要である。拔群人、絶群人が出て民族を鼓舞する事により其民族は發達する、民族が進展するのみならず、民族がその生命を維持する為めにも優越人の出現する事が必要であると考えた」。民族の發展のためには傑出した個人の出現が必須だという。適材適所に人を配置し、能力にあつた処遇をするにも、個々人の優劣を知ることは必要であるという。

「實際に人間を取扱ふ方から云ふと精神の遠心的考察即ち個人差の考察は極めて重要である。人間の共通性を標準として個々人を取扱つては、其取扱方が適切で無い、例へば智能に於いて優等者の者と、劣等のものとを同一學級に纏めて、之に同程度の教育を施すと云ふ様な事をするから適當な効果を擧ぐる事は出来ない」。又都會に於いて人々の激増するに従ひ低能者や、精神薄弱者や、不良者の絶對數は激増するが常則であつて、人間の教育及び使用に於て之を適當に處置する事が著るしく當面の問題になってきた、而して此問題の解釋には正常人と是等の低劣なる人間とを區別するを第一着手とせねばならない。是等社会状況の變動や人口の激増より生ずる實際上の必要が精神の個人的相違の考察を促してやまない」。人の品等を定める手段としてビネーの知能検査が紹介されている。「スタンフォード大學ではビネーの標準を基礎とし之を取捨し擴大して智能の検査標準を定め、而して智能の優劣を『智能率』なる數字を以て示す事にした」。智能率は天才(140以上)、最上智(140-120)、上智(120-110)、平均智(90-110)、下智(90-80)、愚鈍(80-70)、精神薄弱(70-50)、低能(50-20)、白痴(25以下)の9段階に区分した。「尤もビネーが智能測定の標準の考案を發表したのは僅か十五六年前の事であり、又實驗心理學の研究法を個人差の考察に適用し始めたのは比較的新しい事であるから、今日に於いて其等に對しまた餘り多くを望むのは無理であるが、是迄擧げ得たる結果だけでも人間の智慧には層々の段階ある事を或度まで證明したと謂へる、人間の精神を量的に考察する事が愈精確になれば其結論は益人間精神の不平等觀の方に傾いて行くのではあるまいかと考へられる」。

岡部彌太郎(1923, 心理研究 第廿四卷)は、「北米合衆國民の知能」について簡単な紹介を行っている。「眞に國民的な知能の標準はその國民の全人口を基礎として立てられるものである。故に全國民の知能の分配を知るとは種々の觀點から興味のあることであらうが、國民の知能の標準といふことからも大いに興味がある」。陸軍の報告によれば、白人補充兵として本國生れのはメディアン五八・九、同外國生れのは四六・七、黒人補充兵は北部のものが三八・六、南部のものが一二・四であつて、兩者のメディアンが約二〇、これをその人口に従つて六八、一五、一七の重みをつけると合成メディアンは約一五になるものである。「この検査は特に選擇されない一般人に就いて標準を作る場合に大に参考になるものである。即ち我々はこによつて何れは四八の陸軍検査の點數を持つ人々である。この水準附近にある代表的職業は…石工、看護人、…馭者、…飛行機製作工、…調馬師、理髮人、…煉瓦積工、農夫、自動車運轉手、…パン焼人等々である。何人も全人口の代表となる様な標準を得んとするならば、そのテストを行はんとする職業別に氣をつけなければ

ばならないのである」。

テルマン（スタンフォード大學教授）の「推理では米兒童に優る（在米邦人兒童の知能率試験）（1923、心理研究 第廿四卷）」という中外商業新報の記事が転載されている。「米國加州に於ける排日熱は同州の上下院に毎回排日案が提出されないことはない程で、その熱中さ加減は殆ど病的ではないかと疑はれる位であるが、此の解熱劑の一つともなるべき興味ある事實が、而も米人の手に依って發表されたことは、在米邦人は更なり、同胞にとっては至極同慶なことである。…千九百廿八年から卅三年迄に年齢廿一歳に達して、米國の市民權を得られる日本兒童中（現在十歳から十五歳迄のもの）四年間學校教育を受けた五百六十九名に就いて知能検査を行った結果、全兒童の平均知能率は九〇・二で、其中男子平均が九〇・五、女子平均八九・四となつて、之を教育を受けた都會の大小別にするに、桑港、ソスアンゼルス、オークランド市等の兒童は九九・二で、グレスノー、スタクトン、サクラメント等の小都市のものは、八七・六を示し、更にフロリン、サンタクロール等の如き郡部のものは八六・三である。其処で在米歐洲人にして都會に居住する兒童の平均値能率は、北歐のもの一〇〇・三、芬蘭のもの九〇・〇、スロバキヤのもの八五・六、南イタリーのもの七七・五が示され、米人兒童の平均が九七・〇で、此等を比較する時には米國及北歐に對しては稍劣つて居るが、その原因は主として言語にあるらしく、口頭以外の試験は米人兒童と同等であり、推理的の問題に對しては米人兒童同等以上である。而して急速に學習をする檢定には米兒童に優るとも決して劣らないと云ふ成績であつたと云ふ。尚米國軍隊で採用して居るベター検査法に依つて日、米、伊、西、葡等各國の兒童十二歳のもの調査した能率の結果が、日七九・五、葡五二・五といふ成績で、日本が最も優等であつたと發表された」。日本兒童は、欧米の兒童並みに優秀だったのである。

金子準二（1924、心理研究 第廿五卷）は、「精神病醫より觀たる復興問題」と題して、「民族」の復興について書いている。近代において民族が滅亡するのは何故かと問ひかけ、次のように自答している。「思ふに、近代經濟組織の複雑になつたのも一因であらうが、智力の差異あることもその一因であらう。未開人の智能が薄弱なるために社會事情の變遷に對する適應性乏しいが敗滅した主因ではあるまいか。國家の興廢をかく觀ずる以上、精神病醫として智力に重きをおいて復興問題に臨むが當然の態度であつて、衆智をあつめて復興を審議するのに毛頭反對する譯はないが、たゞいかにして衆智をえらぶかを問題とするが精神病醫としての當然の道行と思ふのである」。理想的には、知能検査を実施し「衆智を抜いて復興の局に當らせたいが」、知能検査にはその力が無いという。「今なほいはゆる智能を定むるに多少の効能あるとしても、到底衆智を集めて直ちに復興の事を審議せしむる人選に應用し得る程發達しない未成品で」ある。

三浦藤作（1924、心理研究 第廿五卷）は、「非常時に現れる教育の効果に就て」書いている。「數十時間にして帝都の大半が烏有に歸し、百億以上の富と、十數萬の生靈を失ふといふが如き慘劇を突然目撃した國民が、極度の恐怖心に襲はれ、周章狼狽したことも風聲鶴涙に妄動したつことも、一概に笑ふべきものではない。況んや、暴露された國民性の缺陷の反面には、感激の辭を知らぬほど美しい多くの物語も傳へられて居る。今回の如き非常の事變に現はれた國民性の缺陷のみを見て、直ちに教育の効果に關する悲觀的の言をなすは、餘りに不謹慎極まる」。大震災の凄まじさと、そのときの人々の行動から教訓を引き出している。「從來の教育に於て、全く無視して居たことで、今後の我が國民に必要な教養と

思はれるものが尠くないのを、今回の事變によって知り得たのである。「極度の恐怖に襲はれて居る時には、芒の穂も亦敵兵の如くに見えるのであるが、少し冷靜に考ふれば、今回の如き流言蜚語が全く虚報であることは、容易に看破し得られるであらう。非常時に於いて、冷靜なる思慮を失わぬ訓練、それは教育によつて行ふより外に妙案はない。異人種に對して理解をもつこと、これも亦今後の教育上特に注意を要する問題である。今回の混亂に際し朝鮮人に對する態度を過つたのも我が國民が朝鮮人をよく理解して居なかつたことが、根本の原因である」。朝鮮人に對する暴虐が異人種理解のなさに原因があるとして居る。「朝鮮人に理解のなかつたことを遺憾とする。今回の震災に、我が國民が他の外國人に對する態度は、概して親切であつた。これは一片の外交的辭礼のみでなく、英米人の衷心から告白して居る所である。甚だ喜ばしいことである。異人種に對して、正しい理解をもつことは、今後の我が國民教育上最も重要な問題である。殊に朝鮮の如き、今では我が領土の一部になつて居る。些細の事件から同胞を疑ひ迫害するやうなことは今後絶対にしたくないものである」。教育の影響は大きいと主張する。「自分は明治以後の教育を悲觀的に見る者せあるから、今回の震災に於て、暴露した國民の缺陷が、悉く教育の結果であるとしても、急に明るい世界が暗くなつたやうには驚かない。…明治以後の教育は、二三の外國人が追從的に賞めるほどのものでもなく、知見の乏しい教育者が自負するほどのものでもない」。教育の欠陥を反省することこそ正しい方策であるという。

入谷智定（1925、心理研究 第廿七卷）は「アイヌの精神検査」の中で、「アイヌ兒童の學業成績」と「アイヌ兒童の知能検査結果」について記している。前者については、次のように述べている。「アイヌの精神生活を更に別の方面から調べて觀やうと思つてアイヌ兒童を收容する近文小學校に就て兒童の成績を調べて觀たが大體は内地兒童の成績に比して劣つて居る様である。…アイヌ兒童は和人の兒童に比べると一般に連續的に事物に注意を向けることが困難で、暫く授業に心を向けるかと思ふと直に中心が外に向ふ相である。又規律を守ることが出来悪く、欠席、遅刻が一般に和人の兒童に比して多い相である。…アイヌ兒童の最も成績のいゝのは唱歌で十人中の四人は甲を取つて居る。それでも…十五分の四丈和人に劣つて居る。がアイヌとしては最上の成績である。次に好成績なのは體操で…其他の四科目に於ては内地人に比して一層劣つて居る。殊に算術書方に於て不良の様で八十點以上のものは無い様である」。アイヌは成績が悪く、学年が進むとさらに悪くなるという。和人に比べ知能が低いと結論づけている。「欠席。欠課の多いこと、及び家庭的環境杯の條件がアイヌの成績に悪い影響を與へて居ることであらうが大體から云ふとアイヌの小學校に於ける智能は和人の其よりも低いと觀て差支なからう」。

後者のアイヌの智能に關する記述を見よう。「アイヌの女子三名（満十五歳のもの二名、満十七歳のもの一名）と男子三名（皆満三十一歳）とを被験者に擇んだのである。…和人の被験者は旭川聯隊に勤務せる北海道出身の青年で満二十一歳満二十二歳の歩兵で階級は上等兵一等卒。二等卒混合である。…試験の問題は東京帝國大學心理學教室及び東京市社會局職業紹介所が中心となつて作成されたる性能標準設定検査に用ひたものである」。かくして、以下の結論にいたる。「各人の總得點數を四段階に分けて觀ると、アイヌの成績は最下段に位するのである。換言するとアイヌの知能は和人の知能の最下部級に屬することになる。勿論此の貧弱なる材量の比較から彼此優劣の一般的斷案を下すことは早計であるが、小學兒童成績の比較に於けると同様に大體に於てアイヌの知能は和人の其よりも幾分劣つ

て居ると云ふことは言ひ得らるゝと思ふ」。アイヌが劣る原因を以下のように考察している。「アイヌ知能の劣れる原因には種々あると思はれる。先ず第一に彼等の生活條件が單純で高等なる知的傳統の環境に住んで居ないことも其の一因であらう、又生理的方面殊に酒精の影響杯も其の一因であらうし又内地人に壓迫せられて精神的に萎縮して居るのも其の一因であらう、…又一面人種的精神質が幾分劣って居るのではないかとも思はれる。何故かと云ふとアイヌ人種が和人と接觸して居ることは可なり古いものであり、…若し彼等にして複雑なる文化を模倣吸収して己の生活を向上せしめ、人種を發展せしめる得る元氣と聰明とだにあるなれば今日彼等は今少し高い文化の水準にあるべき筈であるのに今尚原始的状態を脱することの出来ぬと云ふことは取りも直さず這般の消息を物語っている…之を要するにアイヌは温順質朴の人種ではあるが勤勞努力の精神を欠き、向上發展の元氣に乏しく、知的活動は單純で精神的に萎縮して居り、且衛生思想を欠いて居ると云へる」。

著者不明であるが1(925, 心理研究 第廿七卷)、欄外のコラム記事として、欧米の子どもの結果と比較して日本の子どものメンタルテストの結果が、決して劣るものではない事に安堵した、とある。欧米の初等教育の視察を終わって帰国したお茶の水女子高等師範学校附属小学校主事北澤種一氏の話しによるものである。「アメリカ人が國內の各植民地の小學兒童の素質をメンタルテストによって之を試験して、優良な人種劣等な人種と云ふ區別を立て、今後移民を許す許さぬも基礎を作つてゐるが、成績の上では日本の子供が非常に良い成績を示してゐる事に就いて語った。御存じの通りアメリカでは世界大戰に三百萬の國民動員をやつて、初めて世界から一つの國家と認められたが、その動員の苦心の程を察すると、今後入つて来る各國民を、すべて米化せねばならぬので、植民地の學校には米化教師と云ふものが来て、強制的にアメリカ魂を教へ込み、アメリカ人のインターナショナルと云ふことは、他の國とは違ひ、世界中の優良な人種を一國に統一して仕舞ふことが、彼等の理想なので、其の入つて来る素質に就ては常に調べてゐます、其の結果によるとアメリカ人が平均九十七點に對して、ノルウェー、スカンジナビア英獨等は九十四點で日本の子は九十三點であり、伊太利希臘等は七十七點である、私は日本内地の優良な階級の子供を連れて行つたらば、彼等以上なればとて以下でないことを知つて、非常に心強く感じました」。

2. メンタルテストとしての利用と応用に関する研究 淡路國治郎(1920, 心理研究 第十八卷)は、「失業者の精神検査」について考察している。「心理學者が、産業組織に於いて労働者の適任不適任を決定せんがためには、其の個人の精神的方面の出来がいか悪いかといふ事によって決するのが大切だと云ふ事を力説しはじめたのも、やつと最近の事である」。知能検査が職業の適性の判断に応用的にできるのではないかという。「勿論個人の知能といふものは複雑な失業問題の唯一要素でない事は明らかであるが少なくとも重大なる要素の一つであることは否めない」。コロムバス職業紹介所の研究例が紹介されている。

「歐洲大戰のために生活費は暴騰し、随つて各人は相當の生活の資を得て行くがためには一定不變の職に嚙りついてゐる必要が益々大となつて来た。所がこの頃になつて米國北部の高給に釣寄せられて南部から黒人の群れが未曾有に澤山入り込んで来たので此職業紹介所では此等の黒人をも、それ〴〵職に就けてやらねばならなくなった」。單なる知能検査ではなく、「抹消法」「簡單なる命令検査法」「困難なる命令検査法」「置換検査法」「反對聯合検査」「立方體検査」とヤーキス點數式検査を組み合わせてを行った。被験者は94名で、白人

50人、黒人36人、外国人8人であつた。その結果、「黒人は優良なる組に於いては何れの場合も白人よりは百分率が低小で、劣等な組にあつては返つて大なる比率を示してゐる、…産業階級に於いて三四の集團を分ち得るの事實である、但し此事實は黒人にあつては白人の場合程明には現はれてはゐない、その理由は人種の關係上黒人は労働者以上の地位に昇る事が甚だ稀であるからである」。黒人の社会的地位、条件の悪さを指摘している。「黒人に比較的失業者の多いのは一奇であるが此は彼等に對しては白人程多數の就職の途が開かれてゐないためであつて、もし白人の場合であつたならば日雇労働者として分類されるべきやうな者でも失業者の中に包含されて了つてゐるからである」。「少なくとも二週間以上續けて働いた最高級の仕事について報告を求めたが、…被験者中で曾一度でも甚だ高度の知能を必要とする責任ある地位を占めたものは殆どなかつた…四十九人の白人の最高週給の中數は二十二弗五十仙で最多いものは五十弗、最もわるいものは僅に九ドルである、…三十四人の黒人の最高週給の中數は十五弗で最低は四弗二十五仙、最もいゝものも三十弗に過ぎなかつた」。「此圖によれば精神薄弱者の割合は白人よりも黒人の方に大である、殊に黒人に於ては優秀級に屬するものは一人もいゝなかつた」。

デイトン職業紹介所の同様の研究を紹介している。黒人の於かれた厳しい状況が記されている。「黒人及び外人の悉ては失業中に位して産業的見地から云つてやゝ高い程度の人間の多かつたことを示してゐる…」。「コロムバスの白人と黒人との間には著しき精神的能力の相違があつた、此は此等の黒人が南部よりの新來者であつたためである、デイトンでは反之黒人は、大部分北部生まれでその精神的能力も白人とは大差なく、やゝ白人が優つてゐるに止つてゐた」。精神的能力の低い人は、社会的落伍者になると結論づけている。「精神的欠陥を有せる人々の大部分は生活條件に順應し生存競争に於て落伍しないで行く能力を欠いた人達である事は明かである、我々人間は産業生活と蜜關して離るべからざるものである事を考へると、此等の人々の精神的欠陥が無能、失業、浮浪、犯罪の如き徴候として現はるゝ事も豪も怪しむには當らないのである」。こうした研究が産業社会の改良にいかんか貢献するか結論的に述べている。「欠陥」ある人間は同輩と競争を續け得ず、随つて産業的生涯に入ると失敗の方向に進んで行き、…遂には糊口の資にも窮して活氣を失ひ無能者となり終り、…社會の寄食者となる…無能又は常習的失業者の精神的薄弱者達の社會的意義には甚大なるものありと云はねばならない、…その最後の段階に墮する事をば防いでやらなければならない」。そこで、精神年齢によって四つないしは五つの階級に分け、検査の成績によって、求職者をいずれかの階級に分類し、その階級の程度に応じてその人の就職先を決定する。「少なくともその職業の要求に必適する精神的能力を有してゐる人間でなければ其位地を與へない、加之最下級に屬する人間には如何なる職業も與へてやらない。…經濟的社會的に甚だ價値が少いといふやうな人間を排除する事が可能である、社會は勿論かゝる厄介者に對して特別な準備をしてやらねばならないが、反つて此が機運となつて一步進んでかゝる厄介者を全くなくして了ふやうな用意を促すことになる」。精神的能力の低い者を社會から排除することにより、産業社会の改良は達成されるという。

岡部彌太郎(1921, 心理研究 第十九卷)は、「教育測定」と題して知能検査について書いている。「ビネーがその助手シモンと共に低能兒の地王測定を試みてから、單に低能兒についてのみならず、一般に知能測定と云ふことは非常な希望を以て迎へられ、多大の努力と周到なる用意とを以て研究が進められた、嚴密な科學的正確を以て知能を測定することは、

まだ出来ないことであり、又出来そうにも思われないのであるが、種々の障害を排しつゝ、一方に於ては正確度を増す様に、他方に於ては測定法容易になる様に工夫せられて、實際上にはかなり用ひられるに至った。知能テストが実用化され、学校教育で活用されるようになったという。「知能測定は軍隊に入り工場に入ったが、學校に於てその最大の奉仕の場所を得た。これによって學校は教育の客體に關して正確なる知識を得、これに應ずる教育を為し得るに至ったのである。この心理的意味をもった知能測定は學校に入り來ったその本來の役目を果たす以外に、教育的意味をもった別の測定を勃興せしむる役目を務めた、これ」教育の効果を測定せんとする教育的測定である」。

矢田篤(1922, 心理研究 第廿一卷)は、「ターマン氏の低能心理研究」と題して、ターマンが大学生Kに対して行った「精神検査」を細かく紹介している。人種に關わる記述は一方所で行われているのみである。「先ず第一に云って置き度いのは、被験者は決して極端な低能者ではないことである。事實、Kは、約二百萬の軍人に就て行った精神検査の平均成績より少々劣つて居るのである。白人市民中Kよりも優秀な能力を有する者は十〇%以下にして、半熟練職工に於ては五〇乃至六〇%、理髮職人に於ては四〇乃至五〇%、不熟練職工に於ては二〇乃至三〇%のみである。アメリカ印度人に比すればKは優秀な方であつて、恐らく其の一〇乃至二〇%のみが彼よりも優れて居る位であらう。チューク人、カリカク人、ピネー人、ヒル人等に比すればKは非常に伶俐である」。知能検査によりKに適した職業を見出そうというのである。「知能検査の結果のみに就いて云へば、パン屋、理髮職、レンガ積み、…左官、…巡查、…職業野球選手、…行商人、…兵士、…荷車夫、…給仕人、機織工等々があげられている。

佐久間ふき子(1922, 心理研究 第廿二卷)は「知能検査の功過」と題して、グロスマンの知能テスト批判の論文を紹介している。軍隊用の選別テストとして開発され、生まれた集団式知能検査の限界と欠点を指摘している。「この種の検査が陸軍で使用するために案出されたもので、軍人以外の者のためにはなかつたといふこと、及び他の者に通用する場合には一定の制限を設ける必要がある…」。また、即座の反応を中心とした表面的な能力の測定だと批判している。「この検査の測定するところは、表面上の外観、瞬間的能力、機械的の手ばしこさ、順應の速度、反應の敏捷といふやうなことで、つまり比較的程度の低い心理的能力である。これは世に廣く行はれ名譽を博したピネー式規格(スケート)の一種で、しかもピネー式一切の缺點を承継いであるものである。或種の心的反應及び活動の型と、心が受けた訓練の度合いとを一種の仕方であつて測定するといふだけのことで、それ以上に知能を測定するものではない」。さらに、戦時に通用する能力は、平時の能力とは異なると指摘する。「この検査は、…戦争のためである。ところで、戦争といふことは、歴史的に考へると文明化の過程における一要素と見られるが、人間の行為の常規を停止するといふ一事を包含している。戦争はいずれも原始的なものへ逆行することである。戦争上の能率といふのは、ごく特別のものである。人間の務めといふ言葉の中に建設的の能率として伍するわけにいかない。だから、どんなに結果が信頼すべきものであるにしても、戦争能率の検査の結果を直ちに平時の人間の等級づけに適當することは出来ない」。この種の検査の欠点として次の三点をあげる。一つは速度の問題である。「速く考へるといふやり方の人ばかりはゐない。…深く物事を考へる慎重な人たちは、速度の競争で負けるであらう」。第二は型の違いである。「型のちがひは又適する仕事のちがひを生じる。…多くの慎重熟慮

を要する思想家や事業家は、迅速といふことを輕視しなければならないのである。かういふ人たちの要することは時間であり、忍耐、持ちこたへ、長時間に亘る丹誠、失望落膽を諦める能力、決して『失敗』を口にしない心掛である」。第三は答の割当て方である。「この知能検査で點數を算へて人を位づけるには、(下位群の得点は問題にせず)全體の得點數のみに據つてゐるのである」。

匿名での彙報(1922, 心理研究 第廿二卷)「海軍の心理検査」が掲載されている。「海軍では世界海軍に率先して實驗心理による人物の適性検査の研究をしてゐたが著々その緒につき(一)軍醫學校に研究室を設け(二)横須賀では射手、通信、機關、航空各兵の選擇にこの検査法を用ひて良結果ををさめ一方(三)大學に研究生を派出した(四)横須賀工廠では見習ひ職工にこの検査法を用ひてその進むべき方向を指示し(五)更に右研究室では新しい多くの實驗機械が發明されてるが來年度豫算にはこの検査法及び研究に要する費用が要求されてをる。しかし適性研究部の今度の計畫は(一)各工廠の職工にこの検査を行つて工場の能率をはかること。(二)來年度一月施行される兵學校の入學試験にもこれを應用すること。從來は試験制度が悪かつたので、兵學校生徒の成績があまりよくなかつたのを今度のチャンスといふことのないやうな検査法を用ひることにしたのである。…なほ將來はこの検査を士官全體にも實行して大いに海軍の内容充實につとめるとのことである」。選別テストとしての知能検査の効用が説かれている。

越知夫生(1922, 心理研究 第廿二卷第六冊)は、「米國軍隊に於ける精神検査」と題して、ターマン(1918)の「軍隊における知能検査の使用」とドリヴァーの「産業の心理」から一部を抜き出して、米國軍隊の精神検査法使用状況を紹介している。「知能選別試験の一般的な目的は次の二つある。(一)は各個人をその人の軍隊的能率の一番多いところに割當る為めである。(二)は各兵卒を或團體に組立てて訓練する為めの時間を節約する為めである」。このテストは、選別機能に優れているという。「知能等級は次のような細目に亘つて軍事的に價値あるものであることが證明せられてをる。(一)進級させるに足るべき優秀な知能をもつた兵卒を發見する事ができること。(二)精神的に非常に劣等で、他の兵卒の訓練の妨害となるやうなものを迅速に選別して、これを養成軍團へ入れることができること。(三)一様な精神能力の望ましい時に、そのやうな一様な精神能力の部隊を組織することができること。(四)為事の性質によって優秀な精神能力が要求せられる場合に、そのやうな能力の部隊を組織することができること。(五)雑多な軍隊上の職務や又は大學や技術學校における特殊の訓練の為に適當な人間を選ぶ事ができること。(六)知能が餘りに低劣な為に反つて負擔になったり、妨害になるやうな人間を軍隊から排除することができる」。α検査、β検査の紹介の外に、個人検査が紹介されている。「二つの團體検査に落第した者を検査する為めに三種類の個人検査が使用せられる。それは、ヤーキス・ブリッジの點數尺度法と、スタンフォード・ピネー尺度法と、それからパフォーマンス尺度法である。…徵募せられた總ての人が、その文字の素養の度によって、アルファ検査かベータ検査を與へられた。アルファ検査に落第したものはベータ検査が與へられ、二つとも落第するものには個人検査が課せられる」。心理学者が戦争を契機に最大限活用された。「米國が、世界大戰に参加するに當り第一に着手した為事の一つは國內實驗心理學者の動員であつた。而して彼等實驗心理學者の業績の一つは召集軍人の知能検査方法の考案であつた。此等米國軍隊検査法は代商館大會社の雇人募集に關して施行しうる検査法の典型を示すも

のとして産業心理學者の綿密なる注意に價するものである。但し是等検査法について銘記すべきことは此等が集團検査法であつて個人検査法でないことである。知能検査は十分信頼できるものであるという。「此等検査法によってそれゝ知能の測定を受けた人々は實際上其能率や成功の點に於て孰れも齊しく検査の結果を證明してゐる。茲に於て戦前、心理學者は今や既に實際上社會的經濟的の目的のために精神測定を為すに充分なる精密さと確實さを以て知能を測定することを得と云ひし精神検査法賛同者の主張は、完全に證明せられたのである。勿論知能は社會的軍事的産業的能率の唯一の要素ではないが、而も甚だ重要な一要素である。知能低級なるものは指揮命令を了解し遵奉することすら充分にできがたいのである。C級の知能を要する仕事にD級の人々を配置するのはC級の人々をA級の知能を要する仕事に配置するのと同じ様に不經濟である。是は常に利益や生産の問題たるのみならず亦實に人々の生命にも拘る所の問題である」。

守田保(1924, 心理研究 第廿五卷)は、「中等學校入學選抜法としてのメンタルテスト」として、知能テストの入学試験への活用を吟味している。「世にはメンタルテストの中等學校入學選抜法としての價值とメンタルテスト其の物の價值とを混同して考へる傾向のある者が少なくないといふ事である。勿論我國では近年特に中等學校入學選抜法の問題が八釜敷論じられ、それがメンタルテストと結び付かんとして來た為にこの方面の聲のみ高く、メンタルテストが職業の指導異常兒の精神診断や學校内部に於いての色々な利用、犯罪人鑑定等に應用さるゝ方面は専門家以外あまり知られぬ關係上、中等學校選抜法としてのテストの價值がメンタルテスト其の物の全價值かの様な誤解を招いたものである」。メンタルテストを中等學校の入学選抜に用いるのは一つの応用実用化に過ぎないという。中等學校の入学選抜が問題化した背景を次のように述べている。「中等學校に進學を希望する兒童が年々増加する、入學の競争は年々烈しくなる。隨て小學校に於ける準備教育は益々激烈となる。一方には尊き國民教育は破壊されるし、一方に於て弱き少年少女の健康は害せられる。この弊を防止する策としては學科試験を全廢する外ない。さうなると之に代る何等かの方法が無ければならぬ。そこでメンタルテストが採用される様になつたのである」。メンタルテストの長所と短所を検討し、「中學入學選抜法の改革は大きな國家的の問題である慎重研究の要」がある、と結んでいる。

青木誠四郎(1924, 心理研究 第廿五卷)は、「中等學校入學者選抜の方法についての私見」をまとめている。「入學試験の問題は今や教育界に於ける最も重要な實際問題の一として、たゞに教育者のみならず、一般世人の異常な注意を以て迎へられてゐる」。受験の過熱ぶりが伺える。「學童の増加は從つて中學校の入學志望者を増すことになる。併し、この人々の増加につれて中等學校の學級数は増加してゐるのであるから、この事のみでは入學難の問題は起らないのであるが、中學校入學志望者は近年著しくその數を増して來て學校の増加は到底志望者の増加に及ばなくなつて來たのである。すなはち現在の中教育はその普及の程度が昔の比でなく、少しく教育の程度を高く求めるときは中等學校の卒業は當然と考へられ、今や普通の教育程度は小學校より中學校に移らうとしてゐると云つても過言ではないのである」。學校過信、迷信も加熱の背景にあるという。「一般人口殊に學齡期兒童の増加の一方に教育の普及と云ふ事及其半面にあるわが國特殊の學校過信の風潮が中等學校入學志望者を激増させ、しかもわが國の富力と教育尊重の程度—日本人は學校を迷信するのに學校の教師を輕んじ、教育の施設を輕んずる憐れむべき矛盾の傾向が著しい

—を以つてしては到底これに相當せる収容力を増すべき施設をなすことが困難となり、この事が入學難を醸すようになって來たのである。「なるべく優秀な成績で、なるべく席順が上で入學しようとする欲求と、優秀な學校にのみ入らんとする欲求とが、準備の自信の欠乏し兒童には自己の作業に對する自己批評の機能が發達してゐないしまた比較し得てもその對手の状態を知るに由ないのであるから自分の作業に自信をもつことは少ない。—と相俟つて、極端な準備を強ひる様になり、この準備は疲勞過度となつて、身體の機能を害するに至り、殊に發育期にあつて、機能の抵抗性少なき兒童期の危害を思はしめるものがあるのである。しかのみならず教師、父兄のこれに對する心勞も著しく大なるものがあるのであつて尋常六年を受持つ教師の過勞の如き決して二度としようと思はぬと云ふ様な状態にある。…事實今日でも、『入學試験が受からぬ子供など死んでもよい』とか『試験は死ぬまで努力しなくては』などと言つたり、考へたりする人が可なりあるのである」。社會制度を急激に改善することは困難であるので、受験準備の弊害を除去し、当面の問題である子どもの身體の健康に及ぼす悪影響を如何にして取り除くかという問題に直面するのである。入学試験の結果と入学後の各学年の成績との一致度は極めて少なく、兩者の間に何らの關係もないことを示すものと解釈できる。入学試験結果以外には、二つの結果がある。一つには素質を見る素質検査、すなわち就中智能査定があり、他の一つには小學校における評価の結果がある。これ等の結果と中學校における成績との關係の強さを見ることである。「小學在學中の成績を以つて上級學校の入學の許否を決することは、教育の繼承と云ふ點から見ても、入學準備教育の不必要と云ふ點から見てもまた相當の豫知性のある點から見ても極めてよき方法であるが、一方に各學校の採點法が區々であるために、これを以つて異なる學校よりの入學志望者を比較することはできない。結局、これ等の缺點に對しては、將來教育測定の方法が確定され實施されて同一尺度に採點せられ、一方教育者の態度が協同的となり、純正となるのをまたなくてはならないのである」。「智能査定の方法が入學試験」のために用ひられるに至つたのは、それが智的活動の資質を決定する方法として比較的完全なりと認められ、從つて智能の發達如何を知つて個人の特性を覗ひ、これによつてその學校の目的とする作業の性質に合するや否やを知り、更にこれによつて入學の許可を決しようとしたものである。我が國でこの方法をこの入學難問題の解決の一方法として推したのは田中博士を最初とし、大正八年中東京府立第五中學校の入學試験に試験的に採用したのはじまるのである。爾來入學難問題の喧傳されるに從つて、この方法は各地方に於て試験的に採用せらるるに至り、また學科試験方法にも影響して種々な變改が試みられる様になつて來た。「智能検査を以て入學試験に用ひれば相當の豫知性をももち、かつ準備が最少まで縮少せられるの効果をもち、現今の入學難問題については充分の解決を與へるものである事を信ずる。…併し乍…テストだけやればよいと云ふ事になると、直接必要のない、算術や、讀方はどうでもよいと云ふ事になり、何にせよ中等學校に入れるにはテストさへやればよいのだから、學校の成績などはどうでもよいと云ふ様な事になりはしないかと思ふ。現に算術と讀方だけの試験があれば、地理や歴史は疎んぜられ、算術讀方、地歴をすれば圖畫や唱歌は輕んぜられ不勉強となる事は實際に見られる事なのであるから、かような懸念はもしこの方法を實施すれば實現されることが推定される」。結論として、「小學校の成績を以て入學せしめること」、「小學校の成績と智能査定の方法を併用する」ことが考えられる。

匿名で雑録(1925, 心理研究 第廿七卷)に「男女の智能は同等」であることを説く記事が載っている。「幾多の實驗の結果は『女に頭が無い』所でなく『男女學生の間には殆ど智能の差別を認めぬ』と云ふことが美事に證據立てられた。これは、獨り女子の高等教育許りでなく下は幼稚園から上は大學迄等しく斷言することの出来る事になった。…日本でもこれから興味のある問題になって来るらしい『女は男の頭脳と競争することが出来るか何うか』といふ難問題に就て、アメリカではいろゝな方面から研究して『男女の智能には差違なし』と最近學問的に斷定された。…人間としては『頭が無い』と言はれた因習的解釋はそろゝ撤回しなければならなくなつて來たわけである」。

上野陽一(1925, 心理研究 第廿八卷)は、「米人知能十四才説その他に關する鬭争」を紹介し、次のようにまとめている。「(一) アメリカ國民の知能をアーミーテストで測定したといふことには根據がない。ストダードがアメリカ人の平均精神年齢は十四才位であるといつてゐるが、嚴密にいへば無意味である。(二) 學校兒童の編制をもっと等質にするためには、知能テストは實際に役にたつ。しかしテスト者の根本的の誤解を除かない限り、テストが濫用される恐れがある。(三) 根本的の誤解の重なるものは、(イ) テストは知能を測定すると考へ、(ロ) この知能は遺傳によって定められて居り、知能テストはこの遺傳的知能を表示し測定すと考へてゐることである。(四) かういふ考へに基づいて、生來知能の一般テストを作らうとするのは、理論的實驗としては面白いかもしれないが、そんなテストがあると主張し、又すぐできると信ずることは、社會に對して不正を働くに等しく、勝手に優劣をつけられたものに大變な迷惑を及す。(五) かういふ態度はテストそのものゝ實用的發達のためにもよろしくない。遺傳的知能をテストする一般的方法を作らうとするよりは、軍事・實業・技術等、實際方面における適性選擇のために特殊のテストを作ることには骨を折つた方がよい。テストの目的は鈴木太郎の胚質の能力を知らんがためではない、胚質の素質と訓練の結果とは、現在吾人のもつてゐる力では、區別するつことができないからである。それよりも、現在鈴木太郎は八學年の仕事をするに適してゐるか、機關車乗務員として適當か、中等品の自動車販賣人としてはどうかを明らかにすることがテストの目的である。或一組のテストで知能を測らうとするのは、物さし・はかり・速度計などの中、一つを以て、時間・空間・重さ・速さ・色・形・美・正義・信仰・希望及び慈善のすべてを測らうとするに等しい」。

5) 欧米・アジア諸國に關する隨想・紀行文

石田三治(1917, 心理研究 第十二卷)は、「日本人の趣味」と題して、日本人の特徴について書いている。「…便器に描かれた草花の模様は吾々をして悠々たる野糞の趣を経験せしめると云ひ度い位、日本人は自然同化を欲する國民である。形から小用の方の器を朝顔と呼ぶも日本人でなければ出来ない藝當だ。西洋婦人の服装はよく彼等の國民性を表すもので、…人為的な差別的な生活は日本人には一寸困難である。彼等は寒ければ衣物を着、暑ければ裸になる…。自然との融和を旨とする日本、人工・人為を主とする西洋、兩者の違ひはここにあるという。「西洋人は人間の力、其の獨創を尊重する。…彼等は自然に屈しない。斯くて彼等は雜然と置かれた其の個々のものを夫々愛翫し得るのであらう。日本人趣味を自然的と云ふ言葉に縮めれば、西洋人趣味は人間的と云へる。…何處までも自然を征服する所に一つの力強さを示して居る。…必ず自然と調和すると云ふ一點に各時代を通じて日本人趣味の特色がある」。

一記者(1918, 心理研究 第十三卷が、「無題録」として、日本と支那の親善關係を奨励している。中国から日本への留学生のことばとして、「日本には西洋の模造品ばかりだ」と批判している。「私は學校へ入つて先生の講義を聴くに及んで、次第に日本の學界に對する尊敬の念が薄らいで來ました、何故かと言ひますと、日本の學者方の説く所は大概歐米の學者の説を紹介批評して居て、御自分の説といふものは學年の終りにほんの申譯ばかりに附け加へるか、甚しきに至つては御自分の説は全然立てずに只、歐米學者の諸説を其の儘翻譯的に講義して居られる教授も居られます。而して参考書として薦められるものは殆ど皆洋書です」。支那の模範となるよう日本独自の學究が必要であると説く。「一般日本人としては今回の戦争に依つて日本が支那と提携して行かねばならぬといふ事を眞實感じたならば、今迄の様な支那人を輕侮するといふ念を全然棄てなければならぬ。根本的に言はうならば支那を馬鹿にしてゐる根性が吾々の腹の底に在るからである（之は日清の役以來殆ど痼疾となつて了つた）。英國は獨りよがりに先進國と己惚れて獨逸諸邦を侮り、其を研究することを怠つてゐた報は今度正しくやつて來た。日本もいつまでも日清役結末當時の様な調子で支那を輕侮し、武力と僅かばかりの文化とを恃んでいゝ氣になつて居ると、支那人と眞實の提携をするなどいふ事は到底出來たものではない。支那人を教へてやるなどといふ傲慢心が吾々にある内は到底ダメである。歐米の學問を受賣りしてそれで『教へてやる』もないものだ。さうでなく日本人は支那人と相共に携へて歐米の粹を取り、吾々固有の東洋文明を益々發達させて、茲に新しい大文明を生む可く努力しなければならぬ」。

湯原元一(1918, 心理研究 第十五卷)は、「獨逸文化の特質に就いて」講演を行っている。欧州の国情を細かに説明し、どいつの特徴についてふれている。「…獨逸文化の中で特に著しいもの、他の諸國に皆々目立って顯著なる一特徴…是は色々ありますが、先づ其の中…彼の組織的能力であります。…就中其の精神的能力を悪い方へ働かす點に於ては彼は何れの國民と比較するも大に優つて居る。奸智蠻勇背信等は彼の最も得意とする所である。…此の組織的能力を以て彼に特に發達して居るものと視ねばならぬ。…比較的完全に發達して居るのは、やはり此の國であるといふことを、何人も認めなければならぬと思ふ」。日本人は、この組織力が弱いという。「吾々日本人の性質として此の組織といふ事には最も不適當なものだと信ずる。それは何かといふと我儘放題で拔駟功名をする。さうして外國人などには愛嬌を振蒔くに拘はらず随分嫌はれる。甚しきは俗に所謂鼻摘みを以て遇せられて居る。獨逸人の如く傲岸不屈な處はないが、どうも他から可愛がられる國民ではない。亜米利加に往つて居る日本人の舉動などに就き先輩の人達が色々心配して居りますけれども、衣食住の差や、それから色々の思想上の差などがありますから、とても亜米利加人と心底から融和しさうにも見えない。就中獨逸人とは餘程似た所もあるが、又到底相容れない性質を持つて居る。かくの如く吾々は世界に可愛がられる國民でない以上は、詰りは和戰共に脇づくで來いと、斯ういふ覺悟を以て世に立つて往くの外あるまい。それに付いては此の獨逸人殊に普魯西人の性質には多くの缺點はあつても、其の文化就中其の組織的能力の如き、敵ながらも大に學ぶべき所があると思ふのであります」。

上野陽一(1922, 心理研究 第廿一卷)は、「キスコンシン大學訪問記」を書いている。日本の水準がアメリカに近いことを強調するなど、歐米の文化水準への接近を強く意識していることがうかがえる。ジャストロー先生にあつた時の一節である。「私が工場心理学を研究するといふので、日本の工業状態について色々質問された、支那の陶器なども手工品で

あるが、日本の工業も多くは手工であらうといはれるので、美術的のものは手工であるが、その他のものは、皆機械工業になってゐる、アメリカにあるもので日本にないものは一つもない、たゞ規模が小さいだけであると答へた。「インデナーポリスの一週間」では、アメリカ文化と日本文化の類似点、戦争に関わる日本人の国民性などにふれていて興味深い。「こちらの活動（写真）はレンズがいゝためか極めて見るに樂である。今夜のは、…アメリカの若者がパリの舞妓に迷ひ、夫婦になってかへつて来る…紆餘曲折して二人の仲が許されるといふ、丸で日本の道楽息子が藝者に迷つて勘當されると少しも違はない、その他、金が唯一のものでないことを教へるフィルムや、愛國心をそゝるもの、日本の俠客ものに似たものなど、日本的のものゝ多いのには驚いた。そして軍縮會議の模様なども直ぐ晝にして活動に出す、日本は山東は手放すが滿州は離さぬといふやうなことを活動地圖にして出す。必ずしも教育的ではないが、教授的であることはたしかである」。

日本人の国民性について次のように述べている。「日本人は好戦國民なりやといふ問題だけを窮めて見たいと思ふ。世界の歴史を見るに、最も榮えた國は戦争に勝つた國である、日本もさうである、併し日本だけが好戦なのでは、どこの國でも戦争に負けて榮えた國はない。今日アメリカは恰も世界平和の主唱者のやうな體であるが、そのアメリカですら、今日の繁榮を來すまでには、どれだけ戦争をしたか知れないのである。誰でも若い時にはよく喧嘩する、けれども大人になると、おとなしくなつて、子供が喧嘩するのを見て、之を批評する、その態度は恰も生まれたときから紳士であつたやうな、とりすました風である（皆笑ふ、アメリカの態度に皮肉をいっただつてもあるが、果たして了解せりや否や）子供にして喧嘩せぬものは、大人になつても男らしさを發達させぬとさへいはれてゐる。戦ふことは必要なことである」。鎖國の眠りから覺めた日本を次のように語っている。「百年の長夢から醒めて軍備を急いだ、そして立派な軍國になつた、國家を保全せんがためにはかうするより外なかつた…この強盜海賊の横行する世界に首を出した日本が、どうして軍備をせざるにゐられようか、長く眠つてゐた日本國民の戦争本能は外的に對する恐怖のために俄然發展した、…そして勝つた。併しこの平和の國民をかういふ軍國にしたのは一體誰であるか、責任はアメリカにあると思ふ。…日本人は…好戦國民である…戦へば必ず勝つ國民である」。時代はすすみ、經濟上、學問上、宗教上の戦争は今後もなくなるといふ。「…戦いに強い位の國民でなくては、經濟的の戦争は出來ぬ、平和論は人類の罪惡に對する宣戰である。舊き意味の戦争において勝つたもののみが、新しき意味の戦争において勝ちうるものである…この點において日本人が好戦國民であることは世界平和のために心強いことである」。日本の心理学の發展ぶりについても意氣高く語っている。「日本の心理学についても色々聞かれたから、出来るだけ答へておいた、日本に心理学専攻の學者が百人以上もゐるといふたら、驚いてゐた、一體アメリカ人は日本ことを知らなさ過ぎる、私がシカゴにゐるとき市教育課の精神検査の係りをしているシカゴ大學出身のミス、キュトニウスキーといふ人と電車にのつてゐたら、日本にもこんな電車があるかと聞いた、そこで私は『あるとも、ゝゝゝ、シカゴの電車は系統が簡單であるが、東京のは遙かに複雑で一年ゐてもとてもわからぬ位複雑である』といつてやつた」。

匿名で彙報蘭(1922, 心理研究 第廿二卷)に「外国語の修得の困難」の記事が紹介されている(Hamerton, The Intellectual Lifeより)。「語學の知識はどんな時でも最も嚴重な試験にかゝりうるのである。といふのは、彼が出會ふ最初の本國人が彼の試験官であり、彼

が踏むその最初の外國都市が彼の試験場だからである。この事實は、近代語の上達といふことが威嚴的なものであるよりも寧ろ實用的なものであるといふことのたぶん一つの理由となるだらう、といふのは、そのやうに多くの批評家のをる面前では大きな自負をふり廻はすといふことは困難だからである。若し意地の悪い外國人に嘲笑を向けられたら、どんな學識のある大學教授でも為すところが無いのであらう。外国語の習得が実用的に必要であり、難しいことであることを紹介している。

上野陽一(1923, 心理学研究 第廿四卷)は、「雑話」の中で、エール大学のハンチントン教授が日本を訪れた時の感想を書いている。日本、日本人に対する印象が書かれていて興味深い。「日本に來ての第一印象は往來の不整頓極まる事であると語り出される。道路が極めてせまい。…馬力よりも人力を多く用ひたので、道路を廣くする必要がなかつた。…人力を用ふことを文明の退歩であるとして罵る人もあるが、自分はさうは思はぬ、ペルシヤや、トルコのやうに自動車の發達したところでも文明はドンハ、退歩してゆくし、人力車のある日本でも文化は益々進んで行く」。日本人は自己判断しないという。「日本人は何か相談しても自分の判断に訴へて即答しない。上長と相談してからでなければ、明答せぬ、實に變な國民である。我々の國では、各自に責任をもたせておくから、ちゃんと自己の判断で即答する、あへて他と相談したりなどする必要はない」。ノルウェーに比べ日本の心理学が進んでいることを述べている。「星のペルリーナ夫人がアール博士をつれて參觀に來られました。博士は列項にもある通りノルウェーの心理學者です。研究所の適性検査機械や、能率増進の實績などを見た…ノルウェーでは、まだかくの如き應用的の設備は一つも出來てゐないなどいつてゐました」。

上野陽一(1923, 心理研究 第廿三卷)は、「フランクなアメリカ人」を書いている。「アメリカからヨーロッパに行つて見ると、いかにもアメリカの人が心易く、胸襟を開く國民であるといふことがわかる。ヨーロッパでは一寸工場や實驗室を見るにも、オイソレと手輕には行かないが、アメリカではそれが極めて簡單に行くことは、誰しも氣づくことであるが、それが産業經營の上にも現れてゐるから面白い。…勿論各會社には研究部があつて、盛に研究してゐるが、何かいゝことを發見すると、同業者同志互に報告し合つて決して隠さないといふことである。…そこになると、日本人は中々度量が狭い。碌な秘密ももつてゐない癖に、門戸を閉ぢてエラガつてゐるが、それは結局自分の仕事の信用を害し、國家の産業發展を妨げることになるのを知らずにゐるのである。快く打明けるといふ氣分これは是非學びたいことである」。

城戸精太郎(1923, 心理研究 第廿三卷)は、「ライブチツヒ消息」の中で、現地の新聞が日本人の素行を取り上げたことを「外國人同志の大喧嘩」と題して書いている。「柏林カイザー・アレー街のカフェでひどい見か喧嘩があつた。柏林に研究中の四人の日本人がへゞれけに酔つて入つて來た。其の態度が馬鹿に挑戰的だつたため居合せた他の外國人をすっかり激昂させてしまった。此の日本人等が樂手に君が代を奏せよと強要するに及んで他の外國人が遂に干渉をした。日本人等はコップをたゞきつけ始めた。そこで相容は總立になつて日本人に取つかゝつて之を袋だたきにした。警官が來てやつと相方を取り鎮めた。日本人は警察署へ連れて行かれた。醫師の治療を受けずばならないであらう」。この記事の切り抜きの隅に城戸は、「大正十一年一月一日、ライブチツヒの新聞、こんな記事があるので日本人の肩身が狭くなります」。

増田惟茂(1923, 心理研究 第廿三卷)が、「米國の心理學と米國々民性」について『東亞之光』に寄せた短文を心理学研究に転載している。「米國の思想とか方針とか云ふものは概念的に上から定まって行くのではなくて、…實行の後から定まるので…主義は何も教へて居ない。…心理學でもさうである澤山の研究があるけれども何だか締まりがない、支離滅裂と云ふ様なもので人々が種々のことをやって居る。一人としてもさうであるし、米國全體としても種々のことをやって居るのであって全體としては仕事に纏りが少ないと云ふ傾きがある。あゝ云ふ自由の天地からは種々面白い研究が出るのであるけれども、どうも私はさう云ふ點が物足りなく感ずるのである」。

帝國學士院の新計画(1925, 心理研究 第廿八卷)が、「雜報」欄で紹介されている。日本人の研究を歐米に普及させることが急務であったことがわかる。「本邦に於ける各學會の機關誌其の他に依りて世に發表せらるゝ研究の成績にして學術の發達に寄與し人知の増進に貢獻するに足るもの決して少なしとせず然るに是等は邦語を以て記述したるもの多きを占むる為普く歐米の學界に紹介せられざるの憾甚多し斯の如きは知的協力の精神より觀て大に遺憾とする所なるのみならず發見若しくは發明に關する優先權を保障する上より考ふるも亦甚だ不利益なるを免れず而して他方各大學の紀要學術會議の輯報等は歐文出版物なれば我邦に於ける研究を歐米の學に紹介するに適當なる機關たるに相違なきも經費其の他の關係上是等の機關に依りて世に發表せらるる學術的業績は其の數に於て著しく制限せらるゝのみならず其の發表に於ても往々にして遲延を免れず為に前述遺憾不利益とする點を補ふに足らざるは我學界の切實に感ずる所なりと信ず」。日本人の研究を海外に知らしめることが、國際社会に参入するのに欠かせなかつた。「研究成績の概要を普く且速に世の學界に紹介するに我學界の諸士」が以下の計画を進めることに賛同してほしいと訴えている。例えば、英語、仏語、獨語のいずれか(英語が望ましい)で研究成績の概要報告または予備報告を作成し、本院に提出すること、提出する歐文報告は訳一千語以内のもので文意明確文字明瞭なものであること、邦文原稿は約二千語以内で述語は歐訳をつけること、等が規定されている。

Ⅲ 全体的考察

1 文明開化・富国強兵策と心理学 「あらゆる面で欧米列強に追いつきたい」、「國際舞臺で五角・対等に交渉したい」、これは開国以来日本人の間にある強い願望だった。表5に幕末から昭和初期に至るまでの歴史上の出来事をまとめた。一瞥するだけで、常に欧米諸國との緊張關係の中で、日本の近代化が進められたことがよくわかる。日本が西洋列強の中で対等な外交交渉を行う上で、文明国化することは緊急・緊要な課題と考えられていた。この時代的な差し迫った課題が、心理学研究に反映していたことは、「心理研究」に掲載された論文を概観してみると理解できる。民族問題に言及する論文が少なくなく、文明人と野蛮人との差違を比較検討した研究もかなりの数あった。日本民族の独自性を明らかにすること、欧米との比較で日本民族が如何に優秀であるかを示すことが、科学的知識に支えられ、かつ強い軍事力を持つ欧米の文明国に対抗し、五角の發達を短期間に遂げるためには絶対に必要な条件であった。1854年に日米和親條約を、1858年には米國を初めとする5カ國と修好通商條約を締結している。欧米列強に対応する一方で、アジア諸國に対し

表5 幕末・明治・大正歴史年表

西曆	年号	歴史上の出来事・事件
1789	寛政元年	フランス革命・「人権宣言」発表
1825	文政8	外国船打払令
1842	天保13	薪水給与令・アヘン戦争(～1842年)
1853	嘉永6	ペリー浦賀来航
1854	嘉永7	日米和親條約締結
1855	安政2	日露和親條約
1858	安政5	日米修好通商條約締結(和蘭・英・仏・露西亞)
1859	安政6	安政の大獄(尊皇攘夷派処罰)・ダーウィン「種の起源」
1860	安政7	桜田門外の変(尊王攘夷派水戸藩士井伊直弼暗殺)
1862	文久2	生麦事件・アメリカ南北戦争勃発
1863	文久3	薩英戦争・下関事件(長州藩外国船砲撃)・リンカーン奴隷解放宣言
1864	元治元年	第一次長州征伐
1867	慶応3	江戸幕府滅亡
1867	慶応3	大政奉還・王政復古の大号令・明治天皇即位
1868	明治元年	明治維新
1869	明治2	東京遷都・北海道開拓使設置・北海道と改称
1871	明治4	廃藩置県・日清修好條規調印(琉球を鹿児島県に編入)
1872	明治5	学制の発令・琉球藩の設置
1873	明治6	徴兵令・岩倉使節団
1874	明治7	台湾出兵
1875	明治8	日鮮修好條規締結(江華島條約)・新聞紙條例・樺太・千島交換條約
1876	明治9	日韓修好條規調印
1877	明治10	東京大学開学
1879	明治12	琉球藩廃止・沖縄県設置(琉球処分)
1880	明治13	集会條例
1883	明治16	鹿鳴館開館(井上馨外務大臣)
1886	明治19	ノルマントン号事件
1887	明治20	保安條例
1889	明治22	大日本帝國憲法公布
1890	明治23	教育勅語発布
1891	明治24	足尾鉾毒問題発生
1894	明治27	日清戦争(～1895年)
1895	明治28	下関講和條約(日本台湾を領有)・三国干渉(ロシア・ドイツ・フランス)
1896	明治29	台湾統治の法律制定
1902	明治35	日英同盟
1904	明治37	日露戦争(～1905年9月)
1905	明治38	ポーツマス條約(遼東半島、満州鉄道、韓国等の權益を日本に)
1910	明治43	韓国併合(朝鮮と改称・日本の植民地化)
1911	明治44	日米通商航海條約改正(関税自主權回復)・工場法成立
1914	大正3	第一次世界大戦(～1919年)
1919	大正8	三・一運動、五・四運動
1920	大正9	國際連盟成立・ドイツ労働党(ナチス)結成
1923	大正12	関東大震災
1925	大正14	治安維持法・普通選挙法公布
1929	昭和4	世界恐慌の始まり
1931	昭和6	満州事変(柳条湖の満州鉄道爆破)
1932	昭和7	上海事変・リットン調査団調査結果公表
1933	昭和8	日本國際連盟脱退

ては植民地化を矢継ぎ早に進めた。1871年に琉球を鹿児島に編入し、1874年に台湾出兵を行い、1895年に領有し、1910年には韓国を併合した。隣国台湾と韓国を占領し日本の領土とする過程で、民族問題は同化策と係わる重要な問題であった。心理研究で民族問題に言及する論文が多かった背景には、このような事情もあったのであろう。

分析では、便宜上5つのカテゴリーに分けて分析した(表6~表10)。その結果、欧米との比較研究や、日本民族の優秀性を示す知能研究、あるいは日本人を欧米白人並みの優良人種に改良することを目指す優生学に係わる研究などが多く見られ、心理学研究においても明治期の富国強兵策に合致する傾向が強かったことがわかる。ゴルトンの優生学を背景にした、社会改善、国民の人種改良を論じた心理学論文が少なくなかったことは、心理学の発展の初期段階から、かなり実践的な応用に結びついた形で研究が展開されたことを示すものであろう。心理学の実用性、応用性が強く意識された。新しい学問として前途を開拓するには、その有用性が認知されなければならなかったからであろう。「編輯者の立場から」(1923, 心理研究 第廿三卷)に、心理学が実際に社会に应用されていることを歓迎する編集後記が記されている。「日本の社会の進展もかなり其の歩みが遅くなりつつあるやうです。(日露戦争前後を境として日本の社会の進展度は暫時平衡状態にあるやうな気がします。)然し進んでゆきつつある方面もあります。産業能率の問題に心理学がどんどん應用されてゆくのは愉快です。こうした事情は、松本亦太郎(1923)、が「心理学應用の諸方面」と題して整理し、詳述していることから裏づけられる。松本によれば、心理学の實際的應用に日本の社会が覚醒し始めたのは大正5, 6年頃からだという。知能検査や広告の心理などは早期に紹介されていたが、実用化されていなかった。その後、「東京帝國大学の心理学研究所は社会の諸方面に於ける心理学應用の中樞的顧問の役を務め、各方面の要求に應じ心理学専攻者を配布し事に當らしむる事に力を致した」。心理学の應用された分野をまとめると以下のものである。実験心理学の成果が、實際の社会に適用され始めたのである。「應用に着手してから日もまだ浅いが、…欧米に於ける應用の状況と比して略ぼ歩調を並べて進んでゐると認める事が出来る。これは我國に二十餘年來實驗心理学が行はれてゐたのに全く負うてゐる。我國の少壯専攻學者が實驗的研究法に習熟し、種々研究を試みてゐた事が地盤になり、世界の激變に應じて遽に勃興し來った心理学應用の氣運を迎へ、社会諸方面よりの要求に應じ活動を始めた譯で、我國の學者が好機をを逸しなかつた事は喜ぶ可きである」。

心理学の應用化において、注意すべき事は軍事心理学とも言うべき、陸・海・空の軍における研究が成果を期待されていたことである。「兵ヲ徴スルノ方法ハ、国家ノ大典、忽ニスヘカラサル者ニシテ…全国ノ丁壯ヲシテ兵役ヲ帶ハラシメ…」(塩田 他, 1984)、近代的な軍隊を急遽整備するため、徴兵令が出されたのが1873年であった。心理学の輸入からほぼ20年たって、科学的な実験手続きを用いた心理学が、具体的な成果を期待された。客観的、科学的手法を中心にすえた心理学であるが、富国強兵の国家施策の流れに取り込まれていたといえる。松本亦太郎(1923, 心理研究 廿三卷)が、「心理学應用の緒方面」について整理したことはすでに述べた。表11 はそれを表にしたものである。表を見ると、軍からの研究の要請があったことがわかる。富田精(1912, 心理研究第二卷)は、論文「啞人の結婚問題」の中で、台湾、朝鮮を日本の領土として人口を数えている。「我國の人口は、明治四十一年の現在数が、内地と臺灣とを合せて、五一、一七一、三八七人、之れに朝鮮

表6 分析対象文献リスト(欧米・アジア諸国と日本の比較研究)

Table with columns: 著者名, 専門分野, 発表年, 論文名, 掲載誌, 巻・号. Lists comparative psychology studies from 1912 to 1925.

表7 分析対象文献リスト(日本「民族」「人種」「国民性」に関する研究)

Table with columns: 著者名, 発表年, 論文名, 掲載誌, 巻・号. Lists studies on Japanese ethnicity and national character from 1912 to 1925.

表11 大正初期における心理学応用の諸方面

海軍	○無線電信・砲術・機関・航空・潜航等特殊作業→実験心理学応用調査会の設置 (田中寛一・松本亦太郎) ○横須賀海軍港⇄東大心理学研究所(安藤謚次郎)(囑託=田中寛一・増田惟茂) ○佐世保軍港(久保良英)
陸軍	○心理学応用懸案・陸軍諸学校候補者選抜=精神検査利用検討・西澤頼應=陸軍教授
航空	○候補者選抜=精神検査利用
鐘淵紡績会社	○標準工設置=全会社組織の作業能率向上化(東大心理学研究所=田中寛一)
倉敷紡績会社	○労働研究室設置(紡績作業に関する心理・生理的研究=研究部員桐原葆見)
逓信省	○実験心理学の実用化=計算・数の記憶・伝票の整理・迅速な書記作用・知覚に対する運動の調節・語の置換・迅速な発信受信の運動、大阪の逓信局に研究所設置計画
貯金管理局	○作業に関する実験心理学的研究=鈴木久蔵、千輪浩=緻密な分解的及総合的研究
電信局	○発信受信の速度及誤謬・疲労と休憩=田中寛一・淡路圓次郎・石井俊瑞
電話局	○電話交換作業の経路・疲労・疲労の回復・作業時間と休憩時間の関係・練習=寺澤嚴男
司法省行刑局(監獄)	○寺田精一・石井俊瑞・内田勇三郎=犯罪心理講習及研究・囚人の心理状態の心理学及精神病方面よりの研究
東京市社会局	○久保良英・淡路圓次郎=少年職業紹介の部で精神検査、職業指導に関する心理学研究心理実験室設置計画
東京府立商工奨励会館	○能率技師養成所設置=東京の大工場・会社・商店等の技師的仕事従事者対象に作業能率・工場の科学的管理法等講習し、商工業の能率増進を図る(上野陽一中心、松本亦太郎・増田惟茂=能率研究、永井潜(生理学研究所)=疲労に関する講義・実験) ○奨励会館では上野陽一・内田勇三郎・寺澤嚴男・淡路圓次郎・野田信夫諸氏の講義
協調会	○産業能率研究所開設(上野陽一所長、内田勇三郎・荒木東一郎協力)
小・中・高等	○知能検査・教育検査・入学試験における知能検査の応用(樺崎淺太郎・田中寛一・久保良英・岡部彌太郎)
東京市教育課	○市内小学生1万人対象に知能検査実施(本田親二・栗橋宇一・渡邊徹)
社会教育関連	○新聞雑誌に用いる活字の大きさに対する読字難易度(桑田芳藏・城戸幡太郎・淡路圓次郎)
航空心理研究室	○東大附属航空研究所所管(航空作業に関する分解的研究及高空における酸素の欠乏・温度の低下等が精神及身体の機能に及ぼす影響=松本亦太郎・田中寛一・寺澤嚴男・増田惟茂)

注) この表は、松本亦太郎(1923, 心理研究 廿三卷)より作成した。

表8 分析対象文献リスト(心理学と日本社会の改良に関する研究)

著者名	書名	発表年	学位	掲載誌	巻号
松本亦太郎	優良種族の消長	1912	文学博士	心理研究	第一巻第一号
阿部文夫	結婚と遺傳	1912	文学博士	心理研究	第一巻第二号
渡水謙	社会の改善と遺傳	1914	文学博士	心理研究	第一巻第三号
山下宗雄	人類的進歩	1915	文学博士	心理研究	第一巻第四号
高田仙太郎	人類の遺傳	1917	理学博士	心理研究	第一巻第五号
高橋茂三郎	本邦青年女子の死亡危険	1917	文学博士	心理研究	第一巻第六号
三田隆三郎	精神的特徴(動作)の遺傳	1917	文学博士	心理研究	第一巻第七号
藤名(兼綱)	特殊教育と優生學	1918	文学博士	心理研究	第一巻第八号
杉井寛子	日本人の精神と遺傳	1923	文学博士	心理研究	第一巻第九号
海野幸徳	社会的環境と遺傳的進歩	1915	文学士	心理研究	第一巻第十号
佐久間幸子	優生學の限界に就いて	1919	文学士	心理研究	第一巻第十一号
	優生學の限界	1923	文学士	心理研究	第一巻第十二号

表9 分析対象文献リスト(日本人の知的能力と遺傳・環境・教育に関する研究)

著者名	書名	発表年	学位	掲載誌	巻号
木村久一	天才教育論	1913	文学士	心理研究	第一巻第十三号
風澤良太郎	天才教育の歴史	1917	文学士	心理研究	第一巻第十四号
松本亦太郎	優人の優	1921	文学博士	心理研究	第一巻第十五号
岡部彌太郎	智識の秘訣	1923	文学博士	心理研究	第一巻第十六号
ネルマン	北米合衆國國民の知能	1923	医学博士	心理研究	第一巻第十七号
金子進二	推定では劣兒童に属する種族問題	1924	医学博士	心理研究	第一巻第十八号
三浦隆作	精神検査より見たる種族問題	1924	医学博士	心理研究	第一巻第十九号
入谷龍義	非常時に現れる教育の効果に就いて	1925	文学士	心理研究	第一巻第二十号
藤名(兼綱)	アインの精神検査	1925	文学士	心理研究	第一巻第二十一号
渡路圓次郎	無能者の精神検査	1925	文学士	心理研究	第一巻第二十二号
阿部彌太郎	実業者の精神検査	1925	文学士	心理研究	第一巻第二十三号
佐久間幸子	ターマン氏の低能心理研究	1922	文学士	心理研究	第一巻第二十四号
佐久間幸子	知能検査の功過	1922	文学士	心理研究	第一巻第二十五号
藤名(兼綱)	海軍の心理検査	1922	文学士	心理研究	第一巻第二十六号
守田辰生	海軍に於ける精神検査	1922	文学士	心理研究	第一巻第二十七号
青木隆四郎	米國軍隊に入隊する精神検査	1924	文学士	心理研究	第一巻第二十八号
藤名(兼綱)	中等學校入學選抜法としてのメンタルテスト	1924	文学士	心理研究	第一巻第二十九号
上野陽一	男女の知能は同等	1925	文学士	心理研究	第一巻第三十号
	米人知能十四才以下の個に関する論争	1925	文学士	心理研究	第一巻第三十一号

表10 分析対象文献リスト(欧米諸國に関する論議・紀行文)

著者名	書名	発表年	学位	掲載誌	巻号
石田三治	日本人趣味	1917	文学士	心理研究	第一巻第三十二号
一記元一	獨逸文化の特質に就いて	1918	文学士	心理研究	第一巻第三十三号
上野陽一	無題論	1922	文学士	心理研究	第一巻第三十四号
藤名(兼綱)(Hamerton)	エスキモ人の大衆的風俗	1922	文学士	心理研究	第一巻第三十五号
上野陽一	外國語習得の困難	1923	文学士	心理研究	第一巻第三十六号
上野陽一	フランスのアメリカ人	1923	文学士	心理研究	第一巻第三十七号
上野陽一	ライプツィヒに消息	1923	文学士	心理研究	第一巻第三十八号
上野陽一	雜誌	1923	文学士	心理研究	第一巻第三十九号
上野陽一	米國心理學と米國々民性	1923	文学士	心理研究	第一巻第四十号
帝國學士院	米國學士院の新計畫	1925	文学士	心理研究	第一巻第四十一号

及び大正元年までに増加したものを加へて、ザット六千萬人と見てもよい」と述べている。すでに海外出兵アジアに進軍していた軍部にとって、兵士を適材適所に配置するために、心理学の利用が必要だったのである。

植民地の異民族を日本「民族」に融和させ、一つの国家として統一することが現実に急務となっていたのである。台湾を日本の領有とした後、植民地の人々を日本文化へと同化する教育が実施された。速水(1919)の台湾生蕃の文化に関する現地報告は、皇国化への教育が強力に実施されていたことを心理学者の目から伝えている。速水(1919)の紹介論文「臺灣生蕃人の文化」は、日清戦争後の日本のアジア侵略が、日本の心理学に大きな影響を及ぼしていたことを物語るものである。1895年4月に下関講和条約が締結され、台湾は日本の領土として確定していた。速水の紹介では生蕃の子どもは日本語をよく話し、神話的な感情を抱いているかに描かれている。しかし、講和条約の直後の1895年の5月には台湾民主国が独立国として創られ、「台湾の武装抗日運動は、台湾平定後もなおつづき、20年の長い間事件は続発」した(家永, 1978)。心理学者であった速水が講習会の一環として台湾総督府に招聘されていることから、中味は明らかではないものの、講習会の内容は心理学に係わるものだったであろうと推測できる。富国強兵、殖産興業の時代にあつて、個人々の適性の診断と、作業の能率を図るために心理学の研究が有効であると認知されつつあつた。こうした状況から、社会の動きと密接に関連した形で、心理学者の研究関心もあつたといえるであろう。

2 心理学における遺伝論及び優生学と日本民族の優良化

心理研究(1922, 第廿二卷第六冊)に「宣言」が載っている。「明治四十四年以來茲に拾年間「心理研究は我國に於ける唯一の心理學雑誌として我學界に努力を續けて参りましたが、此度帝大心理學教室を中心とする『日本心理學雑誌』が岩波書店から出ることになりました…よつて…色々相談してみた結果、『心理研究』は…目的を鮮明にすることになり、大正十二年度を期し之を實行していくことになりました…」心理學研究会の立場は、「心理學に對して多少の興味と素養とを有する一般民衆に心理學に關する豊富にして組織的な知識を與ふる…専門の學徒と民衆との仲介者たるの位置に立つ」としている。目的には、一つの重要項目として遺伝の問題があげられている。方法では、「我國人の手に成る獨創的研究の發表をもちよむべきことあるべきも、…主としては我國及び欧米諸國に於て發表されたる重要な研究の紹介及び批評を掲ぐる」とあり、外国論文の紹介に重きが置かれている。さらに部門を分け、時代的問題を連続的に紹介し批評していくとしており、第7分野には優生学の研究が取りあげられている。「遺傳=優生學は大きな實際社會的關心事であり、精神的特質の遺傳の問題は世界的な學問上の關心事であつた。さらに、第8分野には、「其他、社會心、民族心の研究。…」があげられ、「民族」の研究が重視されていたことがわかる。

すでに論じたように、アジア諸國に對する日本の植民地化政策の中で、日本人の知的優秀さ、心身の強靱さは、欧米の人々に劣るものであつてはならなかつた。このことを確認し、裏づける研究を心理学が試みたともいえる。植崎(1913)や高田(1917)は、その一例であろう。日本人の人種としての優秀性を強調するために、人種改良が叫ばれた。理論的基盤はゴールトンの優生学であつた。さらにメンデルの遺伝の「法則」は、人の優秀な形質と劣等な形質が継承されることを確信させるのに大きな影響力を持った。メンデルは、遺伝の「法則」を1865年にすでに発表しているが、遺伝子という概念がなかつた当時、彼の

斬新な説は一般には受け入れられなかつた。「メンデルの法則」が世に広まるのは、1900年のことであつた(中沢, 1978)。「メンデルの法則」が日本に取り入れられたのは1906年頃で、東京帝大の外山亀太郎の蚕の雜種に関する研究を通じてであつた。数年後には、生物学におけるこの発見が、分野を転じて心理学に取り入れられ、ゴールトンの優生学と結びついて、日本民族の優良化及び人種改良が強力に主張されるに至つたのである。心理学において、欧米列強の人々と精神的にも肉体的にも互角の日本人を生み出す方途を探ることは、最も大きな關心事の一つであつた。

「青年期の心理学」(元良, 1910)の中でHallもまた、ゴールトンの劣等人種に関することばを引用している。「思ふに體育の教化上の價値たる甚大なり、…然かもガルトン(Galton)氏は希臘人が吾人に優ることは猶吾人が黒奴に優るが如きを論ぜり、…若し能生理的完全に到達する得んには、道徳的及精神的優越も亦從て得らるべく、否ずんば國民的文化は其基礎不安なるを免かれざるなりと。…將來の最優國民たるべきものは、身體に對して最知慮ある注意を為したるものなるべき」。ゴールトンの影響の大きかつたことがわかる。他方で、優生学に對する批判がなかつたわけではない。Kevles(1985)は、ゴールトンの優生学が「人種改良」の名の下に人間世界に如何に大きな影響を及ぼしたかを、今後への警鐘の意味を込めて告発している。

第I部で、若くて結婚していない女子は、西洋に送られ、白人男性との結婚を推奨される、こんな話がまことしやかに噂され、人々が動揺したこともあつた。欧米白人との混血により日本民族の優良化を図りたいとの願望の表れであつたのであろうか。概観したように心理研究において優生学に言及した論文は少なくない。全ての論者が優勢学支持一辺倒ではないが、批判を呈する場合にも、何人かは日本人の優良化そのものには積極的な関心を示している(齋藤茂三郎, 1915, 海野平徳, 1919)。優生学そのものが輸入されたものであり、民族の優良化の発想も当時世界的に優勢な思想であつた。ドイツにナチが結成されたのが1920年であり、優勢思想が法的に力を持つた。優生学を基盤に、民族や人種を改良するには、「劣等」な人の子孫を残さない、すなわち「劣等」な人々の結婚を制限する事が有効だと考えたのである。他方で、「優等」な人々の結婚を促進し、優秀な子孫を増やすことが、人種の改良に有効だと考えた。より極端に、断種という形で優勢政策が行われたのが1920年代で、1930年代前半にかけて法律が制定された(市野・立岩, 1998)。フランス、ドイツでは、國家の衰退没落への不安等から、1890年代から本格的に議論されはじめたのである(マーク・B・アダムズ, 1998, スティーブン・トロンブレ, 2000)。ヨーロッパだけでなく、ナチの優生思想は、アメリカの優生学と強く結びついていたことが指摘されている(シュテファン・キュール, 1999)。優生学は過去の問題となつてはではなく、現代においても形を変えつつ継承され、議論されている(市野・立岩, 1998, ブライアン・アップルヤード, 1999)。日本においては、戦後「優生保護法」(1948)が制定され、特定の障害者に対する「断種」手術の条件も規定されていた。なお、19世紀に入って「人種」という概念が頻りに用いられるようになるが、何を以て人種の違いを区別するかは難しく、「人種」の定義の仕方には歴史や文化が深く関わつていられるといわれる(フランソワ・ド・フォンテット, 1988)。いずれにしても、第一次世界大戦を目前にし、國威を發揚するために、日本民族を優秀なものに人種改良し、強力な日本帝國・國家を創出することが焦眉の課題であつた。心理学もまた、この目標を研究の俎上にのせ、解明すべき重要課題として

設定していたことがわかる。

第I部で見た社会の動きや人々の心理と、心理学における研究内容との間には強い関連が認められ、社会的に重要な課題が心理学研究に強く反映していたということができよう。

3 知能テストの利用・応用・実用化と日本民族

知能テストは、日本「民族」の優秀性、人種的優秀性を測定するものとして利用された面がある。本研究II部で分析の対象として取りあげた、「心理研究」を発行したのが心理学研究会であった。心理学研究会は、大正時代に入り、国民を心理学の面から啓発することを目的として、「心理叢書」を刊行している。松本亦太郎(1917)は、叢書の刊行にあたって「序」で次のように語っている。「心理學の研究には心の働く根本的形式に關するものと、その具體的發顯に關するものとの二方面がある。抽象概括的に心理を論ずるに當っては歐米心理學者の設定したる所をその儘採用して差支ない場合が多い。然るに心の具體的方面は國の文化に従ひ、風土氣候に従ひ、身體的素質に従ひ、種々に發顯するものであるから、西洋の社會、國土或は民族の間に發った心理現象を以て、直に之を我が國の民族に期待する事が出来ない。歐米人と日本人との間に種々の相違があるから、日本人の間に現るゝ具體的心理現象は之を歸納的に觀察し、これが心理的説明を試みなければその真相を明にすることが出来ない。然にかゝる具體的心理現象に關する研究は、是迄極めて少數のものを除いては我國に於ては未だ發表されてゐない。『心理叢書』は主として具體的心理現象に關する我國に於ける研究を發表する單行本の聚集である。…之を以て一は心理學の發達を助長し、一は實際生活の諸機關の施設及び運轉に對して、基礎的知識を供給し、是等をして科學的基礎の上に立たしめんと希望を有して居る」。心理叢書の発刊は日本に於ける一つの新運動であると、大きな期待を表明している。したがって、心理叢書で刊行された本は、当時としては心理学研究において重要なテーマを扱ったものであると理解することができよう。松本(1917)自らが編集し、村瀬雄平が著した「智能の遺傳」がその一つである。知能研究においても、その優劣の如何によっては国家の盛衰が左右されると考えられており、民族主義的な傾向が見られる。村瀬は、緒論において次のように述べている。「遺傳の研究は學問上重要なもののみならず、其知識の實際的應用は一家の隆替、一國の盛衰に關する。遺傳の事實は昔から一般に認められてゐるが、遺傳に關する俗間の知識は極めて幼稚で甚だしい誤謬を含んでゐる、それが爲めに從來家族及び國家の被むった損失は蓋し尠少でない。抑も優良な父母からは概して優良な子供が生れ、劣等な父母の子供は概して劣等兒である、而して肉體上に於ても精神上に於ても父と母とは子供の諸性質の決定に平均上同等の寄與をなすものである。されば從來父系のみを重んじて母系を輕視した謬見を破り、配偶者の撰擇に思慮を用ひ、優良なる男女が結婚して優良なる子孫を儲くることは、啻に一家繁榮の基なるのみならず、また一國一社會の利益である」。人の成長・發達は遺傳的に規定されるところが大きく、遺傳を考慮した結婚をすることが、優良な子どもを生み出すのに必要だという。ここには、優生学的な発想を見ることができる。問題があるとしながらも、断種法も示唆されている。「劣等種族の繁殖を制限する最も有效なる方法は外科的手術によりて劣等者の生殖力を断絶するにある。乍併此方法を實行するには國家の權力を借りる必要があり、又其當否に就ては他の見地よりする社會政策や人權問題の上から大に議論がある。…繁殖力の断絶が救治すべからざる少數の最劣悪者に限らるゝのは當然の事である」。心理テストが、適性の判断や個人の精神的發達の診断の域を超え、国家施策の観点から述べら

れている。

さらに、優良な子どもを育てることは、国家の命運にとって重要であると述べる。「一國人口の量に於ける消長は固より大に留意すべき事柄であるが、其よりも一層重要な質の問題である。劣悪なる分子の増加は負債の増加と同じく、社會は其資産を彼等の爲めに蕩盡せられ、過重の負擔の爲めに漸次衰滅に向ふであらう。之に反して有爲なる人物が輩出して國民力量の平均價が高まるならば生産の改良、富源の開發等によって國力は益々増進するであらう。凡ての大事業は有能なる個人の明察と手腕とを要求し、一國の文化は天才的先覺者の指導を待つて發展する、而して偉人天才は概ね有能者の家族から出る。然らば有能者の増加を圖つて人傑出現の機會を多くすることは國家百年の計として甚だ肝要である」。近代国家として發展するためには、優秀な知的能力を持つ子孫が必要であり、そのためには「人種改良」も視野に入れなければならないという。「歐米に於ける優良種族の衰勢、劣等種族の増長は最早打ち捨て置けざる程顯著な事實となつた。如何にかして此状態を改めざれば國家の前途は實に岌々乎として危い。世の經世家、慈善家、社會改良家は何れも社會の健全なる發達を希ひ、人類の幸福を増進せんことを期する者であるが、從來…境遇の改良のみによって這般の目的を達し得べしとの信念に基づいてゐた。乍併遺傳學者の見所では境遇の影響は遺傳の力に比して復かに小なるものである。如何に境遇を改善しても人々の遺傳的素質を改良せざる限り社會の劣悪分子は永久に其跡を絶たない」。知能の問題は単に個人の問題だけではなかつた。欧米に比肩する日本の国家を造る上で、優秀な民族の生産は必須であり、その意味では知能研究は日本「民族」「人種」の欧米並みの優秀さを「科学的」に実証する役割を担っていた。「我邦は最近數十年の間に文化に於て武力に於て未曾有の大發展を遂げ、今や東洋唯一の盛國として世界列強の間に伍するに至つたが、其と共に我民族の職責は愈々重きを加へ、一方には極東に於いて邦人の經營施設を要するもの益々多く、他方には西洋文化移植の時期漸く過ぎて本邦固有の文化を産出すべき時期に入らんとしてゐる。…爰に於て吾人は特り國民の平均價を維持するを以てれりとせず、其をして彌々高らしむべく、又一般に我民族の長所は益々之を發揮し、短所は之を改良又は除去するに努むるの要を感ずる。然らば即ち人種改良は我國にありても決して學者の閑問題ではなく、我が民族の進化發展の爲め一方に於ては優生學的調査研究を盛にし、他方には斯學の教ふる所に從つて實行の方法を講じなければならぬ」。西洋の主要国と比較して、優るとも劣らぬ日本人でなければならなかつたのである。

知能研究において、日本人と欧米人との優劣を明らかにすることは、研究者にとって最も強い関心であつた。例えば黒澤(1917)は、叡智指数なるものを算出し、結局は日本人は欧米人と比較してもかなり高い値を示すと指摘した。日本人は欧米人に劣らなかつたことと主張したのである。また、テルマン(1923)の知能テストの国際比較研究が紹介され、その中で日本の児童の知能は欧米の児童並みに優秀であると結論づけられている。さらに、匿名の筆者(1925)は、日本の児童の知能が、欧米の子供と同等のものであり、喜ばしいことであるとしている。知能検査は、当時からさまざまな問題点も指摘されていた。しかし、日本人の優秀さを示す客観的な指標として、盛んに利用されていた。

引用文献

- 青木澄夫 2000 日本人のアフリカ「発見」 山川出版社
 有賀長雄 1885 教育適用 心理学 上巻・下巻 牧野書房 (大泉博監修 1996 文献選集 教育と保護の心理学 明治大正期 第1巻 クレス出版)
 朝日新聞 2001年 7月11日 「単一民族発言? 田中外相語る」
 朝日新聞 2002年11月17日 「難民への思いやりどこに」
 坂西友秀 2002 西洋人と黒人に対する日本人の人種ステレオタイプの形成に関わる心理—歴史的背景 埼玉大学紀要 教育学部 (教育科学 I) 第51巻 第1号 65-84.
 坂西友秀 2002 鎖国前後における日本人の西洋人観・黒人観の心理—歴史的背景 埼玉大学紀要 教育学部 (教育科学) 第51巻 第2号 73-95.
 ブライアン・アップルヤード 1999 優生学の復活 (山下篤子訳 毎日新聞社)
 (Bryan Appleyard 1998 BRAVE NEW WORLD. Penguin Putnam Inc.)
 Darwin, C. 1859 On the Origin of Species by Means of Natural Selections. (八杉竜一訳 9163 種の起源 岩波書店)
 遠藤隆吉・市川源三 1910 男女青年之心理及教育 敬文館書房
 福澤諭吉 1869 掌中万国一覽 (富田正文編集 1981 福沢諭吉選集 第二巻 岩波書店)
 フランソワ・ド・フォンテット 1988 人種差別 (高演義訳 1989 白水社)
 G. Stanley Hall 1910 青年期の研究 (本良勇次郎他譯)
 外務省外交資料館日本外交史辞典編纂委員会, 1992 日本外交史辞典
 Golton, F. 1869 Hereditary Genius; an Inquiry into its Laws and Consequences. (甘粕石介譯 同文館 1935 天才と遺傳 岩波書店)
 長谷川時雨 1983 旧聞日本橋 岩波書店
 服部誠一 1874 東京新繁昌記 (山本三生編 1931 現代日本文学全集 第一篇 「明治開化期文学集 改造社」)
 本庄太郎 1897 児童心理学 博文館 (大泉博監修 1996 文献選集 教育と保護の心理学 明治大正期 第2巻 クレス出版)
 市野川容高・立岩真也 1998 障害者運動から見えてくるもの 現代思想 「特集 身体障害者」 Vol. 26-2 p258-285.
 イ、ソーンダイク 1904 人間性研究 (北澤定吉譯) 日本済美會
 家永三郎編 1978 日本の歴史 5 明治国家と民衆・日本の資本主義とアジア ほるぷ出版
 石井良助・服藤弘司 1995 幕末御触書書集成 第六巻 岩波書店
 Kevles, D. J. 1985 In the Name of Eugenics. Genetics and the Use of Human Heredity. (ダニエル・J. ケヴルズ 1993 西俣総平訳 優生学の名のもとに 朝日新聞社)
 香原志勢 1988 人間、この感性的なるもの—人種の問題— (川田順造・福井勝義編 民族とは何か 岩波書店)
 小泉又一 1908 教育的心理学 大日本圖書
 京大日本史辞典編纂会 2000 新編 日本史大辞典 東京創元社
 マーク・B・アダムズ編 1998 比較優生学史 (佐藤雅彦訳 現代書館)

- (Mark B. Adams 1990 The Wellborn Science: Eugenics in Germany, France, Brazil, and Russia. Oxford University Press, Inc.)
 松本亦太郎編・村瀬雄平著 1917 知能の遺傳 (日本人についての研究) 心理學研究会
 Maurice Reuchlin 1957 HISTOIRE DE LA PSYCHOLOGIE Presses Universitaires de France
 (モーリス・ルシュラン 1959 心理学の歴史 (豊田三郎訳) 白水社)
 南 博偏 1976 心理学の名著 学陽書房
 南 博 1994 日本人論—明治から今日まで— 岩波書店
 宮城栄昌 1975 沖縄の歴史 琉球新報社
 永原慶二 1999 岩波日本史辞典 岩波書店
 中山泰昌 1934 新聞集成 明治編年史 全十五巻 林泉社
 中沢信午 1978 メンデルの発見 共立出版
 日本心理学会 2003 日本心理学会70年史 (財)日本心理学会
 小川正人・山田伸一 1998 アイヌ民族近代の記録 草月館
 岡本春一 1963 フランシス・ゴルトン (四)—近代心理学史、補注— 岡山大学法文学部学術紀要 第十六号 47-70.
 岡本春一 1976 ゴルトン—『天才と遺傳』— (南博編 心理学の名著 12選 学陽書房 I 23-41)
 岡本春一 1987 フランシス・ゴルトンの研究 ナカニシヤ出版
 大泉 博 1977 近代日本における教育心理学の問題 心理科学 第1巻第2号 1-11.
 大泉 博 1998 明治教学としての心理学の形成 (心理科学研究会編 1998 日本心理学史の研究 法政出版 1~35頁)
 大下尚一・有賀貞・志邨晃佑・平野孝 1989 資料が語るアメリカ 有斐閣
 大槻快尊 1911 実験心理学 成美堂
 リーヒー, H. H. 1986 心理学史—心理学的思想の主要な潮流— (宇津木保訳) 誠信書房
 佐藤達也 1998 心理学研究の自立: 学会・留学・実験 (佐藤達也・溝口元偏 通史 日本の心理学 北大路書房 第4章)
 Scripture, E. W. 1901 実験心理学 上・下 富山房
 スティーブン・トロンプレ 2000 優生思想の歴史 (藤田真利子訳 明石書店)
 (Stephen Trombley 2000 THE RIGHT TO REPRODUCE. A. P. Watt Limited)
 下田次郎 1904 女子教育 金港堂書籍
 篠田鈺造 1996a 明治百話 上・下 岩波書店
 篠田鈺造 1996b 幕末百話 岩波書店
 シュテファン・キュール 1999 ナチ・コネクション (麻生九美訳) 明石書店
 (STEFAN KÜHL 1994 THE NAZI CONNECTION. Eugenics, American Racism and German National Socialism. Oxford University Press, Inc.)
 心理學研究会 1912~1925 心理研究 第一巻~第廿八巻
 心理學研究会 1913 明治年間に於ける心理学發達の史料 心理研究 第13巻 228-249.
 塩田庄兵衛・長谷川正安・藤原彰編 1984 戦後史資料集 新日本出版

高木八尺・末延三次・宮沢俊義編 1957 人権宣言集 岩波書店
高良倉吉 1986 続おきなわ歴史物語 ひるぎ社
東京朝日新聞 復刻版 日本図書センター
内川芳美・松島栄一監修 1983 明治ニュース事典 毎日コミュニケーションズ
山川菊江 1983 わが住む村 岩波書店
横浜開港資料館・横浜居留地研究会 1996 山川出版

第二部

マイノリティに対するステレオタイプと
現代的偏見に関する研究

セクシャル・マイノリティに対するセクシャル・マジョリティの 態度とカミング・アウトへの反応

桐原 奈津*・坂西 友秀**

第一章

セクシャル・マイノリティに対する セクシャル・マジョリティの態度と カミング・アウトへの反応

目的

マイノリティに関する研究の多くは、人種的な偏見や差別に焦点を当てるものが多かった。しかし、差別や偏見の対象は、人種的なマイノリティに限られたものではなく、宗教的マイノリティであったり、女性であったり、障害者や弱者や病気の人たちであったりする。日本におけるハンセン病患者に対する処遇が人権侵害であり、政府自らの手で差別と偏見を作り出してきたことは、周知の事実である。1960年代に黒人の公民権運動や女性解放を目指した「ウーマンリブ」は、それまで当然視されてきたマイノリティや女性に対する公然とした偏見や差別を厳しく問うことになった。公民権運動にみられる世界的な人権獲得と擁護の運動は、従来広く蔓延していた偏見や差別の存在を批判し、その改善と解消を焦眉の課題とするに至った(猿谷,1968)。マジョリティの子どもが通う学校に、マイノリティの子どもを受け入れさせ共学させるバッシング、一定の比率でマイノリティの学生の入学を大学が認めるなど具体的な取り組みが展開された。こうしたさまざまな取り組みの甲斐あって、人々の間にある偏見は徐々に減少してきた。このことを示す研究報告も数多くなされている(Brown,1995)。

Brown は、Dovidi & Fazio (1992) の研究を引用して、白人アメリカ人の人種的なステレオタイプと態度が歴史的に大きく変化しているこ

とを示している。例えば、黒人アメリカ人を記述する否定的な特性語を被験者が選ぶパーセンテージを1933年、1967年、1990年の各年代間で比較し、次のような結果(%)を得ている。(黒人は)「迷信的」:84,13,3,「怠け者」:75,26,4,「無知」:38,11,5,「ばか」:22,4,3,「身体が汚い」:17,3,0,「信用できない」:12,6,4。同様に1963年、1976年、1985年の調査でも似た傾向が示されている。「夕食に黒人の友だちを連れてくることに家族が反対する」:52,26,20,「白人と黒人が混合して結婚することを禁ずる法律に賛成する」:69,35,28,「白人と黒人は別々の学校に行くべきである」:38,20,7。Asher & Allen (1969) と Hrabá & Grand (1970) の子どもの人形遊びを用いた研究でも、人種的な偏見が時代をおって減少していることが示唆されている。人々の差別的な考えは、時代の変化に伴って減少している。この主張を支持する研究が行われてきているのである。

しかし、人々の偏見は確実に弱くなっているのであろうか。「偏見の減少」に疑問を呈する研究も少なくない(例えば、Vanman,1997)。McConahay (1986) は、偏見はなくなっているのではなく、姿形を変えて現在も存在していると考えている(Brown,1995より引用)。つまり、人種主義には旧来型のものと同様のもものが併存しているというのである。前者は、「あなたと同じ程度の収入と学歴をもつ黒人家族が隣に越してきたとしたら、あなたは“とても気にする”、“少し気にする”、“全く気にしない”、

* 港区立教育センター教育相談室

** 埼玉大学教育学部学校教育(教育心理学)講座

(注) 本論文は1999年度埼玉大学大学院教育学研究科学校教育専攻教育心理学分野に提出した修士論文の一部を新たに分析し、まとめたものである。

of *Personality and Social Psychology*, 73,
pp.941-959.

和田 実 1993 同性友人関係：その性および性役割タイプによる差異社会心理学研究 第8巻 第2号 pp.67-75

和田 実 1996 青年の同性愛に対する態度：性および性役割同一性による差異 社会心理学研究 第12巻 第1号 pp.9-11

Whitley, B. E., Jr., & Kite, M.E., 1995, Sex differences in attitudes toward homosexuality : A coment on Oliver and Hyde(1993). *Psychological Bulletin*, 117, pp.146-154

謝 辞

本研究を推進するにあたり、回答者としてセクシャル・マイノリティーの方、大学生・大学院生の多くの方にご協力いただきました。また、お忙しい中ご指導下さった豊島区立第十中学校（調査時）の松永先生、快く情報を提供してくださった中央大学大学院の谷口さんにも大変お世話になりました。ここに改めて、感謝致します。

(2002年 9月30日提出)

(2002年10月25日受理)

The Attitudes and Reactions of the Sexual Majority toward Sexual Minorities

Natsu Kirihara Tomohide Banzai

Sixty-eight female and 57 male undergraduate students were asked to fill in a questionnaire about their attitudes and responses toward sexual minorities (homosexual men, lesbians, and bisexuals). In Japan, many people have gender stereotypes. Gender stereotypes make students expect that both men and women will behave in line with their sexual roles. The attitudes and responses of the participants in this study toward the behavior of the minorities tend to be negative because of the large discrepancy between the expected behaviors patterns for sexual minorities and the actual patterns. We predicted that male and female students would attribute more negative traits such as indecisive, strange, and slender to the sexual minorities, and have negative reactions to them when they come out. The results were as follows:

In general, male students have stronger tendencies to stress gender than female students, and were more negative to sexual minorities coming out. Participants tended not to recognize legal marriages between sexual minorities. The students with strong traditional orientations for male-centered human relations had more conservative attitudes toward the minorities than the students with weak traditional orientations. The results were discussed from the viewpoint of gender stereotypes and prejudice against minorities.

Key words : sexual minority, homosexual, bisexual, lesbian, gender stereotype.

J.Saitama Univ., Fac.Educ. (Educ.Sci. I), 52(1) : 55-80 (2003)

第二章

セクシャル・マイノリティと カミングアウト

セクシャル・マイノリティとカミング・アウト

目 的

同性愛者や性同一性障害（注5）に苦しむ人は、異性間の恋愛・愛情関係・結婚を前提にする伝統的な観念を強くもつ市井の人々から「異常」と見なされ、偏見や差別にさらされてきた。「男か女か。大半の人は自分の性別に疑問を抱かずに生きている。性同一性障害と呼ばれる人たちは心と体の性の不一致に苦しんでいる。身体への違和感を、ある人は『脱げないぬいぐるみを着せられているようだ』と表現する。同性愛と混同されがちだった性同一性障害への理解が進んだのは1998年、日本精神神経学会が定めたガイドラインに沿って埼玉医大での初の性別適合（性転換）手術が行われてからだ。同大と岡山大医学部で合わせて約700人が手術を待っている。「体の性に心押し込めようと苦悩していた人たちが、治療によって心が求める体を取り戻し、名前を変えて生きられるようになった」（朝日新聞、2002年10月9日）。同性愛や性同一性障害が、一般に理解されるようになってきたのはつい最近のことである（性意識調査グループ、1998、ギルバート・ハート、2002）。

英国国教会が「性的関係を持たないゲイ（celibate）に限って容認したのが1991年、世界保健機構がすべての公式文書に記載された病名のリストから「ホモセクシャリティ」の文字を削除したのが1993年である（LONDON ZOK、2002）。性同一性障害は、同性愛とは異なるが、生物学的な性に規定されない性指向・性アイデンティティを持つ点で、また男性は女性を、女性は男性を性愛の対象にすることを前提に考える性的マジョリティに対するマイノリティである点で両者は共通性を持つ。前掲のコラム記事はいう、「彼ら（性同一性障害者）の社会生活は安心からはほど遠い」と。「パスポートなど公文書の性別がもとのままだからだ」。性別適合手術を受けた人たち6人が各地の家裁に戸籍の性別訂正を2001年に申し立てたが、今のところ判決は訂正を認めていない。「性の自認は生後1年半～2年で確立するが、男性の部分を持つ女性もいれば、その逆もあり、心身を完全に男か女に分けられない人もいる。異性の服装で精神的安定を保つ人、ホルモン治療法や手術で心の性に一致する身体的特徴を得たい人など多様で、カウンセリングでは、違和感の程度や生殖能力、就職、結婚、戸籍など様々な問題を確認しながら、性の自己決定をしていく」（庄司理恵子、2002：朝日新聞、10月26日）。身体的な外形や自己の生物学的な性と異なる性を自認する性同一性障害やホモセクシャル、レズビアンなどのセクシャル・マイノリティに対する理解が徐々に広がってきたとはいえ、依然として厳しい現実がある。

我々の社会では、男性が女性に、女性が男性に恋愛感情を抱くこともあれば、男性が男性に、女性が女性に恋愛感情を抱く場合もある。しかし後二者は、同性愛者であると同時に少数者であり、今の社会では彼女/彼らが広く受け入れられているとはいえない。マイノリティに関わる問題は、他にも人種や宗教などいろいろある。マイノリティの中でも、セクシャリティを理由に、社会から迫害を受けたり、差別されたりする人々をセクシャル・マイノリティと呼び（VIVID セクシャリティを考える会、1

999)、ホモセクシャル、バイセクシャルやレズビアンなど sexual orientation (性的指向と訳される。本論文では性指向と記す。：注1) が、同性に向かう人たちも含まれる。セクシャル・マイノリティは、自認する性指向(同性愛等)を公にする(カミング・アウト：注2)か否かの選択を迫られる場合が多い。なぜならば、バイセクシャル、ホモセクシャル、レズビアンなど、それぞれの人がもつ性的対象の好みは、外見から他者が容易に判断することはできないからである。それ故に、同性同士の間で恋愛関係を発展させるためには、自らが同性愛者であることを相手に表明することが第1の必要条件になる。性指向がマイノリティである人は、自分からセクシャル・マイノリティであることを表明しなければ、性的魅力を感じ、恋愛感情を抱いていることを相手に伝えることができない。

現在の日本では、大多数の人がヘテロセクシャル(異性愛者：注3)であり、恋愛関係・婚姻関係の成立とその是認は、当事者双方がヘテロセクシャルであることを大前提にしている。このことは、「同性愛」の項目を辞典(金田一他,1986)で調べるとよくわかる。「同性愛(名詞)自分と同性の人に対する恋愛→ホモ・レズ」とある。それに対して、「異性愛」の項目は辞典には載っていない。同様に1998年版の学習研究社の辞典にも「異性愛」「ヘテロセクシャル」の項は記載されていない。「異性愛」という言葉はわざわざ説明する必要がないのである。相手に性的魅力を感じ、恋愛関係を築き、性的な愛情を抱くためには、双方が異性愛者であることが必須であり、疑う余地のない前提条件なのだ。「恋愛」の項を見ても「恋愛 男女の間の恋いしたう愛情」とある。つまり、「恋愛」は男女間で生じる感情で、そこから外れたものとして「同性愛」があるのである。辞書に「レズビアン」「ホモセクシャル」「バイセクシャル」の項目があるのに対して、「ヘテロセクシャル」の項目がないのも同様の理由からであろう。しかし、同性愛者が特別な属性を持つわけではない。「異性愛者であることは『言うまでもない』ひとつの属性であり、すなわち異性愛者の『アイデンティティ』は決して個人的に秘匿すべきプライベートなものではない。異性愛者の場合は自分がどういふセックスをするのかを公的な場所で言わないかもしれないが、自分の奥さんや夫の話をするをはばからない。つまり、異性愛者のアイデンティティはプライベートな部分とパブリックな部分をきれいに分離されているのだ。ところが、異性愛者のアイデンティティはその中に純粋に性的な部分がこうして防衛的なプライバシーのうちに含まれているのに対して、同性愛者のアイデンティティはすべての部分がセックスと同一視されがちであり、そのためにアイデンティティ全体がこのプライバシーによって覆い隠されてしまうのである。このようなわけで、ゲイ男性はそのパートナーの話をしただけで、「プライベート」な隠すべきセックスを、表立ったパブリックな領域に必要もなく持ち出してきた発言として受け取られてしまいがちなのだ」(キース・ヴィンセント・風間孝・河口和也, 1997)。

「ホモセクシャル」「レズビアン」という言葉から、男性同士、女性同士の性行為を想像する人も少なくない。実際に、1990年に東京都が行った「青年の家」への同性愛者の宿泊を禁止するという処分(注4)も、同性愛者を必要以上に性的な存在とし

て見ていることの一例ではないだろうか。一般的とされている異性愛者が、世界中の異性すべてを性的な行為の対象と見なしているわけではないのと同様に、同性愛者と呼ばれる人がいたからといって、彼女/彼が、周囲にいる同性全員を性的な行為の対象として見ているわけではない。異性愛者にもいろいろな人がいるように、同性愛者に分類される人々が、すべて共通した一定の特徴を備えているわけではない。

同性愛者であることをカミング・アウトすることによって受ける差別や偏見も少なくない。1990年に東京都の「青年の家」が、同性愛者による宿泊施設の利用を拒否した前述の事例では、都がとった具体的な措置は、男女別室ルールを同性愛者にも適用するというものであった。一見平等とも思える理屈で行われたこの処置は、公的施設からの同性愛者の排除に他ならない。その後、同性愛者団体(「動くゲイとレズビアンの会」,1997,アカー)が東京都を相手取り起こした裁判で東京都が行った答弁には、「青年の家は青少年の健全育成を行う施設であるから」というくだりがある。同性愛者は青少年の健全育成に悪影響を及ぼす、といわんばかりの陳述内容である。

赤十字社が行っている献血の申込書にも、奇妙な点が見られる。「より安全な輸血を行うために皆様方の健康状態についてうかがうためのものです」と書かれた問診票(2003年現在)の質問に次の事項がある。「この1年間に次のいずれかに該当することがありましたか。①不特定の異性と性的接触をもった」と問うた後に、「②同性と性的接触をもった」という設問がある。なぜ「不特定」の異性ととの性的接触と同列に同性との性的接触が問い質されているのであろうか。「特定の人とのセックス」あるいは「セイファーセックス」を行っていたとしても、「同性」との性的な接触を行った人は献血することができないのだ。ちなみに質問は、「③エイズ検査(HIV検査)で陽性と言われた。④麻薬・覚醒剤を注射した。⑤①～④に該当する者と性的接触をもった」と続いている。麻薬・覚醒剤の注射と同じくらい、もつといえばエイズ検査で陽性と言われた、つまりエイズ感染していることと同じくらいに同性との性的接触は「安全な輸血」の障害になるというのだろうか。これは明らかに同性愛嫌悪を示すものであろう。

同性同士の間で交わされる恋愛感情、憧憬などは、現在だれにとっても奇異なものとして映るのであろうか。中学・高校と女子校に通学し、同性同士のカップルを日常的に身近に見、自ら同性に対して恋愛感情を抱いた経験のある女性(24歳)にとって、同性を好きになることは自然な感情であり、違和感を引き起こすものではなかった。したがって、彼女は、同性同士の愛情の交換が極めてまれな現象であり、同性愛者がセクシャル・マイノリティであることを意識することはなかった。同性愛を意識する以前に、前述のように同性のカップルが、何の問題もなく、周囲から特別視されることなく、普段の生活にありふれた存在としていたのである。同性愛/異性愛という分類がなされ、同性愛に対する誤解と偏見があることに気づかされ、この問題に関心を持つようになったのは、彼女の大学入学後のことであった。思春期・青年期に女性が同性に対して強く憧れ、好意的な感情を抱くことは、珍しいことではない。こうした現象に関して、心理学から説明が試みられてきた。一つは、同性愛を青少年が成長

の過程で通過する一過性のものとして捉える視点である。「中学から高校にかけての一時期に同性愛と言われる現象が見られることがある」(詫摩, 1986)などは一例であろう。他には、異性愛を正常とし、同性愛を異常または性的倒錯として扱うものも少なくない。我々が行った先の調査研究(桐原・坂西, 2003)でも、セクシャル・マジョリティである異性愛者は、同性愛者とりわけホモセクシャルに対して否定的なイメージと対応(「なよなよしている」「病气」「友達をやめる」「襲われる」、等)を示す傾向が強かった。

セクシャル・マイノリティを異常視するこのような社会環境で生活しながら、自らを同性愛者として自認するには強力な抵抗と多大な困難がともなうことは想像に難くない。性同一性障害の治療にあたる医師のことばは自己受容の難しさを表している(庄司理恵子, 2002年10月26日, 朝日新聞)。「男なら何でもできる。早くホルモン治療を受けたい。乳房切除も考えている(性同一性障害に苦しむ16歳の女子高校生)」。男装すれば自分を受け入れられるのか実際に経験することを提案し、ひげや体毛が濃くなる、声が低くなるなどホルモン療法の効果だけでなく、気分不安定や肝障害などの副作用も認識するようにして、カウンセリングを続けている」。カミング・アウトするには、自己のセクシャル・マイノリティの受容に加え、他者からの理解と受容を得るという新たな困難を招来し、解決を迫られる。カミング・アウトは、社会的な拒絶と排斥を生むおそれがあるのである。前記の女子高校生の苦悩のことばが紹介されている。「メールで知った女の子と付き合ったりしているが、『一番の親友には、反応と結果が怖いので、うち明けていない。親にはもっと話せない』」。セクシャル・マイノリティが、自分の性指向について周囲の人々から理解を得ようとカミング・アウトするためには、自己受容と他者受容の二重の困難をくぐり抜けなければならないのである。

同性愛者としてカミング・アウトすることの意味について、前出のアカーが口頭弁論資料集のなかで述べている部分を引用し参考にしよう。「1990年2月、府中青年の家でのリーダー会で、私たちが同性愛者の団体であることを紹介したのは「うそをつきたくない」という気持ちからでした。同性愛者であることを隠したり、異性愛者のふりをしてきた私たちが、自分が同性愛者であることを明らかにすることは、自分が同性愛者であることを受け入れ、同性愛者としての生き方を模索する第一歩であるとともに、同性愛者に対する偏見や差別に身をさらすということでもありました。偏見や差別は様々な形で表れます。侮辱や不躰な質問(時には暴力)のように直接的攻撃の場合もあれば、ことさらな無視、あるいはそのようなプライベートなことをわざわざ言わなくてもいいのにとか、子どもにまで教える必要はないという、関わりを絶とうとする姿勢、時には私たちの気持ちを無視した必要以上の配慮やおせっかいの場合もあります。こうしたことで再び自分が傷つけられることを恐れてカミング・アウトができない同性愛者はたくさんいます」。同性を恋愛の対象にすることが、自然の感情であり、隠すべき事ではないにもかかわらず、偏見や差別をおそれてカミング・アウトできない現実がある。

本論文では、セクシャル・マイノリティである女性自身の意識と、自ら同性愛者であることをカミング・アウトする意味について明らかにすることを目的とする。自己の性指向が同性に向き、自分がセクシャル・マイノリティであることを他者にカミング・アウトすることが、告白する当の本人自身にとってどのような意味を持つのかを聞き取り調査を通じて検討する。また、カミング・アウトが、セクシャル・マイノリティの人々の日常生活におけるストレスとどのような関係を持つのかについても吟味する。事前の調査(桐原, 1997 卒業論文, 未発表)においては、居住形態や、「お付き合いした経験」(同性との恋愛関係)など、いくつかの要因がカミング・アウトすることと関連していることが示唆された。例えば、カミング・アウトしたことがある人の方が、カミング・アウトしたことがない人よりも「お付き合い」したことがある人が多かった。また、カミング・アウトしていない人の方が一人暮らしの割合が高く、カミング・アウトしている人の方が、恋人と同居している割合が高かった。しかし調査では、カミング・アウトする相手の違いを全く考慮していなかった。調査から、だれにカミング・アウトするかによって結果に違いが生じる可能性があることが示唆された。実際、「家族」、「友人」、「職場の上司や同僚」の三者にカミング・アウトする相手を分けた調査では、同性愛者の37%が家族にカミング・アウトしていた。友人へのカミング・アウトでは、「ほとんど知っている」、「何人かは知っている」、「同性愛者の友人のみ知っている」の3項目を合すると、実に92%の同性愛者が友人にはカムアウトしている。しかし、職場でのカムアウトとなると、84%の同性愛者がカムアウトしていない(中央大学文学部, 矢島ゼミナール, 1992)。

以上のことから、本研究ではカミング・アウトに的を絞り、だれに対してカミング・アウトするのか、その時相手の反応はどうだったのか、といった点を中心に調査し、考えられる支援の方法を探っていきたい。また、自分と同じ性指向を持つ人々と交流できる何らかの手段や媒体(以下コミュニティと呼ぶ)に参加しているか否か、参加してみた印象、参加後の変化についても調査する。先の調査では、女性のみを対象にしていたため、今回は男性に対しても調査を実施して、男女差を検討し、差があるとすればその差の分析を行う。

方 法

調査対象 性指向(sexual orientation)がマイノリティ(minority)である人々が集まるサークルや新宿2丁目などの繁華街にいた人を調査対象とした。またその人たちの知り合いも調査の対象とした。本人が自認する性指向がマイノリティである男性と女性を対象とした。その内訳は、関東近郊および関西の17歳から48歳までの31人である。

質問紙の作成 I 基礎データと居住地の地域性、II カミング・アウト、III 「コミュニティ」への参加の3つのカテゴリーに分け、各カテゴリーに適する質問項目を作成した。I 性別(女性・男性・半陰陽)やセクシャリティ(ゲイ・レズビアン・バイ

セクシャル・ヘテロセクシャル・わからない・どちらでもない)、性自認(女性・男性・トランスジェンダー・FTMIS: 頭で認識している自分の性別と、もって生まれた身体の性別が違う人(TS)で、もって生まれた性別が女性だった人・MTFTS: TSで、もって生まれた性別が男性だった人・その他)、職業未婚・既婚、恋人の有無、子どもの有無、居住形態(一人暮らし・親と同居・恋人と同居・配偶者と同居・その他)、現在の生活に対する満足度(「とても満足」～「非常に不満」の5段階評定)などの基本的な情報を得るための質問項目を用意した。次に、居住地について、都道府県名を答えてもらった後、各地域の地域性を問う質問をした。IIのカミング・アウトのカテゴリーでは、1親に対するカミング・アウトについて、①カミング・アウトした経験の有無、②相手(親)の反応(拒絶的・理解の努力・理解・反対・悲嘆・病気扱い・その他)、③その後の経過(交流途絶・必要事項以外会話断絶・無変化・より親密化・その他)、④現在の様子、⑤カミング・アウトの良否(「非常に良かった」～「しなければ良かった」の5段階評定)をたずねた。さらに同様の質問を、2社会的に大きな意味を持つ相手に対するカミング・アウトについて行った。IIのコミュニティーへの参加のカテゴリーでは、①セクシャル・マイノリティの人々が集まる何らかの「コミュニティー」に参加しているか否か、②「コミュニティー」を知ったきっかけ(友人知人の紹介・雑誌等・その他)、③参加する前の印象(恐い・楽しい・派手・暗い・その他)、④参加するきっかけ(知人の誘い・思い立って・その他)、⑤参加後の印象の変化(一貫して否定的・否定から肯定・一貫して肯定的・肯定から否定・その他)、⑥生活の変化(楽しくなった自分を受容できるようになった・その他)、⑦自分のセクシャリティを知る人には話し、知らない人には話せない悩みの種類(友だち関係・恋愛関係・進路・仕事・家族関係・その他)、などについて質問した。以上の質問項目を一冊にまとめ質問紙を作成した。

手続き レズビアン・バイセクシャル・ゲイが集まるサークル(コミュニティー)や新宿2丁目(ゲイ・バーが密集する世界有数のゲイ・タウン)のバーで質問紙を配布し、回答を依頼した。調査への協力が得られ回答が終了したあとその場で回収した。あるいは、サークルの人に一括して質問紙と返信用封筒を渡し、配布・回収の上郵送してもらった。調査期間は1998年夏から冬であった。

結 果

1 セクシャリティと性別・性自認・職業・結婚・居住形態の関係

「あなたのセクシャリティ(誰を恋愛対象とするか)を教えてください」との質問に対する回答で、「ゲイ(男性で男性を恋愛対象とする人)」、「レズビアン(女性で女性を恋愛対象とする人)」、「バイセクシャル(男性も女性も恋愛対象とする人)」、「ヘテロセクシャル(異性を恋愛対象とする人)」、「わからない」、「どれでもない」の6選択肢のうちで人数が多かった「レズビアン」を選択した人と、「バイセクシャル」を選択した人に分けて、他の質問項目に対する回答を比較した。

セクシャリティ(誰を恋愛対象とするか)と性別(生物学的な性)・性自認の関係

性別が「女性」でレズビアンの人が17名、バイセクシャルの人が5名であった。レズビアンがバイセクシャルの約3倍となっている。性別が「男性」でバイセクシャルの人が4名だった。「女性で女性を恋愛対象とする」というレズビアンの定義からして、男性でレズビアンの人はいなかった。調査対象者が、自らの性別とは別に、自分の性を男性と女性のどちらであると認識しているか(性自認)を回答してもらった。性自認が「女性」でレズビアンの人が17人、バイセクシャルの人が5人だった。性自認が「男性」でバイセクシャルの人が4人だった。性(2)×セクシャリティ(2)の χ^2 検定を行った結果、有意であった($\chi^2(1)=8.92, p<.01$)。残差分析の結果、レズビアンは女性が多く、バイセクシャルが少ない。それに対して男性はバイセクシャルが多い。

セクシャリティと未婚既婚・子どもの有無の関係 レズビアンでは「未婚」が12人、「既婚」が1人、「離婚」が2人、「その他」が1人であった。バイセクシャルでは「未婚」が9人だった。バイセクシャルは全員「未婚」であった。レズビアンで「その他」を選択した人が一人いるが、その他の後のカッコ内に、「非婚」と書かれていた。これは「未婚」ではなく、自分の意志で結婚しないということの意味するのであろう。セクシャリティと未婚・既婚の間には統計的に有意な関係がなかったため、セクシャリティを込みにして χ^2 検定を行った。有意な結果が得られ($\chi^2(3)=46.51, p<.01$)、既婚者(4%)及び離婚者(8%)に比べ、未婚者(84%)が有意に多かった。次に、セクシャリティと子どもの有無の関係を吟味すると、レズビアンで子どもが「いる」人が5人、「いない」人が11人であった。バイセクシャルでは子どもが「いる」人はいなく、「いない」人が9人となっている。子どもの有無(2)×セクシャリティ(2)の χ^2 検定を行うと、有意傾向が認められた($\chi^2=3.51, p<.10$)。レズビアンには子どものいる人(31%)が多く、バイセクシャル(100%)には子どものいない人が多かった。

セクシャリティと恋人の有無及び恋人のセクシャリティとの関係 レズビアンで恋人が「いる」人が9人、「いない」人が8人であった。バイセクシャルで恋人が「いる」人が3人、「いない」人が6人であった。恋人の有無(2)×セクシャリティ(2)の χ^2 検定を行ったが、有意な関係は認められなかった。この質問に、「恋人がいる」と答えた人に、恋人のセクシャリティについてたずねた。レズビアンで恋人も「レズビアン」の人が8人、レズビアンで恋人が「バイセクシャルの女の人」が1人。バイセクシャルで、恋人が「バイセクシャルの男の人」が10人、バイセクシャルで恋人が「ヘテロセクシャルの男の人」が1人いた。セクシャリティ(2)×恋人のセクシャリティの χ^2 検定の結果は有意であった($\chi^2(3)=20.00, p<.01$)。レズビアンの人にはレズビアンの恋人をもつ割合が大きく(89%)、バイセクシャルの恋人をもつ割合は小さい(11%)。それに対して、バイセクシャルの人は男性のバイセクシャルの恋人をもつ割合が大きく(91%)、レズビアンの恋人をもつ割合は小さかった(9%)。

セクシャリティと居住形態の関係 レズビアンで「一人暮らし」が5人、「親と同居」が5人、「恋人と同居」が4人、「その他」が3人であった。バイセクシャルで「一人暮らし」が4人、「親と同居」が4人、「その他」が1人、「恋人と同居」はいなかった。レズビアンで「その他」を選んだ人の内容は、「2個所で暮らす。恋人と（住民票はこの家）、子ども・子どもの父親の家」に住む、「恋人とその子ども」と住む、「オトウト」と住む、であった。バイセクシャルで「その他」を選んだ人の居住は、「寮」だった。セクシャリティと居住形態の間に統計的に有意な関係はなかった。

セクシャリティと現在の生活への満足度 レズビアンで現在の生活に「とても満足している」人が2人、「まあ満足している」人が8人、「どちらとも言えない」人が4人、「どちらかといえば不満」な人が3人であった。「非常に不満」な人はいなかった。バイセクシャルでは「とても満足している」人がいなかった。「まあ満足している」人が7人、「どちらとも言えない」人が2人で、「どちらかといえば不満」な人も、「非常に不満」な人もいなかった。セクシャリティと現在の生活への満足度の間には統計的に有意な関係はない。そこで、セクシャリティを込みにして、生活への満足度（満足・どちらでもない・不満）の3カテゴリーで χ^2 検定を行った。有意な結果が得られ（ $\chi^2(2)=12.53, p<.01$ ）、生活に不満を感じている人（12%）に比べ、満足している人（65%）の割合が有意に大きかった。

2 カミング・アウトに関わる心理的要因と環境要因

親や周囲の社会的に大きな意味のある人（以下重要な人）に対してカミング・アウトした経験のある人を、「カミング・アウトしたことのある人」とし、経験のない人を「カミング・アウトしたことのない人」とした。そして、その他の質問項目に対する回答を比較した。

コミュニティへの参加と親・周囲の人へのカミング・アウト

親にカミング・アウトしたことのある人で、コミュニティに「参加している」人が5人、「参加していない」人が4人だった。親にカミング・アウトしたことのない人で、コミュニティに「参加している」人が14人、「参加していない」人が5人であった。コミュニティへの参加(2)×親へのカミング・アウトの有無(2)の χ^2 検定を行ったが、結果は有意ではなかった。そこで、カミング・アウトの有無別に、「コミュニティへの参加の有無」について χ^2 検定を行った。カミング・アウトした人では、「コミュニティへの参加」の比率に差がなかった。カミング・アウトしたことのない人では、「コミュニティ」に参加している人の方が、参加していない人よりも有意に多かった。

周囲の重要な人にカミング・アウトしたことがある人では、「コミュニティに参加している」人が18人、「参加していない」人が4人であった。カミング・アウトしたことのない人で、コミュニティに「参加している」人が1人、「参加していない」人が6人であった。コミュニティへの参加(2)×周囲へのカミング・アウトの有無(2)の χ^2 検定を行ったところ、結果は有意であった（ $\chi^2(1)=10.72, p<.01$ ）。残差分析を行った結果、コミュニティに参加している人の方が、周囲にカミング・ア

ウトしている割合が高かった。逆に、コミュニティに参加していない人の方が、周囲の重要な人にカミング・アウトしていない割合が高かった。

生活の満足度と親・周囲の人へのカミング・アウト 親にカミング・アウトしたことがある人では、現在の生活に「とても満足している」人、「どちらかといえば不満」な人、「非常に不満」な人はいなかった。「まあ満足している」人が6人、「どちらとも言えない」人が3人であった。カミング・アウトしていない人では、現在の生活に「とても満足している」人が1人、「まあ満足している」人が10人、「どちらとも言えない」人が6人、「どちらかといえば不満」な人が3人であった。「非常に不満」な人はいなかった。結果を理解しやすくするためカテゴリーを合併し単純化した。「とても満足している」人と、「まあ満足している」人を合せて、「満足」グループとし、「どちらかといえば不満」な人と、「非常に不満」な人を合せて「不満」グループとした。こうして、満足度に応じて「満足」「どちらともいえない」「不満」3カテゴリーに分けた。親にカミング・アウトしたことのある人で、現在の生活に「満足」している人が6人、「どちらともいえない」人が3人、「不満」な人はいなかった。親にカミング・アウトしていない人で、「満足している」人は11人、「どちらとも言えない」人が6人、「不満」な人が3人だった。親へのカミング・アウトの有無(2)×生活への満足度(3)の χ^2 検定を行ったが、有意な結果は得られなかった。そこで、カミング・アウトの有無別に、生活に対する満足度について χ^2 検定を行った。カミング・アウトしたことのある人では有意な結果が得られ（ $\chi^2(2)=6.00, p<.05$ ）、カミング・アウトしたことのない人では結果は有意傾向が認められた（ $\chi^2(2)=4.90, p<.10$ ）。しかし、多重比較を行ったが、何れの対の間にも有意な関係は認められなかった。数値上は、カミング・アウトしたことのある人には、「不満」のある人はいなかった。カミング・アウトしていない人には、「不満」のあるひとが3人（15%）いた。

周囲の重要な人にカミング・アウトした経験のある人で、現在の生活に「とても満足している」人が2人、「まあ満足している」人が13人、「どちらとも言えない」人が5人、「どちらかといえば不満」な人が2人、「非常に不満」な人はいない。周囲の人にカミング・アウトしていない人で、現在の生活に「とても満足している」人がいなく、「まあ満足している」人が4人、「どちらとも言えない」人が3人、「どちらかといえば不満」な人が1人、「非常に不満」な人はいない。理解しやすくするために、「とても満足している」人と「まあ満足している」人を合せて、「満足」グループとし、「どちらかといえば不満」な人と「非常に不満」な人を合せて「不満」グループとした。こうして、満足度に応じて「満足」「どちらともいえない」「不満」3カテゴリーを作成した。周囲にカミング・アウトしたことのある人では、現在の生活に「満足している」人が15人、「どちらとも言えない」人が5人、「不満」な人が2人だった。カミング・アウトしていない人では、現在の生活に「満足している」人が4人、「どちらとも言えない」人が2人、「不満」な人が1人であった。周囲へのカミング・アウトの有無(2)×現在の生活への満足度(3)の χ^2 検定を行ったが、有意な結果は得られなかった。そこで、カミング・アウトの有無別に、生活への「満足」（満足・どちらともい

えない・不満) 3カテゴリーについて χ^2 検定を行った。カミング・アウトしたことのある人では、結果が有意であり($\chi^2(2)=12.63, p<.01$)、「不満」(9%)のあるひとより「満足」している人(68%)が有意に多かった。カミング・アウトしたことのない人では、有意な結果は得られなかった。

親・周囲の人へのカミング・アウト経験の有無と居住形態の関係 親にカミング・アウトした経験のある人では、「一人暮らし」の人が4人、「親と同居」している人が2人、「恋人と同居」している人が2人、「その他」の人が1人であった。親にカミング・アウトしていない人では、「一人暮らし」の人が8人、「親と同居」が7人、「恋人と同居」している人が2人、「その他」の人が3人であった。居住形態(4)×親へのカミング・アウトの有無(2)の χ^2 検定を行ったが、有意な結果は得られなかった。

周囲の重要な人にカミング・アウトしたことのある人では、「ひとり暮らし」の人が9人、「親と同居」の人が5人、「恋人と同居」の人が4人、「その他」の人が4人であり、「配偶者と同居」の人は皆無であった。周囲にカミング・アウトしていない人では、「一人暮らし」の人が4人、「親と同居」の人が4人いた。「恋人と同居」している人と「配偶者と同居」している人、「その他」の人はいなかった。居住形態(4)×周囲の重要な人へのカミング・アウトの有無(2)の χ^2 検定を行ったが、有意な結果は得られなかった。そこで、カミング・アウトの有無別に χ^2 検定をすると、カミング・アウトしている人で有意傾向が認められた($\chi^2(4)=9.36, p<.10$)。多重比較を行ったが、有意な結果は認められなかった。数値上は「一人暮らし」(41%)が最も多く、「親と同居」(23%)、「恋人と同居」(18%)の順であった。

3 セクシャリティとカミング・アウト

「自分のセクシャリティについて親にカミング・アウト(*明らかにすること)したことはありますか」という質問に対して、「有る」を選択した人を、「親にカミング・アウトした」グループとし、「ない」を選択した人を、「親にカミング・アウトしていない」グループとした。この2つのグループと他の質問項目との関係を分析した。

セクシャリティと親へのカミング・アウト及びその善し悪しとの関係 レズビアンで親にカミング・アウトしたことが「ある」人が4人、「ない」人が12人だった。バイセクシャルで親にカミング・アウトしたことが「ある」人が3人、「ない」人が6人であった。親へのカミング・アウトの有無(2)×セクシャリティ(2)の χ^2 検定を行ったところ、結果は有意ではなかった。そこで、セクシャリティを込みにして χ^2 検定を行うと、有意な関係が認められた($\chi^2(1)=4.84, p<.05$)。親にカミング・アウトしていない人(72%)がカミング・アウトしている人(28%)より有意に多かった。

レズビアンで、親にカミング・アウトして「まあよかった」と思っている人が1人、「どちらとも言えない」人が3人であった。バイセクシャルでは、親にカミング・アウトして「非常によかった」と思っている人が1人、「まあよかった」人が1人、「どちらとも言えない」人が1人だった。セクシャリティとカミング・アウトしたことの善し悪しとの間に統計的に有意な関係はなかった。そこで、セクシャリティを込みにして、善し悪し度(よかった・どちらとも言えない・よくなかった)の3カテゴリー

について χ^2 検定を行った。結果は有意ではなかった。カミング・アウトすることの積極的な意味は認められなかった。

セクシャリティと重要な他者へのカミング・アウト及びその善し悪しとの関係

レズビアンで、社会的に大きな意味を持つ人(重要な他者)にカミング・アウトしたことの「ある」人が13人、「ない」人が4人であった。バイセクシャルで、カミング・アウトしたことの「ある」人が7人、「ない」人が2人であった。セクシャリティ

(2)×重要な他者へのカミング・アウトの有無(2)の χ^2 検定を行ったが、結果は有意ではなかった。そこでセクシャリティを込みにし、カミング・アウトの有無について χ^2 検定を行った。結果は有意であり($\chi^2(1)=7.53, p<.01$)、重要な他者に対してカミング・アウトした人(77%)の方がしていない人(33%)より有意に多かった(自分のセクシャリティについて、接する時間も長く関係が社会的に大きな意味を持つ人にカミング・アウトしたことが有りますか?)という質問に対して「ある」を選択した人を「周囲にカミング・アウトした」グループとし、「ない」を選択した人を「周囲にカミング・アウトしていない」グループとした)。

レズビアンで、カミング・アウトして「非常によかった」人が8人、「まあよかった」人が4人、「どちらかといえばよくなかった」人が1人であった。バイセクシャルで、カミング・アウトして「非常によかった」人が3人、「まあよかった」人が2人、「どちらとも言えない」人が2人であった。「よかった」・「どちらとも言えない」・「よくなかった」(3)×セクシャリティ(2)の χ^2 行くと、結果は有意ではなかった。そこでセクシャリティを込みにして、カミング・アウトの善し悪し(よかった・どちらとも言えない・よくなかった)の3カテゴリーについて χ^2 検定を行った。結果は有意であり($\chi^2(2)=24.09, p<.01$)、重要な他者にカミング・アウトしたことは「よかった」と回答した人(85%)が、他の2カテゴリーに回答した人(「どちらとも言えない」(10%)、「よくなかった」(5%))よりも有意に多かった。

セクシャリティと親及び他者へのカミング・アウトの有無 レズビアンで、「両方にカミング・アウトしたことがある」人が3人、「親のみにある人」が1人、親と他者「他者のみにある」人が9人、「両方にしていない」人が3人であった。バイセクシャルで、「両方にカミング・アウトしたことがある」人が3人、「親のみにある」人は1人、「他者のみにある」人が4人、「両方にしていない」人が2人となっている。セクシャリティ(2)×親・重要な他者へのカミング・アウトの有無(4)の χ^2 検定を行ったが、結果は有意ではなかった。セクシャリティを込みにして、カミング・アウトしたことがある相手4カテゴリー(重要な他者と親・親のみ・重要な他者のみ・無し)について χ^2 検定を行った。結果は有意であり($\chi^2(3)=11.96, p<.01$)、重要な他者へのカミング・アウト(52%)が親へのカミング・アウト(4%)より有意に多かった。親と重要な他者双方にカミング・アウトしている人は24%であり、双方にしていない人は2%だった。

全体的な傾向をみるため、親へのカミング・アウトと重要な他者へのカミング・アウトを合せて、カミング・アウトしたことがあるグループとして1つにまとめた。レ

ズビアンで、「カミング・アウト経験のある」人が13人、「ない」人が3人であった。バイセクシャルで「カミング・アウト経験のある」人が7人、「ない」人が2人であった。セクシャリティ(2)×カミング・アウトの有無(2)の χ^2 検定を行ったが、結果は有意ではなかった。セクシャリティを込みにしてカミング・アウトの有無について χ^2 検定した。結果は有意であり($\chi^2(1)=9.00, p<.01$)、カミング・アウトしたことのあつた人(80%)がない人(20%)より有意に多かった。

4 セクシャリティとコミュニティへの参加

セクシャリティの違いとセクシャル・マイノリティの人が集まる「コミュニティ」への参加の関係を吟味する。

セクシャリティと「コミュニティ」への参加・契機 レズビアンで「コミュニティ」に「参加している」人が12人、「参加していない」人が5人だった。バイセクシャルで「参加している」人が5人、「参加していない」人が3人であった。セクシャリティ(2)×コミュニティへの参加の有無(2)の χ^2 検定を行ったが、結果は有意ではなかった。そこでセクシャリティを込みにして、「コミュニティ」への参加の有無を χ^2 検定した。結果は有意傾向が認められ($\chi^2(1)=3.24, p<.10$)、「コミュニティ」に参加している人(68%)が、参加していない人(32%)より有意に多かった。

「コミュニティ」を知ったきっかけを見ると、レズビアンでは、「友人・知人の紹介」による人が6人、「雑誌等で見た」人が4人、「その他」が2人であった。バイセクシャルでは、「友人・知人の紹介」による人が1人、「雑誌等で見た」人が1人、「その他」が3人であった。その他の内訳は、「自分達で作った」、「インターネット」、「お店のチラシや口コミで」、「学校のポスター」等であった。セクシャリティ(2)×コミュニティを知ったきっかけ(3)の χ^2 検定を行ったが、結果は有意ではなかった。そこで、セクシャリティを込みにした分析を行ったが、有意な関係は認められなかった。

「コミュニティ」への参加の契機を見ると、レズビアンでは、「知人に誘われて」参加した人が4人、「思い立って」参加した人が5人、「その他」が3人であった。バイセクシャルでは、「知人に誘われて」参加した人が1人、「思い立って」参加した人が4人であった。「その他」の内訳は、「他に選択肢はなかった」、「はじめから声をかけられて参加した」、「体を動かしたいと思ったし、何も考えずに仲間が集まる必要があったから」であった。セクシャリティ(2)×コミュニティへの参加の契機(3)の χ^2 検定を行ったが、有意な結果は得られなかった。そこで、セクシャリティを込みにした分析を行ったが、有意な関係は認められなかった。

セクシャリティとコミュニティへの参加前後の印象及び生活の変化 コミュニティに参加する前の「コミュニティ」に対する印象は、レズビアンでは、「怖い」が1人、「楽しい」が3人、「その他」が7人であった。バイセクシャルでは、「怖い」が3人、「楽しい」が1人、「その他」が1人であった。「派手」と「暗い」を選択した人はいずれのセクシャリティにおいてもいなかった。その他の内訳は、「やらねばならな

いこと、必要なこと」「期待」「期待と漠然とした不安」「未知」であった。セクシャリティ(2)×コミュニティに対する参加前の印象(5)両者の間に統計的に有意な関係はなかった。そこでセクシャリティを込みにして、参加前の印象について χ^2 検定を行った。結果は有意であった($\chi^2(4)=14.00, p<.01$)が、ダンカンの多重比較ではどの対の間にも有意な関係は認められなかった。回答は「恐ろしい」(25%)、「楽しい」(25%)、「その他」(50%)に集中し、「派手」「暗い」を選択した人はいなかった。

参加前と後の「コミュニティ」に対する印象の変化を吟味した。レズビアンでは、「否定的から肯定的になった」人が4人、「肯定的なまま」の人が5人、「肯定的から否定的になった」人が3人であった。「否定的なまま」の人と「その他」を選択した人はいなかった。バイセクシャルでは、「否定的から肯定的になった」人が1人、「肯定的なまま」の人が4人であり、他の選択肢を選んだ人はいなかった。セクシャリティ(2)×参加前後の印象の変化(4)の χ^2 検定を行ったが、有意な関係は認められなかった。そこで、セクシャリティを込みにし、印象の変化4カテゴリー(否定的のまま・否定的から肯定的へ・肯定的のまま・肯定的から否定的へ)について χ^2 検定を行った。結果は有意で($\chi^2(3)=10.05, p<.05$)、印象が肯定的なままの人(53%)が否定的なままの人(10%)より有意に多かった。否定から肯定、肯定から否定へ印象が変化人の割合はそれぞれ29%、18%であった。

「コミュニティ」への参加の前後で生活がどのように変化したかを見ると、レズビアンでは、「知り合いが増えて生活が楽しくなった」人が9人、「自分を受け入れられるようになった」人が4人、「その他」の人が4人であった。バイセクシャルでは、「知り合いが増え、生活が楽しくなった」人が4人、「自分を受け入れられるようになった」人が2人、「その他」の人が3人であった。「その他」の内訳は、「あまり変化なし」「自分の気持ちに正直になれた」「仲間がいるという安心感、心強さ」「他者の存在に勇気づけられた」「性格が前向きになれた」等であった。セクシャリティ(2)×コミュニティへの参加による生活の変化(3)で χ^2 検定を行ったが、有意な結果は得られなかった。セクシャリティを込みにしてコミュニティへの参加による生活の変化(3カテゴリー)の χ^2 検定を行ったが、有意な結果は得られなかった。カテゴリー間に違いは認められないが、「知り合いが増えて、生活が楽しくなった」(50%)、「自分を受け入れられるようになった」(23%)人等が多く、全体的に肯定的な生活の変化が認められた。

悩みを話せる相手・話せない相手と悩みの内容・人間関係 回答者のセクシャリティを知っている人には話せるが、知らない人には話せない悩みについて吟味した。レズビアンでは、「友達関係の悩み」を選んだ人が2人、「恋愛関係の悩み」が16人、「仕事上の悩み」が2人、「家族関係の悩み」が5人、「その他」が1人であった。「進路についての悩み」を選択した人はいなかった。バイセクシャルでは、「友達関係の悩み」を選択した人が1人、「恋愛関係の悩み」が5人、「家族関係の悩み」が1人、「その他」が2人であった。「進路についての悩み」と「仕事上の悩み」を選択した人はいなかっ

た。「その他」の内容は、「自己にまつわる思想」「ナシ」「ないよ」等であった。セクシャリティー(2)×悩み(6)の χ^2 検定を行ったが、有意な関係は認められなかった。そこで、セクシャリティーを込みにして、話す内容6カテゴリーについて χ^2 検定を行った。結果は有意であった($\chi^2(5)=50.54, p<.01$)。「恋愛関係の悩み」(60%)を選択した人が、他の何れの話題(家族関係:17%、友だち関係:9%、仕事:6%)を選択した人よりも有意に多かった。「恋愛関係の悩み」は、自分のセクシャリティーについて知っている人には話せるが、知らない人には話せない話題である。

回答者のセクシャリティーを知っている人と知らない人との人間関係に違いがあるか否かを吟味した。レズビアンで、「大した違いはない」を選択した人が1人、「知っている人の方が自分らしくいられる」が13人、「知らない人とは自分を偽っている」が1人であった。「知らない人の方が…本来の自分だ」と「その他」を選択した人はいなかった。バイセクシャルでは、「大した違いはない」人が5人、「知っている人の方が自分らしくいられる」人が1人、「知らない人とは自分を偽っている」人が2人、「その他」が1人、「知らない人の方が…本来の自分だ」を選択した人はいなかった。セクシャリティー(2)×人間関係(5)の χ^2 検定を行った。両要因間に有意な関係はなかった。そこで、セクシャリティーを込みにして、人間関係の5カテゴリーについて χ^2 検定を行った。結果は有意であり($\chi^2(5)=50.54, p<.01$)、「知っている人の方が自分らしくいられる」と回答した人(58%)が、「知らない人の方が…本来の自分だ」(0%)、「その他」(4%)と回答した人よりも有意に多かった。

自由記述の内容は以下の通りであった。「私がどんな人のどんなところにひかかれているか、そしてそのことからどんなに力をもらってがんばれるか、私がどんなに同性が好きかを皆は知らない。男に守られるだけが女じゃないと思う。そういうみで気持ちをおさえているので、自分を偽っていることになるのかもしれない」、「恋愛の話がしやすいし、ラク。もっとヘテロ以外の存在を知って欲しい」、「知らない人の中では、自分が存在していない感じで、自己表現の途が閉ざされている奇妙な感覚がすることがある」、「やはり、女の人に目が行くから気使うし、男の人が近寄ると(下心あるときのみ)気持ち悪いし、それをごまかすのが大変。友人でいようと、ごまかし、かわしつづける」、「「don't ask, don't tell」方針なので、向こうが聞いてこない限りは、自分の事は話さないから、あんまり違いはないけど…。なんかうまく言えない」、「セックス、恋愛の相談は体験者でないとできないが、その他の関係はヘテロもヘテロ以外も変わらない」、「特になし」、等であった。「知っている人の方が自分らしくいられる」と回答した人が、自分を相手に理解してもらおうことの難しさを強く感じていることがわかる。

考 察

全体的な考察 統計的に有意な結果は得られなかったが、数値上は、バイセクシャ

ルの人よりも、レズビアンの方がカミング・アウトの経験者が多い。バイセクシャルの場合、世間一般で「普通」とされている異性を好きになる可能性もあり、その場合カミング・アウトする必要がない。一方で、レズビアンの人の場合、カミング・アウトしない限りは異性愛者として扱われる。自分の真意を隠し続けることや、わき起こる自然な感情の発露を無理に抑制することは、自責の念や自己嫌悪を生じさせ、カミング・アウトの必要を感じるさせるのかも知れない。

カミング・アウトして良かったと思うか否に関する質問に対しては、レズビアンでは、親にカミング・アウトして「まあよかった」と思っている人が1人、「どちらとも言えない」人が3人で、バイセクシャルで、親にカミング・アウトして「非常によかった」と思っている人が1人、「まあよかった」人が1人、「どちらとも言えない」人が1人であった。肯定と否定が相半ばする「どちらともいえない」の回答が半数を占め、カミング・アウトした時の相手の反応は必ずしも受容的ではなかったようだ。自由記述を見ると、カミング・アウトに伴い、積極的反応と消極的反応が入り交じった複雑な事態が展開され、すっきりと割り切れる事情にはないことが示唆されている。母親にカミング・アウトしたレズビアン女性は、次のように書いている。母親は、「否認し(そんなことはまるでなかったかのような反応)、パニックをおこし、そのあとはなかったかのようにふるまった」。その上、それ以後「いっさいそのことを話題にはしていない」。「カミング・アウトしたことについて良かったと思うか」と問う質問に、彼女は「どちらともいえない」と答えている。しかし、その後の自由記述に「母親には受け入れる力がないことがわかった。母娘関係を考え直す一つのヒントにはなかった」と一面では肯定的に回答している。

バイセクシャルの男性も母親にカミング・アウトしてよかったと記述している。母親は「(理解する)努力はしていたが、いつか(異性愛者に)変わると信じていた」。母親がセクシャリティーの問題を良く理解しているか否か不明であるが、カミング・アウトした結果として「付合っている人(恋人)を性別を問わず紹介できるようになった」し、「自分を隠さなくてもよくなった」。だから、カミング・アウトしてよかったと彼は思っているのである。この二人は、カミング・アウトを通じて自己開示することができ、さらに親との関係を客観的に冷静に考えるきっかけができた。このことがカミング・アウトしたことの大きな成果であったといえよう。

「接する時間も長く、関係が社会的に大きな意味を持つ(重要な)人にカミング・アウトして良かったと思うか」という質問に対して、レズビアンの回答では、カミング・アウトして「非常によかった」が8人、「まあよかった」が4人、「どちらかといえればよくなかった」が1人だった。バイセクシャルでは、カミング・アウトして「非常によかった」が3人、「まあよかった」が2人、「どちらとも言えない」が2人であった。親に対する場合と同様に、周囲の重要な人に対しても、カミング・アウトの後の相手の反応は肯定的なものばかりとはいえない。ただ一人「どちらかといえればよくなかった」を選択した人の自由記述を見ると、カミング・アウトすることの難しさが表現されている。相手から「聞かなかったような態度を取られた」ことで、「言っても(カ

ミング・アウトしても)、無かったことになったから)、カミング・アウトしたことは「どちらかといえばよくなかった」のである。しかし、たとえ相手の反応が肯定的なものでなかったとしても、関係を絶たれたり、カミング・アウトの事実をなかったことにされたりしない限りは、その後の関係のなかで、お互いに理解を深めることができる。つまり、カミング・アウトすることは、同性愛者であることを告げる単なる一つの行為だけではなく、その後の関係の変化ややりとりまでを含んだ、一連のプロセスなのである。性指向がレズビアンであるにもかかわらず子どものいる人がいる。おそらく、結婚して子どもを持つことに対しては疑問を抱く余地も無かったが、その後自分のセクシャリティに疑問を感じたのではないだろうか。

現在の生活の満足度では、比較的満足している人が多かったが、バイセクシャルでは、「どちらかと言えば不満」な人も、「非常に不満」な人もいなかった。これは、先程のカミング・アウトの必要性と関わっているのかもしれない。既述のように、バイセクシャルではそれほどカミング・アウトの必要性を感じないため、カミング・アウトできていなかったとしても、あまり不満に思うことはない。それに対して、レズビアンの方はカミング・アウトの必要性を感じていながら、カミング・アウトできていない現状に対して不満を感じるのではないだろうか。

「コミュニティ」に参加する前の「コミュニティ」に対するイメージでは、バイセクシャルの方は「怖い」というイメージを抱いているが、レズビアンの方は「楽しい」というイメージを抱いている。ところが、参加後の印象の変化では、肯定的な印象から否定的な印象に変化しているレズビアンがいる。これは、参加前の印象がよかった分、現実とのギャップがあったということなのかもしれない。コミュニティに参加する前に抱いたコミュニティに対する印象が、バイセクシャルよりもレズビアンの方がよかったのは、普段の生活での不満や理解しあえないことをセクシャリティに帰着させていて、同性同士、同じセクシャリティの者同士ならわかってもらえるはずだ、という強い期待を抱いていたためではないだろうか。当然のことだが、コミュニティの参加者同士、同性愛者という前提があったとしても、個人個人がわかり合う努力をしなければならない。コミュニティに参加することによって、「自分の気持ちに正直になれた」、「他者の存在に勇気づけられた」という肯定的な意見が多い中で、「他人まかせにしようとする人が多い」、「段々遠のいていった」等の意見もあり、関わり方の違いを反映していると考えられる。

コミュニティへの参加に関しても、統計的に有意な結果は得られなかったが、レズビアンに参加している割合と、バイセクシャルに参加している割合では、数値上はレズビアンの方が多い。これも上記と同様のことがいえるのではないだろうか。レズビアンである場合は、コミュニティに参加することで本来の自分を表現でき、参加しない状態では自分を偽っている。バイセクシャルの場合は必ずしもそうとは言えない。レズビアンの方の「知らない人の中では、自分が存在していない感じで、自己表現の途が閉ざされている奇妙な感覚がすることがある」という自由記述からも、こうした事情が裏づけられる。コミュニティの種類にもよるが、たいていのコミュニテ

ィーはレズビアン/ゲイのためのコミュニティであり、同性愛であることが前提になっている場合が多い。そのような場所では、バイセクシャルだった場合に、同性に対する恋愛感情を公言することはできても、異性に対する恋愛感情を公言しにくい状況がある。そのため、バイセクシャルにとっては、コミュニティであっても必ずしも居心地のいい空間とはいえないのかも知れない。

「自分のセクシャリティを知っている人と、知らない人との間の人間関係の違い」では、レズビアンは圧倒的に多くの方が、「知っている人の方が自分らしくいられる」と回答している。バイセクシャルの方のほとんどが、「たいした違いはない」と回答しているのと対照的だ。おそらく、レズビアンとバイセクシャルでは、生活の中で自らのセクシャリティについて意識する程度も違うのであろう。レズビアンである場合は、異性間カップルを前提とした会話では、常に違和感を感じるだろうが、バイセクシャルの場合は、異性にも恋愛感情を抱くのであるから、異性間カップルを前提とした会話にも加わることが可能なのである。

セクシャル・マイノリティのカミング・アウト セクシャル・マイノリティの側から、ヘテロセクシャルであることが前提とされる社会の中で、セクシャル・マイノリティとして生きて行くことの困難さ、誤解と偏見について明らかにしてきた。特に、カミング・アウトすることによってもたらされる不利益と解放感、カミング・アウトしないことの孤独感などについて明らかにすることができた。カミング・アウトの可否を問うた質問に対する自由記述において、「隠さなくても良くなったから」という趣旨の記述が目立った。カミング・アウトしていない状態は、「隠し事をしている」という精神状態にあることを意味するのであろう。相手の反応がどうあれ、隠し事をしないで済む状態になれることで、カミング・アウトして良かった、と実感することになるようだ。

ここで注意しなければならないのは、セクシャル・マイノリティという枠組みで一つに括ってしまっているが、レズビアンとバイセクシャルではカミング・アウトのもつ意味付けも異なるということである。特に、男性のバイセクシャルの場合は、セクシャル・マイノリティであることを隠し、異性愛社会のなかの規範に沿って生きていくことも可能である。男性のバイセクシャルは、カミング・アウトしなければ、男性優位の異性愛社会で、異性の恋人を探し、男性の特権を享受していくことができる。しかし、レズビアンの場合は、同性愛者としてだけでなく、女性として受ける不利益もあるのだ。本研究では、男性同性愛者の声を拾うことができなかったが、男性同性愛者と女性同性愛者の差異の研究は、今後の課題であろう。

セクシャル・マイノリティに対する市井の人々の態度や反応を明らかにすることを目的に、桐原・坂西(2002)は、一般大学生・大学院生を回答者に設定して質問紙調査を行った。この研究から、セクシャル・マイノリティに対する誤解と偏見が明らかになった。特に、ホモセクシャルに対する「なよなよしている」などの否定的なイメージや、ホモセクシャル(男性同性愛者)としてのカミング・アウト(女性では異性の友人からのカミング・アウト、男性では同性の友人からのカミング・アウ

ト)に対する「治すべき病気だと思う」、「気持ち悪いと思う」などの反応が浮き彫りになり、ホモセクシャルとしてカミング・アウトすることには非常に大きな困難をとまうことがわかった。先にも述べたが、ジェンダーに強く拘束されている男性は、男らしさの規範から逸脱したものとして「ホモセクシャル」を認識する。そのため、ホモセクシャルの人は「異性愛」という前提からはみ出した「同性愛者」というだけではなく、「男らしくない者」として二重の意味で否定されてしまう。

両調査結果を合せると、カミング・アウトする側と、される側の両方から捉えたカミング・アウトが見えてくる。カミング・アウトする側は、自分のことを知って欲しくて、理解してもらいたくてカミング・アウトする。カミング・アウトした人のなかに「カミング・アウトしなければよかった」と回答した人が若干いた。これらの回答をした人は、相手に「聞かなかったような態度を取られ」、「言っても、無かったことになったから」、「どちらかといえば(カミング・アウトしたことは)よくなかった」と感じたようだ。しかし、相手の反応が否定的ではあっても、「(カミング・アウトしたことで)隠さなくてもよくなったから、言っても良かった」と記述している人がいることなどから、カミング・アウトが複雑な意味合いを持つことがわかる。友人にカミング・アウトされた側は、非常に「驚く」。その驚きを上手に隠し、「そういう人がいてもいいんじゃない？」など、一見理解を示す言葉がけをする人が多かった。しかし、カミング・アウトした側には相手の真意がきちんと伝わっており、「受け入れられているようだ、よく解っていないような感じがしている」と自由記述している。友人からのカミング・アウトに対して「いつから(同性愛者になったの?)」という趣旨のことを聞いている人も多かった。異性愛が前提にあり、しだいに同性愛に移行する、という理解が行き渡っていることを感じさせる。カミング・アウトする側は、セクシャル・マイノリティであることを知って欲しくてカミング・アウトするのであるが、あくまでも、セクシャルリティはその人の特徴の一部に過ぎない。しかし、一度カミング・アウトしてしまうと、まるでセクシャルリティが当人のすべてであるかのように扱われたり、セクシャル・マイノリティの代表であるかのように見られたりする。『大学の中でゲイとしてカミング・アウトすると、皆が同性愛について僕に聞くようになってくる』(『実践するセクシュアリティ』, 1998)と書かれているように、カミング・アウトに対する反応について『セクシャル・マイノリティである僕の一挙一動を「そういう人だからそうする」みたいな感じで読み込みを始めた人もいた』という自由記述もあった。

「実は自分は同性愛者で、以前からあなたのことが好きだった」と告白されると、一転して「気持ち悪い」「治すべき病気だ」と思う人の割合が増え、「やめてくれー」「身の危険を感じる」などという自由記述がでてくる。特に男性に否定的な反応が強い。これは、男性同性愛者に対する否定的なイメージとも関連があると思われる。少々の嘲笑を伴って語られる、自動車で追突されたことを意味する「おかまほられちゃったよ」などという言い方にも、男性同性愛者に対する否定的なイメージが表れているのではないだろうか。極端に言えば、男性性の象徴としての「セックス(通常いわ

れているところではペニスによるヴァギナへの挿入を伴った異性間性交渉)」という行為に対して、男性同性愛者が行っている(と思われている)「アナルセックス(肛門性交)」は、男性性の危機として捉えられているのではないか。挿入する側、つまり性行為においても主導的な役割をとるべき男性が挿入されてしまい、受け身になることは、ジェンダーからいえば男性性を失った嘲笑されるべき事柄なのかもしれない。「と思われている」と表現したのは、肛門性交は異性間性交渉でもかなりの割合で行われており、男性同性愛者が必ず肛門性交を行っているわけではないからである。

マイノリティに対する差別と偏見 マイノリティである、というだけでこれほどまでに誤解と偏見にさらされなければならないのだろうか。日本国内には、他にも様々なマイノリティが存在する。例えば、在日韓国人や在日朝鮮人の人は、日本名を持って生活している場合が多い。外国人だということがわかると差別されるからである。実際に、朝鮮人学校に通う女子学生が通学途中にチマチョゴリを切られる、嫌がらせを受けるという事件が続発した(朝日新聞, 1994年10月6日, 1998年9月10日, 2002年12月20日)。視覚障害者や聴覚障害者などの障害者も、健常者をマジョリティとすればマイノリティになる。最近ではいくらか改善されたが、健常者を前提として作られている駅などの公共施設では、不自由な思いを強いられることになる。人身事故などで列車が止まっているとき、車内放送で説明があるが、聴覚障害者の方に対するフォローが行われている様には思えない。首都圏にある国立のU大学においても、車椅子の通行の支障となる大学構内の車止めが撤去される様子はない。最近までは、学部棟の入り口に設けられたスロープを使い、車椅子で学部棟に入ってきて、エレベーターがあるわけではなく、階段が出迎えてくれるだけであった。現在のような不況時には、障害者の人が真っ先に解雇の対象となる。埼玉県内では、多数の障害者を雇用していた中村製作所の倒産(1999年)により、多くの障害者が職を失い、その後就職できた人はほとんどいない(NPO・そよかぜ, 1999)。マイノリティに対する偏見、差別は、人種や民族問題と関連して議論されることが多い。しかし、マイノリティ問題は、多種多様であり、我々の日常生活にあるありふれた問題である。なによりも我々自身がある場面においては偏見や差別の対象にされるマイノリティであることも少なくないのである。マイノリティであるか否か、同じマイノリティであっても、否定的な属性を付与されたり、付与されなかったりするの、それぞれの社会・文化の在り方によって大きく異なることは、最近の文化人類学研究が実証するところである。

同性愛者を取りまく状況の国際比較 日本国内でも、同性愛者自身による自主的な活動は活発化している。「レズビアン/ゲイ映画祭」に対しては、東京都の外部団体「東京都歴史文化財団」が助成金を出している。東京でレズビアン/ゲイのパレードが開かれるようになってから、すでに数年以上が経過している。経済の分野でも、今や同性愛者は巨大なマーケティングの対象であり、国際ゲイ&レズビアン旅行業協会の調査によれば、ゲイトラベル(同性愛者向けの旅行商品)の市場規模は、現在米国内だけで470億ドル(約5兆円)といわれている(日刊スポーツ, 1999年11月26日)。日本でも1999年11月に、国内初の同性愛者専門の旅行会社「トゥルートラベル」が誕生

した。その後この会社は2001年に廃業し、航空券を卸売りする株式会社「ルウエスト」が同性愛者（ゲイ）だけを顧客とする旅行会社を設立することになった（日経流通新聞、2001年9月25日）。医学の分野でも、1995年、日本最大の精神医学の学会である日本精神神経学会は、正式に世界保健機構の疾病分類を採用し、同性愛が精神医学的異常でないことを明確に宣言した。これは非常に重大な効果をもたらした。それ以前、同性愛が精神医学的異常とされていたときには、自らが同性愛者であると認めることはきわめて困難だった。そのような状況でカミング・アウトすることは、自分が異常であると公表することであり、精神科に連れていかれ入院させられたり、カウンセリングを受けさせられることを意味した。正常な人間が、「あなたは精神医学的に異常です」宣告され、治療という名目で投薬され、「異常を治す」ためにカウンセリングを受けさせられたらどうか。どんなに屈強な人でも、精神的に異常を来してしまうだろう。同性愛は異常でも病気でもなく、治癒するものでもないのだ。精神科に入院させられ、カウンセリングを受けさせられ、「治りませんでした」と放り出された経験のある同性愛者は少なくない。

世界には、同性間カップルに婚姻と同等の権利を認める法律をもつ国もある。国家レベルで同性間カップルの関係を法的に承認したのは1989年のデンマークが初めてであり、以後、ノルウェー（1993年）、スウェーデン（1994年）、アイスランド（1996年）、オランダ（1998年）、フランス（1999年）において同様の制度が承認された（小原克博、2002、VIVID セクシャリティを考える会、1999）。これらは「登録パートナーシップ（Domestic Partnership）」と呼ばれるもので、当事者間の関係を公的機関に「登録」することによって、婚姻関係にあるカップルであれば受けられる様々な利益を保障する。パートナーが死亡した時の財産相続権の保有、パートナーの入院時の面会や付き添いの権限の保有、職場での扶養手当・社会保険などの受給資格の保有などである。財産相続権などの経済的な権利の獲得もさることながら、パートナーの入院時の面会や付き添いの権利は、非常に大きな意味を持つ。日本にはこのような制度がなく、ともに生活してきた同性のパートナーが、病気や事故で入院した時、悲惨な事態に見舞われるケースもある。他方のパートナーが面会を求めたが、「ご家族の方以外の面会はできません」といわれ、死に目にもあえなかった例もある。現在、日本で上述の諸権利を得るためには、養子縁組をするしかない。パートナーとして登録する場合と、一方がパートナーの養子に入る場合とでは、精神的な満足感は大きく異なるであろう。南アフリカ共和国では、1996年に同性愛者に対する差別を禁止する世界初の憲法が制定された（榎澤幸広、2002）。南ア聖公会ケープタウン教区のデズモンド・ツツ大主教は、同年同性愛者を支持し、「性的志向によって人を差別するのは人種や皮膚の色を基準とし差別するのと同様に非道徳的だ」との見解を表明した（小原、2002）。これは、あらゆる差別を禁止する、という文言のなかに性指向（sexual orientation）による差別も禁止したもので、エクアドル憲法（1998年）、フィジー憲法（1997年）にもみられるという（谷口、1999）。

一方、同性愛行為そのものを禁止する法律がある国もある。「このような行為を禁

止する法律は特にユダヤ＝キリスト教的思想やイスラム教圏に多く存在している。その刑罰も死刑から軽い罰金刑までさまざまである。同性愛行為を禁止する法律の多くに、男性の同性愛行為のみを規制の対象とする文言がみられるのも一つの特徴である」（谷口、1999）。国際的な人権NGOであるIGLHRC（The International Gay and Lesbian Human Rights Commission）の調査（1998）によれば1998年10月現在、同性愛行為を禁止している国は86ヶ国あり、そのうち男性同性愛行為のみを禁止の対象としているのは33ヶ国である。ここにも、同性愛に対する差別だけでなく、男女差別という二重の差別がみられるようだ。「ここが変だよ日本人」というテレビ番組（TBSテレビ、1999年9月1日放送）で、「同性愛」というテーマの時に行われた、「自分の子どもが同性愛者になったら、殺す」というインド人の発言や、「ガーナには同性愛者はいない」というガーナ人の発言が、同性愛に対する認識の低さを示している。ジャマイカでも、ゲイは batty man と呼ばれ蔑まれている。ジャマイカでは中世の魔女狩りのように「男らしさ像」にそぐわない人が batty man として、村の住人に処刑されたりしている、という。ジャマイカでは女性差別がひどく、女性は男性のために働いて子どもを産めばいいのだ、と思われており、レズビアンによるカミング・アウトなどは想像もできない。カミング・アウト＝射殺、という図式の成り立ってしまう国もあるのだ。

ギルバート・ハート（2002）は、文化とセクシャリティの関連性をめぐるいくつかの原理が明らかにされてきたとし、4点を指摘している。第一に、いつの時代にも非西欧社会には西欧社会同様な文化と性習慣の複雑なコード（規範）が存在している。第二にセクシャリティとは習慣や親族関係、家族関係といった社会の構成要素の一部であり、そういった社会システム全体を広く視野に入れたうえで理解しなければならない。第三に、性行動の多様性は何れの集団にも共通してみられる現象であり、セム・ジェンダー関係が広く許容されている社会も多い。西欧文化ではヘテロノーマルという規範（ヘテロノーマティブ）が社会的事実として支配的な影響力を行使しているが、それを盲目的に受け入れるのではなく、その影響力の解明に取り組むべきである。第四に、…西欧文化におけるセクシャリティの歴史への見直しが始まり、ゲイやレズビアンを社会に反逆するアウトロー扱いしてきた従来の法規範を人道的なものに書き換えようという動きが見られるようになった」（Pp. 38～39）。西欧社会で伝統的に認識されてきた同性愛/異性愛という二分法は、その正確な原因や理由については明確なものはないものの、近世への移行期に生じた。この性にまつわる変容には、ブルジョアの中流階級の価値観の制度化や、社会医学及びセクシャリティに関わる国家の言説の非宗教化、欲望及びアイデンティティに関する個別化した概念、核家族内の生殖の重視といった要因が関連している（Pp.78）と主張する。同性愛を異常視すること自体が文化的な所産であることに注意する必要がある。

マイノリティへの差別と人権問題 同性愛に対する差別は、女性差別などその他の差別とも無関係ではない。実際、フランスやアメリカなど、人権意識の高い国では同性愛に対する公的な（制度上の、或いは法的な）差別も少ないように思われる。フランスにおいては、「家族制度の崩壊である」などの反対意見もあったものの、1999年

にパートナーシップ法が成立し、婚姻制度に反対して同棲を続けていた男女カップルも、婚姻と同等の権利を受けられるようになった。婚姻に関する国家施策そのものが、変化を迫られているといえるだろう。

「男女という分離の前提がある限り、人は絶対に人ではいられない。男か女、どちらかにされてしまうのだ。その前提の下には当然差別が生まれる。差別がよくないことだと啓蒙されれば、この前提の象徴的思想として『普通は異性愛なのだ』という根拠なき断言が立ち現れる。すなわち、その差別の根底にある認識を残し不問にしたまま、マイノリティという無数のカテゴリーが誕生し、異性愛というスタンダードによって浸々それらが『認知』される。認知する側は永遠に自らの判断を無自覚に信じたまま、自分を縛り自分以外の誰かをも縛り続けるのだろう。しかし、なぜ私がアナタに認知されなければならないのだろうか？単純に考えてみればことははっきりとする。私とアナタはちがう。事実上、単に、絶対的に、それだけだ。そして地球上の50億人の全員が、単にちがうのだ」。葛森(1993)がこのように述べた時から、すでに6年以上が経過した。男女共同参画社会をめざした自治体の取り組みが各地で始まっている。しかし、依然として男女という分離は存在しており、性別による差別もなくなったとはいえない。

だが、女性解放運動によって男女差別の状況が少しずつ改善されてきたように、同性愛者が少しずつ声をあげていくことによって、同性愛者をとりまく状況が改善されてきたことも事実である。「動くゲイとレズビアン」による裁判闘争の過程でも、マスコミ報道によって同性愛者の存在が広く知られるようになった。この団体は「同性愛者のための電話相談」や「同性愛についての勉強会」を通して積極的に活動を行っている。シンガーソング・ライターの笹野みちる(1995)は、「Coming OUT!」を出版した。同性愛者自身が語ることで、カミング・アウトすることができない同性愛者に、自分以外の同性愛者の存在を知らせ、勇気づけることができる。異性愛者にも、同性愛者の社会的活動を介して彼/彼女の存在がみえてくる。同性愛について、同性愛者自身が発信する情報から学ぶ機会が増えることで、我々の無知からくる差別や偏見が徐々に減少していくことになるだろう。1997年に東京大学の五月祭で行われたシンポジウム「ゲイ・スタディーズ ミーツ フェミニズム」は、ゲイの社会的活動の大きな成果として捉えたい。また、同性愛に関する論文も、社会学、法学、心理学など、様々な分野で少しずつではあるが書かれるようになってきた。ゲイバーやミスターレディーなど、奇抜な色物として扱われることの多かった同性愛が、学問の場で扱われるということは大きな意味がある。「何故同性愛になったか」ではなく、現実の「生活者としての同性愛者」に関する今後の心理学研究の発展を期待したい。

注1：性的指向…「セクシャリティ」と同義で使われる場合も多い。性的欲望の向く対象が何かということであり、たとえば、狭義にはそれが同性か異性かということ。同性であれば同性愛者、異性であれば異性愛者、両性であれば両性愛者である。

注2：カミング・アウト/カムアウト…自分がレズビアン、ゲイであることを公表する

こと。自分自身で認めることも含む。現在はセクシャル・マイノリティ全般でも使われる。「coming out of the closet」から。

注3：ヘテロセクシャル…性的指向が異性に向かう状態（またはその状態にある人）。ヘテロ、ノンケ（そのケがない、の意）、ストレート (straight)、ノーマル、ふつう、ともいう。後の3つは、「異性愛は正常、他は異常」とする社会意識を補強するとして嫌うセクシャル・マイノリティもいる。

注4：1990年の東京都の処分…1990年、「動くゲイとレズビアン」の会、アカー」が、東京都の府中青年の家を宿泊利用しようとした際、「青少年の健全育成を目的とする青年の家においては、たとえ夫婦といえども同室宿泊は許されない。同性愛者は同性に対して性的欲求を抱くものであるから、宿泊利用はできない」と、宿泊拒否をした問題。アカー側がこの処分を不相当として、裁判で争われた。一審(1994年)でアカー側が勝訴し、これを不服とした東京都が控訴した二審(1997年)でも、アカー側が勝訴している。

注5：性同一性障害…一人の人間においてその性別と性自認とが異なり、同一性を得られないことに苦痛を感じる障害。'96年には埼玉医科大学、'97年には日本精神神経学会が、この障害の治療手段として性転換手術が必要、という答申を発表し、埼玉医科大学において日本で初めての手術が行われた。

注6：性別…生まれつきの「女」と「男」。この性別と性自認が一致しない状態（またはその状態にある人）をトランスセクシャルという。性別は出産後、外性器の外見に予って判断され、染色体や卵巣・精巣などの内性器による確認は行われなため、誤った判断が下される場合も少なくない。

注7：性自認…sexual identity の訳語で、「自分は女である/男である」という意識のこと。

引用文献

- 朝日新聞 1994年10月6日 チマチョゴリ負けしないで
朝日新聞 1998年9月10日 朝鮮学校にいやがらせー女性と殴られツバ・「死ぬ」添カミソリ
朝日新聞 2002年12月20日 日弁連会長 在日へのいじめゆるさないー異例のアピール
中央大学文学部社会学科 調査演習・矢島ゼミ(1992.10) 同性愛研究序説ー同性愛者と異性愛者の比較調査よりー
榎澤幸広 2002 クローゼットのアップルトヘイト：南アフリカ憲法制定過程における性的マイノリティの位置づけ 法とセクシャリティ 第1号
学習研究社 1998 Super 日本語大辞典
Gilbert Herdt 1997 Same Sex, Different Cultures: Exploring Gay and Lesbian Lives.
Westview Press (黒柳俊蒸・塩野美奈訳 同性愛のカルチャー研究 2002 現代書館)
IGLHRC (The International Gay and Lesbian Human Rights Commission) 1998 "A Global Overview: Criminalization and Decriminalization of Homosexual Acts", IGLHRC Fact

Sheets.

- 金田一京助・金田一春彦・見坊豪紀・柴田武編 1986 国語辞典 第二版 三省堂
キース・ヴィンセント 風間孝 河口和也 1997 ゲイ・スタディーズ 青土社
桐原奈津・坂西友秀 2003 セクシャル・マイノリティに対する態度とカミングアウトへの反応 埼玉大学紀要教育学部 (教育科学) 53巻1号
LONDONZOKU 2002 AUGUST NO.48 Hana Ltd
NPO・そよかぜ 1999 埼玉県入間市の中村製作所が不況で倒産 「そよかぜ」 第157号 (1999年7月8日発行)
小原克博 2002 協会と神学 (["http://kohara.theo.doshisha.ac.jp/church/"](http://kohara.theo.doshisha.ac.jp/church/) に掲載された「世界キリスト教情報」より引用)
笹野 みちる 1995 Coming OUT! 幻冬社
性意識調査グループ 1998 異性愛者ではない女たちのアンケート調査 七つ森書館
谷口 洋幸 1999 「国際人権法とセクシュアル・マイノリティ」 試論～ヨーロッパ人権条約と同性愛を中心に～ 中央大学大学院法学研究科提出修士論文
詫摩 武俊 1986 青年の心理 改訂版 培風館
蔦森 樹 1993 男でもなく、女でもなく けい草書房
動くゲイとレズビアン研究会 1997 第18回 口頭弁論資料集
VIVID セクシャリティを考える会 1999 VIVIDAS -セクシャリティを考えるための用語集-

謝 辞

本研究を推進するにあたり、回答者としてセクシャル・マイノリティーの方、大学生・大学院生の多くの方にご協力いただきました。また、お忙しい中ご指導下さった豊島区立第十中学校(調査時)の松永先生、快く情報を提供してくれた中央大学大学院の谷口君にも大変お世話になりました。ここに改めて、感謝致します。

第三章

Ethnic stereotypes and the prejudice of Japanese adults.

ETHNIC STEREOTYPES AND THE PREJUDICE OF JAPANESE ADULTS

Tomohide Banzai

Faculty of Education

Saitama University

255 Shimo-Okubo, Urawa, Saitama 338-8570, Japan

(Email: banzai@psycho.edu.saitama-u.ac.jp)

Poster presented at the 4th Annual Conference of AASP

Melbourne, Australia

Friday, July 13, 2001

ABSTRACT

This study examines ethnic stereotypes and the prejudice of Japanese adults by analysing their responses to Sambo from picture books. *Little Black Sambo* was a very popular picture book in Japan. Most Japanese readers enjoyed the story and preferred the picture of Sambo with a black face, round eyes, and thick red lips. Liking the Sambo pictured to have discriminatory characteristics might suggest strong stereotypes and racial prejudice against Blacks.

The experimenter asked participants (N=47) to only listen to the story of *Little Black Sambo* recited by another participant, who was randomly assigned to the role. They were required to choose the pictures of Sambo that best matched the story from among three pictures that were used as stimuli (S1, S2, S3). S1 was a Sambo with a black face, round eyes, red thick lips, bare feet, and a body without any clothes. S2 was a Sambo drawn realistically without any discriminatory alterations. S3 was the original picture of Sambo drawn by Helen Bannerman. Participants put the three pictures of Sambo in order from the first to the third depending upon the extent to which they attributed each of the following 17 traits: friendliness, having a strong sense of responsibility, imprudence, self-confidence, attractiveness, being civilized, being scary, pleasantness, superiority, high motivation, affableness, being intellectual, humorousness, being terrible, being funny, cheerfulness, and foolishness.

Most of the participants (85%) chose the picture of Sambo with discriminatory characteristics as the one that matched the story the best. They strongly attributed such traits as imprudence, humorousness, being funny, cheerfulness, and foolishness to both S1 and S3, but less attributed such positive traits as self-confidence, having a strong sense of responsibility, being civilized, superiority, high motivation, and being intellectual.

These results suggest that many Japanese adults have racial stereotypes and prejudice against ethnic groups.

Introduction

This study examines ethnic stereotypes and the prejudice of Japanese adults by analysing their responses to Sambo from picture books. *Little Black Sambo* was a very popular picture book in Japan. Most Japanese readers enjoyed the story and preferred the picture of Sambo with a black face, round eyes, and thick red lips.

Aims

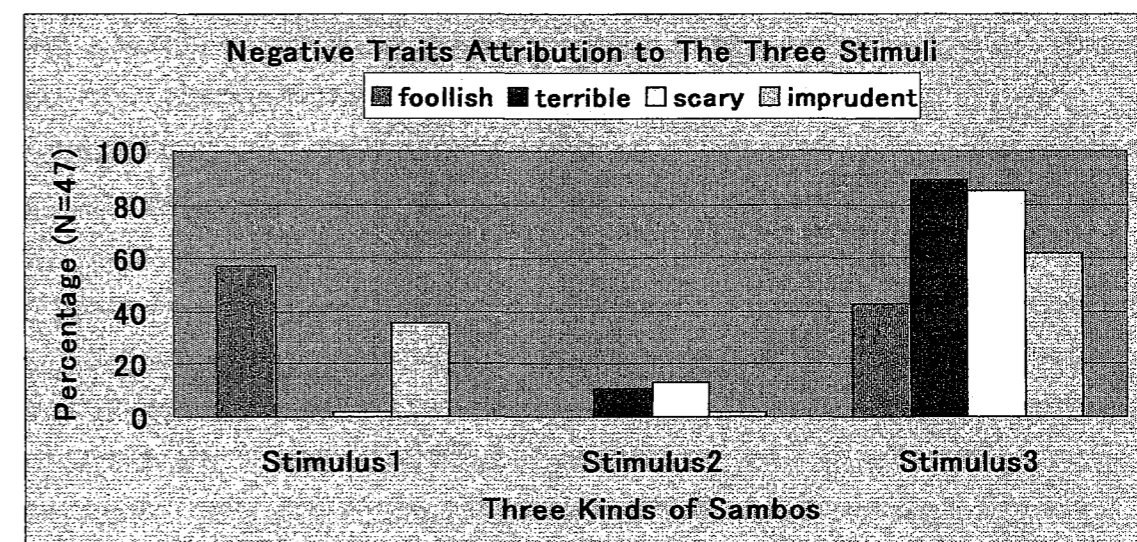
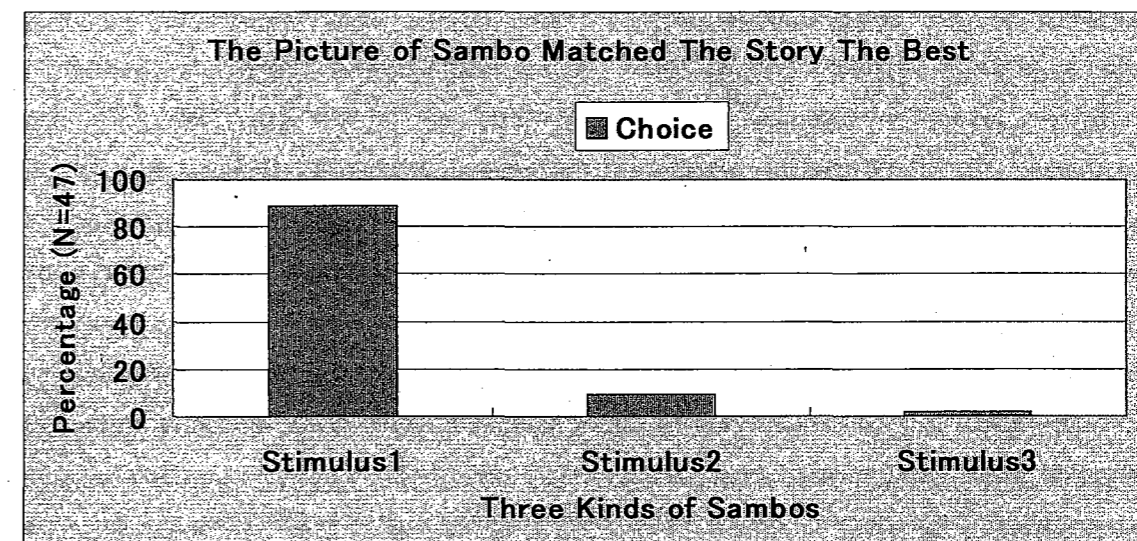
The purpose of the present study was to clarify ethnic stereotypes and the prejudice of Japanese adults. Liking the Sambo pictured to have discriminatory characteristics might suggest strong stereotypes and racial prejudice against Blacks.

Method

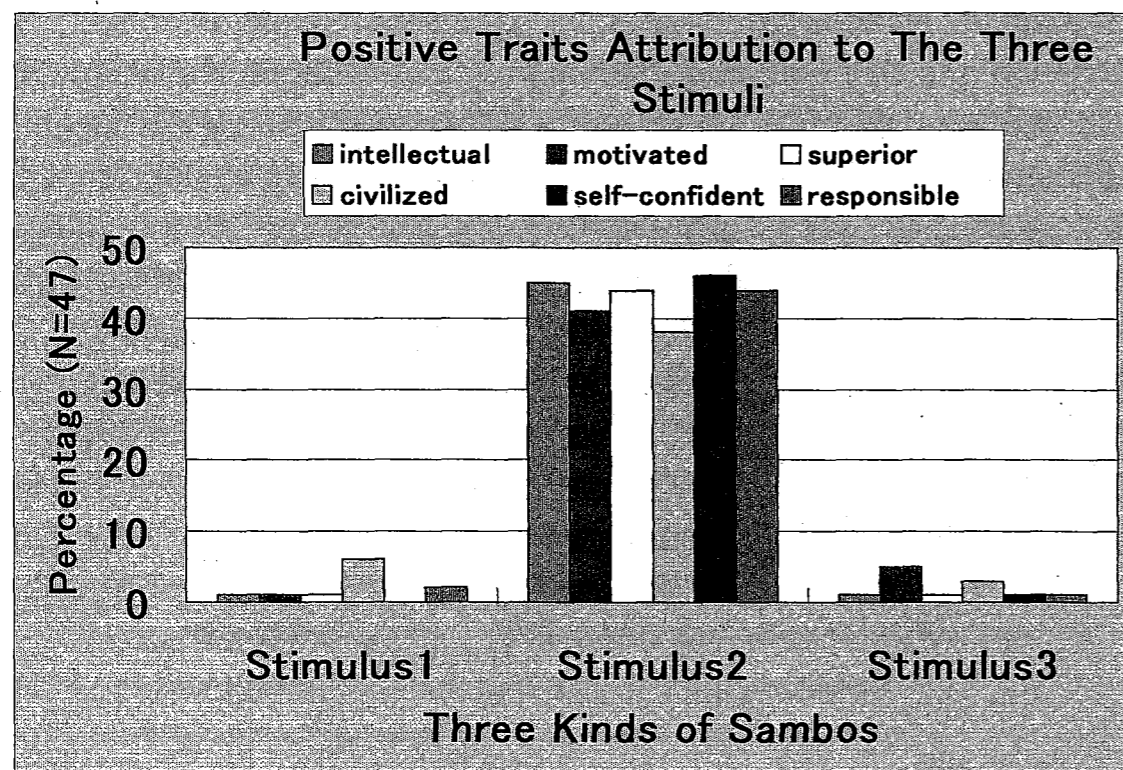
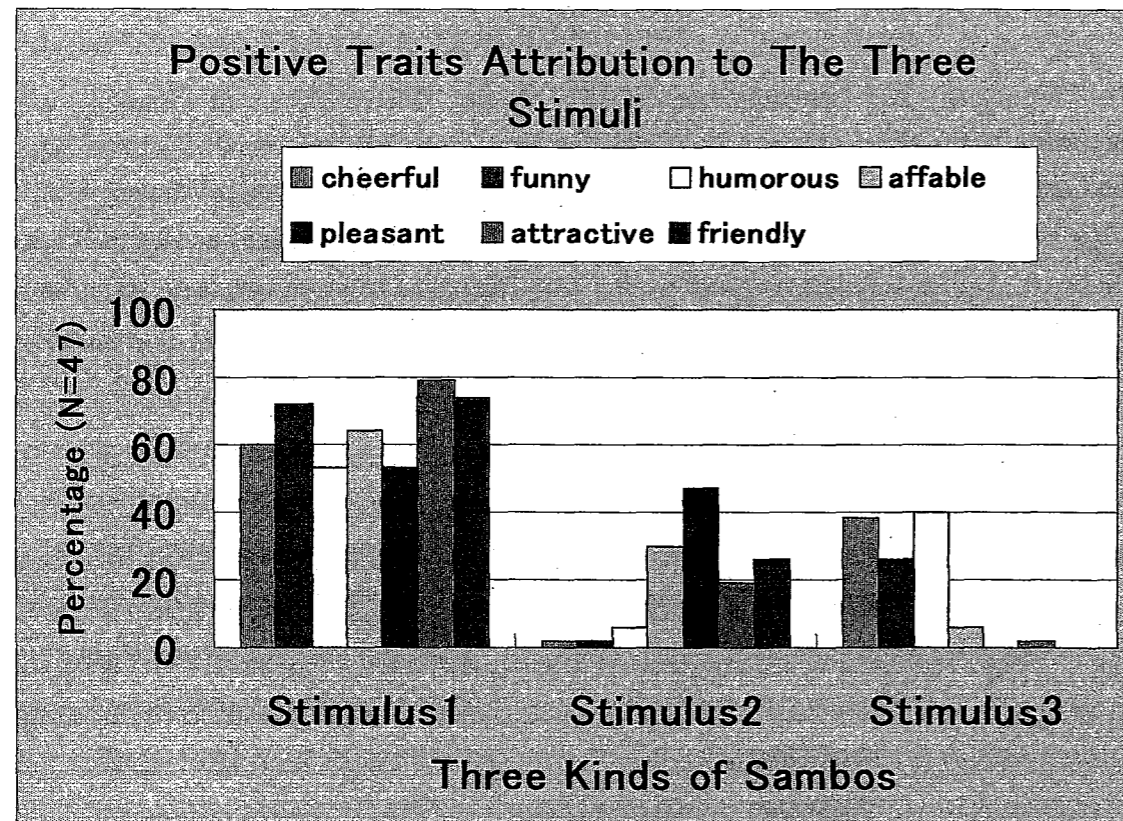
The experimenter asked participants (N=47) to only listen to the story of *Little Black Sambo* recited by another participant, who was randomly assigned to the role. They were required to choose the pictures of Sambo that best matched the story from among three pictures that were used as stimuli (S1, S2, S3). S1 was a Sambo with a black face, round eyes, red thick lips, bare feet, and a body without any clothes. S2 was a Sambo drawn realistically without any discriminatory alterations. S3 was the original picture of Sambo drawn by Helen Bannerman. Participants put the three pictures of Sambo in order from the first to the third depending upon the extent to which they attributed each of the following 17 traits: friendliness, having a strong sense of responsibility, imprudence, self-confidence, attractiveness, being civilized, being scary, pleasantness, superiority, high motivation, affableness, being intellectual, humorousness, being terrible, being funny, cheerfulness, and foolishness.

Results

Most of the participants (85%) chose the picture of Sambo with discriminatory characteristics as the one that matched the story the best. They strongly attributed such traits as imprudence, humorousness, being funny, cheerfulness, and foolishness to both S1 and S3, but less attributed such positive traits as self-confidence, having a strong sense of responsibility, being civilized, superiority, high motivation, and being intellectual. These results suggest that many Japanese adults have racial stereotypes and prejudice against ethnic groups.



資料



資料 1

セクシャル・マイノリティに関する質問紙

修士論文に関するアンケートご協力をお願い

私は、埼玉大学大学院の社会心理学研究室に所属している学生です。

修士論文のテーマとして、性意識を取りあげるに当たり、アンケート調査を実施する事になりました。

回答はすべて研究以外の目的に使用することはありません。また、

すべて統計的に処理されるため、プライバシーが漏れることもありません。

どうぞ、ご協力下さい。

以下の質問項目にお答えください。

1. 学部・学科、または、あなたの専門分野を教えてください。()
2. あなたの性別を教えてください。(男・女)
3. あなたの年齢を教えてください。(歳)
4. あなたの出身地はどこですか? (都・道・府・県)

II. 次の各項目のそれぞれについて、非常にそう思うから、まったくそう思わないまで、あなたの考えに近い選択肢を選択し、それぞれ記号に○をつけてください。

	a. 非常に そう思う	b. どちらかと いえばそう思う	c. どちら ともいえない	d. どちらかと いえばそう思わない	e. まったく そう思わない
1. 家事は、女性の仕事だと思ふ。	a	b	c	d	e
2. 家事は、男性の仕事だと思ふ。	a	b	c	d	e
3. 家事は、男女平等に負担すべきだと思ふ。	a	b	c	d	e
4. 家事は、男女が話し合つて分担すれば良い。	a	b	c	d	e
5. 育児は、女性の仕事だと思ふ。	a	b	c	d	e
6. 育児は、男性の仕事だと思ふ。	a	b	c	d	e
7. 育児は、男女平等に負担すべきだと思ふ。	a	b	c	d	e
8. 育児は、男女が話し合つて分担すれば良いと思ふ。	a	b	c	d	e

III.

1. 以下のそれぞれの人々についてどのようなイメージを持っていますか? 次の各項目のそれぞれについて全くそう思うから、全くそう思わないまで、あなたの考えに近い選択肢を選択し、それぞれ記号に○をつけて下さい。

a. 全く
そう思う。 b. どちらかと
いえばそう思う。 c. どちら
とも言えない。 d. どちらかと
いえばそう思わない。 e. まったく
そう思わない。

(1) 「ホモセクシャル」(男性同性愛者)

	a	b	c	d	e
1. なよなよしている	a	b	c	d	e
2. 優柔不断な	a	b	c	d	e
3. たくましい	a	b	c	d	e
4. 力強い	a	b	c	d	e
5. 決断力のある	a	b	c	d	e
6. 親しみやすい	a	b	c	d	e
7. やさしい	a	b	c	d	e
8. 頼り甲斐のある	a	b	c	d	e
9. 暖かみのある	a	b	c	d	e
10. 気が弱い	a	b	c	d	e
11. 繊細な	a	b	c	d	e

(2) 「バイセクシャル」(両性愛者)

a. 全く
そう思う。 b. どちらかと
いえばそう思う。 c. どちら
とも言えない。 d. どちらかと
いえばそう思わない。 e. まったく
そう思わない。

	a	b	c	d	e
1. なよなよしている	a	b	c	d	e
2. 優柔不断な	a	b	c	d	e
3. たくましい	a	b	c	d	e
4. 力強い	a	b	c	d	e
5. 決断力のある	a	b	c	d	e
6. 親しみやすい	a	b	c	d	e
7. やさしい	a	b	c	d	e
8. 頼り甲斐のある	a	b	c	d	e
9. 暖かみのある	a	b	c	d	e
10. 気が弱い	a	b	c	d	e
11. 繊細な	a	b	c	d	e

(3) 「レズビアン」(女性同性愛者)

a. 全く
そう思う。 b. どちらかと
いえばそう思う。 c. どちら
とも言えない。 d. どちらかと
いえばそう思わない。 e. まったく
そう思わない。

	a	b	c	d	e
1. なよなよしている	a	b	c	d	e
2. 優柔不断な	a	b	c	d	e
3. たくましい	a	b	c	d	e
4. 力強い	a	b	c	d	e
5. 決断力のある	a	b	c	d	e
6. 親しみやすい	a	b	c	d	e
7. やさしい	a	b	c	d	e
8. 頼り甲斐のある	a	b	c	d	e
9. 暖かみのある	a	b	c	d	e
10. 気が弱い	a	b	c	d	e
11. 繊細な	a	b	c	d	e

(4) 男性異性愛者

a. 全く
そう思う。 b. どちらかと
いえばそう思う。 c. どちら
とも言えない。 d. どちらかと
いえばそう思わない。 e. まったく
そう思わない。

	a	b	c	d	e
1. なよなよしている	a	b	c	d	e
2. 優柔不断な	a	b	c	d	e
3. たくましい	a	b	c	d	e
4. 力強い	a	b	c	d	e
5. 決断力のある	a	b	c	d	e
6. 親しみやすい	a	b	c	d	e
7. やさしい	a	b	c	d	e
8. 頼り甲斐のある	a	b	c	d	e
9. 暖かみのある	a	b	c	d	e
10. 気が弱い	a	b	c	d	e
11. 繊細な	a	b	c	d	e

(5) 女性異性愛者

a. 全く
そう思う。 b. どちらかと言
えはそう思う。 c. どちら
とも言えない。 d. どちらかと言
えはそう思わない。 e. まったく
そう思わない。

1. なよなよしている	a	b	c	d	e
2. 優柔不断な	a	b	c	d	e
3. たくましい	a	b	c	d	e
4. 力強い	a	b	c	d	e
5. 決断力のある	a	b	c	d	e
6. 親しみやすい	a	b	c	d	e
7. やさしい	a	b	c	d	e
8. 頼り甲斐のある	a	b	c	d	e
9. 暖かみのある	a	b	c	d	e
10. 気が弱い	a	b	c	d	e
11. 繊細な	a	b	c	d	e

5. 以下のそれぞれの言葉の意味を、かっこの中にあなたが知っている範囲で書いて下さい。

(1) 「ホモセクシャル」

()

(2) 「バイセクシャル」

()

(3) 「レズビアン」

()

6. 恋愛対象の選び方または恋愛感情の抱き方を以下のように定義するとしたら、あなたは(1)~(5)のどれに当てはまりますか。あなたの性指向を、以下から一つだけ選択して記号に○をつけて下さい。

- (1) ホモセクシャル：男性で、男性を恋愛対象（性的対象）とする人
- (2) バイセクシャル：同性も異性も恋愛対象（性的対象）になる人
- (3) レズビアン：女性で、女性を恋愛対象（性的対象）とする人
- (4) ヘテロセクシャル：異性のみを恋愛対象（性的対象）とする人
- (5) Aセクシャル：誰に対しても、恋愛感情、性的感情をめったに持たない人

7. あなたの周りに、ヘテロセクシャル（異性のみを恋愛対象とする人）ではない人はいますか？以下の選択肢からひとつだけ選んで記号に○をつけて下さい。

- (1) いない。
- (2) はっきりとはしないが、そうではないかという人がいる。
- (3) いる。
- (4) わからない。
- (5) その他 ()

IV.

1. あなたと同性の友人が、「実は同性愛者である」、とあなたに打ち明けてきたとします。

(1) その時あなたはどのように感じるでしょうか。以下の選択肢それぞれについて、非常に当てはまるから全く当てはまらないまで、あなたの考えに当てはまる度合いを選択し、記号に○をつけて下さい。

a. 非常に
当てはまる b. どちらかとい
えば当てはまる c. どちら
とも言えない。 d. どちらかとい
えば当てはまらない e. まったく
当てはまらない

①. 全く理解できない。	a.	b.	c.	d.	e.
②. 治すべき病気だと思う。	a.	b.	c.	d.	e.
③. 驚く。	a.	b.	c.	d.	e.
④. 気持ち悪いと思う。	a.	b.	c.	d.	e.
⑤. 友達付き合いをやめる。	a.	b.	c.	d.	e.
⑥. ともかく話を聞く。	a.	b.	c.	d.	e.
⑦. より親密になると思う。	a.	b.	c.	d.	e.
⑧. 打ち明けてくれたことに感謝する。	a.	b.	c.	d.	e.
⑨. 襲われるかも、と不安に思う。	a.	b.	c.	d.	e.

(2) なにか言葉をかけるとしたら、どんな言葉をかけると思いますか。自由に記述してください。

()

2. あなたにとって異性の友人が、「実は同性愛者である」、とあなたに打ち明けてきました。

(1) その時あなたはどのように感じるでしょうか。以下の選択肢それぞれについて、非常に当てはまるから全く当てはまらないまで、あなたの考えに当てはまる度合いを選択し、記号に○をつけて下さい。また、その後のカッコ内に自由に記述して下さい。

a. 非常に
当てはまる b. どちらかとい
えば当てはまる c. どちら
とも言えない。 d. どちらかとい
えば当てはまらない e. まったく
当てはまらない

①. 全く理解できない。	a.	b.	c.	d.	e.
②. 治すべき病気だと思う。	a.	b.	c.	d.	e.
③. 驚く。	a.	b.	c.	d.	e.
④. 気持ち悪いと思う。	a.	b.	c.	d.	e.
⑤. 友達付き合いをやめる。	a.	b.	c.	d.	e.
⑥. ともかく話を聞く。	a.	b.	c.	d.	e.
⑦. より親密になると思う。	a.	b.	c.	d.	e.
⑧. 打ち明けてくれたことに感謝する。	a.	b.	c.	d.	e.

()

(2) なにか言葉をかけるとしたら、どんな言葉をかけると思いますか。自由に記述してください。

()

3. あなたと同性の友人が、「実は自分は同性愛者で、以前からあなたのことが好きだった」、と打ち明けてきたとしたら、あなたは どう する と思 いますか。以下 の 選 択 肢 各 々 について、非 常 に 当 て は まる から ま っ た く 当 て は な ら ない ま で、あ な た の 考 え に 当 て は ま る 度 合 い を 選 択 し、記 号 に ○ を つ け て く だ さ い。ま た、そ の 後 の カ ッ コ 内 に、自 由 に 記 述 し て 下 さ い。

- | | a. 非 常 に 当 て は まる | b. ど ち ら か と い え ば 当 て は まる | c. ど ち ら と も 言 え ない | d. ど ち ら か と い え ば 当 て は ま ら ない | e. ま っ た く 当 て は ま ら ない |
|-----------------------------------|-------------------|-----------------------------|---------------------|---------------------------------|-------------------------|
| ①. 全 く 理 解 で き 不 い。 | a. | b. | c. | d. | e. |
| ②. 治 す べ き 病 気 だ と 思 う。 | a. | b. | c. | d. | e. |
| ③. 驚 く。 | a. | b. | c. | d. | e. |
| ④. 気 持 ち 悪 い と 思 う。 | a. | b. | c. | d. | e. |
| ⑤. 友 達 付 き 合 い を や め る。 | a. | b. | c. | d. | e. |
| ⑥. と も か く 話 を 聞 く。 | a. | b. | c. | d. | e. |
| ⑦. よ り 親 密 に な る と 思 う。 | a. | b. | c. | d. | e. |
| ⑧. 打 ち 明 け て く れ た こ と に 感 謝 す る。 | a. | b. | c. | d. | e. |
| ⑨. 襲 わ れ る か も、と 不 安 に 思 う。 | a. | b. | c. | d. | e. |
| ⑩. 好 か れ た 事 は 素 直 に 嬉 し い。 | a. | b. | c. | d. | e. |

()

V. 結 婚 に 対 す る 意 識

あ な た の 結 婚 に 対 す る 意 識 に つ い て お 聞 き し ま す。以 下 の 文 に ど の く ら い 賛 成 か、そ れ ぞ れ に つ い て 選 択 し 記 号 に ○ を つ け て 下 さ い。

- | | a. 全 く そ う 思 う。 | b. ど ち ら か と 言 え ば そ う 思 う。 | c. ど ち ら と も 言 え ない。 | d. ど ち ら か と 言 え ば そ う 思 わ ない。 | e. ま っ た く そ う 思 わ ない。 |
|---|-----------------|-----------------------------|----------------------|--------------------------------|------------------------|
| 1. 同 性 愛 者 の 婚 姻 も、法 律 で 認 め る べ き だ。 | a | b | c | d | e |
| 2. 同 性 愛 者 に 限 ら ず、婚 姻 制 度 そ の も の が 必 要 不 い。 | a | b | c | d | e |
| 3. 異 性 愛 者 の 婚 姻 以 外 は、法 律 で 認 め る べ き で は 不 い。 | a | b | c | d | e |

以 上 で す。こ の 結 果 は す べ て 統 計 的 に 処 理 し、修 士 論 文 に ま と め ま す。個 人 的 な ご 迷 惑 を お か け す る こ と は あ り ま せ ン。

長 時 間 ご 協 力 あ り が と う ご ざ い ま し た。

ア ン ケ ー ト を 通 じ て 感 じ た こ と、改 善 し た 方 が 良 い と 思 わ れ る 点 な ど を ご 自 由 に お 書 き 下 さ い。

性 意 識 調 査 ア ン ケ ー ト ご 協 力 の お 願 い

私 は 埼 玉 大 学 大 学 院 の 社 会 心 理 学 研 究 室 に 所 属 し て い る 学 生 で す。修 士 論 文 の テ ー マ と し て、性 意 識 を 取 り 上 げ る に 当 た り、予 備 調 査 を 実 施 す る 事 に な り ま し た。回 答 は す べ て 研 究 以 外 の 目 的 に は 使 用 す る 事 は 有 り ま せ ン。ま た、全 て 統 計 的 に 処 理 さ れ る 為、プ ラ イ バ シ ー が 漏 れ る 事 も 有 り ま せ ン。ど う ぞ ご 協 力 下 さ い。

次の各質問にお答え下さい。選択する質問は当てはまるところに○印をつけて下さい。

- (1) あなたの性別を教えてください。()内には具体的に記入して下さい。
「1. 女性」、「2. 男性」、「3. 半陰陽」、「4. その他 ()」
- (2) あなたの考える自分自身の性別(性自認)を教えてください。(○をつける)
「1. 女性」「2. 男性」「3. トランスジェンダー(異性の性役割を持ちたい人)」「4. FTMTS(頭で認識している自分の性別と、もって生まれた身体の性別が違う人(TS)で、もって生まれた性別が女性だった人)」、「5. MTSTF(TSで、もって生まれた性別が男性だった人)」「6. その他 ()」
- (3) あなたのセクシャリティ(誰を恋愛対象とするか)を教えてください。
「1. ゲイ(男性で男性を恋愛対象とする人)」、「2. レズビアン(女性で女性を恋愛対象とする人)」、「3. バイセクシャル(男性も女性も恋愛対象とする人)」、「4. ヘテロセクシャル(異性を恋愛対象とする人)」、「5. わからない」、「6. どれも無い ()」
- (4) あなたの年齢を教えてください。(歳)
- (5) 現在の職業はなんですか。
「1. 学生」、「2. 会社員」、「3. 公務員」、「4. 教員」、「5. 自営業」、「6. 主婦」、「7. パート」、「8. 無職」、「9. その他 ()」
- (6) 未婚既婚の別
「1. 未婚」、「2. 既婚」、「3. 事実婚」、「4. 離婚」、「5. その他 ()」
- (7) 子どもはいますか。「1. 有 (人)」、「2. 無」
- (8) ①現在恋人はいますか。
「1. 有」、「2. 無」、「3. 複数」、「4. その他 ()」
②恋人がいる方は、恋人について以下から選択して下さい。
「1. ゲイ」「2. レズビアン」「3. バイセクシャル(男)」「4. バイセクシャル(女)」「5. ヘテロセクシャル(男)」「6. ヘテロセクシャル(女)」「7. その他 ()」
- (9) ①あなたの居住地はどこですか。(都・道・府・県)
②現在の居住地の地域性について、以下の特徴が当てはまる度合いを1~5から選択して数字に○をつけて下さい。
「1. 非常に当てはまる」「2. やや当てはまる」「3. どちらともいえない」「4. あまり当てはまらない」「5. まったく当てはまらない」
i. 伝統的なしきたりを重んじる (1. 2. 3. 4. 5.)
ii. 都会的な (1. 2. 3. 4. 5.)
iii. 男らしさ・女らしさが要求される (1. 2. 3. 4. 5.)
iv. 結婚して家庭を持つ事が当然とされる (1. 2. 3. 4. 5.)

- v. 長幼の序を重んじる (1. 2. 3. 4. 5.)
vi. 個々人が尊重される (1. 2. 3. 4. 5.)
vii. 地域ぐるみの付き合いが有る (1. 2. 3. 4. 5.)

(10) 現在の居住形態を選択して、1つだけ○をつけて下さい。

- 「1. 一人暮らし」「2. 親と同居」「3. 恋人と」「4. 配偶者と」「5. その他(具体的に:)」

(11)現在の生活に満足していますか。1つだけ○をつけて下さい。

- 「1. とても満足している」「2. まあ満足している」「3. どちらとも言えない」「4. どちらかといえば不満」「5. 非常に不満」

I. カミング・アウト

(1)セクシャル・マイノリティである可能性に気付いたのはいつですか?
(歳頃)

(2)そのときあなたは、どのように感じましたか?感じた事を自由に記述して下さい。
()

(3)自分のセクシャリティについて親にカミング・アウト(*明らかにすること)した事がありますか。(ある場合は話した人に○を付けて下さい)

- 「1. 有る(父親・母親・両親)」「2. ない」「3. その他 ()」

*「有る」と答えた方にお聞きします。「ない」「その他」と答えた方は(4)に進んで下さい。

i. その時の相手の反応はどうでしたか?番号を選択してカッコ内に数字を記入して、その下の大きな()に自由に記入して下さい。

- 「1. 拒絶的」「2. 理解しようとしていた」「3. 理解を示した」「4. 反対された」「5. 嘆き悲しんだ」「6. 病気扱いした」「7. その他 ()」

(父親の反応:) (母親の反応:)

()

ii. その後の経過・現在の様子について、カミング・アウトの及ぼした影響を教えてください。番号を選択し、()内に記入して下さい。

- 「1. まったく交流がなくなった」「2. 必要事項以外話さなくなった」「3. 表面上は変化無し」「4. 以前より親密になった」「5. その他 ()」

(父親と:) (母親と:)

()

iii. 総合的に判断して、その相手にカミング・アウトして良かったと思いますか？番号をそれぞれ1つだけ選択し、() 内に記入して下さい。

「1. 非常に良かった」・「2. まあ良かった」・「3. どちらともいえない」・
「4. どちらかといえばよくなかった」・「5. しなければよかった」

(父親に：) (母親に：)

()

②自分のセクシャリティについて、接する時間も長く関係が社会的に大きな意味を持つ人にカミング・アウトした事がありますか？(○をつけて下さい。)

「1. ある」・「2. ない」・「3. その他 ()」

「1. ある」とした方にお聞きします。「2. ない」と答えた方は、IIへ進んで下さい。

i. その相手とはどういう関係ですか？当てはまるところにすべて○をつけて、複数いる場合は、最も関係が重要と思われる人には◎をして下さい。

「1. 友達」・「2. 会社の上司」・「3. 同僚」・「4. 同級生」・「5. 近所の人」・
「6. 親戚」・「7. その他 ()」

ii. その時の相手(複数いた場合は◎の人)の反応はどうでしたか？

「1. 拒絶的」・「2. 理解しようと努力していた」・「3. 理解を示した」・「4. 反対された」
「5. 嘆き悲しんだ」・「6. 病気扱いた」・「7. その他 ()」

()

iii. その後の経過・現在の様子について、その相手との関係にカミング・アウトが及ぼした影響を教えてください。○をつけて下さい。

「1. まったく交流がなくなった」・「2. 表面上は変化無し」・「3. 必要事項以外話さなくなった」・
「4. 以前より親密になった」・「5. その他 ()」

()

iv. 総合的に判断して、その相手(◎の人)にカミング・アウトして良かったと思いますか？1つだけ○をつけて下さい。

「1. 非常に良かった」・「2. まあ良かった」・「3. どちらともいえない」・
「4. どちらかといえばよくなかった」・「5. しなければよかった」

()

II. コミュニティーへの参加

(1)現在、あなたはセクシャル・マイノリティーの人々が集まる何らかのコミュニティ(以下コミュニティと略す)に、参加していますか？

「1. 参加している(具体的に：)」・「2. 参加していない」

「参加している」とした方にお聞きします。「参加していない」と答えた方は(7)へ進んで下さい。

(2)そのコミュニティを知るきっかけについて教えてください。(1つだけ○をつけて下さい。)

「1. 友人・知人の紹介」・「2. 雑誌等で見て」・「3. その他 ()」

(3)参加する前の、そのコミュニティに対する印象を教えてください。1つだけ○をつけて下さい。

「1. 怖い」・「2. 楽しい」・「3. 派手」・「4. 暗い」・「5. その他 ()」

(4)参加するきっかけになったのは何ですか。1つだけ○をつけて下さい。

「1. 知人に誘われて」・「2. 思い立って」・「3. その他 ()」

()

(5)参加してみて、コミュニティに対する印象はどのように変化しましたか。1つだけ○をつけて下さい。

「1. 否定的な印象が変わらず」・「2. 否定的な印象から肯定的な印象になった」・
「3. 肯定的な印象が変わらず」・「4. 肯定的な印象から否定的な印象へ」・
「5. その他 ()」

(6)あなた自身の生活は、どのように変化しましたか。いくつでも○をつけて、後の()内に自由にお書き下さい。

「1. 知り合いが増えて生活が楽になった」・「2. 自分自身を受け入れられるようになった」・
「3. その他 ()」

資料 2

人種ステレオタイプに関する 刺激材料・質問紙

()
あなた自身のセクシャリティについて知っている人との人間関係と、そのことを知らない人との人間関係についてお聞きします。

(7)あなたが悩みを抱えたときに、あなたのセクシャリティについて知っている人には話せるけれど、セクシャリティについて知らない友達には話せない、と言う悩みの種類を以下の選択肢の中からいくつでも、選んで○をつけて下さい。

- 「1. 友達関係の悩み」「2. 恋愛関係の悩み」「3. 進路についての悩み」「4. 仕事上の悩み」
「5. 家族関係の悩み」「6. その他()」

(8)あなた自身のセクシャリティーについて知っている人との人間関係と、そのことについて知らない人との人間関係は、あなたにとってどんな違いが有ると思いますか？以下から選択し、1つだけ○をつけて下さい。

- 「1. たいした違いはない」「2. 自分のセクシャリティーについて知っている人の中でのほうが自分らしくいられる」「3. その他の場所では自分を偽っている」「4. 自分のセクシャリティーについて知らない人のいる場所が自分の生活の中心だから本来の自分だと思う」「5. その他()」

()

以上です。この結果を元に新たに調査用紙を作成し、セクシャリティについての理解を進める為、調査を実施する予定です。ぜひ次の調査にもご協力して下さるよう、よろしくお願いします。

次回の調査に協力 {出来る・出来ない} (○をつけて下さい)。

なお、調査の結果は修士論文でまとめますが、個人的なご迷惑は一切おかけしません。

長時間ご協力有り難うございました。

アンケートを通じて感じた事、改善した方が良いと思われる点等を自由にお書きください。

性別, 年齢についてあてはまるところに○をつけてください。

性別 (男 女) 年齢 ()

1 これから『ちびくろさんぼ』を読んでいただきますが、あなたはこの物語の内容をどのくらいよく知っていますか。あてはまる選択肢をひとつ選び数字に○をつけ、さらに読んだことがあるかないかあてはまる方に○をつけてください。

1. とてもよく知っている (読んだことがある, 読んだことがない)
2. だいたい知っている (読んだことがある, 読んだことがない)
3. 少しだけ知っている (読んだことがある, 読んだことがない)
4. まったく知らない (読んだことがある, 読んだことがない)

2 『ちびくろさんぼ』についておききします。次の質問について自分の考えや感想にもっとも近い選択肢を1つ選び数字に○をつけてください。記述欄には自分の考え・感想をお書きください。

1. 『ちびくろさんぼ』を読んだ感想をお答えください。

	まったくそう おもわない	あまりそう おもわない	どちらとも いえない	だいたいそう おもう	ひじょうに そうおもう
a 楽しい物語だ.....	1	2	3	4	5
b ユーモアのある物語だ.....	1	2	3	4	5
c さびしい物語だ.....	1	2	3	4	5
d 愉快的な物語だ.....	1	2	3	4	5
e 人を傷つける物語だ.....	1	2	3	4	5
f ばかばかしい物語だ.....	1	2	3	4	5

【 自由記述欄 】

3 これから3人の子どもの絵を見ていただきます。今読んだストーリーに登場するさんぼのイメージにもっともよくあてはる絵はどれですか。あなたのイメージにぴったりあてはまるさんぼの絵を1つだけ選び、アルファベットを記入してください。

()

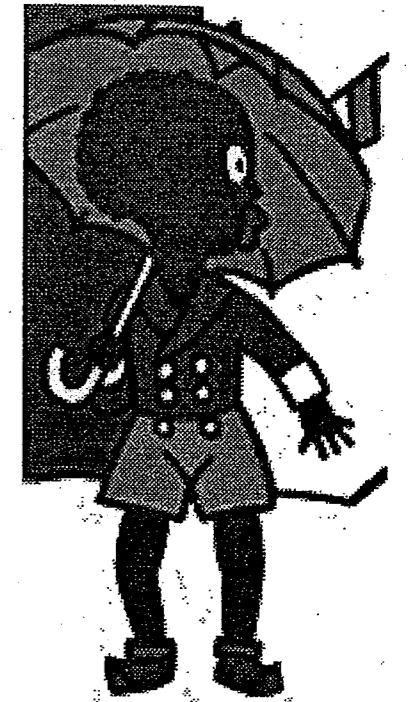
- 4 これから、三人の子ども（A～C）の絵を見ていただきます。三人の子どもを見てあなたが受ける印象をもとに、次にあげる項目の性質がもっともよくあてはまる子どもを1番、次によくあてはまる子どもを2番、もっともあてはまらない子どもを3番として順番をつけてください。A～Cの子どもの（ ）に1～3の数字を記入してください。

【例】 例えば、”たくましい”という性質が「もっともよくあてはまる子ども」は「子どもB」で、「二番目によくあてはまる子ども」は「子どもA」で、「もっともあてはまらない子ども」は「子どもC」だという印象を持った人は、下の例のように記入してください。

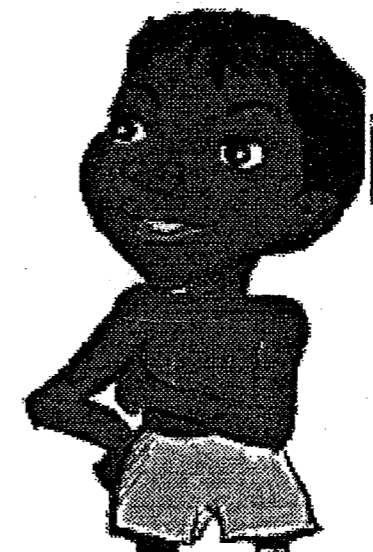
たくましい…… 子どもA（ 2 ）， 子どもB（ 1 ）， 子どもC（ 3 ）

1. 親しみのある…… 子どもA（ ）， 子どもB（ ）， 子どもC（ ）
2. 責任感のある…… 子どもA（ ）， 子どもB（ ）， 子どもC（ ）
3. 軽率な…… 子どもA（ ）， 子どもB（ ）， 子どもC（ ）
4. 自信のある…… 子どもA（ ）， 子どもB（ ）， 子どもC（ ）
5. かわいい…… 子どもA（ ）， 子どもB（ ）， 子どもC（ ）
6. 文化的な…… 子どもA（ ）， 子どもB（ ）， 子どもC（ ）
7. こわい…… 子どもA（ ）， 子どもB（ ）， 子どもC（ ）
8. 感じのよい…… 子どもA（ ）， 子どもB（ ）， 子どもC（ ）
9. 優れた…… 子どもA（ ）， 子どもB（ ）， 子どもC（ ）
10. 意欲的な…… 子どもA（ ）， 子どもB（ ）， 子どもC（ ）
11. 人なつっこい…… 子どもA（ ）， 子どもB（ ）， 子どもC（ ）
12. 知性的な…… 子どもA（ ）， 子どもB（ ）， 子どもC（ ）
13. ユーモアのある…… 子どもA（ ）， 子どもB（ ）， 子どもC（ ）
14. きもちわるい…… 子どもA（ ）， 子どもB（ ）， 子どもC（ ）
15. おもしろい…… 子どもA（ ）， 子どもB（ ）， 子どもC（ ）
16. ゆかいな…… 子どもA（ ）， 子どもB（ ）， 子どもC（ ）
17. まがぬけた…… 子どもA（ ）， 子どもB（ ）， 子どもC（ ）

S1



S2



S3



**STUDIES ON THE FORMATION PROCESSES OF ETHNIC
STEREOTYPES AND THE PREJUDICE TOWARD
MINORITIES IN MODERN AGE OF JAPAN**

**A research report of project funded by Grant-in Aid for Scientific
Research (C) (2) of Japan Society for the Promotion of Science**

Edited by Dr. Tomohide Banzai

Department of Educational Psychology, Saitama University
Sakura, Saitama, Saitama, 338-8570 Japan

2003

「近代日本の人種ステレオタイプの形成過程とマイノリティに対する現代的偏見の研究」
平成12年度～平成14年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2) 研究成果報告書
課題番号12610112

2003年3月31日 発行

連絡先 埼玉県さいたま市桜区下大久保255
埼玉大学教育学部教育心理学講座 坂西友秀
電話 048-858-3161 tbanzai@post.saitama-u.ac.jp